
蓬の旅（モンハンFF）

杜神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蓬の旅（モンハンFF）

【Nコード】

N3452I

【作者名】

杜神

【あらすじ】

えゝ。解説を頼まれたので、此のウォルフガングがやらせて貰うニヤ。

「初心者としてハンターの道を歩みだした蓬^{よもぎ}なのニヤ。

彼女が日々の経験から次第に立派なハンターとなっていく物語だった筈^{ベース}なのニヤ。」

「元^{ベース}に為る作品は主にドスなのニヤ。オリジナル要素は話が進展してからはずきり出て来るのニヤ。出てくるとゲームとは異なっていくので注意なのニヤ。」

「みづ？」

「おや？ミウはまだ出るのは早いニヤ。」

「では、読むのニヤー！」

今日も楽しいキノコ生活（前書き）

初のモンスターハンターFF作品です。

短編でもいいのですが連載形式にしてみました。

マツタリと蓬よもぎの成長を描いていきたいと思っています。

今日も楽しいキノコ生活

小説 蓬よもぎの旅。(モンスターハンターFF)
第一章 今日も楽しいキノコ生活。

今日も天気良かった。

日差しはやや真南から少し西に移りお昼過ぎだと言う事を示していた。

「さて、今日も行きますか。」

あたしは今日も元気にベースキャンプから飛び出した。あたしの名前は蓬よもぎ。一応19歳花の乙女売出し中。って、そうじゃなくて…今、あたしは初心者として修行中のハンターだ。そう、まだまだ初心者。基本的な武器である片手剣をやつと習得したばかりである。

「よし、武器の準備もよし。砥石もあるし。回復薬も持ったし…えっと…ああ、そうか、地図が無いとまだ迷うな…えーっとそれから…」

まだまだ慣れていないあたしは教官の教わった事を思い出しながら、基本的なアイテムをいそいそと揃えていた。

よし、これでいいかな。

鞆に必要な物を詰め終わるとあたしはベースキャンプを後にした。

此処は密林と言われている場所だ。非常に暖かく、寒い時期に入っても雪などは無い。それだけ温暖な為、生き物が豊富でハンターとしては獲物も沢山あった。

しかし、まだ初心者のあたしには、逆に戸惑わされた。そう、色々あり過ぎるのだ。

ベースキャンプから海岸沿いに出ただけでも、薬草、ネンチャク草、ペイントの実、鉄鉱石、石ころ…は、兎も角。まあ、色々アイテムがごろごろでるのだ。すぐ鞆が溢れそうになる。

しかし、殆ど何もかも始めてのあたしにはどれも大事に見えるので此れもあれも集めてしまう。

「ああ、しまった。今回は特産キノコを採集するんだっけ。」

すっかり依頼を忘れてた…（汗

今回、あたしがギルドで受けた依頼は「特産キノコ5本の採集」だった。

こんな所でピッケル振るってる場合じゃないな。えーっと…キノコってどこに生えてたっけ…

そう考えながらあたしは密林をてくてくと歩いていた。

「ブヒッ！ブヒッ！」

豚のような泣き声が聞こえる。えーっと、この動物は…。

物覚えが悪いあたしはモンスター辞典なる物をギルドで購入していたのでパラパラとめくる。

ふむふむ…こいつは「モス」と言うのか。えーっと、好物は…え…

「キノコ…!?」

と、あたしはつい大声で言ってしまった。しかし、傍に居たモスは黙々と地面をごそごと何か探している様な仕草をしていた。

えーっと、辞典によると…探してる場所にはキノコがあるかもしれない…

なるほど、ではちょっと探してみるかな。

「がさがさ…こそこそ…」

落ちている葉っぱとかをあまり乱暴に扱わずに退けていく。特産キノコは人の親指くらいのかわいいキノコでこの辺りでよく取れる美味いキノコなのである。其の俣ではあまり美味しくは無いが上手に調理したり、何かを加えて発酵させる事で、色んな効果のある食品に出来るのであった。

こつんと、指に当たる感触がする。

「お？此れかな？」

出来る限り傷を付けない様に下の方から優しく掘り起こす。大事な商品である。乱暴に穿ればいいと言う物ではない。暫くすると親指ほどの大きさのキノコが出てきた。笠がやや茶色っぽい赤色、辞典通りだ特産キノコに間違いない。

「よしよし。先ずは一個順調ね。」

そう言つてバックに入れる。あまり余裕は無いがキノコは余裕で入る、傷が付かない様に丁寧に布で包んでからしまつておいた。

「あれ？モスも居ないし…キノコは他に何処に在るのかな…。」

あたしはキノコを探して密林を歩いてた。しかし、始めの一本以来中々見つからない。モスも居なくなつたし…。他に何かいい方法は無いのかなあ…。

つと、足を滑らせて、倒れかけてしまう。

「つとつとつと…危ない危ない…って、あれ？こんな所に洞窟なんて在ったんだ。」

密林の高台になった場所、ベースキャンプから上がった場所にあたしは来ていた。今まで気づかなかったがぱっくりと大きな洞窟が口を開けていた。

そういえば、キノコってジメジメした所にも生えるんだっけ。中に入れば何かあるかも。

そう思い、あたしは中に入る事にした。

「ヒュウウウウウ…。」

風が吹きぬけていく。つまり入り口と出口があり空気の通り道があるということだ。風通しのいい場所だと乾燥するからキノコは少ない筈よね。

そう考えてあたしははじめじめした場所を探して洞窟内を歩き始めた。洞窟、とは言ってもところどころで天井が開けていたり、岩の性質なのかほのかに光ってる部分があったりと中は全く暗くは無かった。ジメジメした場所を見つけ、あたしはキノコを探し始めた。

「え〜つと、多分この辺なら…。」

さっき掘り起こした感覚を思い出しながら、指をまさぐこそこそ弄る様にしてキノコを探す。う〜ん…。

なんかいやらしいな…。えっ？いや、あたしはそんなことは…。考えてないんだからね！

つて、其れは兎も角。なんだかんだと言っているとまた指にさつきと同じ感触が。

再び出来る限り傷を付けない様に優しく掘り起こす。よし、二本目だ。やっぱりジメジメした洞窟内もいいポイントなんだな。
メモしておこう…

洞窟内を散策しキノコはやつと五本揃った。ふゝ…。まさかこんなに掛かるとは。慣れて無いせいもあるけど、くたびれちゃったよ。

「報告もしたいし、ベースキャンプに帰りますかね。」

そう言ってあたしは立ち上がった。そして、近くの洞窟の出口から外に出る。

「え？……。」

外を見て唖然としてしまった。既に日が暮れている。海の遠くで太陽が最後の光を沈め様としていた。

「いつけない！夜になると夜行性のモンスターが出てくるんだったけ。」

教官に注意されていた事に気づいてあたしは急いでベースキャンプに向かった。が…あまり早く走れない…あれ？あたしそんなに足が遅い方じゃない筈なんだけど…

あ…そうか、キノコ取りで延々時間を潰していたからスタミナ切れちゃってるんだ…。

お腹がグウウと鳴いている。あゝうゝ…今回はこんがり肉は持つ

てきて無いや…とりあえず急いで帰ろう…
あたしは出来る限り足を速めていた。

「ギャア！ギャア！」

う…聞きたくありません。そんな泣き声は…。
気持ちはその思っても、事実は変わる事は無い。あたしが声の方を見ると、青い色の肉食の小型モンスターがこちらを見て威嚇をしていた。

「あう。ランポスじゃない……。」

肉食のモンスターでは最弱の部類だが、如何せんあたしもハンターでは最弱である。エッヘン！って自慢に為らないって…

って、一人コントしてる場合じゃないな。逃げようにもこいつ素早いから、スタミナの無い今はきついんだよな。何とか倒すか…
そう思っ、あたしは武器を構えた。

あたしの今の武器はハンターナイフを少し強化したもので、あたしのオリジナル、ハンターナイフ蓬バージョンなのだ！と威張ってもハンターナイフに毛が生えた能力だけどね…

ランポスは威嚇をしながら此方を見ている。基本的にこいつ等は軸線をずらしつつ真っ直ぐに襲ってくる習性がある。言い換えるならその習性を利用すれば楽に倒せるのだ。

「よし、訓練どおりの習性ね。あたしでもやれる。」

そう、自分に言い聞かせ武器をしつかりと構えた。その時、ランポスが飛び込んでかぶりついて来た！
あたしは素早く盾を構える。

「ガキイーン！」

ランポスの牙を何とか盾に当てながら受け流す。小さい盾だから其の俥受けてたら弾かれるのが落ちだ。無論ランポスはそんなには強くは無いから其処まで気にしなくても良さそうだが、此処で盾の扱いを慣れておかないと結果的にあたしは成長出来なくなる。頑張らなきゃ！あたしはそう自分に言い聞かせた。

ランポスは体勢を整えようとして少し後ろに下がる。しかし其れはあたしの丁度いい攻撃距離だった。

「ええい！」

あたしはそう叫びながら飛び込んで斬りつける。

「ザン！」

手にずっしりと重み加わる。手応えが十分にあった。ランポスは悲鳴を上げつつ横たわりのた打ち回る。首筋からはかなりの血が出ていた。

どうやら運よく急所に当たったようだ。偶然に感謝！

ランポスが起き上がる前に、あたしは非情にも止めを刺す。しかし、ここで殺らねば殺られるのは此方なのだ。狩りと言う特性上、綺麗事では済まされない。

其れが嫌ならハンターなどすべきではないのだから。

「ふい〜。」

やらなくてもいい一仕事が終わってあたしは溜息を一つ吐いた。其の後でふと気づく。

「あ、ランポスの素材も集めておかないと。」

そう、あたしみたいな初心者にはランポス素材はいい武器や防具の材料になるのだ。早速あたしは皮剥ぎ用のナイフを腰からはずしてランポスを解体し始めた。

「えっと…これは使えないか…この鱗は良さそうね。この牙も行けそう。」

解体しながらあたしは使えそうな素材を集めた。戦闘後に手に入れるために全ての素材が使えるわけではない。だが、一人で狩りをしただけに取り分は全てあたしの物。初心者としてはホクホク気分の報酬となった。そして鞆はほぼ一杯になる。

「あ、いつけない！時間制限が近いわ。」

そう、依頼には時間制限がある。期限を過ぎると例えアイテムを揃えていようが依頼は失敗扱いになる。

あたしは急いでベースキャンプに向かった。

「お帰り、蓬ちゃん。」

カウンターに居る彼女はそう答えた。彼女はハンターズギルドで働くメイド、もといハンターズレディのセレンゲティさん。皆は愛称としてセティって呼んでいる。

「ただいま。何とか間に合いました。あ、此れが依頼のキノコです。」

そう言ってあたしは依頼された特産キノコ5本を手渡す。セティさんは確認してからあたしに言った。

「オッケー。ちゃんとあったわ。じゃあ、此れが報酬ね。」

そう言ってセティさんはあたしに報酬をくれた。キノコ狩りだから金額はさほど多いものではない。しかし、初心者には美味しい報酬だった。

「ありがと。今日はもう家に帰って寝ようかな...。」

あたしはそう言っていた。セティさんが言う。

「お疲れ様。今日はゆっくり休みなさいね。」

うん、本当にもう休みたい...。ミスもあったし...ランポスにも襲われたし...まあ、上手く倒せたからいいんだけどね。

そう考えながらあたしは家に帰り、其の俤ベットに寝込んだことは言うまでも無い。

あ、ランポスの皮をなめして無いや。痛まないといいけどな…。
そう思いつつ夢の中に入っていた。そ

今日も楽しいキノコ生活（後書き）

今回は此れにて終了。

さて、次回の蓬の冒険は何か？

次回予告「大剣に明日はあるのか？」

なお、予告は突然変更される恐れが多大にあります（おい
貴方もレッツハンティング♪

大剣に明日はあるのか？（前書き）

とりあえず採取を終えた蓬。

次は何をするのか？其れは此れから開幕、開幕ううう。

（ちよつと表現がやや硬くなってるかも…）

台詞は「」で。擬音系は『』で表現しています。

大剣に明日はあるのか？

小説 蓬の旅（モンハンFF）
よもぎ

第二章 大剣に明日はあるのか？

「ふあああああ。今日も良く寝たなあ。」

あたしはそう言ってベットから身を起こした。先日から一夜が明け
て陽光も部屋に注ぎ込む朝のひと時。

あたしはベットから降りて窓をより広げた。

『ギイイイイイ。』

軋む音をしながら窓が開く。眼下にはあたしが住む村が一望できた。
あたしの住む村、暁の村とも呼ばれる此の村は正式名称は村長の名
前を取って「シャイルレゼイラーフェラント」と言うのだが…

あまりに長いので其の朝日の美しい色焼け具合から「暁の村」と通
称されていたのだ。

今日も美しい情景を表現していた。家々は陽光で黄金色に輝き、近
くの木々は其の豊かな緑を陽光に照らしながら生き生きと育とうと
している。

水のせせらぎが行き渡り、朝早くだが既に子供の楽しむ声も聞こえ
ていた。

「お、起きた様だニヤ。」

そうあたしに言ってきたのはあたしの家に一緒に住むアイルー族の

ウォルフガング君であつた。

「あ、うん、お早う。あ、昨日のランポスの皮、なめしてくれたんだ。有難う、ウォルフ君。」

あたしは、そうウォルフ君にお礼を言ってから、テーブルに広げてるランポスのなめし皮を手に取った。うん、いい皮だな。これなら、武具屋さんのシャイゼル小父^{おじ}さんも喜ぶだろう。

「大した事じゃないニヤ。其れより、今日は如何するのニヤ？」

ウォルフ君は手にしていたフライパンからさつと目玉焼きを皿に入れた。それをつつそう言っていた。

「そうねえ…急いでしたい事が無いから、今日は教官の所で大剣のおさらいをしたいのよね。」

あたしはそう答えた。ウォルフ君は頷きつつ、

「為るほどニヤ。蓬は早く色々な武器を覚えたいのだニヤ。」

そう言った。あたしは其れに肯定しつつ、

「うん、片手剣って便利で良い武器だけど、何て言うのかな。此れがあたしの武器だ！ってのかな。そんなのが探したくってね。」

そう答えた。ウォルフ君は、うんうんと頷きつつ、

「そつだニヤ、シャルさんもレイナルドさんも、自分の得意武器を持って戦っているもんニヤ。蓬も探したいのだニヤ。」

そう言った。そう、大抵ハンターには自分が得意とするスタイルがある。故に、全てのハンターが気楽にパーティーが組める訳ではない。武器にはそれぞれ相性の良し悪しがあるからだ。対モンスター用の巨大で強力な武器を扱うなら尚更そうだと言えるだろう。ウオルフ君の答えに頷きながらあたしは椅子に腰を掛けた。彼はちやっちやと朝御飯の仕度をしてくれている。因みに、彼との付き合いは多少長く既に5年になる。あたしの衣食住の大半をサポートしてくれ、村人との交渉や同族やメラルー族との話し合いまでこなすあたしから見れば執事のように働いてくれているすごいアイルーである。以前、どうしてあたしに其処までするのか聴いた事があった。開口一番彼はこう言う。

「やりたかったからだニヤ。」

彼らしい理由かも……。まあ、兎も角そんな感じで生活していて、流石に年齢が年齢だし、たまたま、此の村にハンター教育に来ていた教官の目にも止まりハンターの修行を始めたのが約1年前。

今、此の村には常駐しているハンターは2名しか居ないシャルさんとレイナルドさんだ。勿論彼らも立派なハンターだが二人では荷が重い依頼もあるらしい。あたしが修行を始めたのを聞いて彼らも色々あたしに教えてくれていた。

そうやって、少し前のことを思い出していたらウオルフ君が声を掛けてきた。

「蓬。目玉焼きが冷えて固まる前にきちんと食べるニヤ。今日のは、ロイさんから貰った卵だから美味しいのニヤ。」

そう言われて、あたしは思いに耽っていた状態から現実に戻された。

「あ、はい。じゃあ、頂きます。」

あたしはそう答えて、早速朝食を頂いた。

ハンターズギルドの隣にこじんまりとした建物がある。裏にはやや広い練習場が。そう、此処があたしの教官が居る場所。彼曰く「訓練所」だそうだ。

「お早うございまーす！」

あたしはそう言って「訓練所」に入り込む。中には、あまり身体を覆っていない機能的な皮鎧に身を包んだ筋肉隆々とした男性が居た。あたしの教官ガルシエンドさんだ。

「おお、よく来たな。今日は如何した？」

教官はあたしを笑顔で迎えてくれた。あたしは元気に答えて言う。

「あ、はい。昨日実践で片手剣を使って教官の教え通り機能的で便利だったのですが、他の武器にも慣れておきたくて今日は其の御教授を受けたいと…」

と、其処まで言いかけたら教官は『ガバッ！』と立ち上がりつつあたしをがっしりと捕まえてこう言った。

「おおおおお！蓬も其処まで成長したのか…。おぢさんは嬉し

いぞおおおお！」

教官…号泣しないでください…。教官は非常に凄腕でいい人ではあるのだが…其の…感情表現が豊か過ぎなのよね…。まあ、もうだいぶ慣れたけれど。

一頻り号泣した後であたしに向かって教官は言った。

「で、何から学びたい？」

あたしは即座に答えた。

「大剣を教えて頂きたいのです。」

「成程。あれは万端で良い武器だ。では、裏の練習場で教えよう。参ろうか。」

「はい！」

そうしてあたし達二人は裏の練習場で大剣のトレーニングを受けた。

「成程ねえ…広範囲が攻撃できるのがメリット、其の分動作が鈍くなり隙が出来やすいのがデメリット、但し行動の終点では、別の動作にもって行き易い為、臨機応変な展開が出来る事、特出すべきなのは…武器自体で攻撃をある程度防げる事かしらね。」

そう、片手剣よりも広範囲をしかもより強力な攻撃まで。片手剣には常に反対の手に、と言うか腕に小型の盾を装着する。バランス的な意味と平行して其れによって敵の攻撃をある程度回避する狙いも

ある。実際、昨日も其れであたしは怪我をせずに済んだのだし。

しかし大剣は其の武器自体が巨大ゆえに盾代わりにも為ると言うのだ。まだまだ初心者であたしには嬉しい能力だと思った。注意点は、防御中攻撃を食らうと若干切れ味が落ちる、か。まあ、此れは仕方が無い、武器で防いでいるのだから。

「ふうん。此処まで違つと戦い方を考えないとなあ…。教官に教わった方法で先ずは試してみますか。つて言うよりも…、先ずは大剣を創らないと…。」

そう、実はまだ創つてなかったりする…。先ずは教わる方が先と考えていたから。訓練所で基礎を学んだ後、あたしは武具屋に向かっていた。

「お、いらつしゃい。つて、蓬ちゃんじゃないか。昨日はランポスを倒したんだつて？ウォルフが喧伝してたぞ。」

武具屋の前に来たら武具屋の主人シャイゼル小父さんがそう声を掛けてきてくれた。小父さんと呼んではいるが彼はまだ30代、武具が好きで堪らないと言う、まあ、職人の鑑みたい人だね、うん。

「あ、有難う…。ランポスくらいでウォルフ君も喧伝なんてしなきゃいいのに…。」

あたしはちょっと恥ずかしくなり顔を赤らめつつそう答えた。シャイゼル小父さんは軽く笑いつつ言う。

「はっはっはっは。そんなに謙遜しなくていいさ。初めてってのは誰でも緊張するし、大変なもんだよ。俺だって、初めて武器を任された時は緊張しっぱなしだったぜ。」

成程…確かに立場は違えど、そう言う言われ方をすれば納得が出来るな。

「あ、有難う。あ、えっと。大剣が創りたいんだけどあたしの素材では何が今は創れるかな？」

あたしは、そう言っただけである素材のリストを提示した。リストをふんふんと暫く小父さんは見ている。暫くしてから答えて言った。

「そうだな、お勧めとしてはマカライト鉱石を少し使うが、バスターブレイド辺りがいいだろう。威力はあまり無いがマカライトの効果で抜群の切れ味がある。少々研がなくても行けるぜ。」

研がなくてもいい、かあ…。確かに砥石で研ぐのは手間が掛かるし、いいかも。まだ初心者だから威力は二の次だし。そう考えている所に更に小父さんはこう言ってきた。

「まあ、其れとだな、此れはついでなんだが、飛竜素材が手に入るようになれば、其の大剣と組み合わせで結構強力なのが創れそうなので勧めてるんだよ。」

なんと……。今のあたしには飛竜なんて夢の夢だが、将来を考えればいい投資かも。そう思っただけで言った。

「良さそうじゃない。で、素材は何が要って、資金は幾らかかりそう?。」

そう言って商談が始まった。勿論商談自体は小父さんの方が上手だった事は言つまでもない…。

それから三日後、

「これがバスターブレイド…。」

柄以外が鋼の鮮やかな光沢に覆われている大剣を見て素直にあたしは感動していた。其れを自慢げに小父さんは言う。

「いいだろう、その光沢。此の色合いがいいんだよなあ。マカライトと上手く反応させると此の色合いが出てなあ…。」

とまあ、暫く小父さんの鍛冶談義が始まる。何時もの事ではあるが、為にも為るので、あたしはうんうんと相槌を打ちながら聞いていた。其れが終わると早速、きちつと装備を試みることにした。

「鞘は無いからな。基本的に背に背負う様にして仕舞うのが普通だ。」

小父さんはそうやって仕舞い方をアドバイスしてくれていた。其のアドバイスに従いあたしは背中に背負っていた剣受けに引っ掛けるように大剣を仕舞う。

『カチャッ』

きちつとハマル音が聞こえて大剣はあたしの背中に固定された。其れをうんうんと頷いて見つ小父さんが言う。

「いい感じだな。そうやってハマっている時は少々走ろうが平気な筈だ。まあ、鞘が無いから無理だけはしない様にな。」

そう言われてあたしは頷いた。そして言う。

「有難う小父さん。採取ついでに新しい此の武器を試してくるよ。」

そう言つてあたしは駆け出していた。其の姿を見ながら小父さんは言う。

「若いってのは良いもんだ。只、余り危険に飛び込まなければ良いがな。」

まだ30代と言うのに年寄りな口調で叔父さんは言っているのだつた。

「いよつと。」

まだ慣れないのでややふらついた様子で大剣を構えるあたし。大剣は刃となる部分も大きいが巨大武器の為バランスを考えて柄が長く

出来ている。そう、約三分の一は柄なのだ。そして片手を柄の付け根を持ち反対の手で柄の下側を持つ。そして梃子ていこの原理を基本として振り回す武器なのだ。臂力じりきりくのみで扱う物ではなく、自然の力、つまり遠心力や敵の重さですら利用して爆発的な破壊力を出す武器なのであった。

「よしと。早く慣れないとな。」

そう言っであたしは左右に振り回してみる。

『ブウウウン』

空気を切り裂きながら独特の刃が走る音がする。いい感じみたいだ。さて…。あたしは教官に教わった技を試してみる事にした。大剣を高々と上げて、「氣」を全身から腕に向かって注ぎ込むようにする。勿論此れは概念的表現であって、実際に経験で分かるものと、此処では注釈させてもらっておく。暫く溜め込んでからあたしはおもむろに地面に向かって大剣を叩き付けた。

「ええええい！」

『ズンッ！』

物凄い低音の単発の音が響き、地面が振動する、海岸で砂地であった為、剣が落ちた周囲の砂が一気に巻き上がった。

「うへ…げほっ…………ぺっぺっ…ああ、砂が…。」

口に入り込んだ砂を一生懸命あたしは吐き出していた。しかし、凄い威力だ。教官に教わった「溜め斬り」をやってみたのだ。此の威力なら状況次第で凄い逆転効果も期待できるな。あたしはそう思っ

た。勿論無防備に為るから使い方が限られそうだけど…。

「ふう…よし、練習は此れくらいにしておきましょう。蜂蜜とか色々取りたいから頑張って行かないと。」

あたしはそう言っ大剣を何時もの場所に仕舞い、採取の為に密林内部へと歩き出して行った。

採取を済ませてあたしは家に帰っていた。今日の収穫は蜂蜜が一杯、薬草が二束分、太陽草に落陽草が少しと、アオキノコが数本、珍しいものでは、ニトロダケと言う物があつた。図鑑で分かったけどどうやら火薬の調合に使うみたい。今度調合も教わらないとなあ…。そうやって整理しているとウオルフ君がやってきた。

「お、今日も一杯取つたのニヤ。晩御飯も出来てるニヤよ。」

「あ、ありがと。採取で走り回ってお腹空いちゃってたんだ。」

ウオルフ君の言葉にあたしはそう答えて、食堂に入り席について夕食を味わうことにした。

明日は依頼を何か受けて大剣で頑張ろうかな。あたしは食事をしつつそんな事を考えていた。

おつと、手入れは忘れちゃ駄目だよね。武器は維持管理が命！小父さんに呆れられない為にもせつせと手入れしないとね。

大剣に明日はあるのか？（後書き）

大剣を使う事にした蓬。

今後彼女は何を体験するのか？

次回予告「調査とあたしと大剣と大猪と」

どこかのノリなのはお約束だ！

尚、予告は都合により変更される事があります。

さあ、貴方もレッツハンティング！

調合とあたしと大剣と大猪と（前書き）

バスターブレイドを入手し手ごわいモンスターを相手に使おうと意気込んでいる蓬。

彼女は其処から何を学ぶのか…。

（今回から三人称表現で基本物語は描かせて頂きます。）

調合とあたしと大剣と大猪と

小説 蓬の旅（モンハンFF）
よもぎ

第三章 調合とあたしと大剣と大猪と

「ふん。ドスファンゴの狩猟の依頼ね。本当にこれで良いのね？」

蓬に対しセティは念を押す様にそう言った。蓬ははっきりとした口調で答える。

「ええ、まだまだ大剣は不慣れだけど、此処で実践積んでおこうと思っ
て。」

はつきりと思いが見える蓬を見つつもセティは不安そうに眺めながら
答えてこう言った。

「気持ちは分かるけどねえ。初心者には結構きつい相手よ？猪突猛
進って奴だから。」

暫くそう言われて蓬は少し考えていたがセティのほうを向いてはっ
きりと言った。

「うん、其れは教官からも聞いたから大丈夫。ファンゴは何度か戦
ってるし、危ないと思ったら逃げるようにする。」

決意の現われを見てセティは溜息を吐きつつ言う。

「決めるのは蓬ちゃんだからね。分かったわ。では、此れはギルドで受理しておくわね。」

そう言つてセティは蓬から貰つた依頼書をせつせと所定の手続きで処理し始めた。其れを見つゝ、蓬が言う。

「有難うセティさん。あたしは此れから、調合屋に行つて少し教わつてから依頼をこなして来ます。じゃあ。」

そう言つてギルドを蓬は後にした。見えなくなる後姿を見ながらセティが言う。

「まあ、実践で学ぶほうがいいのかもね。子供が思い描く程「狩獵」はそんなに甘い物じゃないものね。」

そう言つて、事務手続きをこなすセティであつた。

「爺ちゃん居るかな。」

蓬は村の少し外れた所にある調合屋を営んでいる爺さんことグロウの元に向かつていた。グロウ爺さんは竜人族。結構な年齢らしいが元氣はつらつで、店では様々な調合用素材や実際の調合をしてくれたりする頼もしい御爺さんであつた。因みに調合とは二から三種類の材料を所定の方法で混ぜ合わせることで新しいアイテムを生み出す一種の錬金術である。何でも自由に作り上げれる訳ではなく所定の法則と確立に起因する方法なので、其の幾つかを学ぼうと蓬はそ

こに向かっているのであった。

「お、いたいた。爺ちゃん！」

黙々と手元の作業をしていた竜人族の老人は、其の声の方向を向き、対象を確認する。その後、笑顔でこう答えた。

「おうおう…蓬ちゃんぢやないか。今日は如何したかのう？」

「あ、っと。あたしに少し調査を教えて欲しいんだけど、今いいかな？」

蓬は用件を端的にそう言った。グロウは、うんうんと頷きつつ答えてこう言った。

「可愛かったお前も、とうとう其処まで育ったか…。あれは何時ぢやったかのう…。」

蓬の用件には答えず、思い出話に為りそうに為ったので、蓬は焦りつつこう言った。

「あ、御免、グロウ爺ちゃん、あたし此れからドスファンゴの狩獵に行かなきゃいけないから、少しだけ調査を教わりたいんだけど…。」

「

そう言われて、折角の思い出話に花が咲けなかったグロウは少し残念ながらもこう答えた。

「まあ…其れでは仕方が無いのう。で、何が覚えたいんぢやな？」

「えっと、回復薬と回復薬グレートの調査を教えてください。」

蓬はそう御願ひした。グロウはうんうんと頷きつつ答える。

「成程のう。それなら簡単ぢやな。回復薬は、薬草、または太陽草にアオキノコとの調合でいけるぞい。回復薬グレートは、回復薬に蜂蜜でいけるのう。慣れてくれば、薬草、アオキノコ、蜂蜜の三種調合で一氣に作れるのぢやが、ちと失敗しやすいから先ずは二種調合でなれるといいのう。」

蓬は成程、と納得しつつ、一生懸命にメモを取った。そして言う。

「有難う、爺ちゃん。早速試してみるね。」

そう言つて蓬はすぐさま駆け出して行つた。其の様子を見つつグロウが言う。

「あの蓬がのう…。わざわざハンターを目指すのも、此れも宿命かのう…。」

なにやら意味深に言う、グロウ爺さんであつた。

家に帰つた蓬は、ごそごそと材料を準備して早速、言われた通りに調合をチャレンジする事にした。

「えっと。先ずは、薬草にアオキノコと…。」

そう言つて二つの素材を揃える。調合には、何か特別な道具が必要

な訳ではない。いや、道具があれば完璧な調合が可能なのだが、此の世界では錬金術として確立されており、手順さえ間違つてなければ、かなりの確立で道具無しでも、きちんと調合が発生し、別のアイテムに為るのである。まあ…失敗すれば「燃えないゴミ」と為るのが。

蓬は、素材を手順通りに合わせ始めた。すると、両者は反応し合い別のアイテムへと姿を変えていく。暫くして其れは、回復薬に為った。

「出来た！こんな感じで良いのね。よし、回復薬グレートは、依頼が終わってからチャレンジしましょう。」

蓬はそう言つて出来上がった回復薬を鞆に仕舞い込む。そして、昨日作ったバスターブレイドを背負いきちんと装備した。基本アイテムを確認してから家を出つつ言う。

「んじゃ、ウオルフ君、あたしはドスファンゴ狩猟の依頼に行つて来るから留守番宜しくね〜！」

其の声に、家の奥から、

「分かったニャー！初めてのモンスターなんだから気をつけるニャー！」

と、そう言うのが聞こえた。それに安心しつつ蓬は家を後にした。

「密林」に蓬は到着した。依頼書によると、最近此処にドスファンゴがうろつきだして邪魔に為っているらしい。ファンゴ系は食欲旺盛なモンスターで、空腹時は特に機嫌が悪いのが特長だった。特に餌が少ない寒冷期は気性がかなり荒く獰猛となる。蓬は辞典を復習しつつ頭に入れていた。

「ファンゴの大親分つて所よねえ。動きも似てるのかな…。」

蓬は今、鎧としてはバトルシリーズを頭以外は全部揃えて着ていた。此の鎧は機能的な割りに防御力もそこそこあり、殆どが採取だけで集まる素材で作成できたのだ。唯一、獰猛なモンスターの素材としてはファンゴの毛皮が必要だったので蓬は多少苦労したが、ランポスよりは単純に攻撃するファンゴだったので、それなりに素材を集めていたのだった。其のファンゴに似ている動きなのかな？蓬はそう思っていたのである。

勿論、後で苦戦したとき、予習の大切さを蓬は知る事になる。

蓬は探索するべく、密林を歩き始めた。

「探す時つて、結構見つからないものよねえ…。」

蓬はそうぼやいていた。特定の巣で、定期的に休む習性のある生き物や行動範囲が限定されやすい生き物ならまだしも、食欲旺盛で猪突猛進なファンゴ系の生き物は、行動範囲が結構広く、熟練しないと、捕捉はやや手間取るのである。

道中に、ファンゴが数匹居たので、邪魔に為るのと大剣の訓練という事で蓬は倒しておいたが、ドスファンゴは未だに見つけられずに

いた。

そんな時。

先日キノコを探しに入っていた洞窟の方からなにやら、ファンゴの様な泣き声と大きな足音が洞窟を伝って聞こえてきた。もしかして…。蓬はそう思い、洞窟のほうを用心深く覗いて見た。

遠巻きに見るにも拘らず其のファンゴはあまりにも大きかった。通常のファンゴの何倍あるのだろうか…。蓬は啞然としてしまう。そして言った。

「なにあれ…。ドスって付けたら良いってもんじゃないわよね…。大きすぎじゃない。」

此の世界では類似モンスターにドスという接頭語をつけてより強い大きな、等と言う意味で用いる事が多いのだが…。蓬が見つけたドスファンゴは、ファンゴの五倍以上はいこうかと言う程の巨体だった。初めて見るので蓬には其れが適正サイズかは分からない。しかし、依頼の対象モンスターである事は一目で分かったので、如何戦うか考える事にした。

「うーん…。真っ直ぐ戦うのもいいけれど。あの巨体だし、少し有利に戦うアイテムとか無いかな…。」

そう思い鞆を漁る。そして、痺れ罨というアイテムがある事に気が付いた。小型、とは言ってもドス系のモンスターだが、それらもはめる事が出来る特殊な仕掛けの罨である。一度発動すると少々の飛竜なら、十から二十秒程度束縛する事のできるアイテムであった。たった、それだけか、と思うかもしれないが、其れだけで、意外と色々出来るのが狩りの面白さである。蓬は其れを使ってみる事にした。

「実践では初めてだけど、ファンゴの仲間だし、はめるのは楽なはずよね。」

そう言つて、ドスファンゴが居る洞窟内に足を踏み込んだ。

まだ、ドスファンゴは蓬に気づかず、一生懸命に餌を探している。蓬はさつさと靴から痺れ罠を出し設置する。設置に多少時間が掛かるが、設置さえ終われば、一定時間、其処に入ってくるモンスターを麻痺させて捕らえてくれる働きがある。一度っきりの使い捨てアイテムなので設置の仕方、も学ばなくては為らなかった。

「よし、これで良いわね。さあ、ドスファンゴ、来なさい！」

そう言つて、逃げられても良い様に、ドスファンゴにペイントボールを投げつける。匂いや色で位置を知らせる特殊なもので一定時間有効だ。其れが、ドスファンゴに当たり、奴は食事を邪魔された対象を探した。

目が合う。そして、敵と判断した。ドスファンゴは荒々しく息を吐き、前足を何度も踏みしめる、今から突っ込みます！という合図である。蓬は大剣を構えて防御体勢に入った。

「さあ！来なさい！」

其の声に導かれた訳ではないだろうがドスファンゴは食事の邪魔をした人間に自慢の牙を立てながら突っ込んできた。蓬は大剣をしつかりと構えて防御体制をとり攻撃を受け流す。鈍い金属音がしてドスファンゴの攻撃は回避できた。

「よし、今のうちに攻撃ね。」

そう思い、ドスファンゴが走り去った方向に向き直り攻撃しようと

武器を構え直した…。
が…。

「え?!」

驚いて蓬は声を上げる。ファンゴであれば突っ込みすぎて暴走気味になり、そこを衝いて攻撃すればあっさり倒せた。しかし、今、ドスファンゴは蓬に攻撃をかわされた途端、急停止を掛けてすでに方向転換しかけていたのだ。

不味い!!

武器を構え直しているので、防御体勢に持つて行くにはやや時間が掛かる、蓬はそう判断して、攻撃点限界で回避する選択を取る事にした。

ドスファンゴは再び体勢が整うと先ほどとは異なり、すぐさま突っ込んで来た!

蓬は出来る限り引き付けてから回避運動に入る。あまり早いと敵も其処まで馬鹿ではない、若干の方向転換をしてくるからだ。が…。

「いたつ!!」

回避しきれずに、足を少しかすった様だ。鎧がたまたま無かった部分に牙がかすったのか、直線状に綺麗に赤い筋が出来て其処からじわりと血が出ている。戦闘中で応急処置とも行かない為、我慢をしつつ、ドスファンゴの方に向く。ドスファンゴは既に方向を変えつつあった。

「なんて事、こんなに方向転換が早いのでは、大剣では防御してからはきついわ。」

動きにやや隙がある大剣では確かにきつかった。仕方が無いので少

しずつ逃げる事を繰り返しながら罠の方へ誘う。
五回ほど回避して逃げ回った後、ようやく罠の前に蓬は来た。

「はっ、はっ、はっ、さあ…。こっちよ…。」

回避にスタミナを使いやや息が荒れている。しかし、まだ戦闘はこれからだ。何せ、敵はまだ無傷なのだから。

ドスファンゴは蓬目掛けて突進して来た。

が、

罠の上を通過する瞬間。罠は発動し、あたりに凄まじい放電が見えた。そしてバリバリと空気を裂くような音がしたかと思うと、ドスファンゴは罠に捕らえられて動けなくなっていた。

「よし！今のうち！」

蓬はそう言って、武器を構えてドスファンゴの傍に来た。そして溜め始める。そう「溜め斬り」である。

「此れでも、喰らええええ！」

全身の力を込めて、大剣バスターブレイドを叩き落す！

鈍い音がして、ドスファンゴから大量の血が噴出した。しかし、此れで終わった訳ではない。

蓬は、罠がまだ効いている事を確認しつつ「横薙ぎ」「切り返し」と次々と攻撃をしていた。

ドスファンゴは切り刻まれながらも罠から脱出すべく身体に力を込める。其れ故に、身体の血はますます激しく吹き出して蓬に掛かるのであった。

罠の効果が切れた。

其れを確認した蓬は素早く後転してその場から離れる。しかし、あ

まりに大きな傷を負ったのか、ドスファンゴは蓬の方ではなく、洞窟の奥の方へ移動して行った。

「え…。何で…。」

状況が分からず蓬はそう言ってしまう。

暫く呆然としていたが、教官に言われた事を思い出した。

「モンスターはダメージを喰らい過ぎると、自分の体力を回復して傷を癒す為に休み場となる場所に戻るものが多い。だから、完全に見失うな。」

そうだ。追いかねば。

そう思い、走り始めようと思った時、足に痛みが走った。

「あ…そうだった、薬草塗っておかないと。」

蓬は靴から薬草を取り出し、食べても良いが傷口に直接塗りこんだ。痛みが走るが、この方がやや直りが早い。薬草の効果で早くも、綺麗に血が出なくなった。傷跡を確認しつつ、蓬はドスファンゴを追いかける事にした。幸い、ペイントボールで大体の位置は分かる。

「こっちのようね、急がないと。」

そう言っつて、蓬は走り始めた。

ドスファンゴは足を引きずりながら休み場に到着した。今までは、多少の人間なぞ、自慢の牙で蹂躪すれば逃げ帰っていったのに、今回は不覚にも罠に掛かり更に多くの手傷を追ってしまった。痛みに激しい身体を騙しつつ、ドスファンゴは何時もの休み場に横に為った。そう、彼らは休んでいるときに、凄まじいまでの新陳代謝により傷すら癒す事が出来るのである。

そうやって休み始めたところに、蓬が到着した。

「あ、あれか……。寝ているようね。」

蓬は事態が事態なので小声でそう言っていた。そして起こさない様に近づく。

ドスファンゴは寝息を立てている。さっきまで血が滴っていたのに、もう血は固まり、傷口はふさが始めていた。凄まじいまでの代謝能力である。

蓬は大剣バスターブレイドを構えた。そして急所の一つとも言える、心臓付近に目標を定め、力を込める。

「これで、終わってね!!」

そう言っただけで力を入れて大剣を振り下ろす。

手には肉を斬る以上の感触が来た。恐らく骨まで到達したのである。

折角休んでいた時に、突然に起こされたドスファンゴは暴れようとしたが、急所を攻撃され、数回足を動かした後で、動かなくなった。蓬は、ドスファンゴが動かなくなった事を確認してから、その場へタレ込んだ。

「はあああ……。きつかったあ……。」

溜息と共に安堵感が来る。

そう、依頼が果たせたのだ。

とりあえず大剣は仕舞っておき、解体用のナイフを取り出した。
そしてドスファンゴを解体始める。

「ただいまあ…。」

一仕事が終わった口調で蓬はギルドカウンターに居るセティに言った。元氣そうとは言えないが無事に帰ってきた蓬を見てセティは笑顔で答える。

「あらあら、おかえり〜。仕事のほうはどうだった？」

そう言われて、蓬は鞆に収めたファンゴから解体した素材を出しつつこう言った。

「苦戦したけれど、何とか倒せました〜。初めてだとこんなに大変なのね。」

蓬がそう述懐しているのを見て感心しつつセティがこう言った。

「頑張ってきたわね蓬ちゃん。確かに依頼のドスファンゴだわ。此の素材は持って帰っていいわよ。」

「あ、うん。じゃあ、今日は草くたひ臥れているので明日報酬は貰いますね〜。」

蓬は素材をしまいつつそう言った。そしてよろよろとギルドから出て行く。

其れを見ながらセティは言った。

「無事で何よりよね。初めての場合、あいつ相手だと大怪我をする初心者ハンターは多いから。」

そう、ドスファングは初歩のモンスターだが隙が少ないモンスターなので初心者にはてこずるタイプなのである。
姿が見えなくなった後もセティは暫く出口を見つめていた。

「ただいまあ…ウオルフ君、何とか無事に終わったよ。」

家に着くなり、蓬は荷物を乱暴に置きながらそう言った。ウオルフが奥から出てくる。

「おお、お帰りニヤ。帰りが遅いからそろそろ仲間に迎えに頼もうかと思ってたニヤ。」

ウオルフはそう言って蓬の置いた荷物をいそいそと片付け始めた。
蓬は鎧を脱ぎながら言う。

「あゝ。あたし甘く見すぎてたよ。こんなにも強いなんて。まだまだ修行よねえ…。」

「其れが分かるのニヤら、進歩した証拠ニヤ。お、いい牙だニヤ。皮はまたなめしておくニヤ。」

荷物を整理しながらウォルフはそう言う。蓬は、殆ど裸状態で濡れたオルで身体を拭きながら答えてこう言った。

「あ、うん。何時も有難うね。あたし今日もう、くっただから、台所のちよつとつまんだら寝ちやうね〜。」

そう言いながら蓬は台所へ向かって行つた。其れを見届けた後ウォルフは荷物をどんどん整理する為、あれやこれやと作業をしているのであつた。

何とか、手ごわい敵を倒した蓬。しかし、これも立派なハンターになる序章に過ぎなかつた。

調合とあたしと大剣と大猪と（後書き）

何とか苦勞してドスファンゴを倒した蓬。

次にはどんな敵が待ち構えているのか？！

頑張れ蓬！負けるな蓬！ハンターとしての蓬の道はどっちだ？！

次回予告「踊る大走査線！追跡！ドスランポス！」

尚、予告は突然に変更される事をご了承ください。

さあ、貴方もレッツハンティング！！

踊る大走査線！追跡！ドスランボス！（前書き）

何とかドスファンゴを退治した蓬。

次の彼女の冒険は？

さあ、始まり始まり。

（今回から場面変化時に（ ）で解説を入れています。）

踊る大走査線！追跡！ドスランポス！

小説 蓬の旅（モンハンFF）
よもぎ

第四章 踊る大走査線！追跡！ドスランポス！

（蓬の家で）

ドスファンゴを何とか倒した蓬は疲れの余り目を覚ましたのは次の日の昼を過ぎていた。

「あれ??? お日様がもうこんなに...。」

呆気にとられて呆けながらそう言っている蓬に、其の姿を見つけてウォルフが声を掛けてこう言った。

「おや、寝ばすけさんだニヤ。昨日の素材は全部整理しておいたニヤ。あと、セティさんが来て昨日の報酬をくれたニヤ。」

まだ、多少呆け気味だったが、両手で頬を軽く叩いてから気持ち切り替えつつ蓬は答えてこう言った。

「あ、うん。ウォルフ君有難う。ちょっとシャイゼルさんの所で武器の修理して貰って来る。」

そう言って、台所から軽く食べ物を掴み、反対の手でバスターブレイドを持つ。そして其の俣家を飛び出して行った。

「相変わらずだニヤ。無茶しなきゃいいんだけどニヤ。」

心配しつつウォルフは部屋の掃除をしていた。

（シャイゼルの店（武具屋）の前で）

「ほほう。頑張ったようだな。武器を見たら大体どんな戦いをしたか分かるってもんだ。」

シャイゼルは蓬からバスターブレイドを受け取って、炉を使って修理しつつそう言っていた。感心しながら蓬が言う。

「凄いね。傷とか見ただけで分かるんだ……。」

「まあ、其れが俺の商売だしな。武器や防具はあくまで道具だ、使って何ぼだし、言い換えれば、道具さえ見極めれば如何使ってきたかは分かる。人と違って物は素直だからな。」

シャイゼルは、そう意味深な言葉も含めながら言い、バスターブレイドを修理していた。暫くして修理が終わる。

「よし、此の辺りで十分な筈だ。もし防具も傷んだ時はしっかり持って来いよ。武器や防具は定期的な手入れも大事だし、傷めばこつやって補修しないと最後には使えなくなるからな。」

シャイゼルはそう言う。それに元気に蓬は答えてこう言った。

「うん、肝に銘じておくよ。あたしは只でさえ初心者だしね。基礎が出来なきゃ何時まで経っても一人前は無理だもんね。」

そうして、蓬はバスターブレイドを受け取り、家に向かって走って行った。其の姿を見つつシャイゼルが言う。

「転んでも起き上がればいい。だが、急いで転ばなければ良いがな。」

蓬の後姿を感慨深くそう言っていた。

（翌日、ハンターズギルド、依頼の書かれている掲示板の前で）

次の日。蓬は朝早くからハンターズギルドに来ていた。自分が出来そうな依頼を探していたのである。

「うん……ん……う……。」

蓬が悩みつつ唸っている。セティが苦笑しながらこう言った。

「蓬ちゃん。トイレは奥の方よ。」

「あ、セティさん有難う……って、あたしはトイレに行きたいんじゃないもん！！依頼があたしにどれが合うか考えてただけだし…。」

」

蓬はそう言って抗議する。苦笑しながらセティが言う。

「まあ、其れは分かるけどねえ。眉間にしわを寄せてまで睨めっこしなくてもいいでしょうに。いいのが無いの？」

そう聞かれて、蓬はちよつと迷いながら答えて言う。

「あ、いや…採取系の依頼は其れなりにあるし、出来そうなんだけど。折角だから狩猟系の依頼をチャレンジしようかと見てたの。」

セティはそう聴いて頷きつつ答えて言った。

「ああ…為るほどねえ。まだ試験を受ける迄に為ってないから、そんなに選べる敵は居ないし、第一、余り遠出は、いきなりは危険なものね。」

「うん、そうなんだ。教官にも聞いたけど、「まだ、お前は密林で暫く修行しろ！」って、言われちゃったし……。」

少し気落ちしながら蓬はそう言った。教官であるガルシエンドは蓬を心配してそう言ったのだが、当の蓬は、まだ未熟だ！と理解してしまったようだ。そんな蓬を見ながらセティは微笑んでいた。

ふと、蓬の目に依頼が入る。

「あ…此れ密林のだ。え…っと、ドスランポスの狩猟。ね、セティさん、此れいいかな？」

そう言って、蓬はセティに依頼書を見せた。其れを読み、セティは答えて言う。

「そうね、準備はしつかり。教官にきちんと教わった事を実行する事。其れが出来ているのなら受理してもいいわよ。」

其の質問に蓬は胸を叩きつつ、

「其れなら大丈夫。家に帰ってしつかり仕度をしてから行くよ。」

そう元気よく答えた。ふうっ、と軽く溜息を吐きつつセティは答えて言う。

「分かったわ。じゃあ受理しておくね。今度はまた敵が違っし、無理だけは駄目よ?」

そう言いつつ、依頼書をテキパキと事務処理する。蓬は其れに答えて言った。

「はい！頑張ってきます!」

そして蓬は急いで家に向かって行った。其の後姿をセティは微笑みつつ見ていた。

（蓬の家で）

蓬は家に帰るなり、道具が仕舞っているアイテムボックスをこそ

ごそと漁り始め、準備を始めた。

「えーっと、ドスランポスだから……回復薬も要るし、あ、そうだ、此れを忘れたら駄目ね。」

蓬はそう言いながら、黄色、と言うか、わずかに発光する丸い玉を取り出した。「閃光玉」である。空中に放り投げると空気と反応し空中で強力な閃光を発するアイテムである。視覚が其れなり以上にあり、強い光に耐性が無いモンスターであれば、十秒から長い場合三十秒も、視力を奪う事が出来るそういうアイテムであった。モンスターは視力が奪われるとふらついたりその場で暴れたりするので、緊急時の脱出やモンスターの逃亡防止、攻撃先制権を奪う為などに使われる。素早く動き、かつ取り巻きとしてランポスを従えるドスランポス相手には、これが有ると無いとでは戦闘の難易度かなり変わるのである。

蓬はしっかりと、入れれるだけの閃光玉を鞆に仕舞っておいた。

「これで良しつと。んじゃ、ウォルフ君、今日はドスランポスの狩猟に行ってきます。お留守番またよろしくね。」

蓬はそう大きな声で言った。奥からは答える様にウォルフが言う。

「分かったニャー。無理をせずに行くのニャー。」

定番の其の台詞を聞き、安心しながら蓬は家を後にした。

（「密林」のベースキャンプで）

蓬はベースキャンプに到着して荷物を再確認していた。そして、辞典を取り出しながら復習する。そう、先日の様な、思い込みによって失敗はしなくなかったから。

「ドスファンゴのときは思い込みで大怪我する所だったし、今度は失敗しない様にしないとね。」

そう言いつつ、ドスランポスの項目を見る。

ドスランポス。ランポスの中でも極めて大きく、大きさが3倍以上にも為る。其の特徴は頭にある大きな鶏冠とんかで通常のランポスとはまるで違う巨大な鶏冠で判別が出来る。ランポス同様、基本的に集団行動をする傾向が非常に高く、主に、十匹程度のランポスを引き連れている場合が多い。故に、集団戦闘が出来る準備で対抗しないと危険である。

蓬は、そう、辞典から学んでいた。

「なるほど。だから此れが要るのね。」

蓬はそう言つて、鞆の中にある「閃光玉」に目を留めていた。辞典によれば夜行性ということもあり閃光玉によつて約三十秒程度は硬直させれる事も記載されていた。目一杯持ってきたので多少失敗しても何とか為りそうだ。そう蓬は思った。

「よし、先ずは何処に居るか探さないとね。」

そう言つて蓬は「密林」の奥へと足を進め始めた。

(暫く経った「密林」の洞窟前で)

蓬は外周部から「密林」をくまなく探索したがドスランポスどころかランポスすら見つからなかった。ドスランポスが居るのであればランポスも近くで行動している筈。言い換えるならランポスが見当たらない付近にはドスランポスも居ないと言ふ事に為る。

「外は明る過ぎるから居ないのかな?と為ると…此処よね。」

そう言つて蓬は洞窟を覗いた。先日見たのと同じで風が吹き抜け
てはいるが、ざっと見た上ではモンスターは見当たらない。やや慎重に蓬は中に入つて行つた。

「今度は、失敗はしたくは無いわ。」

蓬は自分にそう言い聞かせて中へ歩みを進めていく。少しの失敗は怪我で済む。しかし、万が一致命的な失敗をすれば、今は一人で依頼をしている以上、手助けする仲間も居ない。故に、「死」に直結しかねなかった。やや緊張して軽く生唾を飲み込むと蓬は更に奥へと進んでいった。

（暫く経った洞窟内にて）

「てええええい！」

蓬はそう言いつつランポスに大剣を振り下ろしていた。手に手ごたえが来る。ランポスは、絶命の叫びを上げつつ倒れる。既に其処には三匹のランポスの死骸があった。

「はっ……はっ……これで、四匹目……。」

蓬はやや息を切らしながらそう言いつつ、最後に残ったランポスを見つめた。ランポスも負けずに威嚇をしてくる。

ランポスはタイミングをずらしながら蓬に襲い掛かった。

蓬は素早くバスターブレイドを盾にして攻撃をかわす。鈍い金属音がして手には軽い衝撃が来たがランポスの爪による攻撃は無事に防げた。其れを認めた後、蓬はバスターブレイドを水平に振り回してランポスに叩き込んだ。

手には十分過ぎる程の手応えが来る。ランポスは絶命の叫びを上げる事も出来ず、文字通り叩き切られた。血が多少蓬の身体に掛かり其の俣ランポスは崩れ落ちた。

「はっ……ふう……これで、此処はもう居ない筈よね……。」

蓬はそう言いながら周囲を確認する。辺りにはランポスの死骸のみで何も居なかった。

一息ついた後、傷んでいないランポスを解体用のナイフで蓬は解体し始めた。

「一人で、複数の敵と戦うのがこんなにも大変だなんて……。」

蓬は解体をしつつ、そう言っていた。一対一であれば、其の敵だけ考えれば良い。言い換えれば其処に集中できる。しかし、敵が複数居るときは、絶えず周囲に神経を使わねばならず、其れはかなりの負担と為った。そう、精神的に。そして其れは次第に体力をも蝕むのだ。油断をすれば怪我をする、そして怪我をすれば更に重大なミスに繋がりがねない。

まだドスランポスと対峙していないのに、今後起こり得るかもしれない其の状況を考えて蓬は多少、身震いをしていた。そして思い出しながら言う。

「大変だけど、道具も使って上手く戦わないと。あれだけ学んだんだもの、きちんと役立てないと教官に怒られちゃうわ。」

そうして蓬は解体を終えた後、バスターブレイドに砥石を掛けていた。其れによりバスターブレイドは再び鮮やかな輝きを発揮し始める。

そんな折、蓬の後ろからさっきまで聞いたランポスよりも太くて響く泣き声が聞こえた。

「なに?!」

蓬は振り向く。其処には、ランポスの優に数倍はあろうかという巨大なランポスが居た。頭には大きな赤い鶏冠。そう、ドスランポスだ!

ドスランポスの泣き声に呼応するかの如く、洞窟のあちこちからランポスが集まり始める。その数六匹。ドスランポスを含めて七匹は蓬の周囲に展開していた。

無論其の間に蓬も呆然としていたわけではない。武器を構えていなかったのも、鞆から「閃光玉」を取り出す。そして徐に其れを上

空に放り上げた。

！！

洞窟内に太陽が生まれたかのような輝かしい「閃光」が走る。其れを目にしまったドスランポス達は、視力を奪われて泣き声を上げながらふらつき始めた。

「よし！行くわよ！」

蓬はそう言つてバスターブレイドを構え、身近に居るランポスカら攻撃を叩き込む。そして、倒れるのを確認した後二匹目に。そうやって、閃光玉の時間が終わるまでに出来うる限りランポスを叩き切つていった。

「はっ…はっ…はっ…。」

敵が多く、閃光玉の効果時間もそんなに長くは無い。蓬は焦りつつ、出来うる限り急いで倒していた。故に、息切れをする程に為っている。自分の周囲にランポスが展開していた為、何とか五匹は倒す事に成功した。しかし、効果が切れたのである。ドスランポスが蓬に向かって攻撃を開始した！

「くっ……。」

六匹目のランポスに武器を当てれず、蓬は素早くドスランポスの方へバスターブレイドを盾の様に構える。強い衝撃と金属を擦る嫌な音がして何とかドスランポスの爪による攻撃は防げた。しかし、ドスランポスはランポスよりも激しく蓬に襲い掛かってくる。蓬は何とか回避しつつ、攻撃の機会を窺っていた。

「は、早いわ…何とか、攻撃しやすい隙を見つけないと…。」

蓬はそう言いつつ、襲い来るドスランポスの爪を前転でかわしていた。ふと、ドスランポスと、最後に残ったランポスが同じ視線に入る。ランポスも漸く閃光玉とんがによる盲目状態から脱した様で、蓬の方に視線を向けていた。

不味い！蓬はそう思った。一対二ではかなり分が悪い。しかもドスランポスが其の一体である。如何考えてもこのまま戦うのは怪我をしかねない。

意を決して蓬は一旦バスターブレイドを手放して鞆に手を伸ばした。そして「閃光玉」を確認する。

其れを手に取り、素早く振り向きつつドスランポスの視線上に向かって閃光玉を放り投げた。蓬が後ろを向いた為、ドスランポス、ランポス共に飛び掛るようにして襲い掛かる！

！！

閃光玉が炸裂し反応が起き、周囲には「閃光」が走る！蓬は投げた後素早く横に避けようとした。が…

「痛！！……。」

かわし切れなかったのか、腰の辺りやや上のウエスト辺りにザックリと傷が出来ていた。まだそんなに血は出ていない、余程切れ味が良いのだろう。蓬は、其処を押さえつつドスランポスのほうを向いた。

ドスランポス達は、再び閃光を浴び、呻きつつ其処に立ち尽くしていた。蓬は其れを確認すると、素早くバスターブレイドのある場所に足を運び、バスターブレイドを手に取った。そしてランポスに斬りかかる。

鈍い手ごたえとランポスの絶命がした。そしてランポスは倒れ込む。其れを確認した蓬はドスランポスにも攻撃を加える為、傍に立ち力を溜め始める。そう、「溜め斬り」である。

「このおおおお!!」

そう叫び声を上げつつ、蓬はバスターブレイドをドスランポスに叩き込んだ。十分な手応えが手に加わる。ドスランポスは悲鳴を上げて横転し、そして暫く後起き上がった。既に盲目状態は解けていた。バスターブレイドで身体には一閃の傷が付いており其処から血が幾らか出ている。しかし、彼はまだ蓬に威嚇が出来るほど元気だった。

「くっ、一発じゃやっぱり無理よね。」

蓬はそう言いつつ、腰の傷に目を留めた。どうやら動いたせいで段々と血も出ている様だ。止血の為にも回復薬を飲まないと……。そう思ったが、とりあえずドスランポスを追い払うなりしないと余裕が無い。武器を再び構え、ドスランポスの攻撃に備えた。再びドスランポスが襲う!!

また、嫌な耳に障る金属音がして何とか蓬はドスランポスの爪攻撃を受け流した。しかし、腰に痛みが走る。

「ぐ……、頑張れ、あたし……。」

蓬は自分に言い聞かせつつ、ドスランポスに向けてバスターブレイドを振り回す。ドスランポスに攻撃が当たり、ドスランポスも其の痛みで仰け反る。多少荒い息を吐きつつ蓬はバスターブレイドを構え直した。

手痛いダメージを受けたドスランポスは、一度蓬に威嚇をした後、方向を変えて洞窟の奥の方へと移動して行った。

「え……?!」

事態が理解出来ずに、蓬は暫く立ち尽くしていた。暫くして、辞典に書いていたことを思い出す。

ドスランポスはダメージが蓄積すると逃げ回りながら徐々に体力を回復し、身体を癒す習性がある、と。

武器をとりあえず仕舞い、鞆から回復薬を出して飲みながら、蓬はドスランポスを追いかけた。

「逃がさないわ！」

決意しつつ、蓬はドスランポスを追いかけていった。腰の傷は回復薬の力で、淡く発光しながら傷を癒していた。其れを確認しつつ蓬はドスランポスが逃げた洞窟の奥へと進んでいった。

（洞窟の奥、静かな場所で）

ドスランポスは傷を癒しつつ移動を続けていた。折角居た数多くの部下が倒され、自分も傷を負ってしまった。今回は獲物を頂く所が自分が獲物にされつつあり、気分の悪い状況だった。飲み水のあつた静かな場所に到着してドスランポスは水を飲みつつ、疲れと傷を癒していた。

「はっ…はっ…やっと見つけたわ。」

息を切らしながら其処に蓬が到着した。それに気づいてドスラン

ポスは一度威嚇をして蓬に対して襲い掛かる。今度は、爪ではなく飛び掛るようにして頭から突っ込んできた。其の牙で噛み付こうとしたのである。

蓬は素早くバスターブレイドで防御の構えをし、ドスランポスの攻撃をしっかりと受け止めた。金属音が響き渡り、手にはかなりの振動が来る。しかし、ドスランポスの攻撃をバスターブレイドはしっかりと防いだ。

ドスランポスは攻撃が効かないのを見ると振り返り素早く移動を始めた。

「あ…待ちなさい！」

蓬はそう叫んでいたがドスランポスは其れには目もくれずスタスタと洞窟の別の場所に走り抜けて行った。

「く…何としても倒すんだから！」

蓬はそう決心をして、ドスランポスを追いかけ始めた。

（洞窟、かなり奥ばっている場所で、上空が開けて崖もあり、非常に景色のいい場所です）

ドスランポスは飛竜も訪れる場所である洞窟の奥ばった場所まで逃げてきた。普段は此处までは逃げない。何故なら此处には自分より手ごわい飛竜種が来るからだ。しかし、しつこいハンターの為に

やむを得ず此処まで逃げたのだ。

其れを追いかけて蓬が到着する。

「こ…今度こそ逃がさないわよ……。」

息を荒らげながらも蓬は閃光玉を取り出す。ドスランポスは激しく威嚇をしながら少しずつ蓬に近付こうとしていた。

「此れで！もう逃げれないわ！」

そう言いつつドスランポスに向かって閃光玉を投げる。三度其れはドスランポスの前で閃光を發した！

！！

悲鳴を上げつつドスランポスがよろめく。其れを確認して蓬はバスターブレイドを構えつつ走り込んだ。

「てりやあああ！」

声を荒げながら蓬はドスランポスにバスターブレイドを叩き切りつけた。そして、横に切り払った後、力を溜め始める。

「此れで、終わってね！」

力を溜め、ドスランポスの胸辺り、つまり心臓がありそうな場所を狙って蓬は溜め上げた力を加えつつバスターブレイドを振り下ろした。手には激しいまでの衝撃が来る。そして、急所に当たったのである。ドスランポスは胸から激しく血を吹き出した。暫くよるめいた後でドスランポスは倒れた。蓬は、暴れては困る為、非情ではあるが首筋にバスターブレイドを振り下ろす。少し痙攣をした後でドスランポスは絶命した。

其の姿を見つつ、暫く蓬は立ち尽くしていた。少し経った後で溜息を少し吐いてから、

「はぁ……ひどい追跡劇だったわ。」

そう言いつつバスターブレードを仕舞い、解体用のナイフを取り出してドスランポスを解体し始めた。

（夕暮れ、暁の村のハンターギルドにて）

蓬は勢い良く、ギルドの入り口を開けて入ってきた。

「ただいま！無事に依頼を終えました！」

そう、元気に言いながらカウンターに手に入れた素材を出す。其の姿に多少感心しつつセティが答えてこう言った。

「あらあら、張り切ってるわね。確かにドスランポスだね。依頼達成おめでとう。此れが報酬よ。」

そう言つてセティは規定の報酬を蓬に渡した。其れを受け取りながら蓬が言つ、

「は……あんなに逃げる敵だったなんて。戦うのも怖かったけど、追いかけるのは神経を使っわ……。」

そう言って、くたびれた様子を見せた。其の姿を微笑みつつセテイは見ていた。そんな折、ギルドに二人のハンターが入ってくる。

「おや、蓬じゃないか。」

「あら、蓬ちゃん、依頼は終わったの？」

二人のハンターは蓬の姿を見てそう言っていた。蓬は其の声に振り向く。其処には二人のハンターが立っていた。一人は背中に折り畳み式の特殊な槍を背負っていた。ガンランスと呼ばれる武器で、切り裂くと同時に機械式の火炮によりモンスターにダメージを与える武器である。もう一人はボウガンを背負っていた。小型だが汎用的な飛び道具で弾の準備次第で様々な援護や攻撃が出来る優れものである。

「レイナルドさんにシャルさん。お二人も依頼だったんですか？」

「ああ、二人でちょっとリオレイアを退治にね。」

レイナルドがそう答える。リオレイアとは代表的な飛竜の一つでリオレウスと言うオスの飛竜とつがいをするメスの飛竜である。かなりの巨体で初めて見ると圧倒するほどらしい。蓬が見た辞典にはそんなことが書かれていたのを蓬は思い出した。

「凄いですね。あたしは必死こいてドスランプスを倒して来た所です。」

「凄くない。あいつは初めてだと大変なのにね。道具はきちんと使ったの？」

蓬の台詞にシャルがそう答えて言った。蓬は頷きつつ答える。

「ええ、閃光玉を持てるだけ持って行って使いました。無かったらあたし死んでいたかも……。」

状況を思い出しつつ蓬はそう言った。そんな蓬を見つつレイナルドが言う。

「そうやって自分が分かるなら段々強くなっている証拠さ。いきなり英雄には為れないしな。少しずつ、漸進的でいいから進まないと」

そう言われて、蓬は、笑顔を見せつつ答えてこう言った。

「はい！今はまだ足手まといで一緒に、とは言えませんが、試験が超えられる位に為ったら是非パーティも御願いますね。」

其の言葉に二人は答えて言う。

「ああ、此方こそ。」

「ええ、一緒にやりましょうね。」

新しい、仲間が成長しているのを見て二人のハンターは微笑ましく見ていた。

苦勞をしながらもまた一つ仕事を果たした蓬、次は彼女は何をして成長をするのか。

踊る大走査線！追跡！ドスランポス！（後書き）

苦労の大追跡の末、ドスランポスを倒した蓬。

次に向かうものは何か？

彼女に待ち構えるものとは？

次回予告「お母さんは怒ると怖いです。」

尚、予告は突然に変更される事があります。ご了承下さい。

さあ、貴方もレッツハンティング！

お母さんは怒らせると怖いです。(前書き)

苦勞の末、ドスランポスを倒した達。

次にやってくるのはどんな試練か？

さあ、始まり始まり。

(今回からオリジナル要素が入ります)

お母さんは怒らせると怖いです。

小説 蓬の旅（モンハンFF）
第五章 お母さんは怒ると怖いです。

（ある地方で語られている伝説）

其れは、「力」を現すもの。

其れは、「思い」を現すもの。

其れは、「心」を現すもの。

其れは、一つであり一つでないもの。

其れは、美しい姿、魅惑の瞳。

かつて言う。

伝説の龍、「シャイレオン」と。

其の鱗は軽く、羽の如く。

其の鱗は硬く、鋼の如く。

其の鱗は強く、何者にも負けない。

其の吐息は熱く、何物も焼き尽くし、

其の吐息は冷たく、何物も凍り尽くし、

其の吐息は現す、全ての事象を。

彼の者は待つ。

そう、彼の者は待っている。

出会う者を。

彼の者は待っている。

静かに、時の虚ろの中で。

何時しえぬ、出会える者を信じて。

（暁の村ハンターズギルドにて）

「今回は此れかなあ……。」

蓬はそう言つて依頼書をセティに渡していた。其れを見つつセティが言う。

「ふむふむ……。飛竜の卵の運搬ね。いいんじゃないかしら。直接戦うわけじゃないし、きちんと見学はしておくべきだわ。」

セティはそう言つて同意してくれた。蓬は笑顔で答えながら、

「え？そうかな。実は、リオレイアの話がこの前レイナルドさん達から聞いたから、なんか見たく為っちゃってこの依頼選んじやった。

」

頭をかきつつ蓬は言っていた。其の様子に、軽く溜息をしつつセティは言う。

「分かってると思うけれど……」

そう言いかけたところで、蓬が其れを遮るように言った。

「準備はきちんと！予習を忘れずに！よね？」

そう言われて、苦笑しつつセティはこう言った。

「やれやれ、大怪我はしないようにね。皆心配するから。」

「はい。気をつけます！」

蓬はそう言いつつ、ギルドを後にしていた。そんな姿を見つつレインルドが言う。

「とうとうリオレイアと御対面か。今の彼女は気性が激しいからな。まあ、いい経験か。」

そう言いつつ、手にしていた飲み物を飲んでいた。

（暫く経った蓬の家で）

「えーっと、閃光玉は此れで良し。ペイントボールもばっちりだし……。あ、そうだ、今回は手ごわいし、回復薬グレートも持って行きましょ。」

蓬はそうやってアイテムを準備していた。そんな折、ウォルフがやってくる。そして言う。

「蓬。今日はこれも持って行くニヤ。」

そう言って、ウォルフはマタタビを蓬に手渡した。其れを見つつ蓬が言う。

「あ、ウォルフ君有難う、ってどうしてマタタビ？」

「知り合いが言ってたんだニヤ。最近「密林」にメラルーの一団が来ているらしいニヤ。ハンターのアイテムも盗むから此れで守るのニヤ。」

蓬の問いにウォルフはそう答えた。

そう、メラルー族はウォルフ達アイルー族と姿は非常に似ているが、決定的な違いがあった。非常に手癖が悪いのだ。集団で、ハンターのアイテムを盗みに来たりもする。直接的なダメージは、殆ど無いがアイテムを盗む、と言う事が厄介である。回復薬、こんがり肉など、ハンターの基本必需品から、罌、補助アイテム等、彼らが持ち運べるものを悉く奪おうとする、盗みのプロフェッショナルであった。唯一の弱点？とも言えるのが彼らはマタタビに弱く、此れを見ると（知ると）真っ先に奪わずには居られない衝動に駆られると言う事なのだ。

「へえ。そうなんだ。んじゃ、有り難く使わせて貰うね。」

そう言つて受け取つたマタタビを鞆に仕舞い込む。そうやって準備は完了した。

立ち上がり、武器を身に付けながら蓬は言う。

「じゃあ、行つて来ます。今日は、卵の運搬をチャレンジするから、狩猟じゃないので大丈夫だと思う。」

其れに答えてウォルフが言った。

「分かつたニヤ。無理な様なら帰つて来るのニヤ。家の事は任せるニヤ。」

「ありがとうございます。じゃあ行つて来ます!」

蓬は元気にそう答えて家を後にした。

(暫く経ち、「密林」洞窟の前で。)

蓬はまた洞窟の前に来た。依頼書によるとこの洞窟の奥の方に飛竜族の巣があり、其処に卵が幾らかあるとの事だった。その一つを失敬して来るのが今回の依頼である。

「考えてみれば、結構ひどい依頼よねえ。」

蓬はそう言っていた。まあ確かに、モンスターとは言え我が子を

攫^{さら}う様なものである。お互いに生きる為に必要であつたり、理由は様々であろうが、良い依頼、とは思えなかった。そうは言っても、受けた以上はこなす努力はしないといけない。蓬はそう言い聞かせて奥へと進みだした。

（洞窟の中間部にて）

バスターブレイドが唸る！ランポスに刃が見事にはまり、叩き切る！横に薙ぐ！不意を衝かれて、襲い掛かるうとしていたもう一匹のランポスの横腹にバスターブレイドが食い込んだ。其の俛ランポスは倒れ込む。

「ふう。ランポスの対応は少しは慣れたかな？」

以前よりは余り息切れをせずに蓬はそう言っていた。其処には五匹ものランポスの死骸が横たわっていた。漸進的ではあるが確実に前に進んでいる。そう自分でも確信していた。余り痛んでいないランポスを解体し、バスターブレイドを研いだから、蓬は更に奥へと進んでいった。

（洞窟の最も奥、上空が開け、崖もある見晴らしのいい場所です）

蓬はゆつくりと洞窟の最も奥になる部分に足を踏み入れていた。以前、ドスランボスと死闘を演じた場所だ。ゆつくり奥を眺めると、緑色の大きな物体が見えた。

「何、あれ……………」

初めて見るものに理解が付いていかず蓬はそう言っていた。其の物体はゆつくりと動いている。そして其の物体からなにやら長いものが出てきた。上と横に。

頭と尻尾だった。そして、其れは翼を広げ始める。まるで其れは、ゆつくりと起き上がりこれから立ち上がるのかと言う人を現すように、優雅に見えた。

「綺麗……………」

蓬は其の姿を見て、ふとそう言っていた。恐らく素直な感情だったのだろう。暫く見とれていたが、ふと気づいて顔を軽く叩く。

「おっと、あれがリオレイアよね。って、なんか凄く大きいんだけど……………」

じっくり観察しつつ蓬はそう言った。今、蓬はリオレイアの巣がある洞窟最奥の部屋の入り口に居るのだが、其処はかなり広く、蓬のいる位置からリオレイアの巣まで、百メートルはあろうかと思われるほどあった。

が……………」

リオレイアはざっと見ても自分達を横に並べて十人以上並びそうであった。そう、十五メートル以上あるのである。あまりにも大き

かった。

暫く其の大きさに呆れていたが蓬は意を決して近づく。そして其れは相手も気づく事に為った。

「さあ、初めましてね。来なさい！」

蓬はそう言つてバスターブレイドを構える。リオレイアは巢に侵入した不審者に気づき、咆哮を上げる。空気が戦慄く！とつさに蓬はバスターブレイドで其の振動に耐えた。手にはびりびりと振動が来る。其の俛で聞いていれば、耳を抱えて蹲つすくまつていたかもしれない。そう、咆哮で敵を止める技、バインドボイスだった。

そうしてリオレイアは、侵入者である蓬に突進した！

「くっ………。」

幾らバスターブレイドで防げるとは言え、相手は十五メートルを優に超える巨体である。其の俛防いでいただけでは吹き飛ばされてしまう。蓬は身体を徐々に捻る様にして自分に加わる力を受け流した。リオレイアは其の力強い突進で頭ごと洞窟入り口に突っ込んだ。起き上がる様子を見せたので、隙が発生する。

「よし、今ねっ！！」

そう言つて、蓬はバスターブレイドをリオレイアの翼に対して叩き込んだ。

やや鈍い感触がしたが、一応バスターブレイドは其の翼の一部を切り裂いた。リオレイアは急いで体勢を立て直し蓬のほうに向き直る。そして頭を突き出してきた。どうやら、噛み付こうとしている。其れを確認できた蓬は、素早く二回ほど側転をする。リオレイアの頭は、蓬が居た位置に其の俛突き出される形になった。そこで蓬

は身体を捻りつつバスターブレイドを水平に回してリオレイアの頭に叩き込む。リオレイアは其の攻撃に怯み、身体を捻り始めた。そして……。

「よし、これで……がつ！」

蓬はそう言いかけて、背中に強い衝撃が走り、前方に倒れこんだ。リオレイアが身体を捻った事で長い尻尾が蓬に凄い勢いで当たったのだ。

蓬は、二度咳き込む。急いで立ち上がらねば。そう自分に言い聞かせて立ち上がる。

其処にはリオレイアが待ち構えていた。

「やばー!!」

逃げ切れないのでバスターブレイドで盾を作る。強い衝撃がバスターブレイドを介して襲ってくる！背中が軋む。痛い、しかし、今はそんな悠長なことは言ってられない。諦めれば命は無いのだ。

数回、リオレイアからの重い攻撃が来た後、奴が飛び上がるような音が聞こえた。翼を羽ばたかしている音だ。バスターブレイドの影から確認する。

リオレイアは羽ばたきながら後方に下がっていた。そして、低姿勢で構えた後……。

其の口から炎の塊が出てきた！

プレス
龍の吐息だ！

ものによっては鉄すら焦がしかねないとも言われる龍の吐息。プレス蓬は急いでしっかりとバスターブレイドを盾状にした。

凄まじい轟音と高温が襲う。が、バスターブレイドにより、手痛いダメージを食らうほどは蓬には来なかった。が、背中の痛みは酷くなる。

「痛い…早く治療しないと危ないのかな。此処は如何すれば…。」

蓬は考えた。幸い今はリオレイアの方も唸りながらこちらを窺っている。一時的に退避した方がいいのか？それとも何かいい方法が…。

思い悩んでいると、何故かリオレイアの方が翼を羽ばたき始め上昇していった。どうやら何処か他の場所に一時的に移動するようだ。其の様子を見つつ、蓬は、

「はああ……助かったかも……。」

そう言いつつヘタレこんでいた。

少しの間そうしていたが、ふと気づいた。どうせ、あのリオレイアは戻ってくる。なら、長居をしては駄目だ。そう決心すると、背中の痛みを抑える為にも回復薬を飲み、バスターブレイドは仕舞って卵がありそうな場所へ足を運んだ。

「えっと…これが卵…って、でか！」

そう、其処には二個の卵があつたが、片方は蓬の四分一程度の大きさ、もう一個は三分の一程度もあつた。重量にすればかなりのものだろう。

「うはあ…こりゃ大仕事だわ…」

そう言つて卵を眺めた。よく見ると、小さい方は、辺りに散らばっている殻と同じ色だが、大きな方はどうも様子が異なる。色合いも全く異なるし、何と云うか妙な感覚があつた。

「とりあえずこの小さいのから行きましょうか…。」

そう言って卵を抱える。

重い……。

重量はそれなりなのだが、丸い故に持ちにくい。なので、其の分無駄に力が入る。

「こ、此れは大変ね…。」

ふらつきながら蓬は洞窟を後にした。

（苦勞して洞窟を出たところ、入り口付近で）

蓬は何とか洞窟を出る場所まで来た。息はやや切れ掛かっているがまだ行けそうだった。

「ふう。まだ半分か。でも頑張らないと。」

そう言った時。周囲からなにやら気配がした。

「ハンターだニヤ。」

「ハンターだニヤ。」

「アイテムを奪うのニヤ。」

「一杯頂くのニヤ。」

ウォルフ君の色違い姿……メラルー族だ！

「げ！こんな時に……」

蓬は足早に逃げようとするが大きな卵を持った状態である。満足に走れるわけが無い。次々とメラルー族が蓬に襲い掛かった！

ここら、そこらと蓬の身体に纏わりつきアイテムを奪おうとする。

「ちょ……やだ……やめ……あ……だめえ！」

別にいやらしい事をしている訳ではないが、大きな卵を持った状態に、プニプニ肉球の攻撃？が来るのだ。其れはもう、気持ちの悪い？攻撃な訳で……。

「ああ……！」

蓬がそう叫びを上げた時、卵は大きな音を立てて下に落ち、見事に割れてしまった。其の音に驚いて、または目的の物「マタタビ」を手に入れてメラルー族は四散していた。

割れた卵を見て呆然とする蓬。暫く其の俣突っ立っていた。

「くうううう。メラルーめえええ！」

悔しさの余り蓬はそう怒鳴っていた。

しかし、文句を言っても依頼は解決しない。蓬は再び洞窟の中へと戻って行った。

（再び洞窟の最も奥、上空が開け、崖もある見晴らしのいい場所です）

蓬は再度竜の巣に来ていた。幸いまだリオレイアは居ないようだ。蓬は其れを確認すると急いで卵の場所に向かった。

其処にはさつき見た大きな卵があった。如何見てもさつきより重そうだ。蓬は少し溜息を吐きつつ、意を決して卵を抱えた。

「あれ？軽い？…」

そう、其れは不思議にもさつきのものに比べて異様に軽かった。しかし、蓬にとっては幸いである。急いで持ち上げると蓬は早足で運んでいった。蓬が洞窟の其の部屋を出る際に後方から竜の鳴き声が聞こえていた。

（ベースキャンプの近くで）

蓬は出来うる限り早足で駆けていた。幾らさつきよりは軽いとは言え、やはり大きな卵である。無理は出来ない、が、ゆっくりしているとさつきの様にメラルーが来たり、場合によってはリオレイアが来るかもしれないからだ。

「はっ……はっ……此処まで…来たら何とか……。」

安心して気が緩んだ矢先、

！！

見落とした石に躓^{つまず}いて前のめりに為る。危ない！倒れてしまう。蓬はそう思った。卵が傷まない様に抱きかかえる様にしながら転ぶ。幸いベースキャンブ近くで海岸付近だったせいもあり、砂地が多く、見た目では卵は無事に見えた。

「だ、大丈夫だったのかしら……。」

心配になり、そつと砂地の上に置いて、じっくり色々と調べる。見回すがおかしな部分はない。いや、おかしいのは卵自体かも知れない。色合いといい、軽さといい、さつき運んだ卵とはまるで違うからだ。

「うゝん。卵には間違いないんだけど……。」

そう言つて蓬は軽く卵を叩いた。すると、何と卵のほうから音が返ってきた！

「え?!……」

不審に思い、蓬は再び卵を叩いてみる。すると、やはり、卵の中から音が返ってきた。中に何かが生きて反応を返しているのだ。

「ちょ、ちょっと、まさか此れから生まれるんじゃない……。」

焦りつつ蓬はそう言っていた。そんな折、こつこつと中から音が聞こえ始め、卵の表面にひびが入る。

「ま、待ってって、今、生まれたらあたしが困るのよ!」

蓬は必死にそう抗議をするが、生まれる側も必死である、そんな抗議をよそに卵を少しずつ壊し顔を覗かせた。

「みつ。」

其れは可愛い声でそう鳴いた。蓬は其れをはっきりと見た。目の可愛い、竜の子供である。片目が青く見えもう片方が赤く見えた、しかも角度や光で微妙に変化するような美しさがあった。身体は白と言うか此れも光の当たり方で煌びやかに輝く綺麗な鱗だった。

「綺麗……………」

蓬は其の姿を見て、一言そう言い、立ち尽くしてしまう。其れは、殻を一生懸命に破り、其処から抜け出た。そして蓬に顔を向けて鳴いて言う。

「みつ、みつ！」

そう言われて、蓬はたと気づく。

「ああ、つと、えつと、如何したらいいの……………」

考えが纏まらず、蓬はそう言ってしまった。それは、更に鳴きながら蓬に訴える。

「みつ、みつ。」

愛くるしい其の姿を見つつ、蓬は、はっと為った。

「もしかして……あたしがあなたのママなの？」

蓬はそう聞く。其れは答える様に言った。

「みう。」

答えるように言った其の言葉に、蓬はがくんと腰を砂地に落としながら、

「なんて事、あたし、この子のお母さんに為っちゃったのね……。」

「

産まれたばかりの子供が、動物であれ人間であれ身近な者を親と認識する事がある。インプリンティング 刷り込みと言われるものらしい。どうやら其の行為で蓬は親にされている様だった。

苦笑しながら、蓬はさっき入手していた生肉をナイフで小さく刻み子供の竜に与えた。すると、竜は小さい口で一生懸命に食べ始めるのであった。

其の様子を見つつ、

「如何したらいいのかしら……。」

蓬はそう呟いていた。

（夕暮れ、ハンターズギルドにて）

蓬は草臥くたひれた様子でギルドに入ってくる。其の様子を始めは普通に眺めていたセティだが、一緒につれているものを見て驚く。

「ちょっと、蓬ちゃん、如何したの？其の子。」

苦笑しながら蓬は答える。

「依頼の卵運びしてたんですが、納める直前でこの子孵化しちゃって、で、あたしを親と見たみたいなんですよ。依頼のほうは残念ですけど失敗です。」

其れを聞いてセティは苦笑しつつ、

「まあ、其れは其れで処理するけど……、その子は如何するの？もし飼うにしても村長に聞かないと駄目よ？」

そう言った。蓬は答えて言う。

「あ、はい。この子もあたしが気に入ったみたいだし、あたしも、こんな子殺すなんて出来ないから、村長に聞いてきます。あゝ、まだ名前決めて無かったわね。」

「みつ？」

蓬が尋ねたので、竜はそう答えた。其れを聞きつつ蓬は少し考えて、

「よし、あなたの名前はミウよ。いいわね？」

そう言った。ミウは喜びつつ、

「みう！」

と、答えた。其の様子とセティは微笑ましく見ていた。

（暫く経ち、村長の家の前で）

暁の村、つまりシャイルゼイラーフェラント村の村長、シャイルゼイラーフェラントは蓬が提出した議題を考えていた。

子供である竜を飼いたい、と。

自分を慕う竜と一緒に生活したい、と。

「ふむ……蓬よ。もし、重大な問題が起きた場合、御主は、究極的な決断、つまり、場合によってはこの子、ミウを殺す事が出来るかな？」

ややきつい口調で村長はそう言った。蓬は答えて言う。

「出来る、とは言い切れませんが、あたしが出来る限りはしたいと思います。あたしを慕ってくれたミウなのであたしが教えます。」

其の答えに村長は、

「ふむ……。」

と、いい暫く考え込む。そして暫くしてからこう言った。

「まあ、よからう。レイナルド達も居るし、もし、万が一があれば例え殺されても文句は言えんぞ？」

そう、強く念を押して言った。蓬は、

「はい！」

そう、はっきりと答えたのだった。

そして、蓬はミウを連れて家に向かう。その姿を見つつ村長は言った。

「竜と人が共に過ごす……か。古の言い伝えが再び語られる時が来ると良いのじゃがな。」

そう、意味深に語る村長であつた。

（暫くして蓬の家で）

「ただいま。ウォルフ君、今、帰ったよ。」
「みう」

二人？は帰ってきた事をそう報告した。奥からウォルフが出てくる。

「お帰りニヤ。メルル一族が邪魔しなかったかニヤ？って、其の竜は如何したニヤ？」

流石のウォルフも驚いてそう言う。

「あ、うん、実はね……………」

そう言つて蓬は経緯を話し始めた。

ひよんなきつかけで竜を飼う事に為った蓬。この事実は何を起くる事を示すのか？

蓬の旅はまだまだ続く！

お母さんは怒らせると怖いです。（後書き）

ミウを飼う事にした蓬。

其れが何を意味するのかは今分らない。

しかし、ハンターとしての試練は此れからだ！

次回予告「先生は偉大です。」

尚、予告は都合により改変される事があります。ご了承ください。

さあ、貴方もレッツハンティング！

先生は偉大です。（前書き）

偶然とは言えミウを引き取る事になった蓬。

ハンターとして「初心者」から「初級」に為るべく試験を受けようとしていた。

果たしてどのように為るのか？

さあ、今回も始まり始まりiiiiiiii！

先生は偉大です。

小説 蓬の旅（モンハンFF）
第六章 先生は偉大です。

（あれから数日後、訓練所にて）

蓬は太刀を構えていた。何度か既に練習はしているが、正しい「型」をするのは初めてかもしれない。傍には教官ガルシエンドが立っている。

「よし、蓬。基本からだ。切込みからの基本技をやってみろ。」
「はい！」

教官の指示に蓬はそう答え、太刀を握り替えながら、所定の「型」へ移っていく。

其の滑らかな動きに、太刀は綺麗に線を描いていく。そう、大剣の様な叩き切る動きではなく、空を切り分けるような動きで。

「よし！基本は良いようだ。次はハンマーのおさらいだ。」
「分かりました！」

蓬はそう答えて、太刀をせっせと仕舞い始めた。
訓練所はそうやって、教官の声と蓬の声、そして武器の音が^{「こだま」}を
していた。

(シャイゼルの「武具屋」の前にて)

「ほう……見たことが無い、鱗と皮だな。」

シャイゼルはウオルフが持ってきた鱗と皮を見つつそう言った。

「やはりニヤ。僕も見たことが全く無いからもしかと思ったけれど、ミウは普通の竜ではないのかもしれないニヤ。」

そう、ウオルフはミウが脱皮した後の皮と鱗を持ってシャイゼルの所に来ているのだった。

其れは、美しい光沢があり、しかも、異常と言えるほど軽かった。シャイゼルは、炉の近くにある金型に鱗を置き、徐にハンマーで叩き始めた。

周囲に金型を叩くハンマーの音が響く、暫く叩いた後、呆れるようにシャイゼルが鱗を持ってきて言う。

「こりゃ、完全に未知の物だな。金型とハンマーの方ばかり傷が付きやがる。うちの装備で加工出来るかも怪しいぜ。」

「其れは凄いニヤ……とりあえず、近所にはシャイゼルさんの所しか鍛冶関連施設は無いから、この鱗や皮は、此処に収めておくニヤ。溜まったら加工出来るようにして欲しいのニヤ。」

ウオルフは、やや一生懸命にシャイゼルにそう言っていた。其の姿を見つつシャイゼルが答えて言う。

「えらく今回は気に掛けるんだな、ウォルフ。アイルーの勇者とも言われた、お前にしては珍しいが。」

「ん」。勘かニヤ。今までの経験が僕に訴えてるのニヤ。行動しておけとニヤ。」

確信に満ちた口調でウォルフはそう言った。其の答えにシャイゼルは、

「そうか、何処まで出来るか分からないがやってみよう。こんな時に、師匠が居ればと思うが、どうせあの爺さんの事だ。色々町をふらついているんだろう。」

やれやれと両手を広げつつそう言っていた。ウォルフは其れに、

「まあ、あの人はそう言う人だからニヤ。じゃあ、御願するニヤ。」

そう言つてウォルフは其処を後にした。其の様子を見つつ、

「不思議な縁で、不思議な子供は、不思議な竜と、不思議な出来事を連れてくる……………てか？つて、俺は詩人じゃないんだがな。」

そう言いながらシャイゼルは作業を始めた。

（次の日、蓬の家にて）

「みう！」

ミウはそう言いながら蓬を引きずっていた。正確には、引っ張ろうとして逆に引っ張られていた、かも知れないが。其れに気づいて蓬が目覚めます。

「ん……あ、ミウお早う。もうこんなに明るいのね。今日は試験だし頑張らないと。」

そう言いながら蓬はベットから起き上がる。そして、徐にベットの横に置いてある防具をいそいそと着始めた。そんな折、部屋にウオルフがやってくる。

「蓬、起き……って、今日は早いのだニヤ。試験だと聞いたから朝食は準備できてるニヤ。」

「ああ、ウオルフ君有難う。さっきミウが起こしてくれたの。分かった、今から食堂に行くね。」

蓬は着替えながら、そう答えた。ウオルフは其れを確認しつつ、

「分かったニヤ、なら、ミウ、お前には美味しいお肉があるニヤ。」
「みう！」

そう言った。ミウがすぐさま返事をしてウオルフの方へ行く。ここ数日変わらない蓬の家での風景だった。

食堂の食卓には美味しそうに料理が並んでいた。ポポノタンをレツドオイルを用い唐揚げにしたもの。頑固パンにドライマーガリンを塗りこんがり焼き上げたもの。スライスサボテンを使った美味し

いそんなサラダ。色々並んでいた。

蓬は席に付き、美味しそうに食べ始める。ミウもウォルフが用意した肉を食べていた。ウォルフは食事を更に準備しながらあちこち行きつつ色々と作業をしていた。

「準備はもう出来てるのかニヤ？」

作業をしながらウォルフがそう言う。食事をしながら蓬が答えて言った。

「あ…うん。準備はばっちりだよ。只…………。」

そう言つて、蓬は顔を俯けた。ウォルフが言う。

「如何したのニヤ？何か不安な事でもあるニヤ？」

「あ、うん…此の前卵を運ぶ時にリオレイアと少し戦った事は話したでしょ。その時に、攻撃ばかり考えてて、手痛い攻撃を食らったから。だから…………。」

そう、蓬は答えて言葉に詰まった。ウォルフが答える様に言う。

「分かっているのなら問題は無いニヤ。次は其処を如何直すか考えて当てはめて行くだけニヤ。急いでも転ぶだけニヤ。」

そう言われて、蓬は暫く考えた後に頷きつつ、

「うん、そうだね。頑張るよ、ウォルフ。ご馳走様！試験頑張ってきます！」

そう答えてから、食堂を後にして出て行った。

「まだまだ、これからニヤ。先は長いだから頑張るのニヤ。」

励ますようにウォルフはそう言っていた。そんな傍で、ミウは美味しく肉を食べていた。

（「密林」のベースキャンプにて）

蓬は緊張していた。何時もは一人で此処に来るのだが、今日は違う。そう、試験の為に教官であるガルシェンドと一緒に居るからだ。「緊張しすぎてるな、蓬。そんな事では、実力は半分も出せないぞ？」

ガルシェンドはそう言って、蓬を落ち着くようアドバイスをした。蓬は軽く顔を数回叩き気分を整えた。そして、

「はい！蓬、これから試験を開始します！」

そう言って、駆け出して行った。其の姿を見つつ、

「かなり緊張してるな。無理をしなければ良いが……。」

ガルシェンドはそう呟いていた。

「試験」其れはハンターとしての適正を量り、其れにより、分か

りやすくランク付けをする為のハンターズギルド独特のシステムであった。此の試験に合格していく事でランクが上がって行き、難しい依頼もこなせると判断され、また優れたハンターと認められるのである。

今回、蓬がチャレンジするのは「初級」つまり駆け出しハンターの登竜門、怪鳥イアンクツクの討伐である。

初心者ハンターの見極めに扱われるモンスターの為、人々はクック先生と愛称を付けるほどであった。

（ベースキャンブ近くの海岸にて）

蓬のバスターブレイドが唸る！

其の刃は、甲殻である殻を突き破り真つ二つに割っていた。獰猛な爪を持ち砂地から獲物を待ち構えるヤオザミを蓬はそうやって倒していた。

勿論倒した後は、何か取れる物が無いか、しっかりと調べる。ヤオザミは甲殻類と区別されるモンスター。硬い外骨格を持ち、其れを武器に攻撃してくる厄介なモンスターの一つである。見た目より異様に素早く動くのが特徴で、初めて対峙するときは其の動きに翻弄されやすい。蓬も初めての時は大怪我をしたものであった。

「よし、此れでもう此处には今は居ないかな？」

確認しつつ、蓬はそう言った。大型モンスターと対峙する為には、邪魔な肉食系のモンスターや獰猛な者は早めに始末しておかないと、致命的な事に為りかねなかった。

そんな折、翼を羽ばたかしてくる音が聞こえた。振り返ると、海

岸の離れた場所に、やや大型の大きな嘴をした翼竜くちばしの様なモンスターが見えた。

「赤い…そしてあの嘴と大きな耳。間違いないわ、あれが、イヤンクックね！」

そう、蓬は確認して走り始めた、手にはペイントボールを持って、蓬がそうやって走り始めたのを、イヤンクックも気づき威嚇の声を上げる。数度そうやって声を上げている所に蓬はペイントボールを投げつけた。

其れが引き金になったのか、イヤンクックは蓬に嘴を徐おもむろに突き刺すように何度も突いて来た。

蓬は側転して素早く避ける！そして、避けながらバスターブレイドを抜く。しかし、まだ攻撃はしない。

イヤンクックは、すぐさま蓬のほうに向き直り、また威嚇をした。そして、身体を回転し始めて尻尾を蓬に当てて来た！

蓬は其れを確認して、素早くバスターブレイドで防御の構えを取る。鈍い金属音が起こり、攻撃を受け止めた事が手に伝わる。其れを確認した蓬は、素早くイヤンクックに向かって思いっきりバスターブレイドを振り下ろした！

「行くわよ！」

蓬はそう言いながら振り下ろす。バスターブレイドは、イヤンクックを両断するように走り、其の翼に一筋の大きな傷を与えた。其処から多少の血が迸はちる。

イヤンクックは痛みは有るのだろうが更に回転を続け、再び尻尾を蓬に当ててきた。

蓬は後ろに跳び下がって其れを避けた、そして、其の俤踏み込みながら、再びバスターブレイドを振り下ろす！

イヤンクツクは再び翼に傷を受けた。血が迸る。そして、余りの痛みに為ったのか、嘴から炎を覗かせながら、激しく上下に飛び上がり始めた！

「え?!」

蓬はそう、声を上げる。いきなり、イヤンクツクの行動速度が上がったのだ！

先ほどとは比べ物にならない速さで尻尾が襲ってくる！バスターブレイドによるガードが間に合わず、蓬は尻尾の攻撃を食らってしまった。

「がつ……はっ……。」

突然の襲撃に思わず倒れこんでしまう、が、すぐさま側転し、イヤンクツクから距離をとる。油断すれば更に致命傷になるからだ。そして起き上がりながら、敵のほうを見る。敵は、嘴から炎を覗かせながら威嚇していた。

「くっ、怒って早くなったのか…… 此处まで違うなんて…… 頑張らないと。」

とつさの事に幾らか動揺したが、蓬はそうやって自分を勇気付けた。

イヤンクツクは、突然の痛い攻撃に怒り狂っていた。そして、敵に向かって数度威嚇した後、周囲にばら撒く様に火炎液を吐き出した。

龍プレスの吐息とは異なり、火炎液は放物線を描きながら砂地に落ちる。ジュツツと砂地の水が蒸発するような音が聞こえた。結構な高温の様だ、食らえば火傷程度では済まないかも知れない。

蓬は横に軸をずらしつつイャンクックに少しずつ近づいていった。イャンクックは蓬のほうへ向き直り、今度は突進を仕掛けてきた！

「なっ……！」

蓬はとっさにバスターブレイドを盾状に構える！全身、特にバスターブレイドを支えている両腕に強い衝撃が走る！蓬は必死で其の攻撃に耐えた。

「くっ……。」

バスターブレイドはイャンクックの嘴が当たり、嫌な金属音を発しながら其の攻撃を耐えていた。其の音がやんで手に加わる力が少なくなつた刹那、蓬は素早く横に躍り出た。そして、イャンクックに向けてバスターブレイドを振り下ろす！

鈍い手応えが手に来る。バスターブレイドはイャンクックの首筋を切っていた。イャンクックは叫びを上げて暴れる。蓬は素早く後ろに下がった。

が……

イャンクックは、突然に、痛みのせいなのか蓬に向かって突進して来た！

「え?!」

事態を理解できなかった蓬は、其の攻撃をもろに食らってしまった。嘴が胸の下、腹部に食い込むように当たって其の俣押し込まれた。

「が……は……！」

呼吸も俣に為らないまま押し込まれ、蓬はイャンクックと一緒に

砂地に倒れ込む。

痛い。苦しい。辛い。しかし、そんな事を言っても事態は改善しない。蓬は力を振り絞り立ち上がる。

イャンクックも既に立ち上がっていた。蓬は武器を一旦下に放置して回復薬を取り出す。イャンクックが威嚇しているのを確認してから回復薬を飲む。

其れにより、腹部を抉^{えぐ}っていた傷の部分は淡い光で塞がれつつあった。一息吐いて、安心した後、イャンクックのほうを見る。

イャンクックは、怒りが収まらないのか再び火炎液を辺りに撒き散らしていた。蓬は其れを確認すると、放り投げたバスターブレイドを再び手にした。そして、イャンクックに近づいていく。

イャンクックは蓬に振り向いて、嘴で素早く突こうとして来た。蓬はとつさに側転をし、バスターブレイドで横に薙ぐ！

其の刃はイャンクックの足に当たり、イャンクックは倒れてしまう。其れを確認した蓬は、再び首筋を狙いバスターブレイドを振り下ろした！

耳に障るイャンクックの鳴き声と共に首筋から血が迸る！イャンクックは暴れながら起き上がった。蓬は巻き込まれるのを避ける為距離を取る。

イャンクックは、手痛いダメージを受けて、息が荒げていた。しかし、まだ逃げるようではない。むしろ、蓬を威嚇している。

「は……は……やはりタフだわ……」

今まで対戦した敵とは違う為、蓬はそう言っていた。そう、此れほどの飛竜に為ると体力が今までとは異なる。登竜門と言われる部分の一つにこう言う理由もあった。

イャンクックは再び、蓬に対して突進して来た！蓬はバスターブレイドで盾を作り其れを防ぐ！大きな鈍い金属音と手に掛かる大きな衝撃、其れを耐えて、蓬はイャンクックにバスターブレイドを叩

きつける！

突撃が失敗したイャンクックは其の攻撃をもろに喰らい、叫びを上げる。そして、苦しさの余りその場で暴れながら立ち上がる。

「痛！……」

どうやら爪が当たったようだ。避け損ねたのかもしれない。足の一部から血が滴っているのが分かった。

しかし、今は其方に気を回すほどの余裕が無く、蓬はイャンクックのほうに顔を向ける。

が……

イャンクックは攻撃を断念したのか、徐に羽ばたき始めて其処を離れていった。

突然の行動に、反応できずに蓬は暫く其処に立ち尽くしていた。

「あ……いけない、追いかけないと。」

そう言いながら、回復薬を飲み、砥石を出してバスターブレイドを磨く。再び戦う準備を完了した蓬は、イャンクックに付けたペイントボールの匂いを頼りに、搜索に出かけた。

「ほう……。閃光玉も使わずに、其処まで追い詰めれる様になったか。素晴らしい進歩だな。」

離れた場所で見えていた教官ガルシェンドは蓬の戦い方を見てそう言っていた。

（「密林」に在る洞窟の奥、飛竜の休み場と為っている地にて）

イヤンクツクは、苦勞しつつ、休み場に戻ってきた。いい餌と思
い襲った人間は、手ごわいハンターで、痛い傷を負わされてしまっ
た。仕方が無いので、暫く休む事にし、イヤンクツクは深い眠りに
付くのであった。

其れから少し時間が経って、ペイントボールの匂いを元に蓬がや
つてきた。後ろからはランポスが近づいている為、蓬は、イヤンク
ツクから離れた場所で、ランポスを一匹ずつ倒していった。

「こう言うときは、ランポス達は邪魔ね……。」

些か、機嫌悪くそう言っていた。まあ、それでもイヤンクツクと
対峙してる時でなくて良かったな。そうも思っていた。

そうして、ぐっすりと眠り、^{いびき}鼾を掻^かいているイヤンクツクの傍に
立つ。バスターブレイドを構え、首筋に対し「溜め斬り」をする為
に力を溜める！

「此れで、だいぶ行ける筈！」

「溜め斬り」は威力が強いが、最大限発揮出来るのは、この様に
寝ている敵に対するときである。約三倍増すとも言われていた。効
果として、だが。

蓬の「溜め斬り」がイヤンクツクを襲う！首筋に強力な一撃が走
り、イヤンクツクは叩き起こされた。狂気と言わんばかりに暴れ始
める。

蓬は素早く後ずさりして、武器を一旦手放し、鞆から閃光玉を取
り出す。そして徐にイヤンクツク、そして自分との直線状になる上

空に放り投げた！

！！

強烈な閃光が発せられ、イャンクックは目を焼かれる。其れにより、その場で暴れ始めた。しかし、其れは、一定の動きになり、蓬にとつては絶好の機会と為った。

「これで終わりよおおお！」

そう言つて、バスターブレイドを徐に掴み取り、イャンクックに叩きつける。更に横に薙ぐ。加えて、力を込めて切り上げる。最後に、

「いつけええええ！」

そう叫びながら、イャンクックにバスターブレイドを叩きつけた。手には重たいほどの衝撃が走る。イャンクックは擦れる様^{かす}な叫びを上げて、力なく倒れこみ其の伥動^{ちやうどう}がなくなった。

「は……は……は……。」

蓬は、息咳きながら其の姿を暫く見ていた。すると、後方から、拍手が聞こえてくる。蓬は其の方向に振り向いた。其処には教官ガルシエンドが居た。

「よくやったな蓬。此処まで成長しているとは、私は猛烈に嬉しいぞおおおおおおお！」

最後は号泣しながら、そう叫んでいた。蓬は其の声を聞きながら、その場にへたり込んでいた。

そう、試験は無事に終わったのである！

（暫くして、ハンターズギルドにて）

蓬は試験を終わり、ギルドに帰ってきた。

「只今です！」

元気にギルドのドアを開けて入ってくる。其の様子を見つつ、セティが言う。

「あらあら、元気ねえ。其の様子だと、試験は無事終わったのかしら？」

其れに、蓬は笑顔で、

「はい！何とか倒せました。此れで初心者はやっと卒業ですかね？」

と、答えた。其れに答えてセティが言う。

「そうね、でもハンターとしてはこれからが始まりよ。頑張っ

てね。」

「はい！」

セティの言葉に元気に蓬は肯定した。

無事試験が終わり「初心者」を返上し「初級」のハンターに
なつた。しかし此れはスタートに過ぎない。
これから何が待ち受けるのであろうか？

先生は偉大です。（後書き）

「初級」ハンターに為った蓬。

おめでとう蓬！が……

さらに蓬には数々の試練が襲う！

次回予告「恐怖！砂漠に現れる暗殺者！」

尚、予告は都合により変わる可能性があります。ご了承ください。

さあ、貴方もレッツハンティング！

恐怖！砂漠の暗殺者！（前書き）

ミウ「みう！」

作者「元気ねえ……。」

ミウ「みう？」

蓬「あゝ……。ミウ、作者さんはブルーモードだから、余りかまったら駄目よ。」

ミウ「みう。」

蓬「さて、今回は「砂漠」が舞台です。」

作者「戦闘描写が問題なのよねえ……。ぶつぶつ……。」

蓬「こりゃ重症ね……。あ、兎も角お楽しみ下さいね。」

ミウ「みう！」

恐怖！砂漠の暗殺者！

小説 蓬の旅（モンハンFF）
第七章 恐怖！砂漠の暗殺者！

（前回より二週間余りたった「砂漠」のベースキャンプにて）

蓬は「砂漠」に来ていた。暁の村からは東の向きにあり、少し離れている為、徒歩で二、三日の距離にある。極悪な環境下ではあるが其処でも独特の生き物達が様々に生き様を営んでいた。勿論、飛竜達も生息しており、又、砂漠特有のものや特定の環境下しか生存しない特殊なものも居るのであった。

今回、蓬はドスガレオスと言う魚竜種と呼ばれる種別のモンスターを狩猟する事に為っていた。一応、教官や他のハンター達から聞いてはいたもののやはり実物を知らぬが故の不安があった。持ってきた辞典を捲り再度確認をする。

ドスガレオス。魚竜種と区別されるモンスター。但し、水の中で生息する訳ではない。砂地を生息地の基本としており、柔らかい土の部分も移動箇所として用いる場合がある。主な生息域は砂漠地帯。砂の中を見事なまでに回遊する。その時は背中にある背びれしか見えず、非常に危険である。また、此の背びれは砂で磨き上げられる為、非常に鋭利で物によつては金属ですら傷が付くほどである。弱いが龍の吐息も使える。属性は魚竜種らしく水。攻撃力が非常に高く、特に怒っている時は非常に危険である。逆に、防御力は弱く、体力がある割には比較的倒しやすい。特に切断武器では首が弱点。射撃武器では貫通弾で効果的にダメージを与える事が可能である。

「ふむふむ……。つて事は、防御を気を付けないと駄目つて事ね。此処は街からも離れているし、いざつて時は助けも来ないものね。」

そう、蓬は今回は一人出来ていたのだった。離れた「砂漠」に向かうのであるから、とウォルフが同行しようとしたがミウの世話があるから、と断ったのであった。

蓬はそうして辞典を仕舞い再度、アイテムの確認を行った。

「え〜っと。此処は暑いからクーラードリンクが要る、っと。回復薬とかは十分持ったし。必要な物は皆持ったわよね。よし、じゃあ行きますか！」

そう言つて、蓬はベースキャンプを後にした。

（「砂漠」にて）

じりじりと焦がす様な熱気が吹き荒れる。空と地面から照り返す日差しが二重に身体を焦がしていく。蓬は今、以前着ていたバトル装備の大半を取り替えてステイルシリーズを着込んでいた。最低限しか身体を覆っていない鎧だが硬度があるマカライト鉱石をふんだんに使用している事もあり、以前よりも頑丈な装備だった。しかも、鎧特有の効果として、防御時に有利に働く能力が機能するのだ。防御面に不安な蓬にとっては嬉しい能力だった。

「此処が砂漠か……。暑いわ……。」

幾ら、体が無駄に温まらなくなるクーラードリンクを飲んでいる
とは言え、見た目が変わる訳ではない。故に、「暑い」と思っ
てしまふ。概念による性であるが人である故に仕方の無い事でもあつた。
気を取り直して辺りを見回す。生き物は殆ど見当たらない。遠巻
きに、ランポスのような姿を見つけた。

「あら？あれは…。ランポスの仲間で、確か…ゲネポスっていう奴
よね。」

蓬はそう確認していた。ゲネポスはランポスからの派生種族。砂
漠や沼地などの多少悪環境でも生き抜くタフな奴で、特有の特徴と
して、黄色い皮と鱗、そして麻痺毒を持っていた。そう、敵を麻痺
させてから美味しく頂くわけである。そう言う意味では、些か嫌な
奴でもあつた。ただ、そうは言ってもランポスの仲間である以上、
大量に居る事がなければ、そう怖いモンスターではなかった。

「後で、何匹か倒しておきましょう。確か、ハンマーの強化であいつ
等の素材が要った様な気が…。」

うる覚えな記憶を元にそう言っていた。実際は、其の大ボスであ
るドスゲネポスの事だったのだが、此処では割愛しておこう。

そんな中、砂、と言うよりも水を裂いて移動する様な、いや、滑
空と言えいいのか、そんな音が聞こえてきた。

「何?!」

状況が変わった事に気づいた蓬が、そう言っ
て周囲を見回す。すると、砂地になにやら小さな影が走っているのが見えた。目を凝ら
して見ると其れは背びれの様に見えた。

「あれって、ガレオスって奴？」

状況的にそう見えた。そもそも目標の敵はドスガレオス。其の小型のような敵と思われる背びれが砂から見える。総合的に判断して、そうだ、そう蓬は結論する。

「よし、とりあえずこいつで戦って試みましょうか。」

そう言つて、バスターブレイドを構える。其の間にも蓬の周囲には三つの動く影が現れていた。

「むむむ……。こいつ等複数で襲うのかな？用心しないとな…。」

そう言いながら、敵を見極める。其のうち、一匹のガレオスが砂から飛び上がり蓬に向けて勢い良く龍^{フレス}の吐息を吐き出した！

蓬は全方向に注意を集中していた。素早く龍^{フレス}の吐息の方向にバスターブレイドを向けて防御体制を取る。龍^{フレス}の吐息はバスターブレイドに当たり蓬は無事に防いだ。然し、ガレオスは砂の中に再びもぐりこむ。

「くつ。此の佯じゃ埒が明かないわね。」

そう、守り一辺倒では何も進まない。ふと、辞典で読んでいた事を思い出した。

ガレオス系は耳が鋭敏で高周波の音を聞くと驚いて砂地から出てくる…と。

「そつえば、音爆弾を持って来てたんだつた。」

片手を鞆に突っ込み、ごそごそと探す、ガレオスに警戒しながらなので手間取ってしまう。が、何とか一つを出すことが出来た。

音爆弾。ドスランポスやイランクックの発声器官「鳴き袋」を火薬と調合して作る高周波発生爆弾。大きな高周波を聞いてしまうと驚くモンスターに有効で此れが意外と多かったりするから侮れない。「馬鹿と鉄は使い様」とは此の事かもしれない。

蓬はガレオスの動きを注意しながら三頭のガレオスが集まった場所に音爆弾を投げつけた。

！！

耳障りな高周波が響く！そして其れを聞かざるをえなかったガレオスは、音に驚いて地面に弾き上がる！まるで、水中に電気を流されて吃驚して飛び上がる魚の様に。

砂の上で何度もびくびくと震え上がるガレオスの一頭に蓬は切りかかる！

鈍い手ごたえと共にガレオスから血が迸る。然し、一発では倒れずそのままガレオスは体勢を整えつつ起き上がる。蓬は、素早く其の俣突っ込みつつバスターブレードを其の胴体に叩き込んだ。其の攻撃でガレオスは何度か痙攣をしたのち動かなくなった。

「ふう……がつ！」

ガレオスを倒して一息つくこうとしていた時、後ろから龍の吐息ブレスを受けて吹き飛ばされてしまう。飛ばされた先は砂地だったので、大した事無きを得たが。素早く蓬は立ち上がる。

「いったあ！…まだ二頭居ただっけ…危ない危ない。」

蓬は残っている二頭の内、自分に近い方に目標を合わせた。そして徐に駆け出す。ガレオスも来るのが分かったのか、再び龍の吐息ブレスを吐く！

蓬は素早く側転をして其れを避ける。そして、龍の吐息で硬直している其の身体にバスターブレイドを叩き込む！

ガレオスは身体を捻り始め尻尾が蓬を襲う。蓬は、バスターブレイドを構えて尻尾の打撃を耐えた。鈍い音がして尻尾は其の俛回ってゆく。蓬は其れを確認した後、バスターブレイドを薙いだ。もろにそれを喰らったガレオスは絶命する。

蓬は最後の一頭に為ったガレオスを見た。其のガレオスは、何と蓬に向かって砂の上を滑走するようにして突っ込んで来た！

「な！……。」

蓬は防御が間に合わず横っ腹に攻撃を受けてしまい、巻き込まれるようにして砂地に転がり込む。数回咳をした後、蓬は立ち上がった。

「かつ…はっ…流石にきついわね…。」

急な襲撃で油断していた為、思った以上にダメージが来たようだ。蓬はそう言っていた。ガレオスは、じりじりと足を進めながら蓬に近づく。

そして、攻撃できる範囲に来たのか、仰け反るように反動を付けて平たく広がる大きな口を開いて喰らいつこうとした！

蓬は其れを素早く横滑りするようにしてかわす。それにより、ガレオスの首筋が蓬の前に来た。

「此れはお返しよ！」

そう言いながら、思いっきりガレオスの首筋にバスターブレイドを叩き込む！

手に鈍い感触が十分に来て、ガレオスを叩き切る事が実感出来た。

ガレオスは上下に捻れる様に跳ねてから地面に打ち付けて、其の俤動がなくなった。

「ふう……。イヤンクックに少し似てるけど、此れもまた独特な動きね……。早く覚えないと。」

そう言いながら、蓬は回復薬を取り出して飲み始める。其の効果で、先ほど傷めた場所が治って行く事が実感出来た。

「やれやれ、ガレオスで此の調子ならドスガレオスは如何なるのかしら……。」

些か不安を抱きつつ、蓬はそう言っていた。そんな折……。

先ほどより、大きな音を立てて蓬に近づく影があった。然し、先の戦いで安心しているのか、まだ蓬は気づいていない。

（同じ頃、暁の村で）

「蓬、如何してるかニヤ……。」

ウォルフは、洗濯物を一生懸命に干しながらそんな事を言っていた。蓬の家では家事の殆どはウォルフが仕切っていた。蓬が出来ない訳ではないが、ウォルフ曰く、

「料理以外は僕がやった方が早いし上手く行くニヤ。」

だ、そうである。まあ、事實は如何あれ、今の蓬の家は実質ウオルフが仕切っている様なものだった。そんな折、ウオルフの傍にミウが寄ってくる。

「みう！」

そう言つて、ミウはウオルフを銜くわえて引つ張ろうとした。

「ニヤ？！ミウ、如何したのニヤ？」

驚きつつ、ウオルフが言う。ミウは引つ張りながら更に鳴いた。

「みう！」

其の方向に眼をやると、服装からしてハンターらしき人物が二人立っているのが見えた。レイナルドやシャルではない。別の人物の様だ。

「ニヤ？ハンターの様だけど、誰だニヤ？」

ウオルフはそう言い、其の二人を見ていた。二人は、ハンターズギルドの方に向かつていた。一人は長身の女性、白く輝く鎧を纏い、背中には血の色とも言える不気味な形相をした狩猟笛を背負っていた。もう一人はやや小柄なハンター。背中にはメラルーの姿をしたボウガンを背負っていたのであった。

「ブラッドホルンにメラルーヘルドルとはニヤ。結構腕のあるハンターみたいだけど何用かニヤ？」

ウォルフはハンターの装備は素早く見極めつつそう言っていた。
ミウは其の様子を不思議に思いつつ、ハンターたちとウォルフを交互に見ているのであった。

（「砂漠」蓬の居る場所で）

「其れ」は、蓬が気づいていない事を「理解」していた。故に凄まじい速度で蓬に突進して行く。そして、「其れ」は自慢の背びれを見事な迄に蓬に当てた。

「がっ！……………」

急に体を襲った痛みに蓬はそう言っていた。一体何が？痛みが出た部分を押さえながら蓬は周囲を見渡す。

少し離れた場所でさっきのガレオスと同じ砂地を高速で移動する影が見えた。然し、さっきに比べて其れが異様に大きい事に気づく。

「痛たた……。もしかして、ドスガレオス？」

そう言いながら、回復薬を取り出して飲む。其れにより、身体に付けられた大きな傷は発光しつつ癒し始めていた。蓬は其れを確認すると、音爆弾を取り出す。敵が砂の中では、此方は不利だからだ。

「其れ」は再び蓬を狙ってきた。然し今度は蓬は分かっている。
自分に来る刹那、側転してかわしつつ音爆弾を「其れ」が進む前方に投げる！

！！

周囲に高周波が起こる！其の音に驚いて「其れ」は地面に出てきた。ガレオスと同じ様に砂の上でビクンビクンと跳ねる。其の姿を見つつ、蓬は其の方向へ走り出しバスターブレイドを出す準備をした。

片手にペイントボールを手にする。そして素早く「其れ」に投げつけた。見事に着弾し、「其れ」に匂いが付く。まだ暫く跳ね回っているで蓬は其の俣突っ込みながらバスターブレイドを叩き込んだ！

「でええい！」

掛け声と共にバスターブレイドが叩き込まれる。その後蓬はすぐさま後ろに下がった。「其れ」は足を使い、大きな身体を砂の上に持ち上げる。

確かにガレオスだ。が、其の色合いと大きさがまるで違う。ガレオスは砂に近い色をしていたが、此れは浅黒く変色しており、其の図体はガレオスの比ではない。優に三、四倍はあるであろう。

「此れがドスガレオスか……………」

確認するように蓬はそう言った。ドスガレオスのほうは蓬を確認した後、踏ん張るような構えを見せる。蓬は素早くバスターブレイドを盾状にした。其処へ龍^{プレス}の吐息が襲う！

蓬の手には鈍い衝撃が走る！しかし、それ以上の効果は与えずに無事、蓬は攻撃を防ぐ事が出来た。ドスガレオスは其れを見てからなのかゆっくりと足を踏み出しながら蓬に近づく。

蓬は、さっきのガレオスが相対して右側方向に尻尾を常に回していた事を思い出し、蓬から見てドスガレオスの左側に走りこんだ。其れに釣られるかのようにドスガレオスは身体を回し始める。

蓬は素早くバスターブレイドを右側面に出し、来るであろう尻尾

攻撃を構えた。激しい金属音がして両手には凄まじい振動が来る。しかし、鎧の効果もあるのである。砂地の上にもかが関わらず、しっかりと其れを防いだのであった。

「よし！」

自分の考えが当たっていた事を蓬はそう言っていた。そして徐にバスターブレイドを構える。尻尾が通り過ぎた以上、次に来るのはドスガレオスの頭部。即ち弱点と為る首筋との御対面である。

「だあああ！」

掛け声と共にバスターブレイドを目標に叩き落す！鈍い手応えと共に、血が迸る！余りの痛みにドスガレオスも仰け反った。蓬は、長居は無用とその場を後ずさる。そして、蓬はドスガレオスを観察した。

ドスガレオスは、手痛い反撃に気分を害していた。口元からは荒々しい息を上げる。そして、再び龍ブレスの吐息を吐く！

其の動作を確認した蓬は、龍ブレスの吐息が吐かれる前に駆け出していた。そして、ドスガレオスの側面へ。尻尾が来ない方へ走り寄ってから、再びバスターブレイドを叩き込む！

ドスガレオスは再び手痛いダメージを喰らい、仰け反る。そして、再び全身を回し始め、蓬に向かって尻尾をぶつけようとする。蓬は、先程と同じ様にバスターブレイドを構えて其れを防ぐ。防ぎ終わった後、今度は蓬はドスガレオスの足元に向けてバスターブレイドを薙いだ！

ドスガレオスの足からも血が迸る！流石に連続で攻撃を喰らい、きつくなったのか、ドスガレオスは向きを変えて、砂地に潜り込んだ。そして其の俛、移動を始める。

「な……待ちなさい！」

逃げ始めたことに気づいた蓬はそう言って、ドスガレオスを追いかけ始めた。しかし、砂の中では圧倒的にドスガレオスが早く見る見るうちに見えなくなってしまうた。蓬はペイントボールの匂いを元に追跡を開始した。

（「砂漠」から少し内陸に入り、土がある地盤の固い場所です）

蓬はペイントボールの匂いを追いかけて、「砂漠」から少し離れた土のある方面まで移動してきた。途中、ゲネポスも居たが、いちいち構う暇も無いので、引き離せるだけ引き離しておいた。そんな中、やや入り組んだ場所に出る。

「此処には居ないようね……。」

周囲を見つつ、蓬はそう言っていた。

が……

ふと見ると、ゲネポスが数頭群れて何かを襲っている様に見える。目を凝らすと、人が見えた。

「何?! 襲われてるのかしら? 助けないと。」

良くは分からないが、放って置く事も出来ないので蓬は鞆から閃光玉を出しつつ其処へ駆け込んで行った。

「こらゝゝゝ！人を食べるんじゃない！！」

そう怒鳴りながら走りこむ。其の声に数頭が気づいて蓬の方に振り向き威嚇をする。其れを確認した蓬は閃光玉を徐に放り上げた！
！！

閃光をもろに目にしたゲネポスは、叫びを上げてその場によるめく。蓬はすぐさまバスターブレイドを抜き、徐によるめいていないゲネポスから叩き切った！

血が迸る！蓬は其の伝流れる様にバスターブレイドを振り、ゲネポスを叩き切っていた。数度そうやって、バスターブレイドを振り回した後、其処にはゲネポスの死骸が横たわっていた。

「ふう……あ、大丈夫なのかな？」

ゲネポスを倒しきつた事を確認した蓬は、倒れ込んでいる人物に近づく。良く見ると、少しかじられていて血が出ている様だが、気を失っているだけの様だ。傷口に回復薬を注ぎ、暫く待つてみる事にした。

「えっと……此の服装ってハンターみたいだけど……今日、此処に他に来る人って居たんだ……って、うちの村ではハンターは三人だし、何処の人だろう？」

蓬はそう言いつつ、其の人物を見る。どうやらまだ少年のようだ。自分と同じ位の小柄な体格。しかし、良く鍛え上げてあるのか、鎧の間から見える筋肉は隆々として見えた。武器はレイナルドの様な武器が観察できた。恐らくガンランスの一種なのだろう。然し、使っていない処を見ると、何かの原因で行き倒れたったのか……？

原因は分からないが蓬は暫く其の少年の元に居た。

（同じ頃、暁の村、ハンターズギルドにて）

ギルドのドアを開けて二人のハンターが入って来た。

「此処がギルドですわね。」

「小さい村だから此の位だと思うよ。」

二人はそう言いつつ入って来る。そして、カウンターのセティの所に来た。

「申し込みは此方で宜しいのでしょうか？」

長身の女性のハンターがそう言う。セティは答えてこう言った。

「ええ、そうだけど。こんな村に流れで来るなんて珍しいわね。お名前は？あ、私はギルドレディをしているセレンゲティよ。セティって呼んでね。」

其れに答えて女性はこう言う。

「此れは御丁寧に如何も。私はチナナ。其の子はクロネ。修行を兼ねて地方の村を回っていた最中ですよ。此方には借りれる宿はあるのかしら？」

「出来れば格安で、良い部屋がボクはいいんだけどな。」

もう一人の小柄な女性（？）がそう言う。セティは微笑みつつ答えてこう言った。

「田舎のギルドだから二階より上が外来ハンター用の宿に為ってるわよ。まあ、良い宿と言えるかは分からないけど、安さだけは自慢出来るかもね。」

そう言いつつ、料金を提示した。其の価格に頷きつつチナナが言う。

「分かりました。では、暫く逗留するので二人分、そうですね、一月分ほど納めておきましょうか。」

そう言いつつ、鞆から財布を出してセティに所定の御金を支払っていた。

「イイコトあるといいねえ、チナナ。」

クロネと言われたハンターはそう言いつつ、カウンターの椅子をくるくると回していた。

「そうですね。何かありそうです。此の村は。」

確信、とも言える口調でチナナはそう言っていた。セティは不思議そうに二人を見ながらギルドでの処理をしていた。

（暫く経った「砂漠」から少し離れた場所で）

「ん……………」

膝枕に居たハンターが目を覚ました。蓬は声を掛けて言う。

「お、気づいたみたいね。大丈夫？」

声を掛けられて、其のハンターは、周囲を見回す。そしてこう言
った。

「えっと……………確か、俺は行き倒れて……………」

「たまたま、あたしを通りかかったので邪魔なゲネポスは倒して貴
方を看病したのよ。あ、看病って言っても膝枕をしたただけだね
もう大丈夫？」

蓬は答える様にそう言っていた。其れに答えてハンターが言う。

「ああ…すまない、命拾いしたようだ、感謝する。少し訳があつて
放浪していたのだが道に迷ってしまつて行き倒れて居たんだ。」

「あゝ。「砂漠」方面は迷いやすいから……………。あ、元氣ドリンクで
も如何？疲れてる時には此れがいいわ。」

「ああ、有難う。助かるよ。」

ハンターはそう答えて蓬が差し出した元氣ドリンクを飲み始めた。
其の姿を見つつ、蓬が言う。

「あたし、今依頼の途中だから、貴方を連れて帰るとか出来ないの。

少しの間ベースキャンプで待っててもらえるかな？」

ハンターは元気ドリンクを飲み干してから答えてこう言った。

「ああ、いや、俺も手伝おう。済まないが少しこんがり肉を分けて貰えるだろうか。そうすれば、十分な働きで君に報えると思う。」

其の答えに蓬は答えて言った。

「そんな事は造作も無い事よ。ベースキャンプに予備でお肉は沢山持ってきているから。ちょっと時間が掛かっても二人なら早く依頼が終わるしね。」

其れにハンターは答えて、

「有難う。済まないが世話に為る。ああ、俺の名前はゾフィー。宜しく頼む。因みにガンランス使いだ。」

微笑みながらそう言った。蓬はにこやかに答えて、

「あ、あたしは蓬よ、よろしくね。今は大剣を使っているの。」

そう言ったのだが…。ふと考えて、こう言う。

「えっと…。ゾフィーって言ったわよね？」

「ああ、俺の名前だが何か？」

ゾフィーはそう答える。怪訝そうに蓬が聞く。

「あ、いや…もしかして、ゾフィーって女性？」

其の質問にきょんとんとして、暫く立ち止まった後、ゾフィーは答えて言う。

「俺は女性だが…。何なら見るか？」

そう言っただけで鎧を脱ごうとする。其の姿を見て、蓬は慌てながら、

「あ、いや、其れはしなくていいって！男物の鎧を着てたし、てっきり男性かと…。」

顔を赤くしつつ蓬はそう言っていた。ゾフィーは苦笑しつつ、

「ああ、此れか。此れは、大事な友人の形見だね。男性用だが、俺は着れるので其の忝愛用してるのさ。」

そう言った。其れを聞いて蓬は、

「形見…。御免なさい！そんな大事な物だったなんて。」

そう言った。苦笑したままゾフィーが言う。

「いや、気にしなくていい。とりあえず、キャンプ地まで行こう。しかし、蓬、依頼の途中じゃなかったのか？」

そう言われたが、蓬は答えてこう言った。

「まあ、そうだけど。まだ日数はあるし、ゾフィーと一緒になら早く依頼は済ませれそうだしね。」

「まあ、確かに一人よりは二人のほうが早いだろうな。」

ゾフィーもそう肯定して蓬について行き始めた。二人はそうしてベースキャンプに向かうのであった。

ドスガレオスはとりあえずまだ退治出来なかったが、ふとした事から仲間を得た蓬。そして謎多き女性ゾフィー。暁の村に新たに来た、二人のハンター。

彼女らはどのように関わり、又、どのような結果を生むのか。其の答えは、まだ、時の彼方にあった。

恐怖！砂漠の暗殺者！（後書き）

チナナ 「漸く、私達の登場ですね。」

クロネ 「つて、ボク達、会話シーンのみみたいなものじゃん」

蓬 「いや…そりやお二人は実力があるから、いきなりあたしとの絡みはきついつて作者さんが…。」

チナナ 「まあ、無理ありませんね。」

クロネ 「今後のボク達をお楽しみに」

ゾフィー 「つて、俺も此処に出るのか。」

蓬 「新規参入のゾフィーさんです。宜しく。」

ゾフィー 「ああ…しかし、何を話していいのやら…。」

蓬 「まあ、追々話に巻き込まれるように為りますよ。まずはドスガレオス狩獵を頑張りましょう！」

ゾフィー 「ああ、助けてもらったしな。今度は俺がお前を助けてやるさ。」

蓬 「どきっ！……あたしってそんな趣味は無い筈なんだけど……。っと、兎も角、次回予告です。次回予告「二人は一人に勝る」です。」

ゾフィー「分かりやすいタイトルだな。」

蓬「このシリーズはこう言うコンセプトだそうですよ。」

ゾフィー「では、また会おう。」

さあ、貴方もレッツハンティング！

二人は一人に勝る（前書き）

蓬 「えへ。今回は基本的に前回の其の俣続きです。」

ゾフィー 「まあ、そうだな、俺達はまだ砂漠だし。」

蓬 「そうなんです！二人して、秘密の花園に……うふっうふふふふふ……。」

ゾフィー 「お、おい！？蓬、如何したんだ？」

蓬 「二人つきりで……。ゾフィー「蓬、今日は熱烈に愛し合おう。」」

蓬 「いけません、あたしは女で

す……。」

ゾフィー 「いや、心配するな。互いに

愛があればどんな障害だって！」

蓬 「ああ、ゾフィー！」

……ああ、いいわあ……。」「

ゾフィー 「駄目だ……別世界に行ってるな此れは……。」

蓬 「ああ、イっちゃいそう……。」「

ゾフィー 「済まない、先ずは話を見てくれ……おい！蓬！元に戻れ！」

二人は一人に勝る

小説 蓬よもぎの旅（モンハンFF）
第八章 二人は一人に勝る

（「砂漠」先日ドスガレオスと戦った場所にて）

蓬は、ゾフィーと共に「砂漠」のドスガレオスと戦った場所に来ていた。

「此処にドスガレオスが来たんだな？」

ゾフィーがそう聞く。蓬が答えて、

「うん。ガレオスを倒して安心してるときに襲われたの。結構ダメー
ジを与えたと思ったけど砂の中に逃げられちゃって。」

そう言った。ゾフィーは其れを聞きながら腕組みをして暫く考えていた。そして、

「つまり、休み場所が別にあるという事だな。此処で待つのも良い
が、「砂漠」を知る為にも、また、休み場所を探す為にも少し散策
したら如何だろうか。」

そう提案する。蓬は少し考えてから、

「うん。そうだね、此処も何度も来る事に為るだろうし。と為ると
…先ずはこっちなな？」

そう言いつつ、駆け出し始める。ゾフィーは其の姿をくすりと笑
って付いて行った。

（同じ頃、ハンターズギルドにて）

「ほう、G級を目指すハンターが来るとは珍しいじゃないか。」

カウンターでそう話しているのはレイナルドであった。其れに答
えるようにチナナが言う。

「此れも修行です。G級はかなり大変だとお聞きましたので。」
「ついでに、楽しまないとね。」

横からクロネがそう付け加えた。チナナは其れを見てやや苦笑す
る。

「成程な。なら、丁度良い。今まで、俺とシャルだけで、古龍タイ
プは苦戦していたんだが出来れば御一緒に貰えないかな？」

レイナルドは、そう言ってチナナたちを誘った。興味深そうにチ
ナナがこう言う。

「古龍タイプですか。最近良く見かけられるんですか？」

其れに答えて、レイナルドはやや苦笑しつつこう言った。

「ああ、余り来て欲しくは無いんだが……。俺が目撃しただけでも炎龍王テオ・テスカトル。他から入った情報では、クシャルダオラ、オオナズチ、などが此の近辺に居るらしい。」

ふむ、と些か悩むような態度でチナナは其れを聞く。クロネがこう言う。

「あいつらが来たがる「何か」が在るのかな？」

其れにレイナルドが、

「其処までは、俺には分からんが……。只、普通一頭だけでも脅威な古龍が、複数見かけられるのは如何考えても異常だ。俺も頑張っているが、此の村はまだハンターが三人だけ。しかも、蓬はまだ「初級」だからな。同行させる訳にも行かない。そこで、腕が立ちそうなあんたらに声を掛けたって訳だ。」

そう言った。しばらく考えたがチナナが答えてこう言う。

「分かりました。古龍相手なら良い修行に為るでしょう。クロネ、貴女も其れで構わないかしら？」

「ボクは、楽しく出来るなら何でもいいよ。」

笑顔でクロネはそう答える。其れを聞きレイナルドが、

「では、済まないが此れから暫く宜しく頼む。シャルも、もう少し

したら来るから後で紹介しよう。先ずは、オオナズチ辺りから行きたいのだが……。」

そう言い、古龍に対する対策を話し始めた。ギルド内は、其の話で盛り上がって行くのであった。

（「砂漠」から少し離れた、岩場の多い地形にて）

蓬達は、「砂漠」を幾らか散策した後、其の周囲にある岩場近辺を歩いていた。

「此の辺りは、岩も多いからドスガレオスは居そうに無いですね。」

蓬がそう言う。然し、ゾフィーは、

「いや、地面に在るだけが全てではない。地下に砂の流れがあれば、奴らは移動が出来るから他の場所に出る可能性がある。」

そう言った。しばらく蓬が考えて、こう言う。

「つまり、此の辺りの何処かに、ドスガレオスが休んでいる可能性もあると?。」

「そう言うことだ。さあ、行こう。」

蓬の答えに同意して、ゾフィーはそう言いながら足を速めた。蓬も足早にして付いて行く。

（周囲が岩場で囲まれ、水が湧き出ているオアシスの様な砂場にて。）

「うわぁ……綺麗……。」

蓬は其処を見るなりそう言っていた。そう、岩場に囲まれて強い「砂漠」からの熱気は遮られており、しかも、岩場の足元には水が湧き出て小さな池を形成していた。砂地特有の植物も幾らか見る事が出来る。水面が煌びやかに光り、其の美しさは神々しく見えた。

「ふむ…岩場に囲まれてるに関わらず…足元には大量の砂がある、か。」

足元の砂を踏みしめながらゾフィーはそう言う。そして、

「蓬、もしかしたら此处がドスガレオス達モンスターの休憩場所かも知れないぞ。」

そう言う。蓬は、周囲に感動していたが、はっと為りゾフィーのほうを振り向きつつ、答える。

「分かった。今は居ない様だけど、ここで待ってみる？」

「そうだな、無闇に探しても、まだ俺達は砂漠に不案内だし、ここで待つてみる方が良くかもしれない。そうしよう。」

ゾフィーも蓬の意見に同意してそう言った。そして二人は木陰に入り、道具や武器等の点検を始めるのであった。

（蓬の家にて）

「みう。」

ミウは退屈していた。ウォルフは家事に勤しんでいて相手を中々して貰えない。蓬は依頼の為数日帰って来ていない。退屈で、辺りを歩き回っては不満を言っていた。

「みう。」

退屈の余り、蓬の部屋にある、いろいろな物を弄^{いじ}っていた。

ふと、落ちる音がする。ミウは其処に目を留めた。其れは大きなペンダントだった。中央には大きな宝石の様な物が埋め込まれており、光の加減で煌びやかに輝いていた。

「みう！」

ミウは其れに興味を示し覗き込む。そして、其の美しさに、更に興味を持ち、

「みう？」

と鳴きながら、じつくりと其れを眺めていた。そんな折、ウォルフが部屋に来る。

「おや？ミウ、何をしてるニヤ？」

そう言いながらミウに近づく。ミウの目の前にある物を見て、

「おや、そんな物を出したのニヤ。」

そう言う。ミウは興味深そうに、

「みう？」

そう鳴く。ウォルフは答える様に、

「此れはニヤ、蓬が行き倒れていたときに付けていたペンダントニヤ。多分、蓬も今は忘れてるかもニヤ。まあ、思い出さないほうが良いのニヤ。」

そう、意味深に言っていた。ミウは、

「みう。」

理解したかは兎も角、そう鳴いていた。ペンダントは、日の光で本当に煌びやかに輝いていた。暫く二人(?)は其れを眺めていた。

（再び、周囲が岩場で囲まれ、水が湧き出ているオアシスの様な砂場にて。）

砂地がざわめく。次々と波打ち始める。そして其れは動き始め、其の姿が明らかになる。其れは大きな背鰭せびれだった。

「来たぞ。蓬、準備はいいか？」

ゾフィーはそう言う。蓬は、音爆弾を片手に持ちながら頷く。そして、徐に、其れに向かって躍り出る。

其れは、音の変化により、自らの休み場に侵入者が居る事に気づく。そして、侵入者に対して攻撃をする為、急遽向きを変える。

蓬は、背鰭が自分に迫り来る事を確認し、音爆弾を放り上げる！！

周囲に耳に障る高周波が響く！其れに耐え切れずに、ドスガレオスは砂の上に姿を現した。数回程身体をびくびくと跳ねる様に捻る。

「いくわよおお！」

蓬はそう叫びつつ、バスターブレイドをドスガレオスに対して斬りつけた！頭に其れは当たる。そして血が迸る。

「蓬！下がるんだ！」

ゾフィーがそう言う。其れを聞いて、頷きながら蓬はゾフィーとは異なる軸上に下がった。ドスガレオスは、其れに釣られるように

して蓬の方に向かう。其の姿を見つつ、

「いい感じだ、行くぞ！」

そう、ゾフィーは言い、ガンランスであるスティールガンランスを構えながら走りこむ。

ドスガレオスは蓬に向かって身体を捻っていた為にゾフィーからは丁度横っ腹を衝く形になった。滑り込む様にしてスティールガンランスを展開しながらドスガレオスに其の刃を食い込ませる。そして、食い込んだ感触を確認したゾフィーは、徐に手元のトリガーを引く！

それにより、内部機構が作動し砲身から火砲が発射される！ゾフィーは素早く三回発射し、其の反動で下がる。

手痛い攻撃を喰らったドスガレオスは、急遽、対象を変更する。そう、ゾフィーの方へ。

然し其れは、蓬にとってチャンスと為る。彼女にとっては目の前に打ち込み易い胴体が来るのだから。

「よし、こっちに向かって来る、蓬、今の内だ！」

スティールガンランスの盾でドスガレオスの攻撃に備えながらゾフィーがそう言った。蓬は、

「此れでも喰らえええええええ！」

と叫びつつ、ドスガレオスの首を叩き切る！血が迸り、ドスガレオスは痛みに仰け反る。蓬は其の俛、横切りと切り返しを繋ぎ、ドスガレオスの足を襲った。

痛みに耐えられなかったのか、ドスガレオスが倒れる。立ち上がろうとして、ドスガレオスは暴れだした。

「よし、行くぞ！」

ゾフィーがそう言い、盾の構えをはずしてドスガレオスに近づき、構えを取る。

其の姿を見た蓬は、ゾフィーとは軸線をずらした所で「溜め斬り」を始めた。

「ドラッヘ Drache カノネ Kanone アッブ・シーセン Abschießen!（竜撃砲発射する!）」

ゾフィーはそう言い、スティールガンランスの「竜撃砲」を使用する！

「竜撃砲」。其れはガンランス最大の武器。内臓機構をフル回転させて用いる強力な火砲で、飛竜の龍の吐息を元に機械的に製作された構造兵器である。威力は強く、敵の防御を基本的に無視をしてダメージを与える効果があり、防御力の高い敵に対しては特に有効な攻撃手段である。只、機構的に負担が大きい為、連発は出来ず、冷却期間が必要であり、又、武器其の物の磨耗も激しい事がネックであった。然し、其れを差し引いても強力な攻撃である事には変わらない。

!!!

轟音が鳴り響き、砲身から莫大なエネルギーが吹き荒れる！其のエネルギーはドスガレオスを其の俛直撃する！

「これでえええ！」

ほぼ同時に蓬も「溜め斬り」をドスガレオスに叩き込んだ！手には十分過ぎる手応えが来る。

強力な攻撃を喰らってしまったドスガレオスは、全身を大きく跳

ね上げた後、砂地に叩きつけて動かなくなった。

其れを確認しながら、ゾフィーが言う。

「Auf Wiedersehen（さようなら）」
アオフ ヴィダーシャオエン

彼女なりの手向けなのだろう。そんな様子を蓬は感慨深く見ていた。そして、

「有難う、ゾフィー。あなたのお陰であっけないほど楽に終われたわ。」

そう言った。ゾフィーは微笑みつつ、

「Vollenden！（完了！）だな。」
フォルエンデン

そう言った。蓬も笑顔がこぼれる。

其れから二人は、倒したドスガレオスを解体し始めた。

（暁の村から少しはなれた街道で）

「こつちだっただけ？ツバサ。」

少女がそう言っていた。ツバサと言われた少年が答える。

「俺に聞くな。そもそも、街道だと油断して、リオレウスなんての

に出会うから……。」

やれやれと両手を広げつつそう言う態度をしていた。そこへ、

「二人とも相変わらずだな！とりあえず、道は間違いなさそうだぜ。」

もう一人の少年がそう言った。少女が其れに答えて言う。

「分かったわよイナズマ…暁の村だったわけ。其処に行くのよね、今回は。」

「其れは略称らしいけどな、ナギサ。まあ、お前の事だ、覚えてないだろ？」

ツバサがそう言う。ナギサと言われた少女は少しはぶてながら、

「ちょ！もう！何時も馬鹿にして！分かってるわよ。え〜っと、シヤイルレゼ………なんだっけ？」

分からなくなり、惚^{とほ}けた口調で最後には言ってしまう。顔に手を当てつつツバサは、

「やっぱりじゃないか…長いから覚えるとか言っておいて其れかよ。」

呆れつつそう言った。イナズマが其れに答えるようにこう言った。

「シヤイルレゼイラーフェラントって名前だったな。どうせ、竜人族の村長の名前其の俣^はだろうけどな。」

「そうそう！其れを言おうとしてたのよ！」

ナギサはそう、一生懸命に釈明する。呆れつつ、ツバサが、

「御前なあ……。」

そう言っていた。そんな事をしつつ三人は村へと向かっているのであつた。

（暁の村への帰路の途中、蓬達は。）

「で、これからゾフィーは如何するの？」

蓬はそう聞いていた。ふと、突然にそう言われてゾフィーはやや驚く。そして言う。

「あ、ああ、実は今は当面の目的が無いんだ。何かしたい事がある訳じゃないしな。」

其の答えを頷きながら蓬は聞いていた。そして、思いついたようにこう言う。

「なら、あたしと暫く一緒に生活しない？」

突然の申し出にゾフィーは驚くが、落ち着きを取り戻しながらこう言う。

「あ、いや。其れは俺としても当座の宿が確保出来るから嬉しいが……。蓬の家の方は問題無いのか？突然に押しかける様に為るのだし。」

其の質問に蓬は即答してこう言う。

「今は家にあたしとウォルフ君、ミウの三人（？）だから問題無いわよ。あ、でも部屋の余分は無いからあたしと同室でもいいわよね？」

其れに、ふと疑問に思いつつゾフィーが尋ねる。

「あゝっと……まあ、家に行くのはいいというのは分かったのだが……ウォルフ君と言うのとミウと言う人について教えてくれないかな。」

蓬はウォルフとミウが人と言われてキョトンとしてしまった。暫くしてから笑い出し、そしてこう言う。

「あ……御免なさい。えっと、説明するわね。」

そう言つて蓬は説明を始めるのであった。

ゾフィーと共に生活をする選択をした蓬。村の周囲で蠢く^{うごめ}なにやら不安な情勢に神経を尖らせるレイナルド、其れに協力するチナナ達。暁の村を目指している三人組。様々な人々の思いを乗せて時は

動いていく。其の先に行き着く結果とは何なのか。今はまだ分かってはいない。

二人は一人に勝る（後書き）

イナズマ「よっしゃ！俺たちも登場だぜ！」

ツバサ「なんか唐突だな。」

ナギサ「まあ、まだこれからだし……でも、これから如何するのかしら？」

二人「さあ？」

ナギサ「ええ！？知らないの？」

イナズマ「いや、暁の村に行つて修行しろつて言われたただだし。」

ツバサ「そうだよな。これから如何するんだろ？」

ナギサ「大丈夫なのかなあ……。」

ウオルフ「突然だけど、予告なのニヤ！」

三人「うわ！吃驚した。」

ウオルフ「次回、蓬は新たな仲間たちと出会い、又別の冒険へと赴くのニヤ！其れは何を指し示すのか、なのニヤ！」

ナギサ「そ、其れで……？」

ウオルフ「次回予告「Gift und Blitz」毒と閃光」

なのニヤ！皆期待なのニヤ！」

全員 「さあ、貴方もレッツハンティング！（なのニヤ！）」

Gift(ギフト) Udd(ウント) Blitz(ブリッツ) 「毒と閃光」

ミウ 「みう!」

ウォルフ 「如何したニヤ?」

ミウ 「みう。」

ウォルフ 「其れは仕方が無いニヤ。まだ出番が僕達は無いニヤ。」

ミウ 「みう。」

ウォルフ 「心配しなくても大丈夫ニヤ。」

ミウ 「みう?」

ウォルフ 「其のうちカッ」良く登場できるニヤ!」

ミウ 「みう!」

ウォルフ 「では、本編を楽しむのニヤ!」

Gift(ギフト) und(ウント) Blitz(ブリッツ)「毒と閃光」

小説 蓬^{よもぎ}の旅(モンハンFF)
第九章 Gift^{ギフト} und^{ウント} Blitz^{ブリッツ}「毒と閃光」

(あれから数日後、蓬の家にて)

朝日が部屋に射してくる。清しさと共に。陽光の気持ちのいい
感覚に肌が刺激を受ける。

「ん…………。」

ベットで蓬は、静かに寝ていた。時折、身体が寝返りを打つ。そ
んな中、

「みつ!」

そう言って、ミウが蓬を引っ張った。

「ん…ああ…お早う、ミウ。…………もうこんなに日が昇ってるのね。」

そう言ってベットから出ようとする。その時、今迄とは異なる感
覚に気づく。そう、同じベットにもう一人居るからだ。

「お…………もう、朝か。昨日も良く寝たな。お早う、蓬。」

もう一人、ゾフィーも目を覚まして、蓬にその声を掛けた。蓬は其の姿を見て、少し顔を赤らめながら、

「あ、お早う……。」

そう言った。其の様子に、些か不思議に思い、ゾフィーは、

「蓬、どうかしたのか？」

そう聞く。蓬は、両手の指をもそもぞと合わせながら小声で、

「そんな格好で居たら……その……恥ずかしいと言つか……。」

そう言っていた。ゾフィーはベットから起き上がっていた。パンツ一枚で立っているのである。で、蓬と同じ女性の体格であれば、恐らく余り蓬も気にしないであろう。

然し、ゾフィーは、全身が筋肉隆々としており、又、一般女性のようなふくよかな胸が無く、胸も筋肉で格好が良い。更に加えて、彼女はブロンドのショートヘアで鮮やかなエメラルドグリーンの瞳をしている。顔も凛々しく、言葉遣いも「俺」言葉である。要するに、女性から見て魅力的な要件を本人は恐らく意識してはいないであろうが揃えていたのである。

そんな人物が目の前、しかも同じベットで寝ていました。と言う状況は、其れはもう、表現する以前の問題なのであった。

「ふむ……。今まで、蓬のような女性と暮らした事が無かったからな……。女性からそう思われるとは思わなかった。」

ゾフィーはそう言う。ふと、疑問に思い蓬が聞く。

「って言うことは…。ハンターとして暮らしていた時には、男性と一緒にやっていたの？」

そう聞かれて、やや苦笑しつつゾフィーは、

「ああ、そうだな…其処にある鎧があるだろう？」

そう言つて、自分の鎧のほうに目を向ける。男性物の鎧だが、既存の製品とはまるで異なる物だった。シャイゼルも不思議がつて見ていたほどなので余程の物だったのだらう。其れに注目させつつ、

「あれを着ていた人物。つまり、俺の「師匠」に当たる人なのだが、彼とずっと一緒に暮らしていたからな。こう言う格好が当たり前に為っていたよ。」

やや苦笑しながらゾフィーはそう言つた。蓬は其れを聞きながら、以前の事を思い出した。其の鎧は「形見」だと。つまり、彼女の言い方からすれば「師匠」は既にこの世の人ではないか、止むを得ず引退などをしていると言う事になる。

「あ……御免なさい。余り、昔の事は思い起こさせない方がいいわよね？」

申し訳なさそうに蓬がそう言う。ゾフィーは苦笑しつつ、

「気にしなくていい。この程度で気落ちしてたら「師匠」に怒られるさ。」

そう答えた。其れを見て蓬は更に顔を赤らめる。そんな折、

「お？皆寝起きが早いニヤ！朝御飯はもう出来てるのニヤ。食堂に来るのニヤ。」

そう言いながらウォルフがやってくる。

「みう！」

ミウが元気に返事をしつつ食堂に向かう。

「分かった、有難う、ウォルフ。」

そう言って、ゾフィーも向かう。蓬は一人、俯きつつ顔を真っ赤にしながら立っていた。

（其れから暫く経った、シャイゼルの店（武具屋）の前で）

「えっと、此れって太刀よね？鉄刀にしてはちょっと違う様な……。」

蓬は、そう言っていた。今、彼女はシャイゼルの店で、新しく使う武器、太刀の出来栄を見に来ていたのである。手に渡された太刀を見つつ、又、手でじっくり触りながら。

「ああ……実はな、ウォルフに言われてミウの鱗とかを加工してたんだが、幾らか上手く使えたんで試作的にそいつに組み込んでみた

んだ。」

シャイゼルはそう言った。驚きつつ、蓬が答えてこう言う。

「ウォルフ君が？あたしには何も言っただけなのに……。それで、ミウが脱皮した抜け殻が無かったのね……。」

そう言う蓬を見ながら苦笑しつつシャイゼルが言う。

「まあ、ウォルフも何かを感じて俺に言ってきたんだしな。余り、難しく考えるな。そうそう、試作とは言え、結構上手くマカライトとかに融合させる事が出来てな。見た目以上に性能はいいぞ其れは。」

そう言われて、蓬は、太刀を鞘から抜く。きちつとはめられた場所から外れる金属音、そして、滑るように聞こえる独特の金属音の後に、其の姿は露あらわになった。

ぱつと見は「鉄刀【神楽】」に見える。しかし、刃の付け根部分がまるで異なっていた。金属でない「何か」がある。加工されている為、其れが鱗とは気がつかなかった。そして不思議な事に、其の周囲には冷氣と熱気が共存していた。

「なんだか、此処が不思議な感覚がする……。」

特殊な加工が施された位置を触るようにして蓬はそう言っていた。シャイゼルが其れに答えるようにこう言った。

「ああ、調べてみたが、冷氣と熱気がある。通常では考えれないが、其の武器は炎と氷の両属性を持つ特殊な太刀だ。」

「え?!炎と氷って両立出来るの?」

驚きつつ、蓬は疑問に思つて聞く。其れにシャイゼルは、

「普通はありえない。師匠の元で学んでいた時にもそんな武器は見たことが無かつた。唯一、冷氣属性のガンランスが、火砲が炎属性だからそうとも言えるが、あれは機構的な話だから、単一武器では聞いた例^{ためし}がないな。恐らく、ミウの能力と思うが。」

解説含めにそう言った。蓬は其れを聞きながら「型」に合わせて太刀を振ってみる。

軽い。

蓬はそう思った。訓練場で扱つたのは鉄刀。此れと大差は無いはずである。マカライト鉱石を使うとは言え、重さは大差がないはずなのに、異様に軽い。

「凄く軽いわ、此れ。」

蓬はそう言った。其れに答えるようにシャイゼルが、

「恐らく其れも、ミウの能力だと思う。基本は「鉄刀【神楽】」の素材しか使っていないしな。重さ的に、其の重さはある得ないから、そうとしか言いようが無い。」

やや、俺にも分からない、と言うような口調でそう言った。

暫く「型」に合わして何度か振っていたが、鞘に仕舞ってから、

「此れ使ってみるわ。シャイゼル小父さん有難う。此れからも御願いね。」

そう言つて、お辞儀をした後で、足早にギルドの方に走って行つ

た。其の姿を見つつ、

「まあ、俺の技も役に立っただって事かな。」

そうシャイゼルは言っていた。

（暫く経ってから蓬の家で）

「ゲリヨス？あの毒怪鳥か。次は其れを倒しに行くんだな？」

ゾフィーが確認するようにそう言った。蓬が答えて、

「うん、「沼地」に現れて周囲に被害が出てるらしいの。レイナルドさん達は何か大きな依頼で今は、近くに居ないって聞いたし、此処はあたし達が行かないとね。」

そう言う。軽く溜息を出しつつ、

「ふっ。まあ、そう言う処が蓬らしいと言うのだろうな。分かった、解毒薬を準備する。然し、蓬、お前其の太刀で行くのか？」

ゾフィーは、答えつつも蓬にそう聞く。蓬は、

「あ、うん。太刀はまだ大剣ほどじゃないけれど、訓練場で練習はしていたから頑張れると思うんだ。いいかな？」

そう答えた。ゾフィーは、

「何で行くのも構わないが、基本的にガンランスと太刀は相性が悪い。だから立ち回りは気を付けないといけないな。」

そう言った。蓬は、

「うん、教官もそう言っていたから、此の前のドスガレオスの様に、ゾフィー、見えるときはあたしに指示を御願いな。」

そう言う。苦笑しつつゾフィーは蓬の肩を叩きながら、

「心配するな、いざと言う時は俺が守ってやるさ。」

そう言った。蓬は、顔を赤らめながら、

「う…うん……。」

そう言っていた。

そうして二人は準備を始める。

「毒怪鳥ゲリヨス」。名前の通り、毒を体内に生成する怪鳥、つまり鳥竜種に属するモンスター。イャンクック並みの体格で、全身はゴム質の皮と非常に硬質化した甲殻（鱗が重積化した物）で覆われており、部位によって苦手になる武器が発生するモンスターである。ゴム質部分はハンマーは効果が薄く、又逆に甲殻部分は剣等は弾かれ易い。ゴム質部分が多い為炎に弱い。特異な能力として頭上にある「鶏冠」にある発光器官を使用して、目を眩ます程の「閃光」を発すると言う特徴があった。更に、光る物が好きで、ハンターのものであるとメラルー顔負けに「盗む」事にも長けている。しか

も、臆病な性格で、基本じつとせずに走り回る特性がある、変わったモンスターであった。

仕度をしている処にウォルフがやってくる。

「蓬、ゾフィー。ゲリヨス相手なら、此れを幾つか鞆に入れておくニヤ。」

そう言つて二人に手渡す。

それは、陽光石だった。日中に取れる鉱石で、^{ほの}仄かに光を放つ特性がある。其れを渡しつつ、

「其れを持つてればゲリヨスはまず其れを狙う事が多いニヤ。アイテムが盗まれにくくなるニヤ。」

そう言つた。二人は、

「有難う、ウォルフ君。」

「^{ダンケ}Danke ^{シェーン}Schön（どうも有り難う）。」

そう答えた。其れにウォルフは、

「^{ビッテ}Bitte ^{シェーン}Schön（如何致しまして）。」

そう言い、恭しく一礼した。その後、其処で笑いが起こるのであった。

（少し経った村の広場で）

「イナズマ〜！早く〜！リオレイア退治なんだから時間掛かるし頑張って行きましょ〜。」

ナギサが大声でそう言う。ツバサは呆れつつ、

「別に、リオレイアはすぐ逃げやしないって……。」

そう言った。ナギサはツバサに向きながら、手に腰を当て少し強い調子で、

「其れはそうだけど！もう少しでクイーンブラスターが作れそうなんだもの。俄然やる気が出てるのよ！」

そう言った。そんな折、其処へ蓬たちが来る。

「あれ？うちの村にハンターさん？」

「その様だな。」

蓬とゾフィーはそう言った。二人に気づいて、ツバサ達も、

「お？此処のハンターさんかな？」

「かな？」

そう言っていた。そんな時、

「すまない！遅れてしまったぜ！」

そう言いながらイナズマが駆けつけてきた。そして、

「お？此の村のハンターかな？俺、イナズマ。イナズマ・ライトニング、宜しくな！」

そう、自己紹介をする。其れに答えて、

「あ、御丁寧にどうも。あたしは蓬。」

「俺はゾフィーと言う、宜しくな。」

そう答えた。其れに釣られるかのように、

「おっと、俺も言わないとな。俺は、ツバサ・ブルーソウル。」

「あたしは、ナギサ・チュリーハートよ。宜しくね。」

そう、各自が自己紹介をした。

そして、お互いの狩猟について話し合う。

「そうか、リオレイアも近くに居るのね。」

蓬がそう言う。ツバサが其れに答え、

「ああ、まあそっちは俺たちで行ってくるよ。修行だしな。」

そう言った。其れに笑顔で答えながら、

「有難う、じゃああたし達も行ってきます。」

蓬はそう言って村を後にしていた。ゾフィーも挨拶をしつついつて行く。

其の姿を暫くツバサは見ていたが、

「ちよつとツバサ！何時まで眺めてるのよ！」

「あ、ああ、行こうか。」

ナギサに言われて、そう答えた。そして三人もリオレイア討伐へ旅立つ。

若い者達もそれぞれの旅へと旅立っているのだった。

（「沼地」、ジメジメした場所で）

「結構足場が悪いわね。」

蓬は足元を確認するようにそう言った。其れに答えてゾフィーが、

「そうだな、回避もし難くなるから気を付けた方が良いな。」

そう言う。其れに蓬は頷いて答えた。

「沼地」。川や山地の関係で湿気が溜まりやすく、其れにより常に湿度が高い状態になった地形の一つ。人が生活するには不向きな環境だが、環境に適応した生き物にはどうやら楽園のようで、様々な適応動植物が居るようである。周囲を歩いているだけでも、様々な小動物や昆虫の鳴き声が聞こえたりする。足元も、びしょびしょで歩にくいとは言え様々な植物が生えている辺り、土地其の物はそう悪いものではないようだ。

そんな中、上空から何かが飛来する音が聞こえてきた。

「どうやら登場の様だ。蓬、準備は良いか？」

ゾフィーがそう言う。蓬は、

「ええ、行くわね。」

そう答えて、其れが降りる場所に向かって走り出した。片手にはペイントボールを持って。

其れは一陣の風を巻き起こしながら着地する。そして、首をあちらこちらに回して食事を探す。その時、

「えい！」

と、掛け声の下に蓬はペイントボールを其れ、つまりゲリヨスに投げつけた。

いきなりの行動にゲリヨスは驚き、奇声を上げながら飛び跳ねる。
そして徐に蓬に向かって嘴くちばしで突こうとして来た！

蓬は素早く横に避ける。そして、太刀を構えて其の俣斬りかかる！

「いくわよ！」

太刀はゲリヨスの翼の付け根をザックリと切りながら打ち下ろされる。蓬は其の俣前転をしてゲリヨスの横をすり抜ける。其れを見たゾフィーはスティールガンランスを構えながら走りこむ。

「今度は俺だ！」

そう言いながらスティールガンランスの刃をゲリヨスに突き刺し

ながら火砲を撃つ！三連斉射をしてから盾を構える。ゲリヨスは手痛い攻撃をして来たゾフィーに対して尻尾を振り回して攻撃をしてくる！

ゴムが金属に当たる鈍い音がして盾が揺れる。然し、ゾフィーは沼地とは言えがちりと構えて無難に防ぐ。蓬が其処へ、太刀を斬り込む！

切り込んだ後、突き上げてから引き下がる。手痛い攻撃を連続で受けてゲリヨスは激しく身体を上下に揺らし小刻みに飛び上がり始めた！

「怒り出した。暴走しやすいから注意しろ！」

ゾフィーがそう言う。蓬は、

「分かったわ！」

そう返事をして太刀を構えなおす。ゲリヨスは蓬のほうへ向き、突如、嘴から毒液を撒き散らしながら暴走を開始する！

「ちょ！……。」

暴走は予測していたが広範囲に毒液を撒き散らしながら来る事までは、蓬は予想しておらず、とっさの反応に遅れてしまう。

！！

蓬は全身に毒液を浴びてしまう。其の俛その場に蹲る。

「がっ……かはっ……。」

突然に掛かった毒液の為に激しく咳き込む。ゾフィーが武器をしまいながら駆けつけ、

「大丈夫か?!」

そう言いつつ鞆から解毒薬を取り出す。そして、蓬の口元に持っていき飲ませる。

何とか其れを蓬は飲み……

「はっ……はあ。吃驚したわ。暴走ってそう言うことだったのね。」

そう言った。ゲリヨスは周囲を走り回りながら毒液を撒き散らしている。苦笑しつつゾフィーが言う。

「済まない、もう少し説明しておけば良かったな。」

「ううん。初めてだもの此れ位でへこたれないわ。」

蓬はそう笑顔で返す。ゾフィーは苦笑しつつ、

「そうか、戦闘はまだまだだ、頑張ろう。」

そう言って蓬の肩を軽く叩いた。蓬は軽く頷き、太刀を持ち直す。ゲリヨスは其の間、辺りに毒液を撒き散らしながら走り回っていた。暫くそうして走っていたが、立ち止まり、敵である二人に向かう。

そして、二人に目指して軽く飛翔したかと思うと急速に加速をつけて滑空してきた!

「いかん!蓬、避ける!」

ゾフィーはそう言いながら盾を構える。蓬は、横に勢いをつけて飛び出す。

激しい金属音が鳴り響く！ゲリヨスの嘴がスティールガンランスの盾に当たり其の音を発生させたのだ。ゾフィーはしっかりと盾を構え其れを防ぐ。そして、

「お返しだ！」

そう言つてガンランスの火炮を二連射する。ゲリヨスは其の攻撃でややよろめくそして、徐に頭を振り出し始め、何かをぶつける様な音、かちんかちんと火打石のような音がして来た。

「てええい！」

蓬は其れを隙と見て斬りかかる。しかし、ゾフィーは、

「いかん！蓬、避ける！」

そう、強い口調で言う。然し蓬は勢いを止められず其の俥斬りつけた。その時……

！！

強い閃光がゲリヨスの鶏冠から発生する！蓬は其の光をもろに受けてしまう。

「きやああああ！」

思わず悲鳴を上げる蓬。ゲリヨスは興奮しているのか、その場に立ち止まり、嘴を震わせている。

「くっ……。」

ゾフィーはそう言いながら、スティールガンランスの火炮の砲弾

を装填する。そして、

「蓬、済まない！」

そう言いながら、ゲリヨスではなく、蓬に対して火砲を発射する。火砲が蓬に当たり、蓬は吹き飛ばされる。

ゲリヨスは暫く嘴を震わせていたが、徐にゾフィーをターゲットに定めた。そして嘴で襲う！

ゾフィーは再び盾を構えて、其れを防ぐ。盾に当たる金属音が数回響く。然し、ゾフィーには害は無い。

其れを防いだ後、ゾフィーは火砲を二連射した。其れはゲリヨスに直撃する。ゲリヨスは再び興奮して小刻みに飛び上がり始める。

「沼地」は日頃の静かな状態から喧騒の状態へと様変わりしていた。

初めての敵ゲリヨスに苦戦する蓬。其れを的確にサポートするゾフィー。二人の戦いは始まったばかり。此の結末は如何に。そして、周囲で戦っているほかのハンターたちは？ミウにはどんな秘密が？謎を深めつつも冒険は続く。そう、まだ答えは分からない。

蓬 「うう……。」

ゾフィー「如何した蓬？」

蓬 「ゾフィーに襲われました……。」

ゾフィー「へ？いや、アレはだな……。そのままだとゲリヨスに襲われるから危ないと思ってだな。」

蓬 「責任は取ってくれるのよね？」

ゾフィー「は?!」

蓬 「うう……。やっぱり捨てられるんだわ……。」

ゾフィー「ちょっと待て！如何してそうなるんだ……。」

作者 「あ……。GL全開だねこりゃ……。」

ゾフィー「おい、丁度いい。蓬をどうにかしてくれ！」

作者 「いや、そんな事を言われてもねえ……。」

蓬 「さあ、ゾフィー。責任を取ってえ……。」

ゾフィー「ちょ！待て、蓬！うあ、待て！だ、駄目……ああ！……。」

作者 「ん……。ご愁傷様。さて、次回予告よね。次回「F r a
u（女）」に為るわ。皆、お楽しみに。」

蓬 「あ。此の身体がいいわあ……。」

ゾフィー「止め……。いやあ！」

汝^{なんじ}の赴^{シヤイレオン}く処にも神龍の加護があらん事を……

キャラクター&用語設定集（前書き）

作者「此处はキャラクター等の説明です。」

蓬「話が進むに連れて更新されます！」

作者「説明されていない事も一応書いてあるので参考までに。」

蓬「ではどうぞ！」

キャラクター&用語設定集

小説 蓬よもぎの旅（モンハンFF）

キャラクター&用語設定集（第二十章時点）

> i 2 9 4 3 — 3 6 2 <

蓬

本作主人公。身長150cm体重50kgスリーサイズ83 / 60 / 84。真つ白とも言える光沢のある長い髪に淡い赤い瞳をした女性。年齢不詳外見的には16歳程度。基本的に明るい性格。漸進的な考えの持ち主でおっとり型。彼女は、五年ほど前にウオルフに拾われて今の村に住み着いたことが判明。神龍シャイレオンと呼ばれる存在の一つである事が語られた。直刀系の太刀、太刀【神龍】シャイレオンを用いる。尚、鞘は存在せず、「R? s t u n g（武装）」リューストウングと言う言葉により、蓬の手に現れる。同時に此の言葉により、衣服が、白く輝く様な水着状の防具、神龍シャイレオンへと変化する。

> i 3 0 1 9 — 3 6 2 <

> i 3 0 1 8 — 3 6 2 <

ウオルフガング

アイルー族。年齢不詳。一応オスらしい。が、詳しくは不明。蓬に世話を焼くお節介者である。語尾に「ニャ」が良く付くのが特徴。シャイゼルとの会話で「アイルーの勇者」と呼ばれている事が判明。「疾風のウオルフ」の異名があるらしい（どこかの銀河帝国将校のようだ）。特殊な双剣を持ち、戦うスタイルを基本としている。ミ

ウと共に戦い始めた。

シャイルレゼイラーフェラント

蓬が住む村の名前。村長の名前でもある。村長は竜人族であり、結構高齢らしいが年齢は定かではない。長すぎる名前なので「シャイルばあさん」などと呼ばれている。そう、女性である。

シャル

村に在中のハンターの一人。ライトボウガンがメイン武器。様々な弾薬を使って敵を倒し味方を助ける、支援のエキスパート。生真面目な性格で、素材マニア。口調はですます調が基本だが、マニアックになると多少狂う。日頃はフルフル装備など、支援に向けた装備を防具として纏い、愛用ボウガンであるメールシュトローム改を使って戦っている。

レイナルド

村に在中のハンターの一人。ガンランスの使い手で、愛用武器は、非常にレアと言われるシルバールーク。常に、シャルの支援を受けながら確実に敵を仕留めるのを主眼に黙々と仕事をこなすナイスガイ。只、喋りだすと軽い男の样だ。防具はレウス装備と此れもレアであるシルバーソル装備を組み合わせて着ている。銀と赤のコント

ラストが美しい鎧となっている。彼にとってはちょっと自慢らしい。

ロイ

暁の村で農場を営んでる人。よく蓬の家に食材を提供してくれている。蓬は逆にロイが困ったときに助けてあげている。まあ、そんな関係。

シャイゼル

暁の村で武具屋を営んでる人。かなりの武具マニア。拘りがある職人さんで、武具や素材の話しをし始めたら下手をすると数時間拘束されかねない怖い人。でも、腕は素晴らしくよく優れた武器を提供し、また修理してくれている。蓬のお気に入りの中の一人。（いい人と言う意味で）

ガルシエンド

暁の村のハンター教官。熱血タイプで感動屋。しかし腕は超一流。後続育成に魂を捧げる、教育者。まあ、要するに物好きのいいおぢさんって処。

セレンゲティ

通称セティ。暁の村ハンターズギルドのギルドレディ。メイド衣装とも言われるハンターズレディ装備を上手に着込むナイスバディなお姉さん。忙しいハンターズギルドの仕事をそつなくこなす人でもある。

グロウ

竜人族の爺さん。調合屋を営んでいる。彼も素材マニア。但し調合系で、だが。なので、シャルとはよく話が合うらしい。元気はつらつな御爺さんである。

> i 3 0 1 6 — 3 6 2 <

ミウ

蓬が第五章で拾う羽目になった子供の竜。美しい目をしており、光の当たり方で美しく色合いが替わる。鱗も同様である。どうやら通常の竜とは異なるらしい。ウオルフと一緒にになって蓬の狩猟に付き添うようになった。小さいながらも龍^{プレス}の吐息を巧みに使い戦う。第十七章以降、人語を喋るようになる。其のうえ、浮遊までし始めた。

> i 2 9 4 4 — 3 6 2 <

ゾフィー (Sophie)

第七章で蓬が出会う少女、見た目少年の様に見えた。ガンランスの

使い手のハンター。何やら訳ありで流浪をしていた。「砂漠」で行き倒れに為っていた処、蓬に助けられる。女の子のはずだが、筋肉隆々で「俺」言葉を使う為に少年に間違われやすい。身長155cm 体重56kg スリーサイズは70 / 62 / 71。ブロンドのショートヘアにエメラルドグリーンの綺麗な瞳を持つ少女である。現在16歳。第十五章で既存の装備は失ってしまう。しかし、シャイレオン神龍からの授かり物として、白く輝く槍とワンピース調（つまりスクール水着のような形）の白く輝く鎧を入手する。其れにより、彼女はランサーとして戦う事に為る。

太刀【神龍】シャイレオン

太刀【蓬】が大幅な変化を遂げた蓬専用の新武器。太刀と為っているが直刀で、反りは無い。又鞘も無く、蓬が呼び出す事でその手に来る様に為っている。刀身は白く発光しており、使用者が発する言葉により凄まじい力を発揮する。シャイレオン神龍が使用した時には、一瞬にして対象を凍結、そして業火により延焼させ、その後、強力な衝撃波で粉々にした。蓬はまだ其処までは使いこなせてはいない様である。

烈風双剣【迅雷・轟雷】

第十一章で明らかになったウォルフガングの専用武器。迅雷、轟雷と呼ばれる二つの剣を用いる。それぞれに異なる「力」が働いており、迅雷には、使用者の速度を著しく増加させる能力と雷属性の付加能力が、轟雷の方には、龍属性を付加した特殊な雷を発生させる能力があった。更に二つを交差して「力」を融合させて用いる事に

より、強力な「雷神波」と呼ばれる広範囲龍属性付加の雷撃が発生できるのだが、使用者の負担が大きく、場合によっては致命的にも為ると言う。彼は此れを用いて「疾風」の様に狩場を暴れまわる事に為る。

シャイレオン 神龍

「力」を為すもの。「思い」を為すもの。「心」を為すもの。一つにして、一つではないもの。全ての力を具現するもの。人は其れを「神龍」と呼んだ。時には龍の姿で、時には人の姿で、現れる不思議な存在。全てを「混沌」に還す存在、「魔王」と対抗している。

ゲイフリオン 魔王

全てを「混沌」に還すべく暗躍する、壮大な意識体。直接的な実体は持たないが、実体に寄生する事で力を発揮する。其の為、如何に、其の実体の意識を「混沌」側に寄せるかが「魔王」にとつては重要な事となる。其れにより、実体時の力の具現性が異なるからである。第十六章においてある女性に憑依した。

シャイレオン 防具【神龍】

蓬とゾフィーが着る事に為る防具。外見上は白く光り輝く水着の格好をしている。蓬の物はビキニ。ゾフィーの物はワンピース調（ス

クール水着の様な物)。覆っている部分は少ないが実は其の周囲の空間に対して効果があり、特殊なフィールドを形成している。故に所有者を傷つける様な行為をする、または作用する存在を悉く排除する(ATフィールドに似ているかも)。現在は、二人とも使いこなせていない為、其の能力は限定的だが、最終的には、ダメージ軽減、自己再生、反重力化、空間歪曲、エネルギー変換再構成化、等驚異的な能力を発揮することになる。文字通り最強の盾と為る装備である。

ランス【神龍】シャイレオン

ゾフィーシャイレオンが神龍から授かる事になった槍。勿論盾もセットである。太刀【神龍】シャイレオンと同じ様に、白く輝く槍で、今は、蓬が呼び出す事で手にすることが出来る。まだ、其の能力は未知数であり、今後判明するであろう。因みに長さは3m程もあり、ゾフィーの身長のおぼ倍もある長い槍である。尚、神龍シャイレオン装備は、重量は皆無である。

>i3017—362< ミュー

第十七章で出現した龍。ミウのそっくりさん。但し瞳の色が綺麗な緑色。どうやら、蓬が持っているペンダントとミウ達は関係がありそうだが...?なお、この話以降、彼女達は人語を解し始め喋る事まで行い、更に空中浮遊まで始めている。其の能力が如何程のものが不明。尚、ミウは蓬に、ミューはゾフィーにべったり付きまとっている。

ジークフリート (Siegfried)

第十七章で名前が明らかに為った存在。如何やら、シャイレオンゲイフリオン神龍や魔王を知っている様である。炎龍王テオ・テスカトルである。以前、ブリュンヒルデと共にウォルフガングと一緒に戦っていたような事が語られた。別名として、ザンクトケーニヒ聖王と言う名がある様である。第十九章でウォルフガングの口からウォルフたちと一緒に「魔王」ゲイフリオンを追い払った事が語られた。

ブリュンヒルデ (Brunhilde)

第十七章で名前が明らかに為った存在。ジークフリートとは知り合いの様だ。炎龍妃ナナ・テスカトリである。以前、ジークフリートと共にウォルフガングと一緒に戦っていたような事が語られた。別名として、ザンクトケーニギン聖王妃と言う名がある様である。第十九章でウォルフガングの口からウォルフたちと一緒に「魔王」ゲイフリオンを追い払った事が語られた。

シルヴェスター (Silverster)

第十九章で出てくるクシャルダオラ。いきなり、蓬に一騎打ちを挑む様な武闘派。しかし、殺しを楽しむような物ではなく、闘う事に喜びを見出すタイプ。やや、思い込みが激しい様で一人で突っ走るところがある。ジークフリートたちを知っているが彼らとは別行動

の様である。

ポルトモネー

Portmonee ゲシュトレン Gestohlen ななせい 七世。ニックネーム“

ポルト”

第二十章に登場のメラルー族。対人間大泥棒猫集団。正式名称“アルカトラズ”のリーダーで、手癖が非常に悪いため、無意識に他人（対人間と称しているが、古龍から宝玉をかつぱったり、ラージヤンの金毛をかすめ取ったり、モンスターにまで手を出す）の物を盗る。ネズミ小僧の如く、達者な口と器用さ、頭脳で何度も死地をかいくぐってきたプロの泥棒猫。隠密行動が得意で、盗みに入る前には下調べをするなど、意外に几帳面。“かわいいもの”と金に目がない。苦手はマタタビとゴキブリ。毛並みは、全身黒毛。人間年齢にして三十歳。ドS。一人称「ミヤー」。相手が何であっても敬語は使わない。語尾に「ニヤ」がつく。自信家で、常に自分の心に従って動く。口が上手い。物事はポジティブに捉えるタイプ。口癖「お前の物はミヤーの物！ ミヤーの物はミヤーの物！」（因みに彼の名前は、（財布・盗む）と言う意味が……（笑））

投稿キャラクター。 投稿者は金剛石さん。

キャラクター&用語設定集（後書き）

作者「今のところ第二十章までの情報ね。」

蓬「話が進んで情報が更新される毎に変更しますから、分からないときはチェックして下さいね。」

二人「では本編で。」

F r a u（フラオ）「女」（前書き）

ゾフィー「其の日に連続投稿って最近流行りなのか？」

蓬「さあ？」

ゾフィー「此処の作者は調子が上がってきたのかな？」

蓬「多分ね。」

ゾフィー「ふむ。まあ、楽しみが増えるのは良い事だな。」

蓬「うんうん。なら、ゾフィーも覚悟を決めましょうね？」

ゾフィー「は？」

蓬「楽しみを増やしましょうよ。」

ゾフィー「ちょ！またか！落ち着け蓬！」

蓬「またまたあ……あたしが、優しくシテ・ア・ゲ・ル。」

ゾフィー「待て〜！ああ……駄目だ！……ああ……誰かあ！……いやあああ……。」

作者「為るように為れ……。かな……。あ、本編をどうぞ。」

F r a u（フラオ）「女」

小説 蓬^{よもぎ}の旅（モンハンFF）
第十章 F r a u「女」
フラオ

（「沼地」蓬達がゲリヨスと戦いを繰り広げている場所にて）

蓬は事態が把握できなかった。無理も無い、閃光で目が眩み、何も見えない状態で、ゾフィーが自分に誤ってきたかと思ったら吹き飛ばされたのだから。

然し、戦闘中である事を思い出し、一生懸命に目が見えるように奮闘していた。

「一体……どうなってるの？……」

そう言いつつ、目を凝らしながら周囲の状況を見ようとしていた。ゲリヨスは、殆ど一方的に攻撃を加えられて極度に興奮していた。再び、発光器官を使い「閃光」をしようとする。

其処へ……、

「ません！」

そう言つて、ゾフィーはスティールガンランスをゲリヨスの頭部に衝^つき立ててから火砲を二斉射した！

ゲリヨスは、無防備な時に其の攻撃を喰らってしまい。よろめく。そして、ゾフィーに向き直り身体を捻^{ひね}って尻尾を当て始める。

ゾフィーは素早く盾を構える。盾にゴムの当たる鈍い音が起こり、手には振動が来る。しかし、しっかりと防いだ事により、其れだけでゾフィーは事無きを得る。

蓬は、ようやく目が慣れ始めたのでゾフィーに声を掛ける。

「ご、御免なさい。閃光で目が眩んでた。」

其の声を聞き、ゾフィーはやや安心しながら答えて、

「もう大丈夫なのか？」

と聞く。蓬は太刀を構えなおして、

「ええ、行けるわ！」

と元気よく答えた。そこでゾフィーは、

「なら、こいつを一旦引き付けてくれ。其の間に俺は火砲の弾を装填する。」

そう言った。

「わかったわ！」

と蓬は答えつつ、ゲリヨスに斬り込んだ。そして突き上げてから引き下がる。

ゲリヨスは、思いも寄らない場所から攻撃を受け、よろめく。そして其の方向に向く。そう、蓬の方へ。

ゾフィーは其のタイミングで、後ろにステップを踏みながら火砲の弾を装填する。そして、

「よし、二人で行くぞ！」

そう掛け声をかける。蓬は、

「分かったわ！」

そう答えて、ゲリヨスに斬り込む。ゾフィーも駆け込みながらステールガンランスの刃をゲリヨスに突き立てる。蓬は、突き上げてから引き下がり、ゾフィーは、再び火砲を二連射した。ゲリヨスは手痛い攻撃を喰らい、其のダメージの余りに倒れてしまう。そして、其の伥動がなくなった。

「ふう……。」

動かなくなったゲリヨスを見て蓬がそう息を吐く。そして其の伥、ゲリヨスに近づこうとした。

「いかん！近づくな！」

ゾフィーがそう怒鳴る。然し、蓬は何故そう言われたのか分からずにゲリヨスの傍まで来てしまった。

！！

突然、ゲリヨスが起き上がり始める！全身を大きく振り回しながら！

「きゃあああああああ！」

「シルト
Shield（盾）」

蓬が叫ぶ！その時、ゾフィーはもう一つの「声」が聞こえた。

「蓬！」

そう怒鳴るように呼びかけて、武器を仕舞いながら蓬の方に走り出す。蓬はゲリヨスの起き上がりの攻撃を喰らい、吹き飛ばされた。其の俛、沼のゲリヨスから離れた場所に落ちる。

ゲリヨスは起き上がった後、足を引きずるようにして暫く移動した後、翼を広げて何処かに去ってしまった。

「死に真似」。臆病なゲリヨスが良くやる。擬態攻撃の一つ。死んだ様に見せかけて近づいた者を起き上がり様に攻撃する嫌らしい攻撃である。しかも、此の攻撃はゲリヨスが持つ攻撃で最も威力があった。

ゾフィーは蓬の元に駆けつけてから声を掛けて、

「蓬！大丈夫か？」

回復薬を取り出しながらそう言った。蓬は数回咳き込んだが、目をはっきり開けてゾフィーを見る。そして、

「御免なさい…折角忠告してくれたのに…。」

そう言った。その様子を見て安心しつつ、

「いや、無事なら良いんだ。ゲリヨスのあの攻撃は下手をすれば致命傷に為りかねないからな。さあ、此れを使え。」

そう言つて、蓬に回復薬を手渡した。蓬は其れを飲みつつ立ち上がる。そして、飲み終わった後で、

「そう言えばゲリヨスは…？」

そう言った。周囲を見回した後でゾフィーは、

「足を引きずっていたように見えたからな。恐らく休み場所に逃げたのだろ。蓬が回復したら追う事にしよう。」

そう答えてから、鞆から砥石を出し始めた。其れを見て、蓬はくすりと笑いながら、

「分かったわ。しっかりと回復しておくわね。」

そう言って自分の鞆から回復薬を更に出して飲み始めた。

（暫く経った「沼地」にあるゲリヨスの休み場にて）

其処は「沼地」でも比較的静かで休みやすい場所のようだった。ゲリヨスは其処で傷を癒す為に首をもたげながら静かに休んでいた。其処へ蓬達がやってくる。

「あ、あそこね。」

蓬は休んでいるゲリヨスを見つけてそう言った。ゾフィーも確認しつつ、

「その様だな、俺が竜撃砲を使うから、其の後、思い切り斬り込ん

でくれ。」

そう言った。蓬は答えて、

「分かったわ。頑張る。」

そう言った。二人はゲリヨスの正面と横に陣取り、正面からゾフィーが竜撃砲の構えを取る。

「ドラッヘ Drache カノーネ Kanone アッブ・シーセン Abschießen! (竜撃砲発射する!)」

ゾフィーはそう言い、竜撃砲を作動させる!

エネルギーの奔流が砲身を駆け抜けて対象であるゲリヨスへ其の伝激流のように押し寄せる!

突然の衝撃にゲリヨスは目を覚まさせられる。そこへ、

「いつけええええ!」

蓬が太刀を斬り込んだ!そして衝き出して斬り下がる。其の攻撃にゲリヨスは、狂わんばかりに暴れた。

「このおおお!」

蓬が更に斬り込む!そして衝き出して又引き下がる。ゲリヨスは叫びを上げるが、声は細くなり、其のうち全く動かなくなった。

其れを見て蓬は一旦離れる。先ほどの事のような事があつては堪らないからだ。ゾフィーが其れに気づいてゲリヨスに火砲を一発当てる。然し、ゲリヨスは何の反応も無い。そう、狩猟は終了したのである!

「ヴォルエンデン！フォルエンデン（完了！）だ。」

ゾフィーはそう言い、終了を宣言した。蓬はやれやれといった様子でその場に座り込む。そして、

「御免ね、ゾフィー……。折角色々忠告してくれたのに……。あたし、突っ込んで迷惑ばかりだったな……。」

いじける様にそう言った。そんな蓬を見て苦笑しつつゾフィーは、
「いや、初めてでもあるし、無理も無いさ。其れに、太刀を持つものが怖気づいて動かない方が役に立たないさ。」

そう言って、蓬の肩を叩いた。蓬は肩を叩いてくれたゾフィーの手に頭をのせる様にした。ゾフィーはそんな蓬を見て微笑みつつ、

「そう言えば蓬。ちよつと尋ねたいのだが。」

そう言った。蓬は不思議に思いながら、

「ん？なあに？」

そう答える。ゾフィーは続けて言う。

「ゲリヨスが起き上がって攻撃したとき、お前、シルトScchildと言わなかったか？」

そう言われて、蓬はキョトンとする。そして、

「えつと……Schil^{シルト}d?どう言う意味なの其れ?」

逆に聞いてくる。苦笑しつつゾフィーは、

「『盾』とか『保護』とか言う意味だよ。知らないのなら問題ない。」

そう言った。蓬は、ふん。と言いつつゾフィーを眺めていた。

ゾフィーは少し考え事をしながら蓬を見るのであった。

あの声は何だったのか?疑問に思いつつゾフィーは其処を後にした。蓬も己の不覚を恥じながら。

(暫く経った暁の村の広場で)

蓬とゾフィーはギルドでの報告を終えて、修理などを済まし、広場に来ていた。そこへ、

「お、蓬さんにゾフィーさんだったつけ。」

そう、声を掛ける者が居た。見ると其れはナギサだった。

「ナギサさん。リオレイア討伐は終わったんですか?」

蓬がそう言う。ナギサはニンマリとした顔で、手にした新しい弓を見せながら、

「じゃ〜ん。お陰で此れが作れたのよ!どお?」

そう言った。緑色のしつかりとした弓。クイーンブラスターであった。

「ほう、いい弓じゃないか。」

ゾフィーがそう言う。なぎさは少し照れた様子で、

「やっぱりそう思う?。」

と嬉しそうに言った。蓬も微笑む。ナギサは、暫く蓬とゾフィーを見ていた。

「ん?あたし達がどうかした?」

蓬がそう聞く。ナギサが少し慌てながら其れに答えて、

「え?いや、そう言う訳じゃないけれど、素敵なカップルだなんて思っで。」

そう言った。其の台詞に二人は、

『はっ。』

と、素っ頓狂に言ってしまった。そして、

「え?そう見えるかな?」

と、蓬は少し顔を赤くする。ゾフィーは同じ様に顔を赤くするが、

「あゝ。ちょっといいかな。ナギサだったよな。」

そう言う。ナギサは、

「うん、そうだけど、何？」

そう答えた。ゾフィーは続けてこう言う。

「俺はFrauフライウ（女）なのだが。」

暫く沈黙が続く。そして、

「ええええええええええ！」

と、ナギサの大きな声が広場に響く。其れに答えるように、

「何だよナギサ、遠くまで聞こえる声で。」

ツバサがやってくる。イナズマも、

「如何したんだ？」

そう尋ねつつやってきた。其の二人を捕まえてナギサが言う。

「ねね、今朝あった此のゾフィーさん女性なんだって！」

其れを聞いて二人も、

『ええええええええええ！』

と言う。ゾフィーは苦笑しつつ、

「そんなに吃驚する事かな……………」

そう言った。ナギサが今度はゾフィーを捕まえて、

「いや、だって、こんなに凛々しいし、男物の鎧をきちんと着込んでるし、筋肉質でツバサやイナズマよりもカッコいいのに女性って聞けば誰でも驚くわよ。」

と、力を込めて言う。其れを聞いたツバサとイナズマは、

『ちよつと待て、ナギサ。其れって俺達に対する喧嘩だよな？』

二人が息が合うようにそう言う。ナギサは、

「あゝ、そのゝ、まあ、其れだけゾフィーさんがカッコいいと言う事よ。うん。」

などと勝手に結論付ける。然し二人はじりじりとナギサを追い詰めて、最後には追いかけてことが始まった。

「ちよつと待て！」

「嫌よゝ。待ったらどうせ、叩くんでしょうが。」

「当たり前だ！」

「だから嫌だって！」

そんな様子を見つつゾフィーは苦笑した。そして、

「俺はそんなに女性っぽくないかな。」

そう、蓬に聞く。蓬は顔を真っ赤にしながら、

「そうね……、一般的な女性さは無いと思うけど、そうじゃない、別の女性としての素晴らしさがあると思うわ。」

そう言った。其の答えに、

「ふむ……俺にはまだ分からないな……。」

ゾフィーはそう言うのであった。広場では三人組の追いかけてこがまだ続いていた。

賑やかな喧騒の中、太陽が夕暮れを伝えつつあった。

ゲリヨスを何とか倒した蓬達。しかし、モンスターはいろんな種類が数多くいる。しかも、蓬では今では太刀打ちの出来ないもの達も周りで蠢いていた。

さらに、ゾフィーが聞いた謎の言葉。此れが意味するものは何なのか、蓬が語ったものなのか？其れとも？解けぬ謎は深まるばかり。まだまだ、蓬達の旅は続く！

F r a u (フラオ) 「女」 (後書き)

ナギサ 「やっぱり信じられないわ!」

ツバサ 「まだ引きずってるよ……。」

イナズマ 「惚れたとか?」

ナギサ 「な、な、な、そんな事は無いわよ!」

二人 「分かりやすいな。」

ゾフィー 「賑やかだな。如何した?」

三人 「うわ!ゾフィーさん…吃驚した…。」

ゾフィー 「ん?如何したのだ。」

ナギサ 「あの〜?」

ゾフィー 「なんだ?」

ナギサ 「調べても良いですか?」

ゾフィー 「は?」

ナギサ 「やっぱり信じられないし、此の目で見ないと!」

ゾフィー 「ちょ!ちょっと待て…。」

ナギサ 「女同士なら大丈夫ですって！」

ゾフィー 「いや、そう言う問題じゃ…あ、止め…。」

ナギサ 「……………」

ツバサ 「如何したナギサ？」

イナズマ 「何かあったのか？」

ナギサ 「ぼつ。」

二人 「一体何が…………？」

作者 「あ…………詳しい事は御想像に御任せします。さて、次回
は…「Tier^{ティア}（獣）」ですよ。お楽しみに。」

ナギサ 「ス・テ・キ」

なんじ
汝の赴く処にも神龍^{シャイレオン}の加護があらん事を……

T i e r（ティア）「獣」（前書き）

蓬 「さあ、ゾフィー。今日こそはあたしの物に……。」

ゾフィー 「な！いきなり其の展開か！待て、蓬！」

ナギサ 「ちよつとまったあ！」

二人 「え？」

ナギサ 「ゾフィーはあたしが貰うのよ！」

蓬 「なんですつてえええええ！」

ナギサ 「さあ、あたしと一緒に行きましょう。其処にベツトは用意してあるわ。」

ゾフィー 「待て、話が飛躍過ぎだ！」

蓬 「待ちなさい！」

ナギサ 「何よ！」

蓬 「此処はゾフィーに選んで貰いましょう！」

ゾフィー 「は？！」

蓬 「（服を脱ぎながら）さあ！あたしと、」

ナギサ 「（服を脱ぎながら）あたしと、どっちを選ぶ？」

ゾフィー 「ちょっと待て！どっちかって……出来るわけ無いだろう？！」

二人 「さあ、さあ、さあ！選ぶのよ！」

ゾフィー 「だ、誰か……。俺を助けてくれ！」

ウォルフ 「御愁傷様だニヤ。其れは兎も角、僕やミウも活躍できるニヤ！」

ミウ 「みう！」

ウォルフ 「其れでは、どうぞなのニヤ！」

T i e r（ティアー）「獣」

小説 蓬^{よもぎ}の旅（モンハンFF） 第十一章 T i e r^{ティアー}「獣」

（前回より約一週間ほど経った蓬の家にて）

「次は、ババコンガか。又特異な奴だな。」

ゾフィーがそう言う。蓬が疑問に思いながら、

「え？ゲリヨスみたいな閃光があるとか？」

そう聞いた。其れに答えてウォルフが、

「其れは違うニヤ。ババコンガは牙獣種と区別される種族なのニヤ。あいつはとても臭い攻撃をするのが問題なのニヤ。」

そう言う。蓬は、

「へえ……。」

よく理解出来ていない返答をする。苦笑しながらゾフィーが解説するよつに言った。

「ババコンガは、主食がキノコと言う変わったモンスターでな。ま

あ、雑食ではあるのだが好物はキノコなんだ。で、菌糸類は発酵すれば人でも臭いおならが出るだろう？」

「あ、うん。」

「つまり、ババコンガはそう言う攻撃をしてくる、嫌な奴って事さ。なので、消臭玉が無いと回復薬が暫く飲めなくなるから注意しないといけないからな。」

「ふむふむ、成程……。」

蓬は、話を聞きつつ考え込む。そして暫くしてこう言った。

「太刀だとういう立ち回りが良いのかな？初めてで良くわかんないんだけど。」

其れに答えてウォルフがこう言う。

「真正面以外から戦うと良いニヤ。奴は突進攻撃を多用しやすいのニヤ。なので、盾の無い太刀は正面は危険だニヤ！」

頷きつつ蓬は、

「成程ねえ……。今回はウォルフ君達も来る？」

答えつつそう言った。

「みつ？」

ミウがそう言う。ウォルフは歓喜しつつ、

「僕達も行って良いのかニヤ?!」

そう言った。蓬は答えて、

「うん、と言うか、最近数日間家空けるじゃない。ミウと一緒に殆ど居ないし。一応、あたしが母親だし。ハンターだから狩猟は止めれないから、それなら一緒に行けばいいと思って。ウォルフ君と一緒にならミウも安心だしね。」

そう言った。ウォルフは更に喜びながら、

「其れは嬉しいのにゃ！ミウ、一緒に仕度をするのニャ！」
「みう！」

ミウの賛同も得て、そう答えつつ、自分の部屋に走って行った。苦笑しながらゾフィーが言う。

「いいのか？彼らを連れて行って。」

蓬が答えて、

「大丈夫。ウォルフ君は「勇者」だからね。ゾフィーは知らないでしょうけれど。彼、グラビモスですら一人で倒してるのよ。」

そう言った。ゾフィーは其れを聞き、

「な……あの鎧竜を一人で倒せるのか……。確かに「勇者」だな。」

驚きつつ、そう答えた。

二人は、お互いに顔を見合わせた後、いそいそと狩猟の準備を始めるのであった。

（「密林」のベースキャンプにて）

「よし。準備は良いかな、皆。」

ゾフィーがそう言う。

「大丈夫！」

「オッケーだニャ！」

「みう！」

それぞれがそう返事をする。其の返事に苦笑しながら、

「では、行こう！今回の目標はババコンガだ！」

ゾフィーはそう言った。其れに答え、

「おー！」

「ニャー！」

「みう！」

それぞれが氣勢を上げた。そして「密林」に全員が入る。

（「密林」移動中に）

ゾフィーはウオルフの姿を見てウオルフに尋ねて、

「ウオルフ、其の武器は？アイルーの武器は詳しくは知らないのだが、初めて見ると思う。」

そう聞いた。ウオルフは、二本の刃状の武器を背負っていた。答えてウオルフは、

「ああ、此れニヤ。昔から愛用している僕専用の双剣なのニヤ。名前は、「烈風双剣【迅雷・轟雷】」と言うのニヤ！」

そう言った。ゾフィーは関心を示しつつ、

「名前からすると、雷属性のような武器だな。」

そう言う。其れに答えて、ウオルフは、

「基本的にはそうだニヤ。只、此の武器は特殊なので「龍属性」も帯びているのニヤ。」

そう説明する。それに、「ほう。」と関心を示しつつゾフィーは、

「扱いが大変そうだな。」

そう言った。ウオルフは其れに答えて、

「そつだニヤ、「暴走」すると、使用者が死に兼ねない武器だからニヤ。普通の人には勧められないのニヤ。」

危険な台詞を然も軽く言うのであった。其の言い方にゾフィーは苦笑していた。

（「密林」海岸近くの開けた場所にて）

「そつちにもコンガが行った、蓬、処理は頼む！」

「わかったわ！」

「ミウのことは僕に任せるのニヤ！」

「みう！」

海岸近くの開けた場所に群れていたコンガ（全身がピンク色の毛に覆われている狒狒ひびのようなモンスター）を一行は退治していた。此の大型のモンスターがババコンガなのである。

蓬の太刀が唸る！「型」通りの美しい動きを描きながらコンガに刻み込まれる！一匹、二匹と倒していった。

ゾフィーもガンランスを突き刺し、火砲を撃つ。そうして、周囲にはコンガの死骸が増えていった。

ウォルフやミウも、二人が漏らして自分達に襲ってきたコンガをウォルフは双剣で、ミウは龍フレスの吐息で倒していくのであった。

「よし！今回は「闘気」が溜まったわ！」

蓬がそう言う。全身に赤い靄もやの様な物が発生し、蓬の髪が舞い上がり始めた。其の姿は「戦女神」のように美しい。

太刀を使用する者は、一定時間に敵に攻撃を続けると、身体に「闘気」と呼ばれる戦闘用の気力を溜めてゆく事ができ、一定量溜まるとこの様に発動、攻撃力が飛躍的に上昇する。更に、この状態だと、対象の肉質を無視した強力な攻撃「鬼刃斬り」と言われる攻撃も出来るのであった。

「おお！蓬もかっこいいニヤ！僕も頑張るのニヤ！」

蓬の姿を見つつウオルフがそう言う。

「みう！」

ミウも負けずそう鳴いた。

そんな仲間を見つつ、ゾフィーが、

「頼もしいな、そろそろ来るぞ！覚悟しておけ！」

そう言った。そう、そう言われた林の方から、ドスドスと重量物が歩いてくる音が聞こえてきた。

自分の餌場を荒らされる事を知り、其れはやってきた。そう、ババコンガである。腹から響く太い嘆き声を上げる。そして、突進を開始する！

「来たぞ！まず俺が攻撃を受けるから、蓬は奴を側面から攻撃してくれ！ウオルフとミウは後方で待機して、他の雑魚が出てきた場合処理を頼む！」

ゾフィーがそう指示を出す。三人（？）は、

「分かったわ！」

「了解なのニャ！」

「みう！」

そう答えた。そして各自が行動を開始する。

ババコンガは、最も近い対象であったゾフィーに向けて突進を開始始めた。そして、盾に激しい音と共にぶつかる。其の俛ゾフィーを押し返すように押し込もうとする。

「ふつ。ババコンガ如きには負けん！」

ゾフィーはそう言っ盾を更に硬く構え、足をしっかりと固定する。何と、そうする事で、ババコンガの怪力の突進すら止めているのである。

「行くわよ！」

蓬はそう言いながら、ババコンガに斬り込む！そして、衝き出して引き下がる。

ババコンガは其の攻撃により仰け反る。其の隙をついて、

「今度は俺からだ！」

そう言って火砲を二回放つ！ババコンガは更に喘いだ。^{あえ}其れを隙と見て蓬は更に斬り込む。そして、

「鬼刃斬り！」

そう言いながら、「鬼刃斬り」をババコンガに叩き込む。そして

斬り下がった。

痛みの余りババコンガは地面をのた打ち回る。暫くそうした後、顔を真っ赤にして起き上がる。其処へ蓬は更に斬りかかるうとした。

「いかん！蓬、下がれ！」

ゾフィーはそう言ったが、蓬は其の促しに堪えてしまふ。その時、

！！

ババコンガは凄まじい音と共に周囲に凄い異臭がする臭気を撒き散らす！蓬は其れをもろに受けてしまった。

「がっ……げ……がはっ……。」

猛烈な臭気に吹き飛ばされ、地面で其の嫌な臭いに蓬は苦しむ。ウォルフが鞆から消臭玉を出しながら蓬の元に素早く駆けつける。

「蓬、消臭玉だニヤ。此の霧を浴びるのニヤ！」

そう言つて消臭玉を使用する。其れにより周囲に爽やかな霧が発生し嫌な臭気が消えていく。蓬は暫く咳き込んだが、其れにより呼吸が安定した。

そんな間にもババコンガは顔を真っ赤にして怒り状態となりゾフィーを襲っていた。ゾフィーは、盾でしっかりと守りつつ、合間にガランスを衝き立てながらじわじわとババコンガの体力を奪っていく。

「は…御免…なさい…もう大丈夫…。」

蓬はそう言つて立ち上がる。ウォルフは再びミウの元に戻る。蓬

は、ゾフィーの所に猛攻を掛けているババコンガの側面に走りこみ太刀を斬り込む！そして、「型」通りに衝き出し、引き下がる。其れにより再び、「闘気」が溜まる。

「よし！」

ヴァッフェ

『W a f f e（武器）』

蓬が威勢を上げた時、もう一つの声がした。

「え?!」

蓬は、其れを聞いてそう言ってしまう。そんな折、蓬の周囲の赤い霧は激しく吹き上がり、荒々しく髪が舞い上がる！更に、持っている太刀の様相が変わり始めた！刃の手元しか付いていない筈の特殊な加工をされた部分が他の刃にも現れ始めたのである。蓬は其の状態に驚く。そして其の場に立ち止まってしまう。

「蓬！ぼつつとするな！」

ゾフィーはそう怒鳴る。其れを聞いて、蓬は我に返った。

「あ…御免ゾフィー。行くわよ！」

そう言つて、ババコンガに斬り込んだ！そして「鬼刃斬り」をする！更に衝き出し、再び「鬼刃斬り」、そして斬り下がった。

其の、強烈な攻撃でババコンガは再びのた打ち回る。今度はゾフィーは、其処へ攻撃を仕掛ける！

ドラッヘ

カノーネ

アップ・シーセン

「Dr a c h e K a n o n e A b s c h i e ? e n !（竜撃砲発射する!）」

竜撃砲が発射される！エネルギーの奔流がのた打ち回るババコンガへ直撃する！其処へ更に、

「これで止め〜！」

蓬がそう叫びながら斬りこむ、そして「鬼刃斬り」をする！更に衝き出し、再び「鬼刃斬り」、そして、更に「鬼刃斬り」を叩き込んだ。流れるような其の攻撃を喰らい、ババコンガは一度身体を持ち上げるが、其の俛倒れて絶命する。其の姿をゾフィーは見て、

「Auf Wiedersehen（さようなら）」
アオフ ヴィーダーシャオエン

そう言った。

ババコンガの狩猟は終了したのである。只、蓬は自分に起きた事が良く理解できず、其の場に立ち尽くしていた。

「あたし、何か別の言葉でも言ったのかしら……。」「

蓬はそう呟いていた。苦笑しながらゾフィーが声を掛ける。

「分からない事は悩んでも仕方が無い。とりあえずは狩猟が上手く済んだんだ。先ずは其れで良しとしよう。」「

そう言われ、納得は出来ないが、蓬は、

「うん。」「

と頷いた。そして解体を始める。ウォルフやミウも其処に駆けつけてきた。

「蓬、頑張ったニヤ！カッコ良かったのニヤ！」

「みう！みう！」

ウォルフとミウはそう言う。蓬はやや、呆け気味に、

「あ、うん、有難う。」

そう答えていた。そんな蓬を見つつゾフィーは苦笑しているのであった。

（狩猟が終了し一息ついて皆が寝静まっている蓬の家にて）

ゾフィーは何故か寝付けなかった。いや、理由は分かっていた。蓬が発したと思われる言葉についてである。

「Schild（盾）にWa^{ヴァ}ff^{ッフ}e（武器）か。まるで、戦う為に生まれてきたように発声していたな……。」

そう言いつつ苦笑した。自分の突拍子も無い考えにである。ふと、横を見ると蓬が寝言を言いつつこちらを向いていた。

「ん〜。ゾフィー…素敵よねえ……。」

全く何を夢見ているのやら…そう思いつつ、ゾフィーは一旦ベッ

トを出す事にした。夜なので、上に一枚羽織ってから外に出る。

「おや？ゾフィー寝付け無いのかニヤ？」

外に出ると、そう声が掛かってきた。ウオルフである。

「ああ、ウオルフ、ちょっと悩み事があつてな。」

ゾフィーがそう言う。ウオルフは答えるように、

「蓬の過去が知りたいのだニヤ？」

そう言った。ゾフィーはつとしてウオルフを見る。そして、

「まあ、俺もちょっと人には言えない過去があるんだがな。然し、蓬はそんなものとは違いに為らないものがある気がする。」

そう言った。其れにウオルフは答えて、

「流石だニヤ。初めて出会った時から只者ではないとは思っていたけどニヤ。蓬は五年ほど前に、此の村に行き倒れになって倒れていたのを僕が拾ったのが始まりだニヤ。」

そう答えた。

「始まり？如何言う事だ？」

ゾフィーはそう問い尋ねる。ウオルフは答えてこう言う。

「蓬は、気づいた時、身に付けていたペンダント以外は、殆ど服さ

えも無い状態で倒れていたのニヤ。しかも、名前すら記憶の無い状態でニヤ。全くの無垢と言っている様な状態だったニヤ。」

ゾフィーはそう言われてふと、

「で、では、蓬と言う名前も年齢ももしかして…。」

そう言う。ウオルフは其れに答えて、

「そうなのニヤ。名前も此処で付けられたものニヤ。年齢は、背格好からその時十四とされただけで、実際の年齢ではないのニヤ。でも、蓬はあの持ち前の性格で、今まで生活してきたのニヤ。」

そう言った。一つ溜息をしつつゾフィーは、

「成程な…。しかし、俺に其処まで如何して教えてくれる？」

そう聞いた。答えてウオルフが言う。

「蓬がゾフィーを気に入ってるからニヤ。一緒に居たいと思うほどにニヤ。だから僕も信じるのニヤ。勿論、いざと言う時は僕も戦うのニヤ。」

蓬を守る。其の決意がウオルフから見える。ゾフィーはそう感じた。そして、

「今日も聞こえたのだが、どうやら蓬は、意識しない状態で何か言葉を呟いているようだ。」

そう言った。そして更に続けて、

「しかも其の言葉は何か「力」が働いている。如何考えても人が出来る代物ではない。蓬が不安に為らない様にする為にも、俺は……。」

そう言いかけて止まる。其れに答えるように、ウオルフが、

「力に為りたい、傍に居たい、そう言うのだニヤ？」

そう、問い尋ねた。ゾフィーは俯いて肯定の意思を示す。其れを見ながらウオルフは、

「やはり、ゾフィーは蓬が期待した良い人だったようだニヤ。言つて良かったと思うニヤ。此れからも蓬を頼むニヤ。」

そう言う。其れにゾフィーは答えて、

「ああ、此方こそ頼む、ウオルフガング。」

そう答えた。

空は星が瞬き、月明かりが差し込む。新たな決意を示す二人を、そつと見つめていた。そう、天から静かに優しく。

（翌朝、蓬の家にて）

蓬は戦いの疲れも癒え、清しい朝を迎えていた。

「みう！」

毎朝のお約束のようにミウが起こしに来る。

「あ…お早うミウ。今日もいい天気ね。」

蓬は目を擦りつつそう答えた。起き上がると、まだゾフィーが寝息を立てて寝ていた。其の姿を見て……。

「ゾフィー……、あたし貴女が好きかも。」

ふとそう言っていた。そして、自分が言った台詞を思い出して顔が真っ赤になる。

「な、何を言ってるのかしらあたしは……。取り敢えず食堂に行きましよ、ミウ、行くわよ。」

自分にそう言い聞かせるように言いながら蓬はミウを呼びつつ食堂に移動した。ミウは、

「みう？」

やや疑問に思いながら蓬の後について行くのだった。暫くし、二人が居なくなってから、

「まあ、俺もお前のことが好きなのかもしれない……。」「

ゾフィーは、そう言っていた。勿論、其の好き、が如何言う意味

を帯びるか、其れは此れからに掛かっているのかもしれない。

蓬を取り巻く不思議な状況。明かされた過去。更に、現実にか
れている不穏な状況。謎はあるとは言え、蓬に気を許し又、信頼も
されている女性ゾフィー。「勇者」ウォルフガング。謎の竜ミウ。
彼女達にどんな運命が待ち、如何言う結果になるのか。其れは、未
来の言葉により語られるであろう。

Tier（ティア）「獣」（後書き）

ゾフィー「はあ……はあ……はあ……前書きでは酷い目にあつた……。」

作者「ご苦労様。」

ゾフィー「と言うか、毎回毎回何故こんな目に遭わねば為らんのだ
！」

作者「作者の陰謀。」

ゾフィー「く……そう、あからさまに言われては反論も出来ん……。」

蓬「そう言うわけで。」

ナギサ「覚悟は良いわね？」

ゾフィー「な、な、な……待て、二人とも！てか、何故裸なんだ！」

蓬「此れから、愛の営みを始めるんじゃない……。」

ナギサ「そうよ。もう逃げられないのよ。」

ゾフィー「や、やめろー！あ……やめ……ああ……いやあ！……ああ
ん！」

作者「あゝあ……。まあ、予定通りとも言つか。ウォルフ次
回予告宜しく。」

ウォルフ「了解ニヤ！ババコンガを無事倒した蓬達。次を待ち受けるのは砂漠に住む大名閣下なのニヤ！次回「地球は青かった」なのニヤ！」

作者 「お楽しみに。」

ミウ 「みう！」

ゾフィー「もう…止め…ああ………」

汝の赴く処にも神龍シャイレオンの加護があらん事を……

地球（テラ）は青かった（前書き）

ゾフィー「処で…。」

作者「ん？」

ゾフィー「今回の題は何故こうなんだ？」

作者「世界初の宇宙飛行士ソ連のガガーリンが言った有名な台詞よ。まあ、彼はロシア系だから地球を「テラ」とは言わなかったでしょうけどね。」

ゾフィー「いや、そう言う事じゃなくて…。」

作者「ん？」

ゾフィー「この作品の繋がりは？」

作者「今回、蓬が体験する事がヒントよ。」

ゾフィー「ほう…。」

作者「まあ、あたしがゲームをしていた時にそう思ったってのもあるけどね。」

ゾフィー「成程、体験が元の台詞な訳だ。」

作者「そう言う事、では、お楽しみ下さいね。」

地球（テラ）は青かった

小説 蓬よもぎの旅（モンハンFF）
第十二章 地球テラは青かった

（前回から約二週間たった「砂漠」のベースキャンプにて）

蓬達は「砂漠」のベースキャンプに来ていた。今回は、此处に生息するダイミヨウザザミと言うモンスターを狩猟するのが目的である。

ダイミヨウザザミ。甲殻種と言われるモンスターの一つ。非常に大きな爪を持ち、そこそこ丈夫な外骨格を形成している為、其れを用いて対象を襲い捕食する。ただ、わざわざ大型動物を襲うことは少ないようだ。本体（胴体部分）が柔らかい構造の為、モノプロスの頭殻（頭の部分が石化したもの）を良く「宿」として用いている。甲殻種は外骨格形成の為、其の大きさの割りに移動速度がかなり速く、侮れないモンスターである。然し、逆に外骨格故に行動が制限される部分（動きに規則性が生まれてしまう）と言う特徴故の弱点もあるのであった。

「まあ、ダイミヨウザザミはそんな感じのモンスターだニヤ。」

ウォルフがそう、蓬にレクチャーをしていた。頷きつつも蓬が尋ねる。

「えっと、毎回聞くように為るけど、あたし太刀だから立ち回りは

如何しよう？」

其れに答えるようにゾフィーがこう言う。

「太刀は横に広く攻撃できる特性がある。まあ、だからガンランスとは立ち位置を間違えると危ないのだが。其れは兎も角。ダイミョウザミは、前後左右四方にはかなり高速で移動するのだが、地中に潜らないと方向転換できないという特性がある。斜め移動も出来ないしな。だから、斜め方向から足を狙って攻撃してくれると一番効果的だと思う。俺は基本正面で立ち向かうからな。」

其の説明に頷きつつ、蓬は、

「うん、分かった。頑張つて立ち回るね。」

そう言った。ウォルフが、

「二人はダイミョウザミに集中するといいニヤ。ゲネポスとかはミウと僕で倒しておくニヤ。」

そう言う。其れに、ゾフィーが答えて、

「ああ、頼むよウォルフ。御陰で戦闘が楽になる。」

微笑みつつ、そう言った。

全員は、其れから、装備や道具の確認を行い、「砂漠」へ旅立つのであった。

（「密林」にて）

「さっきの場所には居なかったな。こっちだろうか。」

ツバサがそう言う。其れに答えて、

「まあ、先ずは先に行こうぜ！出会わないと戦いようがないしな。」

イナズマがそう言う。ナギサも、

「そうね、ペイントさえつければ少々逃げても追いかけるし。」

そう言った。そんな時、上空から翼を羽ばたく音が聞こえてきた。

「お？お出ましかな。リオレイア二頭目、頂くぜ！」

イナズマがそう言う。が、其の姿を見てツバサが怒鳴る。

「待て！こいつは亜種だ！全身が桜色だぞ！」

「え……。依頼は通常の奴だったはず……。まさか！」

ナギサがそう言った、その時。

三人が居る後方から、咆哮が聞こえて来た……。其処には、鮮やかな緑色をしたリオレイアが三人を見つめていた。

「まさか、二頭居たとは……。こりゃ、やばいかな……。」

ツバサがそう言う。イナズマが、

「先ずは一戦あるのみだぜ！」

そう言つて、背負っていた大剣を構える。ナギサは、距離を開けながら弓を構えた。

「密林」では、死闘が始まろうとしていた。

（「砂漠」広い砂地、周囲に何も見当たらないかのような場所で）

蓬達一行は砂漠の最も広い場所に出ていた。見渡す限りの砂地。砂のみが波打ち、文字通り砂の海の様であつた。生き物も殆ど居らず、ゲネポスやガレオスが幾らか確認出来る程度だつた。

「此処も居ないのかな……。」

蓬がそう言っていた、その時。

蓬達の少し前にある砂地がゆれ始める。其れは見る見るうちに盛り上がり始めて、巨大な姿が出現した。高さが6mはいくつかと言う巨大な甲殻種、そう、ダイミョウザザミである。

「出たニヤ。雑魚は僕らに任せるニヤ！」

ウォルフがそう言う。蓬は武器に手を掛けつつ、

「御願いな、ウォルフ。ゾフィー、行くわよ！」

そう言いながら駆け出し始める。ゾフィーは微笑みつつ、

「分かった。正面から俺は向かう。」

そう言つて、ダイミヨウザザミの正面に向かって走り出した。

音に敏感なダイミヨウザザミは、自分に近づく存在に気がついていた。徐に最も近い対象である蓬に向かつて横に進み、自慢の爪おもむろを振るう！

蓬は、其れを見極めながら、ダイミヨウザザミの足の方へ移動しつつかわす。そして太刀を引き出しながら、そのまま、ダイミヨウザザミの足を斬りつけた。そして「型」通りに、衝き出して、斬り下がる。

ゾフィーは、敵が蓬を狙っているので、真正面まで回った後、ガンランスを切っ先から斬り込みつつ、火炮を三連射した。

ダイミヨウザザミは、其の砲撃で些かよろめく、しかし、其の身体からは考えられないほどの速度で、爪を用いて、ゾフィーを襲う！ゾフィーは、盾をしっかりと構えて其れを防ぐ。爪が盾に当たり、耳に障る音が辺りに響く。しかし、其れだけで終わり、ゾフィーには何の被害も与えなかった。其の隙を衝いてゾフィーは更に火炮を二連射する。

蓬は、対象から自分が外れた事に気づいて、再び太刀を「型」通りに斬り込んだ。其れにより、「闘気」が溜まる。

「よし！行くわよ！」

蓬はそう掛け声を上げる。蓬の周囲に赤い靄が発生する！そして、美しい白髪は、さらさらと舞い上がり始めた。

二人とダイミヨウザザミの戦いは中盤に差し掛かるうとしていた。

「だいぶ「型」が身に着いて来たみたいだニヤ。此れなら大抵のモンスターでも平気だニヤ。」

ウォルフは、蓬達を見つつそう言っていた。そんな時、

「みう！」

ミウがそう叫びを上げる。ウォルフは、

「ミウ、如何したのニヤ？」

そう言つて、ミウが叫んだ方向を見る。其処には、ゲネポスではなく、ゲネポスの優に三、四倍はあるうか、ドスゲネポスがやってきていた。其れを見つつ、ウォルフは、

「漸く、僕のまともな戦闘が見せれるニヤ。」

そう言っていた。其の顔には余裕、とも言える表情があつた。そんなウォルフを見つつ、ミウは、

「みう？」

そう声を掛けていた。ウォルフは其れに答えるかの様に、

「ミウは此処で待っているのニヤ！僕は少し遊んでくるのニヤ！」

そう言いつつ、双剣を構えながら駆け出して行つた。

蓬達とは少し離れた場所でも戦いは始まるうとしていた。

（「密林」死闘の場、にて）

「くっ……さ、流石に俺達だけじゃ、二頭同時はきついな…。」

ツバサがそう言う。既に、幾らか傷を負っており、二頭相手に回復薬を飲む暇が余り無いようである。其れに答えるように、イナズマが、

「無理かも知れないが、逃げるにしても、隙を作らないと危ないぜ！」

そう言った。確かに、片方に背を向けて逃げるのは危険がある。かと言って此の仮戦えば、次第に体力を削られ、体力差ではリオレイアに敵う訳が無い。

「あたしが、閃光玉を使うわ！其のタイミングで、皆でキャンプ方面に逃げましょう！」

ナギサがそう言う。そう言う間にも二頭のリオレイアは三人を襲っていた。二人は其れに答えて、

「分かった！」

「任せるぜ！」

そう答えた。ナギサは、二頭のリオレイアが視線を同一にした瞬

間を狙い、其の場所に閃光玉を放り投げる！

！！

強烈な閃光が起き、リオレイアは一時的に目が眩む。

「いまよ！」

ナギサはそう言って走り出す。その時、目が眩んで暴れたリオレイアの尻尾が……

「きゃああああ！」

ナギサに直撃する！ツバサとイナズマは、其の声に驚き、急いでナギサの場所に駆けつける。

「大丈夫か？！」

「兎に角急いで逃げないと危ないぜ！」

そう二人で声を掛けて、ナギサを二人で抱え上げ、其の場を離脱する。

其処で二頭のリオレイアは、閃光で目が眩み、暫く其の場で暴れていたのであつた。

（「砂漠」ダイミョウザザミと戦う蓬達）

「闘気」が溜まつた蓬はダイミョウザザミに斬りかかる！斬り込

んだ後で「鬼刃斬り」、衝き出して、斬り下がる。その後、ダイミヨウザザミは素早く爪を蓬に襲い掛かってきた！

然し、蓬は其れを側転をしかわす。蓬に注意が向いた事により、ゾフィーは火砲の砲弾を装填する。そして、再び切り込む。更に火砲を二連射。

ダイミヨウザザミは手痛いダメージを負い、口の周りに激しく泡を吐き始めた。怒り状態である。

蓬は足を狙って斬りかかろうとした。その時…

！！

ダイミヨウザザミは砂を掘り始め見る見るうちに砂の中に入ってしまう。蓬の太刀は砂地を叩くのみであった。

「え?!逃げたの?」

蓬はそう言う。ゾフィーは、

「いや、潜っているだけだ。下から来るぞ、気をつけろ!」

そう強く言った。ゾフィーが盾を構えつつ待っていると、其処へ…。

砂の地下からダイミヨウザザミが激しく昇り上がって来た!ゾフィーは盾をしっかりと構えるが、それでも、後ろに引き摺られるほどの衝撃が来る。

「くっ……。」

ゾフィーは、全身の筋肉を巧みに用いて衝撃を緩和させる。ダイミヨウザザミは位置を変えつつ、砂地の下から激しく「宿」を当てようと何度も昇り上がっていた。

「ゾフィー！」

蓬は、そう言いながらゾフィーの元に駆け寄ろうとする。

「馬鹿！来るな！」

ゾフィーは其れを静止しようと怒鳴った。その時、

『シルト
Shield（盾）』

蓬から、又声が聞こえた。そして丁度その時、蓬の足元からダイミヨウザザミが昇り上がって来た！

蓬は、ダイミヨウザザミの激しい昇り上げを喰らい、空中に放り出されてしまう。そう、20m位も高く。

「う、わわわ……………」

いきなり上空に放り出されて蓬はそう言っていた。然し、ダイミヨウザザミの昇り上げ攻撃のダメージを受けた様子は無い。

空中に放り出された蓬には目も暮れずにダイミヨウザザミはゾフィーに襲い掛かる。大きな爪がゾフィーを襲う。然し、ゾフィーは盾を使い確実にガードする。盾は、擦る様な嫌な金属音を出しつつも確実に防いでいた。そして、ゾフィーは其の隙を衝いて、再度火砲を二連射する。上手く足に当たったのか、ダイミヨウザザミは倒れこんで足をばたばたし始めた。

「よし！行くぞ！」

そう言ってゾフィーは構えを取る。

「ドフラッヘ Drache カノーネ Kanone アッブ・シーセン Abschießen! (竜撃砲
発射する!)」

そう言い、「竜撃砲」を発射する!

ダイミヨウザザミにエネルギーの奔流が押し寄せる!「竜撃砲」
を喰らって手痛いダメージを追ったダイミヨウザザミは、口からや
や黒い泡を吐きつつ、砂地に潜って行ってしまった。

ダイミヨウザザミが逃げた後になってようやく、蓬は、ゆっくり
と砂地に降り立った。

「ふう……。驚いた……。しかし、何でこんなにゆっくり地面に
降りれたんだろう?」

自分に起きた現象を不思議に思いながら、蓬はそう言っていた。
ゾフィーはダイミヨウザザミが居なくなった事を確認してから蓬に
近づいて、言う。

「大丈夫だったか?蓬。」

蓬は元気な姿を見せつつ返事をする。

「あ、うん。折角忠告してくれたのに御免ね。」

「いや、其れは問題じゃないが…蓬、あの攻撃を喰らったのに何の
ダメージも無いのか?」

ゾフィーは疑問に思いそう聞く。蓬は、

「あ、うん…なんかふわっと身体が浮いちゃって、高々と上がって
焦ったけど、ゆっくり降りてこれたし……。何だったんだろう?」

自分でも良く分からない、そう言っふ風に蓬は答えていた。苦笑しながらゾフィーは、

「そうか…まあ無事で何よりだ。まずは、ダイミヨウザザミを追う事にしよう。ウォルフ、ミウ、行けるか？」

そう言った。ウォルフたちは答えて、

「大丈夫ニヤ、こつちも終わってるニヤ！」
「みう！」

そう言った。ゾフィーたちが其方を見ると、ウォルフの周りに、何かを倒したのであるう、殆ど原形を留めていない「何か」の残骸が残っていた。

（蓬達がダイミヨウザザミとやり合っていた同じ頃、ウォルフ達は）

「さて、久々のお披露目なのニヤ！」

ウォルフはそう言い、右手に持つ「迅雷」を使う。

「今回は30%で行くのニヤ！」

そうウォルフが言うと、「迅雷」に刻まれていた文様が、幾つか煌びやかに光り、「迅雷」が発光し始めた。

ドスゲネポスは、威嚇をした後、ウオルフに襲いかかろうとした！

「行くニヤ！」

ウオルフがそう言う。其処へドスゲネポスは爪を立ててきた、が

……

既に其処には誰も居らず、爪は空を切る。ドスゲネポスは対象を見失い、周囲を見回す。

「僕は此処だニヤ！」

其の声はドスゲネポスの横から聞こえた。其の方向にドスゲネポスは向きを変える。その時、ウオルフの全身から赤い靄の様なものが巻き起こる！

「鬼人化」。双剣使いが使用する能力の一つで、飛竜の風圧を封じ、攻撃力を上げ、猛攻を可能にする、短時間の能力だが、双剣使いの魅せ場とも言える技である。

双剣を構えてウオルフは言う。

「此れでEnde^{エンデ}（終わり）ニヤ！」

そうして、必殺の「乱舞」を放つ！

「乱舞」。「鬼人化」している時に可能な双剣の荒業の一つ。一瞬の内に沢山の攻撃を叩き込む荒業である。

ウオルフの双剣が見えない程に動き、一瞬の間にドスゲネポスは切り刻まれた。ドスゲネポスは悲鳴も上げることが出来ず、文字通り、微塵にされてしまったのである。砂地に残骸と思しき肉と血と些かの鱗と皮が落ちているのみであった。

「ふう…… 久々で、少し派手にやり過ぎたかニヤ？」

ウォルフはそう、謙遜しながら言っていた。ミウは、

「みうゝ！」

そう言いながらウォルフに寄って来る。そして、其の俣ウォルフに抱きつくように覆い被さった。

「おろ？ミウ、そんなにされたら僕が大変だニヤ。」

ウォルフがそう抗議するがミウは、

「みう！みう！」

そう鳴きながら更に覆い被さるのであった。どうやら、ミウもウォルフの戦闘を見て興奮したようであった。そんなミウを見つつ、ウォルフは微笑んでいた。

そんな時、

「そうか…まあ無事で何よりだ。先ずは、ダイミヨウザザミを追う事にしよう。ウォルフ、ミウ、行けるか？」

そう、ゾフィーの声が聞こえて来た。ウォルフたちは答えて、

「大丈夫ニヤ、こっちも終わってるニヤ！」
「みう！」

そう言い、蓬達の前に行くのであった。

（「砂漠」オアシスのある場所、ダイミヨウザザミの休憩地にて）

ダイミヨウザザミは、身体を沢山傷付けられて、休み場で休憩をしていた。餌を少し食べて、其の仮寝始める。それにより回復が早まるからだ。そんな折、蓬達一行がオアシスに到着する。

「あ、居た居た。ペイント忘れていたけれど、やっぱり此処みたいね。」

蓬がそう言う。そう、今回はペイントボールを投げ忘れていたのだ。然し、以前ドスガレオスを倒した経験から、此処では？と思いやってきたのである。

「そうだな、前回の経験が役に立っているな。」

ゾフィーがそう言った。そして更に、

「此処には雑魚が居ないな。ミウには其の辺りに待って貰うとして、一気に止めを指す為に、ウォルフも参加して貰えるか？」

そう言った。ウォルフは答えて、

「わかったニヤ。僕に任せるのニヤ！」

そう言った。そして、ミウを残しておいて三人はダイミヨウザザミの周囲に展開する。ゾフィーは正面、蓬は右後ろ、ウォルフは左

後ろに。

「よし、俺から行く。其れに合わせて二人は切り込んでくれ。」

ゾフィーがそう言う。二人は答えて、

「分かったわ!」

「了解だニヤ!」

そう言った。ゾフィーはガンランスを構えて「竜撃砲」を使用する!

「ドラッヘ Drache カノーネ Kanone アッブ・シーゼン Abschlie?en! (竜撃砲発射する!)」

そう言い、本日二度目の「竜撃砲」が発射された!其処に合わせて、蓬とウォルフが斬りかかる!

「いつけえ!」

「行くニヤ!」

ダイミヨウザザミは折角の休みを邪魔されただけでなく、致命的な一撃を喰らう事になった。そして、一生懸命其の場を脱しようとするが……。

ついにそれ以上動く事は叶わず、ダイミヨウザザミは其の場に静かに横たわるのであった。

そう、無事に狩猟が完了したのである!

「フォルエンデッ 良し、Vollenden! (完了!) 皆、お疲れ様。」

ゾフィーがそう言う。其れに答えて、

「お疲れ様〜。」

「お疲れなのニャ。」

「みう〜。」

皆もそう答えた。笑みがこぼれる。そして、素材を集める為にも各自は解体を始めたのであった。

（数日後、ハンターズギルドにて）

蓬達は無事終わった事を報告しにハンターズギルドにやって来ていた。

「ただいま〜。セティさん、無事にあたし達は狩猟を終わりました。」

そう報告するのだが……。

セティは少し思わしくない顔をしていた。不思議に思い蓬が聞く。

「あの、セティさん如何したんですか？」

蓬が話しかけた事にやっと気づいてセティが答えて、

「あ、御免ね蓬ちゃん。ちょっと、此の間来た三人組のことで問題

が起きてね。」

そう言った。蓬は心配しつつ、

「ナギサちゃん達ですよ？如何したんですか？」

そう言った。セティは答えて言う。

「リオレイア退治に行つて貰ったんだけどね。どうやら同じ場所に亜種まで紛れ込んでたらしくてね。何とか其の場を逃げようとしたらしいんだけど、ナギサちゃんが逃げるときにリオレイアの尻尾に激しくぶつかつたらしくてね……。今、彼女、意識不明なのよ。重体つて訳じゃないんだけど、どうやら打ち所が少し悪かつたみたい。ツバサ君とイナズマ君が交代で看病してるわ。」

蓬は暫く何も言えなかった。そう、こう言う事もあるのだ。とりあえず命に別状は無いと聞いて安心はしたが、それでも意識が戻らないのは不安である。

「あ、あたしもお見舞いに行つて来ます！」

そう言つて二階へ走つていった。其の姿を苦笑しながらセティは見ていた。ゾフィー達も蓬について行く。

二階では、「流れ」のハンターたちが使う部屋が幾らかあり、其の一つに、ツバサ達は泊まっていた。蓬は其の部屋に向かう。

「蓬です。入つても良いかしら？」

蓬は入り口でそう言う。暫く待つと、どうぞ。と聞こえたので蓬はドアを開けて中に入る。

ベットにはナギサが寝ていた。傍で、イナズマは疲れて休んでおり、ツバサが看病をしている処だった。

「セティさんから話は聞きました。ナギサちゃんの具合は如何なんですか？」

不安げに蓬がそう聞く。ツバサは答えて、

「外傷は直ったんだが、意識が戻らないんだ……。グロウさんにも来て貰ったんだが、薬とかで治る以外の分野ではないか、と言われたよ。街じゃないから此処には医者なんて居ないしな。」

少し悔しげにツバサはそう言った。ゾフィーが、

「そうか…我々で出来る事なら手伝うので言ってくれ。」

そう言う。其れに答えて、ツバサが言う。

「イナズマとも話したんだけど、あのリオレイア二頭を倒したいんだ。でも、俺達だけでは荷が重い。手伝って貰えないか？」

其れに答えて蓬が言う。

「其れならあたし達も手伝うよ。ね、ゾフィー。」

「あ、ああ…。然し、ナギサの看病は如何するんだ？」

ゾフィーが最もな意見を言う。それにはウォルフが答えた。

「其れなら僕とミウが付いておくニヤ。戦闘も行きたいけど此処は看病したほうが良さそうだしニヤ。」

其の意見に蓬が、

「ウォルフ君なら安心だね。ツバサ、そう言うことだから手伝うよ。」

そう結論付けた。其れにツバサが、

「有難う。イナズマが、今、疲れて休んでいるからそうだな、明後日にでも行くのは如何だろう？」

そう提案する。ゾフィーが其れに答えて、

「分かった、では俺たちも準備をしましょう。蓬、長居して迷惑掛けてもなんだし準備しに戻ろう。ウォルフ看病のほうは頼む。」

そう言った。ウォルフは答えて、

「任せるのニヤ！」

そう言う。蓬も、

「宜しくね、ウォルフ君。ミウもお留守番御願いね。」

そう言った。其れにミウが答えて、

「みつ。」

そう言う。こうして新たな冒険が始まるうとしているのであった。

ダイミヨウザザミを無事倒した蓬達、然し、他の場所ではモンス
ターたちが蠢いている様なのであった。ナギサの敵討ちとばかりに
燃える二人の少年。其れを手伝う、蓬とゾフィー。蓬の発する謎の
言葉もまだ良くは分かっていない。凄まじい力を発揮した「勇者」
ウォルフ。未来は如何言う道を指し示そうとしているのか？其の答
えは、今は見えてはいない。

地球（テラ）は青かった（後書き）

ナギサ 「……………」

ツバサ 「如何した、ナギサ。」

ナギサ 「百合モードが終わったかと思ったら、本編で意識不明だなんて…。」

イナズマ 「心配するな。仇は取ってやるぜ！」

ナギサ 「まだ死んでないわよ！」

ツバサ 「落ち着けて…。命に別状は無いって言ってたじゃないか、其のうち戻るさ。」

ナギサ 「そうかなあ……………」

ウォルフ 「僕たちが面倒を見てるから大丈夫なのニヤ！」

ミウ 「みう！」

ナギサ 「有難う！ウォルフ、ミウちゃん。」

イナズマ 「あ、いいな、俺にもやって欲しいぜ。」

ツバサ 「お前、そんな風にされたかったのか…。」

イナズマ 「はっ…。（真っ赤に為る）」

（イナズマ逃げ出す！）

作者 「若いつてのは良いねえ……。」

蓬 「作者さん…年寄り地味てますよ…。」

作者 「まあ、もうおばさんだからねえ…しくしく。」

蓬 「ありゃ…。取り敢えず次回予告です。次回「百花繚乱」
お楽しみに！」

作者 「今度は如何やって虐めようかなあ……。」

蓬 「ちょ！其れは止めなさい！」

汝の赴く処にも神龍シャイレオンの加護があらん事を……

百花繚乱（前書き）

ミドリ「初めまして！ミドリです。」

サクラ「よろしゅくに。サクラです。」

ミドリ「で、こちらは如何しろと？」

サクラ「何でも、暴れまくっていいそうやで？」

ミドリ「ほほう、なら、血肉溢れる展開と言う奴やな！」

サクラ「そうやな。だがミドリ気をつけなあかで。」

ミドリ「どうしたんや？」

サクラ「うちの仲を妬^{ねた}んだ、ハンターとか言う奴らが来るんやて。」

ミドリ「ほうほう。なら、うちの愛の合体攻撃で倒すんやな。」

サクラ「そうやな、此れも、愛の力ゆえやで。」

ミドリ「んじゃ、まあ、うちの力見せ付けたるかあ！」

サクラ「そんじゃ、行くかねえ。」

百花繚乱

小説 蓬の旅（モンハンFF）
第十三章 百花繚乱

（あれから二日ほど経った「密林」ベースキャンプにて）

「よし、閃光玉もばっちり、あたしは準備が出来たわ。」

蓬が鞆をポンツと叩きながらそう言った。ゾフィーも確認しながら、

「俺も問題は無いな、閃光玉は俺は、中々使う機会は無いかもしれないが、一応用意しておいた。」

そう言う。ツバサも其れに倣い、

「解毒薬も持ったし……。俺の方も大丈夫だ。イナズマは如何だ？」

そう言う。尋ねられたイナズマは、

「えーっと……。よし、俺も準備は出来たぜ！」

そう答えた。全員が仕度が済んだ事を確認してから、蓬が言う。

「今回は二頭も居るし、同時は危険だから、二手に分かれて探すの

が良いのかしら？」

そう言った。考える為に暫く沈黙が続く。ゾフィーが口を開き、

「そうだな。盾の性能を持つ者が、一名ほどリオハートの方に引き付け役で立ち回って貰って其の間に三人でリオレイアを倒すのが時間的には早いかもしれないな。」

と、そう言った。イナズマが答えて、

「と為ると、俺が、ゾフィーが其の役を担当すれば良いという事かな？」

そう言う。ツバサが、

「そうだな、俺達は見つけたら、すぐ、ペイントボールを投げつけておくよ。」

手元にあるペイントボールを確認しながらそう言った。

「よし、そう言う事で行こうか。万が一、二体同時に為ったら危ないから、その時は、一旦引き下がる位の積もりで行こう。ナギサの為に、戦うのだから其処で、俺達がやられては意味が無いからな。」

ゾフィーが纏める様にそう言った。其の言葉に、全員が頷く。そして四人は、ベースキャンプを後にして、「密林」へと入って行くのであった。

（「密林」飛竜達を探す道中にて）

「イナズマ、其の大剣はティタルニアか。」

ゾフィーは、イナズマが背負っている大剣を目にしてそう言った。
答えてイナズマが、

「ああ、以前、街を襲ってきたクシャルダオラを追い払ったときがあつて、その時に素材を揃えることが出来たんだぜ！」

そう答えた。蓬は、ツバサの双剣を見ながら、

「ツバサ君の双剣は素敵ないデザインね。」

そう言っていた。其れに答えてツバサは、

「ああ、ホーリーセーバーと言う水属性の双剣なんだ。性能も良いんだけど、やっぱり此の綺麗な見た目が気に入ってて愛用してるんだ。」

そう答えていた。そんな事を会話している内に、分かれ道に来る。

「よし、此処で分かれよう。ツバサ達はあちら側を頼む。俺と蓬はこつちを探すから。」

ゾフィーはそう言う。其れに答えてツバサ達が、

「分かった。」

「そっちは任せたぜ！」

そう言っただけで走っていく。其の姿を見つつ、蓬が、

「じゃあ、あたし達も頑張りますよ。」

そう言った。其れにゾフィーは、

「ああ、気を引き締めて掛かる。」

そう答えて走り始めるのであった。

（四人が分かれて搜索を開始し、暫く経った時に）

蓬とゾフィーは、「密林」を捜し歩いていた。そう、ナギサたちを苦しめたリオレイア達を。大きな身体だが、「密林」は文字通り木々も生い茂っている為に、意外と視界が悪く、見つける時は中々難しいのであった。そうやって、二人が捜し歩いていた時、

「ん？あれって……。」

蓬が「何か」を見つけてそう声を上げる。其の先には、緑や茶色の色が数多く渦巻く「密林」の中で鮮やかに彩っている桜色の物体

があった。そう、リオレイア亜種、リオハートである。

「あれは、リオレイアの亜種、別名リオハートとも呼ばれている奴だな。俺達の方で見つかってある意味良かったのかもしれない。こいつの体は結構硬いから、武器の当て方によっては弾かれるからな。」

ゾフィーは、対象を見ながらそう言った。蓬が答えて、

「なら、ゾフィー、こっちは御願い。あたしツバサ君達の方へ行ってくるね。」

そう答えた。ゾフィーは、

「分かった。だが、蓬。」

「ん？」

「気を付けてくれ。今までと違い、こいつ等は些か手強いからな。」

「うん。ミウを見つけた時に、一度戦った事があって、其の時に痛い思いをしてるから少しは分かってる。有難う、ゾフィー。」

そう言い、蓬も答えた。二人は頷きつつ、別れていった。

ゾフィーはペイントボールを手に取り、リオハートの視界に入る。其れを見たりオハートは、威嚇の声を上げる。其れに併せてペイントボールを投げつけた。そしてゾフィーは言う。

「さあ、暫く付き合ってもらおうか。」

そうして、一対一の戦いが始まるのであった。

（一方、ツバサ達は）

「居ないな…。」

周囲を見つつツバサがそう言っていた。イナズマは其れに答えるように、

「リオハートは兎も角、リオレイアは体色が緑だし、気を付けないと見落としかねないぜ。」

そう言う。ツバサは其れに答え、

「ああ、分かってる。寝込んでいるナギサの為に何としても倒すぞ。」

そう言った。そんな時、木々の奥から唸る声が聞こえて来た。二人は顔を合わせ、用心しながら其の声を方へ近づく。

木々の向こうには、飛竜がゆったり出来るほどの空間があり、其処で、リオレイアがゆっくりと休憩をしているように見えた。

「リオレイアだな。まず俺が切りかかるからツバサはその直後にペイントボールを投げつけてくれ。」

イナズマがそう言う。まず自分が切りかかって囷に為ろう、と言うのだ。其れに答えてツバサが言う。

「分かった、無理だけはするなよ。」

「はっ、お互い様だぜ！」

イナズマはそう答えてリオレイアに向かって走り出す。ツバサも手にペイントボールを持ち出しながら後を追った。

リオレイアは、木々がざわめいて状況が変化した事に気づいた。音の方に振り向くと二人のハンターが今にも切りかかるうとしているのに気づく。其処で、彼女は唸り声を上げて威嚇し始めた。

「初めましてだぜ！」

そう言ってイナズマが切りかかる。大剣ティタルニアは、リオレイアの翼の一端を切り裂いた。其れと同時に、バチツつとどす黒い閃光が走る。龍属性の追加ダメージが加わった事を示していた。

リオレイアは、自分に切りかかった邪魔者を追い払うべく、身体を捻り始め、巨大な尻尾をぶつけるが如く、イナズマを襲う。然し、イナズマは、ティタルニアを盾の様に構えて、其の攻撃を受けた。鈍い音が響き、尻尾は防がれ其の俛回つていく。そんな時、

「よし、此れで俺も行くぞ。」

ツバサがそう言いながらリオレイアにペイントボールを投げつけた。見事にそれはリオレイアに当たり、周囲に臭いが広がる。ツバサは其れを確認しつつ双剣ホーリーセーバーを取り出し、構えた。そして、流れ去つていく尻尾に一撃を加える。

リオレイアは、周囲に纏わりつく邪魔なハンターを追い払う為、翼を羽ばたかせて一時飛翔し始めた。少し下がった後で着地し、構えを取る。

ブレス
龍の吐息だ。

イナズマは、リオレイアの方にティタルニアを構える。ツバサは龍の吐息ブレスの発射軸線上から回避する為に数回側転した。

フレス
龍の吐息が襲う！

イナズマのティタルニアにそれは当たった。高温が来るが、ティタルニアが其れを防ぎ、イナズマは手に些かの振動が来たが其れを防ぐことが出来た。

「ちつ。やつてくれるぜ。」

「よし、今度は俺が先に斬り込む。」

二人はそう言う。イナズマはティタルニアを構え直す。ツバサはリオレイアに近づき、ホーリーセイバーを其の頭に衝き立てた。そして、側転をしながら直ぐ其の場を離れる。長居すると一方的に狙われかねないからだ。

頭に手痛い攻撃を喰らったリオレイアは、其の攻撃をしたハンターに対象を移した。それによりイナズマはフリーとなる。ツバサは、自分が狙われている事を理解し、回避に専念する。其れにより、リオレイアはツバサを付け狙う事になり、無防備に尻尾がイナズマの前に来る事になった。

「よっしゃ、ナイスツバサ、だぜ！」

そう言つて、リオレイアの尻尾にティタルニアを叩きつけた。手に強い衝撃が来る。リオレイアの尻尾は手痛いダメージを負ってしまった。

其の痛みに、リオレイアは咆哮を上げる。ツバサ達は其の咆哮で、一旦行動が阻害されるが、リオレイアは、手痛い攻撃をしたイナズマの方に向きを変えていたので、二人は何とか其の場を切り抜けることが出来た。もし、其の俣ツバサが攻撃されていたら、手痛い傷を負っていたかもしれない。

リオレイアはイナズマの方に向き頭をイナズマに向かって向け、其の俣食いつこうとした。イナズマはティタルニアを盾のように構

え、其の攻撃を防ぐ。鈍い音が響き渡り、其の攻撃は防がれた。その時、

「隙だらけだ！行くぞ！」

ツバサがそう言い、リオレイアの尻尾の前で「鬼人化」する！そして、其の尻尾に「乱舞」を行った。ホーリーセーバーが踊る！リオレイアの尻尾はみるみる切り裂かれ、最後には、途中から千切れ落ちた。

リオレイアは尻尾が切れた事によりバランスを失った事と、其の痛みで、地面に倒れ、暴れる。其の頭にイナズマはティタルニアを叩き付けた。

「どうだ！」

掛け声と共にティタルニアが振り下ろされる。それはリオレイアの頭に見事に当たり血が迸る。リオレイアは苦しみつつも、急いで起き上がる。そして、再び咆哮を上げた。

至近で咆哮を喰らってしまい、二人は耳を塞ぐ。其処へ…。

リオレイアの噛み付き攻撃がイナズマを襲う！

「しまっ……ぐああああ！」

イナズマは、胴体をつぷりと噛まれてしまった！其処へ……。

「此処に居たのね！イナズマ君を放しなさい！」

蓬が其処に駆けつけて閃光玉を投げつけた！

！！

閃光によりリオレイアは目が眩み、銜くわえていたイナズマを放り出

して暴れ始める。イナズマは其の俤地面に放り出されてしまう。其処へ蓬が駆けつけた。

「大丈夫？イナズマ君。此れ回復薬、飲めるかな？」

蓬はそう言つて回復薬を手渡す。イナズマは其れを受け取りながら、

「つつ……済まない、助かるぜ。油断してた。」

そう答えてから回復薬を飲み始めた。ツバサは、暴れるリオレイアの足元に立ち「乱舞」を叩き込む。

「いつけえ！」

ホーリーセーバーが踊る！其の攻撃によりリオレイアの片足はズたずたに斬られるのであった。長居は無用と「鬼人化」を解いて其の場を離脱する。

閃光で目が眩んでいる処に更に足に手痛い攻撃をリオレイアは喰らってしまった。其処へ……。

「今度はあたしよ！」

蓬がそう言いつつ太刀で斬りかかる！衝き出して、斬り下がる。「型」をきちんと行動する。

リオレイアは、ダメージが溜まっているとは言えまだまだ元気であった。翼を羽ばたかせて再びハンターたちと距離を取り始めた。

「龍^{プレス}の吐息をするつもりね。ツバサ君、イナズマ君を避難させて。少しの間、あたしが引き受けるわ。」

蓬はそう言つて、リオレイアの方へ走り出す。ツバサは答えて、

「分かった。無理はするなよ！」

そう言つてからイナズマを抱えながら移動する。蓬はリオレイアが着地しそうなタイミングで太刀を振るう！

蓬の太刀はリオレイアの足に当たる。その後の突き出しは胴体へ。其れにより、痛みが増えたりリオレイアは、三度咆哮を出す！

至近に居た蓬は其れを喰らつてしまふ。其の直後……。

リオレイアは突如、痛みで苦しい為なのか、蓬に向かって突進し始めた！

「ちょ！…きゃああああ！」

リオレイアの突進に諸に巻き込まれ蓬は悲鳴を上げる！其の俛、リオレイアは数十メートルは進み、地面に滑り込んだ。蓬は其の俛巻き込まれてしまった。

「う……あ……。」

蓬は、呻きを上げるが身体が思うように動かず、如何しようも出来ない状況と為った！

「不味い！イナズマ、蓬さんを助けに行ってくる。すまないが此処で休んでくれ。」

ツバサはそう言つて駆け出した。

リオレイアは起き上がり、蓬に顔を向ける。

事態は混沌としてくるのであった。

(同じ頃、リオハートと対戦しているゾフィーは)

「確か、こいつは頭以外はほぼ此の武器は弾かれるはず。火砲メイ
ンで行くしかないな。」

ゾフィーはそう言いながら構える。リオハートは、咆哮を上げる！
ゾフィーは盾をしっかりと構え、其れを防ぐ。リオハートは其の
俛、ゾフィーに向かって突進をして来た。

強い衝撃がゾフィーを襲う。然し、盾をしっかりと構えたゾフィ
ーは、がっしりと其れを受け流し、リオハートは其の俛、ダメージ
を受け流されつつ、ゾフィーの後方へと滑り込んだ。そして、ゆっ
くりと起き上がる。ゾフィーの方に向き直ると龍の吐息ブレスを発射した！
ゾフィーは、しっかりと盾を構えて其れを防ぐ。高温が周囲に展
開するが、盾によりしっかりと防ぐ事が出来た。

「一人だと中々攻撃は難しいな……。」

ゾフィーは苦笑しつつそう言っていた。先制攻撃権イニシアティブが取りにくい
ガンランス故にソロで戦うのはやや不利であった。ゾフィーは其れ
を言っていたのである。

此方でも、苦戦が続いていた。

（ハンターズギルドの二階、ナギサが寝ている部屋で）

「みう?!」

ミウが突然叫びを上げる。驚きつつウルフが、

「如何したのニヤ?ミウ。」

そう言う。ミウは、更に、

「みう!みう!みう~~~~!」

突如、叫びを上げ始めた。何かあるとはウルフも悟ったが、それ以上は直ぐは分からない為、

「いきなり言われても分からないのニヤ。」

そう言うが、暫く考えてから気づく。

「まさか、蓬に何かあったのニヤ?!」

ウルフがそう言う。ミウは、

「みう!」

そう答えた。ウルフは、其の場で、少し悔しいと言う顔をしながら、

「そうか……蓬、無事で居てくれニヤ……。」

自分が、直ぐは行けない事を悔しがる様にそう言っていた。ミウは其の姿を見つつ、

「みう……。」

そう鳴いていた。

二人は、ナギサが寝ている傍で、暫くそうして立ち尽くしていた。

ピンチに陥った蓬。大怪我を負い、一時戦闘離脱のイナズマ。蓬を助ける為に奮闘するツバサ。一人、リオハートを止める為に苦戦するゾフィー。此の戦いの結末は？それはもう少し先の未来の話である。

百花繚乱（後書き）

ミドリ「あいたたた……。」

サクラ「どないしたんや？ミドリ。」

ミドリ「自慢の尻尾が……。」

サクラ「ありや、ぶち切れとるやないか……。まあ、唾つけてほつきや其のうちまた生えてくるて。」

ミドリ「そっかあ……。って、トカゲかいな！うちは。」

サクラ「冗談やて。しかし、ミドリに手痛い傷を負わすとは、ハントーとやらも侮れんやな。」

ミドリ「次回は合体攻撃の出番やな。」

サクラ「そうや！うちの愛の力を見せるときや！」

ミドリ「では次回予告やで。次回「エアヴァッヘンErwachen」目覚めるや。楽しみにするんやで。」

サクラ「何が目覚めるんやろな？」

ミドリ「うちに分かるわけないやろ？」

サクラ「まあ、そうやな。ではまた来週。」

ミドリ「元気にしたってや〜。」

汝^{なんじ}の赴^ゆく処^{ところ}にも神龍^{シャイレオン}の加護^{かご}があらん事を……

Erwachen（エアヴァッヘン）「目覚める」（前書き）

ミドリ「どうも。前回より登場のミドリです。」

サクラ「同じく前回より登場のサクラです。」

ミドリ「漸く合体攻撃が出来そうだな、姉さん。」

サクラ「そうだな。うちの愛の力を示せるわな。」

ミドリ「うんうん。此れも、姉さんの力あつての事や。」

サクラ「いや、お前が居らんかったら無理なんやで？」

ミドリ「姉さん……。」

サクラ「ミドリ……。」

ミドリ「よし！此処は、うちも張り切るでえ！」

サクラ「其の調子や！うちの愛の力で切り抜けるんや！」

ミドリ「ほな、いくでえ！」

サクラ「ほいさあー！」

Erwachen（エアヴァッヘン）「目覚める」

小説 蓬よもぎの旅（モンハンFF）
第十四章 Erwachen「目覚める」
エアヴァッヘン

（「密林」ゾフィーとリオハートが戦闘を繰り広げている場所で）

二人は対峙していた。お互いに。如何に隙を見つけるかを。
リオハートが動く。頭を擡もたげて勢い良くゾフィーにぶつけて来る。

「くっ…。」

ゾフィーは盾をしっかりと構え、筋肉を巧みに使う。強い金属音が響き、手から身体へと振動が襲う。然し、其の類まれな体捌きにより、リオハートの力は分散され、ゾフィーは其の攻撃を耐える。

「今度は此方からだ！」

そう言い、ゾフィーは火砲を二連射する。其れはリオハートの頭と翼に当たる。彼女は、身体を捻り始め、尻尾を今度は当てに来る。ゾフィーはすぐさま盾を構えて此れを防ぐ。鈍い金属音が響くが、やはりゾフィーは此れも耐える。其処へ、

「もう一度だ！」

そう言って火砲を二連射する。胴体へ、手痛いダメージが来たり

オハートは、翼を羽ばたかせて、ゾフィーから距離を取る。暫く唸った後、翼を大きく羽ばたかせて其の俤飛び上がった。其の様子を暫く、呆気無くゾフィーは見ていた。が、

「いかん。呆けている場合ではないな。恐らく、リオレイアの方に行くはず。急いで蓬達に合流せねば。」

ゾフィーはそう言いながら、火砲の砲弾を充填し、武器を調べた後に、急いで駆け出した。向こうは空を飛んでいる。急がなければ其れだけ、皆が苦戦し兼ねなかった。

「無事で居てくれ、蓬、皆。」

そう言いながらゾフィーは走っていた。

（リオレイアと死闘中の蓬達は）

「う……。」

蓬は、必死で動こうとしていたが身体を強く打ちすぎたのか、中々動けないでいた。其処へ、リオレイアの頭が近づいてくる。リオレイアは口を開け、蓬を噛み付き始めた！

「あ……ああああ！」

胴体をつぷりと噛まれてしまい蓬は叫びを上げる。其処へツバサがホーリーセーバーを構えながら切り込んでくる！

「蓬さんを放せ！」

そう叫びながらツバサは、リオレイアの先程傷付けた足へ斬り込んだ！

リオレイアは其れにより悲鳴をあげ、其の拍子に蓬は放り出される。

「う…がつ……。」

蓬は放り出され、地面に叩きつけられた。其の俣地面を暫く転がる。

リオレイアは片足を酷く痛めたため、其の俣バランスを崩して倒れ、ジタバタともがく。ツバサは、武器を仕舞いながら蓬の傍に駆け込んだ。

「蓬さ…くつ…。」

声を掛けかけてツバサは止めた。先に回復薬を出さねば。そう思い、急いで鞆を探る。そして、

「痛いかもしれないけれど、我慢してくれ。」

そう言いながら、回復薬を蓬の身体に付いた傷口に注ぐ。

「いつ！ああああ！」

痛みに蓬が叫びを上げる。ツバサは一通り回復薬を注ぐと、閃光

玉を取り出す。

ツバサ達の後ろではリオレイアがやっとの事で起き上がり唸りを上げていた。其処へ、

「暫く黙っててくれ！」

ツバサがそう言いつつ閃光玉を放り投げる。

！！

閃光玉により、リオレイアは再び閃光を喰らい盲目となる。其の場で暴れている間に、ツバサは再び回復薬を取り出した。

「辛いのは分かるが、我慢してくれ。急がないと、全員が危ないんだ！」

そう言いながら、蓬の傷口に回復薬を注ぐ。

「ぐっ……う……ん……ありが……とう……」

蓬は、何とか、そう返事をしていた。其れを見てツバサは微笑む。そして、再び武器を取り、

「暫くは此のツバサ・ブルーソウルが相手だ！行くぞ！」

そう言つて、リオレイアに駆け込んでいく！

リオレイアは、漸く盲目状態から脱した。其処へ、ツバサが駆け込んでくるのが見える。一度威嚇した後、頭を使い襲い掛かろうとした。

ツバサは其れを側転でかわして、ホーリーセーバーをリオレイアの頭に突き立てる。そして直ぐに側転をして離脱する。

リオレイアは頭に再び強い痛みを受けて咆哮する。ツバサは其れ

により動きを止められてしまう！

「しまっ……！」

其処へ、リオレイアの頭がツバサを襲いかかろうとした！その時、

「おっと、そうはさせないぜ！」

ツバサとリオレイアの間の一つの大きな影が入り込んだ。鈍い音が響き渡る。ティタルニアでリオレイアの頭を見事に防いだイナズマの姿が其処にはあった。

「イナズマ！助かった。」

ツバサがそう言う。イナズマは、微笑みつつ、

「汚名は返上しなくてはな！行くぜ！」

そう言つて、ティタルニアを横に薙ぐ！其れは其の俤リオレイアの頭部を直撃する。リオレイアは其れによりよろめいた。

「よし、今度は俺だ！」

ツバサがそう言つてリオレイアの足元に走りこみ「鬼人化」する。そして「乱舞」へ。先程とは逆の足を、ツバサは乱舞で切り刻んだ。すぐさま離脱する。

リオレイアは手痛い攻撃に、翼を羽ばたかせて一旦後方に下がった。そんな時、もう一つの羽ばたく音と鳴き声が聞こえてくる。

「な……。リオハートまで来たのか。足止めが上手く行かなかった

んだな。」

ツバサがそう言う。そう言う間にも、リオ姉妹と一緒に為りお互いを気遣うような仕草が見て取れた。

イナズマがツバサの元に寄って言う。

「これは逃げた方がいいのかな？」

ツバサは其れに答え、

「そうしたいのは山々だが、蓬さんが、まだ……。」

そう言いながら蓬の方を見た。まだ蓬は倒れたままだ。イナズマは、舌打ちを一つしてから、

「ちっ、俺が暫く引き受けるから、ツバサは蓬さんを少し離れた所に運んでくれ！」

そう言いながら、駆け出す。ツバサは、

「お、おい！……くっ、無理しやがって……。」

そう言って蓬の方に走り出す。イナズマは鞆から閃光玉を出して、

「リオハート！今度はやってやるぜ！」

そう言って閃光玉を投げる。

！！

周囲に閃光が走る！

リオレイアとリオハートは、其の閃光を食らって暫く暴れ始めた。

其の間にイナズマはリオハートに斬り込む！

ツバサは、蓬の元に駆け寄り、蓬を抱え上げて、

「済まない、少しだけ離れた場所に行ってもらおう。」

そう言いながら蓬を運び始めた。蓬は、

「う……めんな……さい……。」

そう言っていた。ツバサはやや苦笑しながら、

「気にしないでくれ、誰でも失敗はあるから。」

そう言って、蓬を多少戦場から離れた場所で降ろす。そして、

「其処で休んでてくれ。行ってくる！」

ツバサはそう言っただけでイナズマの元に駆け出した。

イナズマの方は、閃光の効果が終わり、リオ姉妹の攻撃に必死で対応していた。二頭から攻撃が来るのだ、攻撃する余裕など無い。

盾のようにしっかりとティタルニアを使い防ぐ。しかし、防戦一方に為っていた。

「くそお！意気がつてみたものの此の俣じゃやばいぜ！」

イナズマはそう言っていた。其処へ、

「イナズマ！待たせたな。」

そう言っただけで、リオハートの足元にツバサが斬り込んだ。其れによ

り、リオ姉妹の連携が崩れる。

「ナイスだぜ！ツバサ。」

イナズマはそう答えて、武器を構え直す。そして、リオレイアの方へ向かう。然し……

リオレイアが咆哮を上げる！其れにより、二人は硬直してしまう、其処へ…

リオハートの長い尻尾が二人を襲う！

「しまっ！」

「やばっ！」

二人はそう叫びを上げるが、尻尾に纏めて叩き飛ばされてしまう！其処へ漸く、ゾフィーが到着する。

「やっと追いついたか…。くっ、此処は閃光玉で封じるしかないな。」

そう言つて鞆から閃光玉を出す。リオ姉妹は吹き飛ばしたツバサ達に近づこうとしていた。ゾフィーは急いで駆け込みながら、声を張り上げて閃光玉を投げつける。

「させん！」

！！

戦場は再び閃光に覆われた。リオ姉妹は其れを喰らい又其の場で暴れることに為る。

「大丈夫か？二人とも。」

ゾフィーがそう言う。二人は、鞆から回復薬を取り出しつつ、

「ああ、助かった。」

「流石だぜ、有難うゾフィー。」

そう言った。ゾフィーは、其れを見た後で、蓬が居ない事に気づく。

「蓬は？」

そう聞く。其れに答えてツバサが、

「蓬さんはあそこ。今休んでる。ちょっと大怪我をしたから。」

そう言って蓬がいる方を指差した。ゾフィーは安堵しつつ、

「そうか、なら今の内に、出来うる限りダメージを与えるか。」

そう答えて、ガンランスを構えた。そして、リオハートの足元に近づいて、

「ドラッヘ Drache カノネ Kanone アッブ・シーセン Abschließen! (竜撃砲発射する!)」

「竜撃砲」を発射した! エネルギーの奔流がリオハートを襲う! リオハートは手痛いダメージを食らったが、まだまだ元気である、盲目が復帰した事もあり、ゾフィーに尻尾をぶつけて来る。ゾフィーは其れを盾で防いで火砲を撃つ。

リオレイアには、イナズマが斬りかかった。リオレイアは、蓄積

したダメージ故に、些か怒り気味でイナズマを襲う。ティタルニアを盾にして防ぐが重い衝撃が剣を通じて来るのであった。

「つと。こりゃ、だいぶ怒っているな。ダメージが溜まってるって事か。」

イナズマはそう言っていた。ツバサは、ゾフィーを援護すべくリオハートの後方に回り込んだ。そして、尻尾に斬りかかるが、只斬りかかるだけだと、其の硬い鱗や甲殻の為に、弾かれてしまった。

「ちつ、流石亜種だな。「鬼人化」しないと流石に傷は加えにくい。」

ツバサはそう言った。そんな時、

リオハートは、足を少し下げる動作をする。其れを見てゾフィーが叫ぶ！

「いかん！ツバサ、離れる！」

其れを聞いて、ツバサは、急いで側転をしてその場を逃げる。ゾフィーはしっかりと盾を構える。其のゾフィーに向けて、巨大な尻尾が、横からではなく、リオハートが空中で翼を巧みに使いながら上下に回転しリオハートの真下から襲い掛かってきた！

凄まじい衝撃が盾に響く！然し、ゾフィーは其れを何とか堪える。リオレイア系の飛竜が行うサマーソルトという攻撃だった。ダメージが最も大きな攻撃で其れだけでも驚異的なのに尻尾にある毒針から猛毒まで入られると言う、絶句すべき攻撃であった。

空中から着地しようとするリオハートに対してゾフィーは、踏み込みながら切り込み頭部を狙う。ツバサは「鬼人化」を行い、風圧を無効化しながら尻尾が降りるタイミングで「乱舞」を行う！

イナズマは、リオレイアが行う三連続の龍の吐息ブレスを防いでいる処だった。ずっしりと手に衝撃が来るがティタルニアと自分の身体は何とか防ぐ事が出来た。

「ふい」。こりや、もう一息かな？」

暴れつつある、リオレイアを見つつイナズマはそう言っていた。リオハートの方は、手痛い攻撃を喰らった事もあり、咆哮を上げる！ゾフィーは盾により防げるが、ツバサは、硬直してしまう。其処へ、今攻撃した尻尾が襲う！

「ぐっ…またか…」

吹き飛ばされつつ、ツバサはそう言った。其の尻尾はゾフィーが構える盾に当たる。ゾフィーは通過した事を確認した後、再び切り込んで火炮を当てる。ツバサは、飛ばされたが体勢を立て直して、鞆から回復薬を取り出し、其れを飲んだ。

イナズマの方は、龍ブレスの吐息が終わったリオレイアがイナズマに向かって突進を始めた。イナズマはティタルニアを盾にして其れを防ぐ。重量物が突進してくる為、受け流すようにして其れをかわす。

「つつと。危ないぜ。」

イナズマはそう言う。そして武器を仕舞いながらリオレイアの方へ走り始めた。

リオハートは、ゾフィーを攻撃していた。ゾフィーは盾でしっかりと防ぐ。其の隙を付いてツバサは足元に入り「鬼人化」をして再び「乱舞」をした！

リオハートは再び身体を捻り始め尻尾を当ててくる。ツバサはそれを側転をしながら回避し、ゾフィーは盾でかわす。

イナズマは、起き上がろうとして振り向いたリオレイアに、走りこみながらティタルニアを叩きつけた！すると…

痛みに震え上がったのか、リオレイアは突如突進を始めた！しかも不味い事に其のコースには…

「げ！まつ……があ！……」

イナズマは、諸に突進を喰らってしまう。そして其の俤リオレイアはリオハートの居る場所へと突っ込む！

「何?!しまつ……!」

「くそっ!かわせられん!」

ツバサやゾフィー迄もが巻き込まれる。三人はリオレイアの突進に巻き込まれ、地面に強^{したた}かに打ち付けられてしまった。

「……くっ……こんな事では……」

「……ミスったぜ……」

「……済まない……」

三人は起き上がろうとするが、中々出来ない。其処へ、リオレイアとリオハートが、やってこようとしていた。

(ハンターズギルドの二階、ナギサが寝ている部屋で)

「う……ん……」

ナギサは、漸く目を覚ました。其の姿を見てウォルフとミウが言う。

「おお、漸く目が覚めたのニヤ。」
「みう！」

ナギサは身体を起こして周囲を見つつ、言う。

「えっと…？あたしは確か「密林」で……。」

そうやって自分の出来事を回顧していた。其れに答えるようにウォルフが言う。

「二頭のリオレイアから逃げる時に、尻尾攻撃を喰らって、頭を強かに打ってしまったので今まで意識が無かったのニヤ。」

そう言われて、暫く呆けていたがナギサは答えて、

「そうだったのね…処で皆は？」

そう聞く。ウォルフは答えて言う。

「今は其のリオレイア達の退治ニヤ。皆で頑張っていると思つたのニヤ。」

「そっか、皆に迷惑を掛けちゃったね。」

ナギサはそう言う。ミウが、

「みう！」

そう鳴く。ウォルフが、

「皆はそうは思わないニヤ。大事な仲間ではないのかニヤ？で、あれば、元気な姿を見せるのが一番の迷惑でない事だと思ふのニヤ。」

そう言った。其処には笑みがこぼれていた。

（「密林」死闘の場所で。蓬の「中」で）

蓬は気を失っていた。痛み故でもあるが、安心してしまった事もあるのかも知れない。兎も角、現状が如何言う状況かは知りようが無かった。

「あれ？此処は？」

蓬は何も無い、真っ白な空間にいた。地面さえ理解できない。そんな場所に居た。しかも良く見れば自分は裸である。

「あれ？何で？さっき迄防具も着てたし、あれ？太刀も無い？鞆は？あれ？如何言う事、此れは……。」

状況が理解出来ずにそう言っていた。

そんな折、蓬の目の前に、一つの物体が現れ始める。其れは身体
の形に形取り始め、最後には蓬そっくりの姿に為った。

「あ……貴女は誰？」

蓬はそう言う。「其れ」は答えて言う。

「あたしは「蓬」。しかし、貴女ではない。」

言葉の意味が理解出来ずに蓬は更に聞く。

「如何言う事？あたしなのにあたしじゃないって……意味が分からないわよ！」

最後にはやや声を荒げる様に言っていた。「其れ」は答えて言う。

「我等は一つであり、一つでないもの。故に、我は御前であり、又御前ではないのだ。」

自分には理解出来ない事を言われ、蓬は混乱していた。

「あたしなのにあたしじゃないって……訳分かんないよ！じゃあ、あたし達」は何？！」

蓬は理解しようとしてそう聞く。「其れ」は答えて言う。

「我名は「シャイレオン」。「力」であり「思い」であり「心」であるもの。具現すべき全ての力。かつて人は神龍と呼ぶもの。」

蓬は呆気にと取られていた。自分と共にいる者は、類稀な者であり、しかも、自分自身も其の一員というのだ。

「何よ其れ……あたしは蓬よ！其れがあたしの名前の筈……あたしの……あたしは……あたしは何？」

蓬は頭を抱えた。自分は何者なのか？今まで考えていなかった事がいきなり頭によぎり始める。

「あたしは……ああああ！なんなのぉ！訳が分からない！誰か……ゾフィー！助けて！」

蓬は叫んでいた。苦悩し、思い描く者に助けを求めながら……しかし、今はまだ其の助けは来なかった。

「暫く、其の「身体」を借りる。御前を愛する者を助けるが故に。」

其れは、そう言つて、蓬の前から姿を消した。

「あたしは、何なの？……。」

蓬は蹲りながらそう言っていた。其処には彼女以外何も無く、彼女の泣き声のみが響いていた。

（「密林」死闘の現場にて）

リオ姉妹は、厄介なハンターが、纏めて追ひ払えたので、其の処分しようと、首を擡もたげているところであつた。此れで漸く、痛い

思いをしたハンターたちを処分できる。そう思ったその時……

「密林」全体が、激しい振動と共に閃光に包まれる！

異常な事態に流石のリオ姉妹も驚く、また、閃光により一時的に眼が見えなくなった。

漸く眼が戻った時、目の前に一人の女性が其処には立っていた。裸のように見える。然し全身から白く輝く燐光が発せられているのが分かった。

驚異的な物を見たかの様にリオ姉妹は戦慄きを上げる。その声は、威嚇したりするものではなく、恐怖に怯える声であった。

「な、何が……」

そう言いつつ、ゾフィーは「其れ」を見た。

「蓬？！」

ゾフィーはそう声を上げる。そう、蓬が其処に立っているのだ。裸で、右手には太刀を持つて。しかも鞘は見当たらない。彼女の周囲には輝くばかりの白い光が燐光のように纏っていた。

「我名はシャイレオン。此の場は我が介入する。」

蓬の姿をした「其れ」はそう言った。そして、

「リュストウング R?stung(武装)。」

そう言う。すると、「其れ」の周りは輝きを増していった！暫くすると其れは収まり、「其れ」は白く輝く水着の様な「鎧」を纏って現れていた。

「暫^{しば}し、相手をしてやろう。来い。」

太刀を、片手で構えて「其れ」はリオ姉妹にそう言った。リオ姉妹はお互いに咆哮を上げて威嚇する。然し、其の声に何の効果も無い様に「其れ」は立っていた。

咆哮に耳を塞ぎながらもゾフィーは其の様子を見つつ、

「確かに蓬の筈……如何言う事だ此れは？」

そう言つて、事態を見ていた……。

蓬が出会つたシャイレオンという存在。そして、実際にゾフィーの前に立つ蓬の姿をした「シャイレオン」。一体如何言う事なのか？そして、此の未来は如何動くのか？また、蓬は如何為るのか？其の答えは、未来に語られるであらう。

Erwachen(エアヴァッヘン)「目覚める」(後書き)

蓬 「あたしは誰？」

ゾフィー 「如何した？お前は、蓬だぞ？」

蓬 「本当に？」

ゾフィー 「如何したんだ？いつもは俺を追いつけ回す位なのに。」

蓬 「あたし、何なの？分かんなく為っちゃったよ…。」

ゾフィー 「おい、蓬？！何時ものあの元気は如何した？こう言っちゃ何だが俺は御前に追いかけられたのは嫌じゃないんだぞ？」

蓬 「え？」

ゾフィー 「いや、だから…。お前が大事なんだ！」

蓬 「え?!」

ゾフィー 「分かってくれ！如何したんだ蓬?!以前のお前には戻れないのか？」

蓬 「あたしは一体…何なの？」

ゾフィー 「くそお！此の仄では納得出来ないぞお！」

作者^{ニヒ} 「青春してるねえ…。あ、次回予告。次回は「^{エルル・ケ}Erlik?」

n i g (魔王) ニーター・ラッセン N i e d e r l a s s e n (降臨) 「に為るわ。つ
て、物騒な題ね、此れ。まあ、お楽しみに。」

蓬 「あたしは……何がしたいのかしら……。」「

なんじ 汝の赴く処にも神龍シャイレオンの加護があらん事を……

蓬 「此处は……。」

○○ 「御前が安らかに為れる場所さ。」

蓬 「貴方は誰？」

○○ 「私が何者か等は如何でもいい事だ。問題は御前の心にある。」

蓬 「あたしの心？」

○○ 「そう、私の望む心になつて貰わねばな。」

蓬 「貴方は……、何を考えているの?!」

○○ 「私は、全てが「混沌」^{カオス}に還ればいいと思っている者さ。」

蓬 「其処は、苦しみは無いの？」

○○ 「無いぞ。」

蓬 「悲しみは無いの？」

○○ 「無いぞ。だから、蓬、お前も来るがいい。」

蓬 「う、うん……。」

ゾフィー「待て！蓬！俺を置いて行くのか？！」

蓬「ゾフィー？！」

ゾフィー「御前の「思い」はそんなものなのか？」

蓬「あたし、あたしは一体……。」

作者「前書きっぽくないですが、本編をどうぞ。」

Erlik?ning Niederlassen「魔王降臨」

小説 蓬の旅よもぎ(モンハンFF)
第十五章 Erlik?ning Niederlassen「魔王降臨」
エルル・ケーニヒ ニーダー・ラッセン

(「密林」リオ姉妹と神龍シャイレオンが対峙している場所にて)

神龍シャイレオンは太刀を片手に持って引く様に構え刃先をリオ姉妹に向け、
左手は、手を開いた形でリオ姉妹に向けていた。

「さあ、来るが良い。」

神龍シャイレオンはそう言う。リオ姉妹は、其の声に挑発されたかのように龍の
吐息レスを神龍に吐いた！

「Schild(盾)。」
シルト

神龍シャイレオンがそう言うと、左手の目の前に光の光輪が発生した！龍の吐
息スは其れに吸い込まれる様に当たっていく。そして、音も無く其処
に吸い込まれていく。
事態が理解出来ず、リオ姉妹は唸り声を上げつつ其の場で動けな
いで居た。ゾフィーも、

「今の言葉は……。」

そう言いつつ、神龍達を呆然と見ていた。
シャイレオン

神龍は、再び声を上げる。

「ヴァツフェ Waff e（武器）。」

シャイレオン 神龍がそう言つと、持っていた太刀が眩いばかりに輝き始めた！
リオ姉妹を含め其処に居た一同は目が眩む！

其の光が止むと、ゴトリと何か金属か何かが落ちる音がする。シャイ 神龍の足元にボロボロに為った鉄刀「神楽」が落ちていた。シャイレオン 神龍の右手には、白く光り輝く直刀の太刀があつた。そして、構えつつ言う、

「フリーレン Frieren（凍る）。」

太刀の先から光輪が起こり、其処から、膨大な冷気の塊が発生する！其の冷気は其の俤り姉妹に直撃し二人の竜は凍り付いてしまふ！そして…、

「ブレン Brennen（燃える）。」

シャイレオン 神龍は更にそう言つた。すると、先程冷気を出した光輪から今度は、高温の炎が発生し、リオ姉妹を襲つた！急激に凍りついた処に、炎が来るのである。物質として脆くなつてしまふ。其処へ…。

「シュラク Schlag（打撃）！」

シャイレオン 神龍はそう言い、太刀を素早く動かす。音速を超える為、轟音が二つ鳴る！そして、太刀からは光の筋が見えた。リオ姉妹の身体には大きな穴が開いていた。

リオ姉妹は、小さく呻きを上げたが、其の俤身を崩していき、大きい音を立てて倒れていった。

神龍は、倒れたりオ姉妹を確認すると、ゾフィーの方に振り向く。
そして、

「さて、これで良い。御前がゾフィーだな。」

そう言った。ゾフィーはそう言われて頷く。神龍は、ゾフィーに
手を伸ばし、触れた。其処からは光が輝く。そして言う。

「蓬が大変な事に為っている。御前の力が必要だ。着いて来て貰おう。」

神龍はそう言い、光り輝き始めた！其の光が、収まった時には神
龍とゾフィーは其の場には居なかった…。

（蓬の「中」で）

蓬は泣いていた。自分は何者なのか？いや、自分がどうかは分か
つてはいるのだが、自分の経緯、つまり産まれについて考えていた。
しかし、幾ら考えても思いつかない。いや、五年前に、暁の村に行
き付いた時からの記憶しか思い出せない。

「あたしは、一体何？あの「人」が言う様にあたしは、普通じゃな
い？其れとも…？」

蓬は自問自答をしていた。然し、答えは見つからない。其れが更

なる不安を煽^{あお}る。

「あたしは……。助けて……。誰か……。」

泣きながら蓬はそう言っていた。立ち尽くして……。

そんな折、蓬の近くに「黒い」渦巻く物が現れ始めた。其れは音を立てながら形作り始める。蓬は其れに気づいて其れを眺めた。

「何……？」

其れは、次第に人の形と為り……、

「ゾフィー?!」

蓬はそう言った。そう、ゾフィーの姿をした人物が其処に現れたのだ。筋肉隆々とした素晴らしい肉付きの美しい女性。間違いなく彼女の姿に見えた。「其れ」は言う。

「蓬。会いたかった。」

其の言葉に、蓬は身を引く。そして、

「貴女は誰?!」

そう言った。「其れ」はニヤリとしつつ答えて言う。

「姿だけ真似てもやはり無駄か。仕草や言葉遣いまでは真似ができなかったからな……。」

蓬は、身構えながら言う。

「貴女は何者?!」

「其れ」は答えて言う。

「私は、「御前」でもある。いや、御前に誘われたと言った方が良いかもしれないな。」

其の答えに蓬は戸惑う。

「何よ其れ……あたしに誘われたって、何よ其れはああああ!」

最後にはやや半狂乱に為りつつそう言っていた。「其れ」はくすくすと笑いながら、

「そう、其れだよ。其の、壊れ行く様が私にはとても快感だよ……。さあ、此の尽「壊れて」くれ、蓬。」

そう言つて蓬の顔を撫でる。そして、自分に引き寄せながら、

「そうして、お互いに「混沌」^{カオス}へ行こう。其処には苦しみも何も無い、虚無にたゆたう場所が在るのみだ。」

優しくそう語りかけた。蓬は次第にウットリとした様になり、

「あたしも、泣かずに居られるの?」

そう言う。其れは答えて、

「泣く必要も無くなる。悲しみなんて無い世界だから。」

そう答える。蓬は、「其れ」に顔を埋めるようにしながら、

「其れは嬉しいわ…あたし、もう疲れちゃった…。」

そう言う。「其れ」は絆ほどされて行く蓬を見ながら怪しい笑みを湛えていた。そんな時、

「蓬！」

後ろからそう言う声が聞こえる。聞きなれた其の声を聞き、蓬はハッと為って其の声の方に向く。

其処には、ゾフィーと蓬の姿をした存在が立っていた。

「え?!ゾフィー?後……神龍?」
シャイレオン

正氣に戻り、記憶を手繰り寄せながら蓬はそう答えていた。「其れ」は舌打ちしつつ、

「ちっ、奴め、抛り処を連れて来たか……。」

そう、悔しげに言った。それに答えるように、

「御前の望む形にはさせぬよ。蓬も、我の一部、そして、別の形で、我だ。お前のような奴にやる訳には行かぬ。」

シャイレオン
神龍はそう言った。「其れ」は語気を荒げながら言う。

「何時も…何時もだ!」「御前達」は「私」の邪魔をする!初元に帰す事を何故拒む!「混沌」カオスこそが安定であるうに!」

其れに答えて神龍シャイレオンが言う。

「其の問答は無駄だ、ゲイフリオン「魔王」よ。我らは幾度となく、争ったが接点は見出せなかった。我らは「混沌」カオスに抗う道あらがを選んだのだ。この場は立ち去るが良い。」

其れに答えて魔王ゲイフリオンは言う。

「そうは行かぬ。折角もう少して「蓬」を我側に引き入れる処だったのだ。是が非でも此処は引く訳には行かぬな。」

其れに答えて、ゾフィーが、

「そんな事はさせない！蓬は、俺の大切な人だ！御前の様な存在にくれてやる訳には行かない！」

ハッキリとそう言った。蓬は、其の声を聞き、

「ゾフィー、あたし……。」

そう言いつつ、ゾフィーの方へ行こうとする。其処へ、

「行かせぬ！御前は我と共に「混沌」カオスにする為の力と為るのだ！」

ゲイフリオン魔王はそう言い、蓬を捕まえる。蓬は其れを払い除けようともがく。

「いやあ！あたしは…あたしはあ！」

蓬はそう叫び始め、身体が次第に輝き始める！

「ぐっ……おのれ！神龍シャイレオンとしての力を使いこなし始めたと言っのか……。」

ゲイフリオン魔王は蓬が出す其の光に戦きつつ後ずさる。ゲイフリオン魔王の手が離れた事を理解した蓬は、其の促走り出しゾフィーの胸に飛び込んだ。ゾフィーは蓬を優しく抱く。

「お帰り、蓬。」

ゾフィーはそう優しく言った。蓬は、

「只今……。」

耳を真つ赤にしながらそう言っていた。シャイレオン神龍は一つ溜息をつき、

「さて、蓬は此方に来た訳だ。つまり、もう御前が此処に居る意味は無い。素直に立ち去るが良い。」

ゲイフリオン魔王に対してそう言った。ゲイフリオン魔王は舌打ちしながら、

「ちっ、折角の機会が台無しになったか。まあいい、次の機会を狙うでしょう。蓬、又会うでしょう。その時こそ、御前の魂を共にカオス混沌」へ捧げてやるよ。」

そう言いつつ、其の場から消え去っていった。シャイレオン暫くの静寂が起きる。その後、神龍が口を開く。

「さて、我は長居が出来ぬ。御前の中にあつた、我の力を具現化し

ただけに過ぎぬからな。早く御前が私の「力」、「思い」、そして「心」を手に入れてくれる事を願いつつ此処は去るとしよう。又会おう、蓬。我らは一つだが、一つではないものなのだから。」

そう言つて、神龍は消えていった。シャイレオン

ゾフィーは顔を埋めていた蓬に声を掛ける。

「さあ、何時までも此処に居る訳には行かないだろう？ 帰つて、皆に無事を報告しよう。」

蓬は其れを聞いて、ゾフィーに埋めていた顔を起こす。そして、

「うん。まだ、良く分かつていないけれど、戻らなければ為らないのは分かるわ。戻りましょう。」

そう言い、二人は、光の中、元の世界、現実の元へ向かつて行つた。

（「密林」死闘があつた場所で）

ツバサとイナズマは、気が付いた時の状況に呆氣に取られていた。襲われていた筈のリオ姉妹は、身体をぶち抜かれて死亡している。又、蓬とゾフィーの姿は全く見えない。二人は如何して良いか分からず呆然としていた。

「一体…俺達如何したら良いんだろうな……。」

「俺に分かる訳が無いぜ……。」

二人はそう言っていた。

そんな時、リオ姉妹の死体の前に光り輝く大きな塊が現れる！二人は余りの眩しさに、目を手で覆う。

「な！一体なんだ？！」

「分からないぜ！」

二人はそう言う。其の輝きが収まり、眼が慣れてくると、其処には二人の女性が立っているのが見えた。

「えっと……蓬さんとゾフィーさん？」

ツバサが確認しながらそう言う。それに答えて、

「只今、御迷惑お掛けしました。」

蓬がそう答える。イナズマが、

「無事だったんだな！って、ちょっと待てえ！」

無事を言ぼうとした矢先そう叫ぶ。そして、

「ちょっと！服を着ろ服を！」

イナズマが慌ててそう言う。そう言われて初めて蓬は今の状態に気づく。そう、蓬もゾフィーも素っ裸なのであった。

「いやあああああああ！」

「密林」が振動するかも？と言う様な叫び声が辺りに木霊した。
ゾフィーは苦笑しつつ、

「蓬、シャイレオン神龍がやった事をやればいいんじゃないか？」

そう言った。真っ赤に為って蹲ひずくまっていた蓬は、そう言われて、

「そ、そうね…、では、『リュストウンゲR?stung(武装)！』。」

そう言った。すると、蓬とゾフィーの二人が、輝き始める！ツバサ達は彼女達を見れなくなる。輝きが消えた後、蓬とゾフィーは、白く輝く水着の様な鎧を身に着け、蓬は片手に白く輝く太刀を、ゾフィーは白く輝く槍を手にしていた。ゾフィーは其の槍を見ながら言う。

「シャイレオン神龍が俺にくれるのは此の槍か。有難く使わせて貰うでしょう。」

其の様子を蓬は微笑みながら見ていた。二人の様子を、ツバサとイナズマは呆気にとられつつ見ていた。

そう、常識を超えた現象を見て、理解が超えていたからであった。

(人知れない場所にて)

「おのれ……シャイレオン神龍め！今に見ておれ……必ずや「混沌」カオスへの道は、

此の魔王^{ゲイフリオン}が辿り着いてやる！」

魔王^{ゲイフリオン}はそう言い、自分の憑依^{よりしる}と為る「身体」を探して彷徨い始めるのであった。

其処では、妖しいまでの笑い声が響いていた。

蓬の立場が明らかになった。神龍^{シャイレオン}の力を蓬は使いこなせる様になるのか？また、暗躍する魔王^{ゲイフリオン}。彼は何を為そうとしているのか？まだ、情勢は好転はしていない。いや、むしろ悪化しているのかもしれない。しかし、蓬はかつてないものを手に入れた。其れは、何物にも変えられないものであった。其れにより、どの様に未来が描かれるのか？其の答えは時の彼方にある。

蓬 「……………」。

ゾフィー「如何した蓬？」

蓬 「意図的じゃないとは言え……。」

ゾフィー「ん？如何した？」

蓬 「ツバサ君達にヌード見せちゃった…（顔を真っ赤にする）
」。

ゾフィー「あ……。まあ、あれは事故だよ、うん。」

蓬 「そう、思ってくれるかな……。」

ゾフィー「そう思ってくれないと、今後揉めそうな気がするな……。
」

蓬 「うん……………」。

ゾフィー「とりあえずは、家に帰るかな。」

蓬 「そうだね、ナギサちゃんも心配だし。」

ゾフィー「なら、ツバサ達にも声を掛けて帰るとしよう。」

蓬 「うん」。

作者 「何か良い様に纏まったわねえ……。あ、次回予告。次回
「見えない恐怖、火山地帯での死闘？」に為るわ。お楽しみに。」

蓬 「処で、夜は付き合ってくれるのよね？」

ゾフィー 「いきなりもう其処なのか?！」

蓬 「いいじゃない?。」

ゾフィー 「いや、心の準備と言う奴がだな……。」

蓬 「何よ!あの時の言葉は嘘だったの?！」

ゾフィー 「いや、そうじゃなくってだな……。ああ!上手く言い表
せん!」

汝の赴く処にも神龍なんじの加護シャイレオンがあらん事を……

見えない恐怖、火山地帯での死闘？（前書き）

作者「えゝ。警告！今回は描写でかなり過激な表現が含まれます。」

魔王「ゲロ表現、H表現等が苦手な奴は見ない方が身の為だ。」

神龍「と、御前がわざわざ親切で言っつてのもある意味不思議なものだな。」

魔王「只の気まぐれだ。」

神龍「そうか。」

作者「納得しちゃってるし……………」

魔王「まあ、兎も角だ。再度警告する。」

神龍「過激な表現から今回の物語は始まる。」

作者「だから、苦手な人は読まない様に。真面目に、夢見て貰っちゃ困るから。」

魔王「どうしても言うなら我が「混沌」カオスへ誘って……………」

神龍「ええい！此処まで持ち込むな！」

作者「では、お楽しみください。但し、覚悟はするように！」

見えない恐怖、火山地帯での死闘？

小説 蓬よもぎの旅（モンハンFF）

第十六章 見えない恐怖、火山地帯での死闘？

（暁の村からかなり離れた大きな街グラウ＝エルモウムの街通り裏の細い路地にて）

「いやああ………うぐっ……。」

女性は叫びを上げようとしていたが、男達に捕まえられ、猿轡さるくつわをされ、声が上げなくなる。

「ん………ん……！」

一生懸命に、訴えるが男たちは怪しい笑みを浮かべるだけで答えない。其のうちの一人が口を開いて言う。

「今更、如何されるかは、分かるだろうに。この期に及んで、まだ暴れるとは元気なこつた。」

女性の傍で、女性の腕を掴みながら其の男は言っていた。別の男が、女の服を剥ぎ取り始める。女性は一生懸命に抵抗しようとするが、しっかりと押さえつけられ、如何する事も出来ない状況にっていた。

「ん～～！」

必死で訴える。然し、男達は無関心に、自分の目的の為に行動をする。数分もしない内に女性の服はボロボロにされてしまった。

「さて……。どんな具合かな……。」

そう言つて男の一人が女性の胸に触る。

「ん～～！ん～～！」

女性は一生懸命に訴える。然し、男達には届かない。男の一人が、女の頬を叩く。そして、

「五月蠅いな！此れからどうせ、気持ち良くなるんだ。暫く黙つてな。」

そう、自分勝手なことを言つた。

何故、こんな目に……。女性は自分の起きた不幸を考えていた。ただ、困つていた人を助けようとしていた、其れだけだった筈なのに、実際は自分の欲望に忠実な男達に囚われるだけと為ってしまった。いた。

「う、うううう……。」

自分の無力さに、そして、人間の邪悪さに、女性は泣いていた。男たちはそんな事には関心を示さずに、自分の欲望を遂げようとする。

「さて……。こっちは如何かな……。」

そう言つて男は女性の胸から下に手を伸ばしていく。

「んゝ!!」

女性は必死で止める様に訴えるが、無論男たちは聞きもしない。
男は、目的の場所に到達し、其処を弄り始める。

「んゝ!!んゝ!!」

女性が出すそんな声はお構え無しで男は弄り続ける。
如何して、自分がこんな事に……。女性はそう考えていた。次第に……。

「へっ。文句は言いつつも、きちんと感じているじゃねえか。」

そう男は言い、手に付いた液体を女性に見せる。女性は、顔をやや赤らめながらも必死に抗議をする。

「んゝ!!」

男たちはニタニタしながら女性を眺める、其の間にも弄っている男の手は休まらない。次第に、其処から音が聞こえるようになる。

「ほらほら、いやらしい音が鳴り出したぜえ。」

男は、そうやって言葉で女性を煽る。女性は必死で抗議をする。顔は真っ赤ではあるが。

「んゝ!!」

男は服を脱ぎ始め、

「そろそろやってしまおうか。」

そう言った。女性は、今まで真っ赤だった顔が一瞬にして真っ青に為り、必死で抗議しながら喚く。

「ん~~~~ん~~~~ん~~~~！
やかま喧しい！」

男の一人が女性を叩く。其れにより女性は、顔に傷が付き血が少し飛び散った。其れを見て、別の男が言う。

「おいおい、早々と傷を付けるな。まだ俺達は楽しめていないんだからな。」

「す、すまん……。」

叩いた男がそう言って謝る。女を今にも襲おうとしている男は、自分の下半身を女性に近づけつつ言う。

「さあ、行くぞお……。」

「ん~~~~！」

女性は必死で抗議をしていたが……。異物が自分の身体に入り込むのが分かる。其の、嫌悪感に、気分が更に悪くなる。

何故、自分が……。

憎い、無力な自分が。

憎い、無慈悲に襲う此の男達が。

憎い、こう言う行為が野放しにされている社会が。

.....。

憎い、自分の目の前にあるもの全てが！

『そうか...そう思うか...為らば、我に身を委ねよ。我が、御前の望みを一つでも叶え、其の憎きものを「混沌」^{カオス}の元に捧げてやろう。』

女性に声が聞こえて来た。女性は「其れ」に乞う様に訴えた。

『嫌な此の全てを無くす、力を！』

そう、心の中に居る「もの」に訴えた。其れは答えて、

『良し。「誓約」は果たされた。此れからは、此の魔王^{ゲイフリオン}が御前の身体を貰い受ける。そして、御前の望む「滅び」を広げてやろう！』

そう言う。其れを聞いた女性は其の俤、意識を失っていった.....。

「おい、こいつ気絶したんじゃないか？」

男の一人が言う。別の男が答えて、

「別にかまわんだろ？まあ、起きて暴れた方が楽しいのだが。」
「相変わらず、御前は鬼畜だな。」

そう言い、其の答えに別の男が答えていた。そんな折...

「ぐわあ！」

女性に異物を突っ込んでいた男がそう叫びを上げる。そして、其の俛、崩れ落ち、下腹部から大量の血が溢れ出す。更に、下腹部はごっそりと大きな穴が開いており、其処からは内臓がはみ出て、体液と血を吹き出していた。

「なあ！何だ一体！如何した？」

男達が驚いて言う。そして女性を押さえていた手が離れる。女性
は、其のタイミングで起き上がり更に、猿轡さるくわを自分の力で引きちぎった！男性が必死でつけたものだ、簡単に取れるはずのない其れを女性
は外したのである。

「此れは一体……貴様何をした！」

事態が飲み込めず、男の一人がそう言う。女性
は、男達の方へ振り向く。そして、ニヤリと笑みを浮かべつつ、

「今まで好き勝手をしておいて、そんな事を言うのか。全く、こんな奴等が居るから、さっさと「混沌」にせねば為らぬのだ。」

そう言った。

男達は意味が分からず、

「何を訳分らない事を言っ
てやがる！お前ら、やっ
ちまうぞ！」

そう言い、手元から武器を
手に取り始める。其れを見
つつ女性
は、

「下らぬ。御前達には、此の
身体を傷つけた報いを与
えてやろう。」

そう言って、手を伸ばし、「言葉」を言い始める。

「Schwere（重力）」
シュヴェーレ

其の言葉により、周囲に激しい力が働く！男達は地面に激しい音と共に叩きつけられた。そして、其の俣目に見えない「力」に圧迫されていく。

「が…た、助け……。」

「うぐっ…動け…ない……。」

「だ、誰…か……。」

男達はそう言うが、女性は、怪しい笑みを湛えつつ、片手を伸ばし、其の手のひらを男達に広げ、

「とつとと消えろ、屑共。」

無慈悲にそう言って、手を振り下ろす。

激しい音が響き渡り、全身がぐしゃぐしゃに潰された、元人間の残骸が、血肉の残骸として其の場に残されていた。

侮蔑の表情をした後で、女性は其処を立ち去っていった……………。

（前回から数日経った暁の村ハンターズギルドの二階にて）

蓬達は、村に帰ってから、一晚寝た次の日に為っていた。ハンターズギルドに来て、其の二階ナギサが休んでいた部屋に居た。

「で。「密林」での経緯^{いきわづ}を話してくれるんでしょうね？」

キツと睨んで蓬に詰め寄る。蓬はやや後ずさりをしながら、

「わ、分かったから……ナギサちゃん落ち着いて……。」

そう言っていた。ナギサに蓬が詰問されているのには理由がある。ツバサとイナズマが、蓬とゾフィーのヌードを見た事をついポロツとナギサの前で言ってしまったからだった。其の当人達はベットで見事に倒れていた。そう、ナギサにやられて。

苦笑しつつ、蓬はナギサに説明を始めた。

小一時間みっちり説明を聞いて、

「成程ねえ。なら、蓬達は被害者ね。全く、ツバサと来たら……。」

ナギサがそう言う。其の物言いから蓬とゾフィーは、何故ナギサがそこまで怒るのか、大体を把握した。

「処で、もうナギサは大丈夫なのニヤ？」

ウオルフがそう言う。ナギサが答えて、

「あ、うん。まるつきり平気。おかしな点も無いし。明日からはツバサ達と一緒に行けそうよ。」

元気にそう言った。ゾフィーが、

「其れは良かったな。では俺たちも分かれて別件の依頼でも探すか？蓬。」

そう言う。蓬は、

「あ、うん。そうよね。ウオルフやミウ達と一緒にいきたいし。ナギサちゃん、あたし達は此れで行くね。」

そう言うて、ナギサに手を振り、部屋から出て行く。それについて行く様にウオルフやミウも出て行く。ゾフィーが出る間に、

「まあ、ツバサ達には優しくしてやってくれ。」

そう言うて、最後に出て行った。其れにナギサは、

「ちょ！あたしは其の……。」

そう言いかけて、言葉が止まる。部屋には顔を真っ赤にしたナギサが残されていた。ツバサとイナズマは相変わらずだが…。

（暁の村ハンターズギルドギルド一階にて）

「どれが良いのかな？」

蓬は、依頼を見ながらそう言うていた。ギルドでの立場はハンタ

「としてまだ「初級」。幾ら、些か、神龍としての「力」を使える
とは言っても、立場上は新米だからである。ゾフィーが其れに答える
様に、

「蓬、此れなんか如何だ？」

そう言つて一つの依頼を指し示す。其処には「火山」にてバサル
モスの素材を入手する依頼が記載してあつた。

バサルモス。成体になるとグラビモスと呼ばれる飛竜の幼生体。
成体ほどの能力は無いが、全身は岩の様に硬く、また、毒、催眠、
火災の各種攻撃も兼ね備える対応しておかないと面倒な敵でもあつ
た。言い換えるなら、きちんと対応する為に、学ぶ為の一つの「里
程標」とも為るモンスターであつた。

依頼を一通り読んでから蓬は、

「うん、まだあたしは「火山」へは行つた事が無いし、丁度良いか
もね。神龍の装備があるから、素材関連は無理に要る訳ではないけ
れど、持つておけば村の皆には役に立つし、あゝこの依頼主はシャ
イゼル小父さんなのか。なら余計に張り切つてやらないと。」

そう言つた。そんな蓬を見て、ゾフィーは微笑みつつ、

「お世話に為つてゐる人なら尚更張り切りなくなるな。では、依頼を
引き受けようか。」

そう言いながら依頼書を取つた。そして、セティの所へ持つてい
く。

セティは依頼の内容を見つつ蓬に言つた。

「なるほど、初の「火山」ね。蓬ちゃん、其れはいいけれど、装備

とかは大丈夫なの？」

其の質問に答えて蓬は、

「あ、はい。新しい装備が手に入ったので大丈夫ですよ。」

そう答える。何故そう言われたかと言うと、今、蓬は、薄着の衣服のみしか着ていないからである。勿論ゾフィーも。ハンターズギルドに来るハンターは直ぐに出発出来る様に、大抵防具や武器は装備して来ているものである。そう言う意味では、普段着のような格好で来ている蓬達は、異質であった。

セティはそう言われたので、其れ以上は追求せずに、依頼を受理する。

「此れで良しつと。「火山」迄は移動だけでも結構距離があるから、気をつけてね。」

セティはそう言った。其れに蓬は、

「有難うセティさん。では準備を整えて出発します！」

元気にそう答えて、其の場を後にした。ゾフィー達も蓬について出て行く。

一行を見つつ、セティは、

「何があったか知らないけれど、何か吹っ切れたみたいねえ。」

そう言っていた。

（暁の村、村の中心部、広場付近にて）

蓬は、「火山」に向かうべく準備をしようとして、家に足を進めていた。そんな時、

「お、蓬じゃないか。」

そう、声を掛けるものが居た。蓬は其の人物を見て、

「あ、レイナルドさん！其れにシャルさんも。あれ？其方のお二人は？」

そう答えていた。レイナルドとシャル、そして二人のハンターを目にしたからである。

其れに答えてレイナルドが、

「ああ、今回、古龍を相手に激戦してるのでね。其の討伐を手伝ってくれているんだ、チナナ殿とクロネ殿だ。」

そう言い、チナナとクロネを紹介する。二人は蓬の前に来て、

「初めまして、チナナと言います。宜しく御願ひ致します。」
「ボクはクロネ、宜しく」

そう言った。蓬は、やや呆気にとられつつも、

「あ、えっと、まだまだ新米ハンターの蓬です。此方が一緒にやっているゾフィー。そして、生活面から戦闘まで面倒を見てくれるあたしの頼りに為るアイルーのウォルフガング。一緒に生活している龍のミウです。」

そう言つて、全員を紹介した。

「ゾフィーだ、宜しく。」

「ウォルフと言つてくれニヤ！宜しくなのニヤ！」
「みう！」

それぞれが挨拶をする。其の様子を見つつ、レイナルドが、

「おやおや……村長から竜を飼い始めたと聞いたが、こんなカワイコちゃんだったのか、しかもめつぽう美人だな。」

そう言いながら、ミウをまじまじと見る。

「み……みう……。」

ミウは、まじまじと見つめられてそう鳴いていた。苦笑しながらシャルが、

「レイナルド、余りそう見つめると、ミウが怯えますわよ。素材相手を見る様に見てはいけませんわ。」

冗談紛れの台詞をそう言った。ミウは、

「みう~~~~~！」

そう言いながら蓬の影に隠れる。

「ど、如何したのよミウ？」

蓬はそう言うが、

「みうつ！みうつ！」

隠れたまま、ミウはそう訴えていた。苦笑してレイナルドは、

「すまん。怯えさせるつもりは無かったんだが……然し、賢い竜だな、人の言葉も分かるようだ。今までの竜とはかなり違う。」

そう言った。そう言われて、蓬は、

「あ、そう言えばそうね。今まで、人語を理解するモンスターなんて見た事が無かったわ。」

ふと、そう言った。レイナルドは、

「まあ、普通、モンスターと呼んでいるが獣と同格に扱ってるからな、人間は。」

そう、人間の側が蔑んで言っている事を指摘しながら言った。ゾフィーが其れを聞き、

「確かに、そんな風に考えた事が無かったな。考慮すべき事かもしれないな、此れは。」

そう言う。蓬は、

「其れは兎も角。古龍退治と仰られてましたけど、結構大変なのは？」

そう言った。レイナルドは答えて、

「ああ、先日やつとこさ、オオナズチは倒せたよ。奴は、普段見えないから探すのから大変でね。彼女達が居なかったらまだまだ掛かっていただろうな……。」

そう言い、チナナ達の事を賞賛した。答えるようにチナナは、

「私達も修行です。良い経験をさせて貰っています。」

謙遜にそう言う。苦笑しつつ、レイナルドは、

「いや、彼女の狩猟笛や、クロネ殿の的確な援護で、俺はかなり助かってるしな。シャルの負担も減ってるし。」

そう言うのであった。ふと、気づいてゾフィーが、

「レイナルド殿、先程、オオナズチ「は」倒せた。と仰られたが、と言う事はこの近辺に、まだ古龍が居ると？」

そう言った。多少険しい顔つきでレイナルドが答える。

「ああ……俺が見かけたのでも、炎龍王テオ・テスカトルが居た。他にも情報では、クシャルダオラが居る事が報告されている。未確認だが、炎龍妃ナナ・テスカトリの情報も錯綜しているよ。」

其の答えに、蓬達は絶句していた。古龍は、一体だけでも天災と呼ばれる程の影響がある。にも拘らず複数居るというのだ。

「大変なのね……。あたし達も手伝えれば良いのだけれど。」

そう蓬が言う。其れを苦笑しつつレイナルドが答え、

「いや、まだ御前達にそんな事はさせたくないさ。実力が付いたら其の内頼むよ。」

そう言った。蓬達は頷く。

そうして、蓬達はレイナルド達と別れるのであった。

(蓬の家にて)

「しかし、特別持って行く物ってあるのかしら?。」

蓬がそう言う。ゾフィーが答えて、

「そうだな……。神龍シャイレオンの装備だと、基本的に外界謝絶するから、ドリンク系は不要だと思うし……。回復薬とか位じゃないのか?まだ、俺達は、この「力」を使いこなせてない訳だし。」

そう言った。蓬は其れに答え、

「一応回復薬系は揃えておきましょうか。早く使いこなさないと…」

そう言う。ゾフィーは、蓬の肩を軽く叩きながら、

「気持ちは分かるが、焦っても、魔王ゲイフリオンの思う壺だと思つぞ。神龍シャイレオンも言っていたが、「力」だけでなく、「思い」、「心」も彼の処まで行かねば為らないのだろう？」

そう言った。蓬は、

「うん……。そうだね。一歩ずつ頑張る。此れからも一緒に居てね？」

ゾフィーを見つつ、そう言った。ゾフィーは、顔を少し赤くしつつ、

「あ、ああ、勿論だ。」

そう答えていた。ウォルフが奥から出てきて、

「僕も準備が出来たニヤ！何時でも行けるのニヤ。」

そう言った。ミウも、

「みうっ！」

と威勢を上げる。蓬はくすりと笑いながら、

「では、行きましょうか。」

そう言って、入り口に向かうのであった。

（約十日後、「火山」の麓のベースキャンプにて）

「此処が「火山」か……。凄い所ね。」

蓬は全景を眺めつつそう言っていた。其処は、灼熱の場所であった。勿論、今蓬達が居るベースキャンプは過ぎやすい場所であるが、直ぐ奥の洞窟からは、高温の空気が漏れていた。普通の格好では汗ばんで倒れてしまうであろう事は予想出来た。また、目の前にある「火山」からは、定期的とも言える脈動とも取れる噴火活動が続いており、溶岩や火山弾を噴出しているのが見えるのであった。

「さて、対象はバサルモスだったわよね。あたしは見たことが無いから……ゾフィーやウォルフ、知ってるならお願いね。」

蓬はそう言った。答えて、ウォルフが、

「分かったニヤ。奴は岩に擬態しているから注意なのニヤ。」

そう言った。ゾフィーが、

「なら、その辺の石ころでも取っておいて、妖しげな岩に投げてみるか。」

そう言って、付近に落ちている石を何個か集めていった。蓬は、

「では、中は暑いから、あたし達は装備しましょうか、ゾフィー。」

そう言う。ゾフィーは其れに答え、

「分かった、蓬、頼むぞ。」

そう言う。蓬は頷き、

「R? リュストウングstung(武装)！」

そう言う。其の「言葉」により、蓬とゾフィーの体は輝き、暫くして、白く輝く水着の様な鎧と、蓬は白く輝く太刀を、ゾフィーは白く輝くランスを盾と共に持っていた。

「よし、此れで良いわね。」

蓬は、そう言う。ウォルフは其の姿を見ながら、

「始めてみた時も驚いたけれど、何回見ても吃驚なのニヤ。」

そう言う。蓬は、

「ウォルフ君の双剣も凄いいけどね。」

そう答えて微笑んでいた。そうして一行は火山の中に入って行った。

（「火山」溶岩の流れる、洞窟内にて）

「暑そうねえ……。」

蓬がそう言う。苦笑しつつ、ゾフィーが、

「いや、暑いでなく、熱いかも知れないが。」

そう言った。文字作品でしか分からないギャグをさり気無く言うゾフィー……。其れは兎も角。

「そうかも知れないけれど、この防具であたし達は平気ね。」

蓬はそう言っていた。そう、蓬達が着ている防具【シャイレオン神龍】の効果で、「火山」の灼熱の被害は皆無であった。通常ならクーラードリンクが必須、更に、熱が高い場所では其の効果も半減する。そんな過酷な場所なのである。不思議な事に、ウォルフやミウは平気な顔をしていた。

「そう言えば、ウォルフやミウは平気そうだな。如何してなんだ？」

ゾフィーが二人を見ながらそう言う。ウォルフは、

「そう言うものらしいからなのニヤ。でも、詳しくは僕も知らないのニヤ。」

そう答えた。要するに、そう決まってるらしいが、詳しいことは分からない。設定上の「秘密」らしい。と言っているのであつた。

「そうか……。まあ、まずはバサルモスを探さないとな。」

ゾフィーはそう言い、洞窟内に居るかもしれないバサルモスを探していた。

「岩に化けてるって言っても……どんな姿なんだろう?。」

蓬がそう言いながら、手元にある岩を叩く。其れは、普通の岩である事を示す音が返ってくる。

「うーん。こんなの似てるのを探すって言われてもなあ……。」

要領がまだ掴めずにそんな事を言っていた。一行はそうやって、「火山」の中を探索していた。

（「火山」火口部分に近い、灼熱の溶岩が煮えたぎっている近くの広場にて）

一行は火口に近い場所までやってきていた。途中で、ピッケルを使って採掘もする。「火山」では他では採れない貴重な鉱石も出からだ。

「あ、此れは何？」

珍しい物を見つけて、蓬が言う。ゾフィーが其れを見て、

「其れは紅蓮石だな。龍素材と相性が良い石で、鍛冶屋の人が良く欲しがる素材だぞ。」

そう言った。蓬は喜びながら、

「なら、小父さんも喜ぶかもね。」

そう言いながら鞆に仕舞う。ゾフィーは其の様子を見て微笑んでいた。そんな折、

「みう！」

ミウが叫ぶ。

「如何したのミウ？」

蓬がミウの元に駆け寄る。ミウは、

「みう！」

そう叫んで、ある岩の方に向いた。その岩は、広場の中央付近にポツンと立っていた。蓬は其れに近づき、

「この岩が、如何した……。」

と言い掛けた時、グラグラと其の岩が揺れ始める！

「蓬！其処から離れる！」

ゾフィーが怒鳴る。蓬は素早く側転をして、その場から脱した。地面から見えていた岩の十倍以上もある巨大な物体が現れる。

「バサルモスだニャ！」

ウォルフが姿を見てそう言う。幼生体とは言え、鎧竜と言われる巨大な竜グラビモスの子供である。其の大きさは、優に8mを超えていた。

「大きい…此れでも子供なのか…。」

蓬は姿を見てそう言っていた。バサルモスは飛び出して蓬達を見ると咆哮を上げる！

しかし、防具【神龍】シャイレオンに守られた蓬達には其の咆哮は効果が無かった。蓬は太刀を、ゾフィーは槍を構える。

「よし、行くぞ。硬いので、腹を中心に狙う、蓬、気をつけてくれ。」

ゾフィーはそう言い、

「分かった、貴女も気をつけて。」

蓬はそう答えた。ゾフィーは、其れに微笑んで答えてから、

「行くぞ！」

そう言つて、バサルモスの腹めがけて槍を突き立てる。

鈍い音がするが、槍は腹に刺さる。其の俣ゾフィーは二度更に衝き立ててから、後ろにステップを踏み、下がる。

バサルモスは反撃をしようとゾフィーに頭を近づけてくる。ゾフィーは盾を構える。

盾に鈍い音が走る。バサルモスの頭は、盾により遮られ、其の俣別方向へと向いていく。

「今度はあたしが！」

そう言つて、蓬は、バサルモスの足元付近に踏み込み、太刀を衝き立て、素早く斬り下がる。硬くない部分だったので無事に太刀はバサルモスに斬り込んだ。

其れにバサルモスは、呻き、身体を仰け反らす。そして、蓬の方向へ向きを変えて、徐に突進し始める。

蓬は其れを見て、側転を繰り返して避ける。それから、突っ込んでいつて滑り込み、起き上がるまでに時間の掛かっているバサルモスの尻尾を叩き込んだ。

鈍い音がして太刀が弾かれる。それほど、硬いのである。

「凄い硬さね、此れ。」

蓬がそう言う。其れに答えて、ウォルフが、

「まだ此れでも柔らかい方なのニヤ。親、つまりグラビモスに為つたら更に硬くなるのニヤ。」

そう答えた。そう言っている間にも、火山地帯でうろつくイーオス（ランポスの亜種）達を倒しているウォルフとミウであった。

バサルモスは、其の尻尾を腰を上手く使い振り回してくる。蓬は後ろに下がって其れを避ける。ゾフィーは其の間にバサルモスの側面に配置した。

「よし、今度は俺だ！」

そう言っ、ゾフィーはバサルモスの横腹を突き立てる。其れに耐え切れず、バサルモスはゴロンと転がり始めた。ゾフィーは其れに巻き込まれ、盾で防ぐ音が響く。

「ゾフィー?!」

蓬がそう叫ぶ。しかし、答えが返って、

「大丈夫。俺は無事だ、蓬。」

そう言うのが聞こえた。バサルモスが横転から起き上がり、ゾフィーと対峙しているのが見えた。蓬はほっと胸を撫で下ろす。そして武器を構え、

「今度はあたしよ！」

そう言っ、再度バサルモスの尻尾を斬りかかった。鈍い音がして弾かれるが、尻尾には若干の傷が付いている事を確認できた。つまりダメージは蓄積している、と言う事である。

ゾフィーも、

「さあ、俺はまだ無事だ。行くぞ！」

そう言っ、再びバサルモスの腹を衝き立てる。槍は腹を貫通し、

腹を覆っていた硬い岩盤のような甲殻の一部が剥がれ落ちる。そして、中の柔らかい肉質が一部見える状態と為った。

それにより、再びバサルモスは咆哮を上げる！そして、しっかりと腰を据えて構えたと思いきや、全身から、周囲が暗くなるほどの毒の霧を吐き出し始めた！

「いかん！離れる！」

ゾフィーはそう言って、自らも素早く後ずさる。蓬も其の声に素早く反応して下がる。

バサルモスの周囲は毒の霧で覆われてしまった。

「凄いのね。こんな事も出来るんだ。」

蓬は其の姿を感心しつつそう言った。ゾフィーは、

「結構強力な毒だからな。防具【神龍】シャイレオンの効果があるとは言え、何処まで有効かは分からないから、無理はしない方がいいだろう。」

そう言った。蓬も頷く。そして二人は武器を構えなおして、霧が晴れて来た所を見計らいバサルモスに斬り込んだ。

「これで！」

「どうだ！」

二人が斬り込んだ太刀と槍は、バサルモスの柔らかい部分が露出した腹に突き刺さる。

バサルモスは、か細い鳴き声を上げた後で、大きな音を立てて其の場に倒れこんだ。

「Auf Wiedersehen（さようなら）。」
アオフ ヴィーダーシャオエン

ゾフィーは哀れみを込めてバサルモスにそう言った。そう、狩猟が完遂したのである。

「お疲れなのニャ〜。」
「みう。」

ウオルフやミウも駆けつける。そこで一行はバサルモスを解体する事と為った。

（「火山」蓬達がバサルモスと戦っている場所が見える、火山の高い場所です）

「其れ」は、蓬達一行を見ていた。彼女達が戦う様子を。彼女達が楽しんでいる様子を。そして、余り響かない声で吼える。それから、

「ふっ。面白いものが見えた。どうやら、シャイレオン神龍の関係者の様だが……。」

そう言い、「其れ」は再び、何かを探すように其処から羽ばたいて行った。その姿は、凜々しく、威厳があり、畏怖を起こさせるものであった。

そして「其れ」は、空高く舞い上がると、ある方向へと飛び立っていった。

シャイレオン

神龍としての力を使う訓練をする蓬。そして其れを支え、心の拠り処として共に居るゾフィー。蓬を陰ながら支えるウォルフ。癒しの龍ミウ。彼女達は如何言う道を歩もうとするのか。また、憑依よりしろを得た魔王は此れから何を為そうとするのか。村の周囲に何故古龍が沢山居るのか？問題はまだ解決しておらず、また、疑問も数多く起こっている。更に、「火山」で見えた存在は？

時が其の答えを持って来てくれるかも知れない……。

見えない恐怖、火山地帯での死闘？（後書き）

ミドリ「な、なんか、けつたいな話やな。」

サクラ「襲われた女子が可哀想やったわ……。おなこ」

ミドリ「で、でも、助かったんやろ？」

サクラ「あれを助かった、と言っんやるか……。」

ミドリ「うちらではわからへんな……。」

サクラ「そうやな……。そこでや！」

ミドリ「どうしたんや？姉さん。」

サクラ「解説者に来て貰ったんやで。」

ミドリ「おお！其れは有難いやな。」

サクラ「其れではどうぞ！」

？「宜しく頼むぞ。」

ミドリ「あれ？名前の所が……。」

？「まだ決まっていなそうだ。」

サクラ「成程。で、聞きたいんやが、魔王ゲイフリオンが取り付いた女子おなこは如何

なるんや？」

？ 「今は、奴に利用されている、と言う処だな。ただ、彼女の思いが力に反映されるので、思いに反する行為は魔王も簡単には出
来ないだろうな。」

ミドリ「成程ねえ。ゲイフリオン魔王さんも大変なんやな。」

サクラ「強いけども、自由には出来ないと言ったところるか？」

？ 「良い表現だな、まあ、そんなものと思えば良い。」

ミドリ「今日はどうも有り難うでしたあ。又宜しゅうに。」

サクラ「今後とも宜しゅうに。」

？ 「ああ、宜しく頼む。」

ミドリ「多少は分かったのう。」

サクラ「そうやな、では次回予告と行こうか！」

ミドリ「ほいさ。次回「二人のミウ？！」やで。」

サクラ「如何言うことや？ま、まあ楽しみにしたってやあ。」

ミドリ「ほなまたあ。」

サクラ「又来週。」

汝^{なんじ}の赴^シく処^レにも神龍^{シヤイレオン}の加護^{カゴ}があらん事を……

二人のミウ?! (前書き)

ミドリ「ど、ど、ど、如何言うことや?!」

サクラ「落ち着かんかい、ミドリ。」

ミドリ「此れが落ち着いておられるかいな!」

サクラ「いや、そうは言ってもやな……。」

ミドリ「うちは真相究明委員会を立ち上げるんや!」

サクラ「なんか大仰やな……。」

ミドリ「うちが、実態を暴いてやるんやで……むふふふ。」

サクラ「何やら、ミドリまで妖しゅうなってもうたわ……。」

ミドリ「真実は一つ! 犯人は御前だ!」

サクラ「其れ、違う番組やで……。」

作者「あゝ……本編をどうぞ。」

二人のミウ?!

小説 蓬の旅（モンハンFF）
第十七章 二人のミウ?!

（前回より約二週間程経った蓬の家にて）

何時もの様に朝日が部屋に差し込み始める。其れにより、蓬の家では、一日が始まる。何時もの様に、ミウが食堂の方から蓬の部屋へと入ってきた。

そして、蓬が寝ているベットに向かい、蓬の衣服を飛び上がって銜え引つ張る。そして、其の尻引き摺ろうとするが、体重差の為にミウの方が引つ張られてしまう。そうしている内に、

「ん……。あ、ミウ、お早う。」

蓬は目を覚ます。其れに答える様に、

「みう!」

ミウはそう鳴くのであった。そんなミウの頭を撫でながら蓬は、

「貴女も、言葉が喋れたら、もっと意思の疎通が楽に為るのにね。」

ふと、そう言っていた。

「みう？」

ミウは、答える様にと、疑問の様にと取れる鳴き声をしていた。

「お、もうこんな時間なのか。お早う蓬。」

そう言いながら、隣でゾフィーが目を覚ます。蓬はゾフィーの方を向き、

「お早うゾフィー。今日も良い天気みたい。」

そう言いながら、軽くゾフィーの頬にキスをした。いきなりの其の行動に、ゾフィーは、やや顔を赤らめて硬直してしまう。

「お、今日もミウが起こしたんだニヤ。朝食は出来てるのニヤ！」

食堂からウオルフがやってきて、蓬達にそう言う。其れに答える様に、

「有難う、ウオルフ君。」

「みう！」

蓬とミウがそう返事をする。ゾフィーは暫く呆けていた。其処へウオルフがやってきて、

「如何したのニヤ？低血圧か何かかニヤ？もしかして、「女の子の目」とか言う奴かニヤ？」

呆けていたゾフィーを心配してそう言っていた。ゾフィーは漸く正気に戻り、

「ああ、済まない。少し寝ぼけていたようだ。分かった、食堂に向かうよ、有難うウォルフ。」

そう言つて、ベットから起き上がって食堂へ行った。ウォルフは、

「二人の間はまだまだこれからみたいだニヤ。」

実はこつそりと様子を見ていたので、そう言つのであった。

朝食を食べながら、今日、何をするかと言う話に為っていた。

「そうだニヤ。蓬、ロイさんの所に行つて、食材を少し分けて貰つて来てくれないかニヤ？」

ウォルフがそう言う。家の食料の在庫が少なくなっているからであつた。其れに答えて蓬は、

「あ、うん。分かつた。どれ位貰つてくれば良いのかな？」

そう聞く。其れに答えてウォルフが、

「そうだニヤ……。穀類系が……。」

と、何処かの奥さんの様な会話が其処では始まっているのであつた。そんな様子を微笑みつつゾフィーは朝食を食べながら見ていた。一通り話し終り、

「分かったわ。じゃああたしはそうするね。ゾフィーは如何する？」

蓬がゾフィーにそう聞いてきた。いきなり話題を振られて、ゾフィーは、

「あ……俺か。そうだな、取り敢えず部屋の掃除でもしようかな。急遽俺が邪魔する事に為ったのに、部屋の掃除も一回もしてないから、何処に何があるのか知りたいのもあるからな。」

やや、焦りつつも、そう答えていた。蓬は、

「そう、分かったわ。ミウはゾフィーと一緒に居てね。」

ミウにそう言う。ミウは、

「みつー！」

そう答えた。そうして、朝食へと全員は戻り、団欒が始まるのであった。

朝食が済み、蓬はロイの元へ行った。ウォルフは台所でせっせと後片付けをしている。ゾフィーは、寝室兼自室（蓬と兼用だが）と為っている部屋の掃除を始めていた。

「暫く家を空けていたから埃が溜まっているな。」

そう言いながら、棚等を掃除して行く。ミウは、其の様子を見ながら、辺りをウロウロしていた。

「みつー。」

「すまないな、ミウ。今は少し相手が出来ないんだ。少し待っていてくれ。」

ミウが強請っているのを聞いてゾフィーはそう言っていた。ミウは、

「みう！」

そう答えて、台所へと向かう。其の様子を見つつ、

「俺も、蓬とミウの様に、一緒に居る存在が居ると良いのかもしれないな。」

ふと、そう言っていた。そんな折、カランと何かが床に落ちる音がした。

ゾフィーは其れを確認する。どうやらペンダントの様だった。

「む、落としてしまったか。壊れては無いだろうな……。」

心配になり、ゾフィーはそう言いつつ、ペンダントを拾い上げる。そして、傷が無いか確認を始める。

其のペンダントは、意匠も綺麗だったが、中央にある大きな宝石に目が留まった。光に当てると様々な色に変わり美しい色合いを見せる。

ゾフィーは、そうやって其の綺麗な色合いを見つつ、

「まるで、ミウの瞳の様に綺麗だな……。こんな色と迄は行かなくても、可愛い存在が欲しいものだ。」

そう言いながら、其のペンダントを日の当たる棚に置いた。

その時……。

『願いは聞き届けた。相応しき者を授けよう。』

何処からともなく、そんな声が聞こえてくる。ゾフィーは周囲を巡らしながら、声を存在を探したが見つからなかった。

そして……。

ペンダントから、眩しい迄の「光」が発せられた！ゾフィーは手で顔を覆う。

「な！一体何が……。」

そう言っていると、ゾフィーの足元に、何かが現れているのが分かった。其れは、ゾフィーに近づき、

「みゅー。」

そう鳴く。そして、ゾフィーに擦り寄った。

事態が理解できずに、ゾフィーは立ち尽くしていた。そんな折、台所から、ウォルフとミウがやってくる。

「如何したのニャー？何か声が聞こえたみたいだニャ？」

「みゅー？」

そう言っていた。そして、

「みゅー！」

其の質問に「其れ」が答える。ウォルフとミウは目を丸くして、

「この子は如何したんだニヤ?!」
「みう?!」

新たに居る「其れ」を見てそう言った。「其れ」は、ミウそっくりの姿をしていた。只、瞳が、ゾフィーの様に、美しい緑色をしているのであった。

「みゅー。」
「みう。」

ミウと「其れ」は、意気投合して何やら話をしている様であった。ゾフィーは呆気にとられてその様子をボーっと見ている。ウォルフは、

「何かあったみたいだニヤ。突拍子もない事でも起きてる様だニヤ。」

そう言った。そう言われた時点で、漸くゾフィーは我に返り、

「あ、ああ……。其処のペンダントを見て、ミウの事を考えててだな、俺にもそんな存在が欲しいなと、言ったら……。」

そう言って、「其れ」を眺めていた。ウォルフが、

「成程ニヤ。あのペンダントは蓬の初めの持ち物だったから、シャイレオン神龍と関連のある物かもしれないニヤ。然し凄いのニヤ。」

そう言って、ミウ達を見ていた。

「みゅー!」

「みう！」

何やらミウ達は、色々言い合っている。ゾフィーは苦笑しつつ、
「何を言ってるか分ければ、更に交流が出来るんだがなあ……。」

そう言っていた。ウォルフが、

「其れが簡単に出来れば苦労はしないのニヤ。ザンクトケーゼザクトケーニギン聖王や聖王妃なら兎も角……。」

そう言う。ゾフィーが、

「簡単ではないかもしれないが、やはり、伝え合いたいな。」

そう、感慨深く言った。すると……。

『造作も無い事だ。我等一族の言葉を解せる様にしよう。』

いきなり、そんな声が聞こえる。ゾフィーと、ウォルフは驚く。

「何だ今のは？さっきも聞こえたが……。」

「今のは如何言う事だニヤ？」

二人はそう言っていた。そんな時……。

「成程。ミウちゃんは、頑張っているんですね。」

「ボクはまだまだだよ。中々蓬の手伝いが出来なくて……。」

そんな声が聞こえて来た。ゾフィーとウォルフの二人は驚いて、

ミウ達に顔を近づける。其れに驚いて、ミウ達は、

「うわ！吃驚しますですう。いきなり大きな顔を近づけたら駄目ですう！」

「び、吃驚したあ……。二人とも如何したのお？」

そう言っていた。ゾフィーとウォルフは顔を見合わせて、

「聞こえたな。」

「聞こえるニヤ。」

そう言った。ミウ達はキョトンとして、

「変な二人なのですう。」

「だねえ…如何したのかな？」

そう言っていた。ゾフィーが声を掛けて、

「あゝ。二人ともちよつといいかな？」

そう言う。ミウ達は答えて、

「何ですか？」

「はい。何でしょう？」

そう聞いてくる。ゾフィーは、一つ生唾を飲みながら、

「今、俺達は御前達の言葉が分かるんだが…。」

そう言った。ミウ達はケロツとして、

「其れは当然ですう。」

「言えるように為ったんですよ。」

そう答えた。ウォルフが、

「そんなので、良いのかニヤ……。」

そう言っていた。ゾフィーが、

「処で、君は何と言う名前なのかな？」

ミウで無い方の子にそう言った。「其れ」は答えて、

「あたしはまだ名前が無いのですう。ゾフィーが付けて下さいですう。」

そう答えた。ゾフィーは苦笑して、

「俺が名付け親か……。そうだな……ミウが居るし、「ミュー」で如何だ？」

そう言った。ミューは喜びながら、

「有難うですう。此れからあたしの名前はミューですう。」

そう言った。ミウが、

「おめでとつお、ミュー。」

そう言う。そんな二人をゾフィーとウォルフは微笑ましく見ていた。

「只今あ！ふいゝ、ロイさん一杯くれたよお。ウォルフ君台所に置いたんで良いよねえ。」

元気に扉を開けて、帰って来る蓬の声が、聞こえて来た。

「お帰りですう！」

「お帰りの、蓬。」

ミウとミューはそう言って部屋から飛び出す。そして……。

「ええええええ？！」

蓬の叫び声が聞こえるのであった。ゾフィーとウォルフは、顔を見合わせて苦笑していた。

（其れから暫く経って、蓬の家の裏庭で）

「リュストウング R?stung（武装）！」

蓬が其の「言葉」を述べる事で、「力」の一部が作用し、蓬とゾフィーに、シャイレオン神龍からの武装が渡される。二人に、白く輝く盾と矛が与えられた。

「よし、これで良いわね。」

「ああ。蓬、いいんだな。」

蓬に答えてゾフィーが言い、其れに更に答える様に蓬が頷く。

「では、行こうか！」

そう言っつてゾフィーは武器を構えた。蓬も構える。ウォルフとミウ、ミューは家の傍で其れを見ていた。

蓬がゾフィーに斬りかかる！ゾフィーは其れを盾で凌ぐ。そして、受け流した後で、槍を水平に薙いで蓬を叩こうとする。

蓬は其れを屈む様にして避ける。そして、起き上がって太刀で薙ごうとした。

「これで！」

蓬がそう言う。ゾフィーは、

「させん！」

そう言っつて、今度は盾で蓬を薙ぐ。蓬は強かに打ち叩かれ、

「きゃあ！」

と叫んで地面に転がる。ミウは其れを見て、

「蓬い！頑張れえ！」

そう言っつていた。蓬は、数回横転した後、逆に其の勢いを使って起き上がりながら太刀を構え、

「まだまだ！」

そう言つて、斬りかかる。ゾフィーは、其れを盾で再びかわす。其れを見ていたミューが、

「ゾフィーも頑張るのすう！」

そう応援する。蓬とゾフィーは笑顔で、

「何だか、こそばゆいね。」

「ああ、でも嬉しいな。」

そう言つていた。そう、自分を応援する者が居る。其れだけで力が沸いて来るのであつた。

二人の戦いは白熱していた。と、同時に、ミウとミューの応援も白熱する。

「頑張れえ！」

「負けたら駄目ですう！」

そう応援していた時……。ウオルフが、

「ちょっと待つのニヤ……。」「

吃驚しながらそう言つていた。蓬と、ゾフィーは手を止めてウオルフの方に向く。

「如何したの？ウオルフ。」

「何かあつたのか？ウオルフ。」

二人はそう聞いた。ウォルフは、

「此れを見るの二ヤ。」

そう言って、ミウやミューを指した。然し、其の方向は……。

「ええええええええええ！」

「ど、如何したんだ御前達！」

其処では再び叫びが上がっていた。何故言われたのか気づかないミウとミューは答えて、

「え？如何したのお？」

「何ですう？」

そう言っていた。蓬は、

「あんた達浮いてるわよ……。」

やや、呆け気味にそう言っていた。ウオルフやゾフィーはうんうんと頷いている。そう言われて、

「あら、本当だあ。」

「あたし達もやりましたねえ。」

と、上機嫌に為っていた。ゾフィーが苦笑しながら、

「そう言う問題なのか……。」

と、言っていた。ウォルフも、

「もう、何でもありだニヤ。」

やや諦め気味でそう言っていた。

其処では、新しい発見の驚きと、新たな仲間の獲得による喜びとがあった。

（「砂漠」灼熱で砂が吹き荒れる場所で）

「其れ」は「火山」から「砂漠」に到着し降り立った。

「ブリュンヒルデ居るか？」

「其れ」はそう言った。砂漠にある岩場の影から、そう言われた者が出てくる。

「何か御用かしら？ジークフリート。」

ブリュンヒルデと言われた者がそう答える。ジークフリートと言われた者は、こう言う。

「シャイレオン神龍の関係者を見かけた。恐らく、ゲイフリオン魔王が策動し始めたのである。
う。」

其れに、ブリュンヒルデは、やや顔をしかめながら、

「そう……又始まるのね。今回は如何するの？ザンクトケーニヒ聖王様は。」

そう言った。苦笑しながらジークフリートが言う。

「言うな。御前だって、ザンクトケーニギン聖王妃だろうに。そうだな……。今回は、
関係を持ってみるか。話は通じそうだしな。」

其の言葉を聞いて、ブリュンヒルデは、微笑みつつ、

「なら、機会を見て関係を持ちましょうか。最近、ハンター達が蠢
いて多少移動しにくいけれど。」

そう言った。ジークフリートは答えて、

「ああ、そうしよう。そう言えば、一行の中にウォルフガングが見
えたな。」

そう言った。ブリュンヒルデは、

「なら、話は進みそうね、彼ならあたし達は知っているから。」

そう言った。ジークフリートは、微笑みつつ、

「そうだな、楽しみだよ。」

そう言っているのであった。

蓬のペンダントをキーにして生まれたミュー。そして、言葉を解し始めた二人。^{ミューミュー}更に、浮遊まで始める。この事は一体何を示すのか。更には砂漠で会話をする二つの存在。^{シャイレオンゲイブリオン}神龍や魔王を知っている彼等は一体？更に、其れを知っていると思われるウォルフガング。謎は謎を呼ぶ。其の答えは、やはり時の彼方にあるのであろうか……。

二人のミウ?! (後書き)

ミウ 「そ、そう言う事で……。」

ミュー 「あたし達も登場なのですよ。」

ミウ 「えっと、でもおおおお。」

ミュー 「もう!ミウはもう少しハッキリ言っただ方が良いですよ。」

ミウ 「ミュー……。そんな事言ってもボク……。」

ミュー 「あゝ、もう!世話が焼けるですよ!」

ミウ 「ああああ!ミューちゃん、やめてえ!」

ミュー 「此処をこっしてえ……。」

ミウ 「や、やだああああ。い、いやああああ!」

ミュー 「気持ち良くして上げますうう。」

ミウ 「だ、駄目ええええ!」

作者 「何してるの二人共?」

ミュー 「ミウを気持ち良くして上げてるですよ。」

ミウ 「ミューに襲われてたんですよ。」

作者 「あゝ……。ミウ、頑張れ。」

ミウ 「そ、そんなああああ！」

ミュー 「さあさあ、続きをするのですう。」

ミウ 「いやああああああ！」

作者 「頑張れミウ……。さて、次回は……。」

聖王 「我らの登場だ。」

聖王妃^{ギン} 「次回^{ザンクト}「S a n k t K ? n i g と S a n k t K ? n i g^{ケニヒ}
i n 「聖王と聖王妃」」よ。お楽しみに。」

聖王 「我ら二人を書くとな長くなるな。」

聖王妃 「そうね、まあ、次回は頑張らしましょうか。」

汝^{なんじ}の赴^{シヤイレオン}く処にも神龍の加護があらん事を……

ミウ 「え、えつとお……………」

ミュー 「ミウ、如何しましたですう？」

ミウ 「あ、いや…ボク、改まってこう言つのは慣れてないから…」

ミュー 「じゃあ、あたしがミウの気持ちを紛らわせてあげるのですう。」

ミウ 「え？！いや…ちょっと待ってえええ？！ミュー、駄目だつてええええ！」

ミュー 「大丈夫。慣れたら快感に為るのですう。」

ミウ 「其れ、論点間違つてるよおおおお！ああ、駄目だつたらあ！」

ミュー 「可愛いですう。あたしが可愛がつてあげるのですう。」

ミウ 「だ、駄目だつてばあ！あ、やだあ、其処駄目え！」

蓬 「何してるの二人とも？」

ミウ 「ああ、蓬、助けてえ！ミューに襲われてるのぉ！」

ミュー 「いいええ。ミウとじゃれ合ってるだけですう。」

蓬 「って事は、あたしとゾフィーと同じって事よね。」

ミウ 「ちょ！待ってえええええ！蓬いいいいい！」

ミュー 「さあさあさあ！気持ち良くなるのですう。」

蓬 「あたしもゾフィーの処に行こうっと」

ミウ 「そ、そんなああああ！」

作者 「そんな感じで本編をどうぞ。」

小説 蓬の旅(モンハンFF)
第十八章 S a n k t K ? n i g と S a n k t K ? n i g
i n 「聖王と聖王妃」

(前回の次の日の朝、蓬の家にて)

「蓬い！朝だよ。起きて〜。」

「ゾフィーも起きるのですう！」

蓬の家の朝は賑やかに為ったようだった。そう、二人の可愛い龍が、主人達を起こしにやってくる。二人は、主人達が被っている布団を一生懸命に払い除け、主人達を引っ張ろうとした。が……。

「あらあ……。」

「おやおや…微笑ましいですう。」

自分達の主人達を見て、二人はそう言っていた。

当の主人達、つまり、蓬達は、ゾフィーに蓬が抱きつく形でぐっすりと寝ているのであった。そんな二人を、二人の龍は、ゆっくりと眺めていた。

「おや？ミウにミュー、蓬達は如何したのニヤ？」

ウォルフが台所から、様子を見る為に、部屋に入ってきて来る。ミウ

とミューは、「しーっ」と囁く様^{なや}に言つて、ウォルフに静かにする様に促した。ウォルフは其れを悟り、ベットの傍に近づく。

「おや……此れは…先にゾフィーが目覚ますと楽しそうな状況だニヤ。」

ウォルフは、悪戯小僧の様に、笑顔を見せつつそう言っていた。其れを聞いたからなのか、ミウとミューは、ゾフィーの方へ移動し、ゾフィーを弄り始めた。

「ん……ああ…もう、朝か……。」

ゾフィーが目覚まし、起き上がろうとする。が、自分を捕らえるものがあつた。

其の方向へ眼をやる。そして……、

「なあ！……。」

そう、叫んだ後、ゾフィーは顔を真っ赤にして、暫く止まってしまっていた。蓬が自分に抱き付く様にして寝ていたからである。そして、一つ溜息をつき、蓬の頭を撫でた。

「御熱いですねえ……。」

「わくわく……。」

「楽しみだニヤ。」

傍から、こんな声が……。ゾフィーが顔を向けると、ミウとミュー、そしてウォルフが二人をまじまじと見ているのであった。

「ちょ！御前達……。」

ゾフィーは顔を更に真紅に染め上げてそう言っていた。見物客の三人はニヤニヤと見ている。そして、

「続きはしないのかニヤ？」

ウォルフが、さり気無く虐める様にそう言った。

「い、いや………続きって御前………こんな状況で出来る訳無いだろう！」

語調を強め、ゾフィーがそう言う。

「と、言う事わあ……。」

「あたし達が居なければ、ですう。」

「ヤッテル、と言う事だニヤ？」

意地悪そうに、三人の人為らざる者が言う。ゾフィーは、

「くっ……。分かった……。其処は否定はしないが、だからと言って今はしないぞ！」

観念したようにそう言った。そんな折、

「あ、あれ？ゾフィーお早う。………あ、ミウ達もお早う。如何したの？」

そう言いながら蓬が目を覚ます。

「何でも無いですよおお。」

「お早うですう。」

「蓬、起きたら朝ごはんなのニヤ。」

三人の人為らざる者は、普段通り（？）に言いながら、蓬にそう言うのであった。其の豹変振りを見て、ゾフィーは、

「くっ……俺は、こうやって遊ばれるのかな……。」

とまあ、そんな事を自問するのであった。蓬はベットから起き上がろうとして、

「あ、忘れてた。」

そう言う。ゾフィーは蓬の方を向いて、

「ん？何をだ？蓬。」

そう言った。その時、蓬の唇が、ゾフィーの其れと重なる。暫く二人は其の俛で居た。

「うわあああああ。」

「御熱いですねえ。」

「イイコトだニヤ。」

三人の人為らざる者は、熱い二人を見ながらそう言っているのであった。蓬は、その後立ち上がり、

「じゃあ、先に食堂に行ってるね。」

そう言って、食堂に向かって行った。其れについて行く様に、ミ

ウやミューは食堂に向かい、其の後ろをウォルフが付いていく。
ゾフィーは、ボーっとしたまま、ベットの上で座り込んでいた。
暫くして、自分の唇に手を当て、

「えっと……。一体何が……。」

自分に起きた状況が暫く理解出来ず、そうやって呆けているのであった。

（数日後、「砂漠」のベースキャンプにて）

蓬達は「砂漠」に来ていた。今回は討伐の依頼ではなく、個人的な用事で、主に素材集めの為に来ているのであった。

主な狙いは食材。アプケロスから得られる生肉。サボテンから採取できるスライスサボテン。虫取りで取れるスパイスワームなどである。

つまり今回の旅は、一家の食事情をより良くする為でもあった。

「準備はいいぞ、蓬。」

「大丈夫うー。」

「行けますですう。」

「僕は問題無いのニヤ。」

一行は蓬にそう言った。蓬は頷き、

リュウストーン
「R?stung(武装)」

そう言う。蓬とゾフィーの体の周囲に光が起こり、次第に収束して行く。そして、形を形成し、何時もの様に、鎧と武器を提供していた。

「よし。これで良いわね。では、食材探しに行きましょう!」

蓬がそう言う。皆は、

「ああ!」

「はあい。」

「はいですう。」

「分かったのニヤ!」

そう元気に答え、一行は「砂漠」へ採取に旅立った。

(「砂漠」採取に勤しむ蓬達が居る場所にて)

「あ、此処にもあるう。」

「ほんとですう。ゾフィー此処にもあつたですう。」

「お、流石に上から探してくれると早いな。」

ミウとミューの二人が浮遊して上空からサボテンを見つけては、そう言う場所を教える。お陰で蓬達は、着々と素材を集めている

のであった。

「この調子なら、早くに帰れそうね、ウォルフ君。」

「そうだニヤ。まあ、鞆に入るだけ集めれば取り敢えずは十分だニヤ。」

蓬はウォルフとそんな事を会話していた。

「砂漠」では、何時もの様に灼熱の日差しが砂に注ぎ、熱気を帯びていた。然し、今日は不思議な事に、ゲネポス等のモンスターが見当たらないでいた。

周囲を見つつ、ウォルフが、

「やっぱり変だニヤ。」

そう言う。蓬がそう言うウォルフに気づいて、

「如何かしたの？ウォルフ君。」

そう聞く。ウォルフは、

「モンスターが見当たらないのニヤ。普通、少なくともガレオスやゲネポスは居そうなものなんだがニヤ。」

そう言った。蓬は暫し周囲を見た後で、

「ふうん。あたしはまだ余り来た事が無いから分からないけれど、ウォルフ君がそう言うなら、何か起きているのかもね。」

そう言った。そう、何か起きているなら良いが……。もし、此れから、何かが起こるのであれば……。ウォルフの頭に、些か、嫌な考

えが過ぎる。頭を少し振った後で、

「まあ、先に採取をするのニヤ。」

そう言つて誤魔化しながら採取をするのであつた。

（「砂漠」、「彼等」の休み場所）

聖王ジークフリートと聖王妃ブリュンヒルデは、「気配」を悟つた。そして、

「どうやら、向こうから来てくれた様だな。我等に会う目的では無さそうだが。」

「そのようね。なら、これから会いに行くの?」

そう言い合っていた。更に、

「そうだな……。ウォルフガングが居るだろうし、行ってみるとするか。」

「分かつたわ。」

そう結論付けた。そして二人は、休み場所から出て、翼を羽ばたかせて上空へと舞い上がっていった。

其の姿は優美にして莊嚴。太陽が彼等を見事に彩り、其の姿は正に「聖なる」者であつた。

（「砂漠」オアシスになっている湖の傍にて）

蓬達一行は、オアシスに為っている湖がある場所で虫集めをしていた。

「お、此れは何だろう？」

蓬が初めて手に入れた虫を見てそう言う。ゾフィーが其れを見て、
「其れは、のりこねバツタという奴だな。俺達は使わないが、武器や防具で使うから、持って帰って問題ないだろう。」

そう言った。蓬は其れを聞いて、鞆に仕舞いこむ。
そんな折、

「蓬いい！空から何か来るよおお。」

「ゾフィー！二頭の大きなモンスターが来ますですう。」

空から、ミウとミューがそう言いながら降りてきた。其の声に、
ウォルフも駆けつける。

「ま、まさか……古龍かニヤ？！」

背負っていた双剣を準備しつつウォルフはそう言った。そう言っ

ている内にも、其の二体の姿は更に大きくなりながら此方へと向かっていった。

「取り敢えず、ミウとミューは、其処の木の陰で避難しておいて。もし、古龍なら、ウォルフ君に頼まないといけないかもしれないし。」

蓬はそう言う。其れに答え、

「じゃ、じゃあ隠れますううう。」

「皆頑張るのですう。」

「分かったニヤー！いざと言う時は僕が出るのニヤー！」
「分かった、蓬。」

それぞれがそう言い、各自が行動を始める。

其の大きな存在は、蓬達の上で止まり、静かに舞い降り始めた。そして、ふわりと砂を殆ど舞い上げることなく可憐に着地をする。其の姿は、モンスターと言うよりは神々しい姿を映し出していた。

「な……炎龍王テオ・テスカトルに炎龍妃ナナ・テスカトリ？！書物では見たが、まさか本物がこんなに身近に居るとは……。」

ゾフィーは、出会った者を見てそう言っていた。ウォルフは、

「おや？誰かと思えば、ジークフリートに、ブリュンヒルデではないかニヤ。」

そう言っていた。其れに答え、

「久しぶりだな、ウォルフガング。」

「お久しぶり、約八年ぶりって処かしら？」

そう言っ、ウォルフに挨拶をしていた。蓬が、驚きながら、

「えつと……。ウォルフ君知り合い？」

そう聞く。ウォルフは、

「そうだニヤ。以前一緒に闘ったこともある人（？）なのニヤ！彼が炎龍王テオ・テスカトルと呼ばれてもいるけど、僕達は、^{ザン}San^{クト}kt K?nig「聖王」ジークフリートと呼んでいるのニヤ。そして、彼女が炎龍妃ナナ・テスカトリと呼ばれてもいるけど、僕達は、^{ザンクト}San^{クト}kt K?nigin「聖王妃」ブリュンヒルデと呼んでいるのニヤ！」

そう言っ二人を紹介するのであった。巨大な二人の古龍の間に、ポツンとアイルーが立っ、会話をしている。其の状況を見て、蓬と、ゾフィーは啞然としていた。

「些か、驚かせてしまった様だな。」

「突然でしたからね。」

二人はそう言っ。其の声に、蓬達は漸く我に歸り、

「あ、えつと。ウォルフ君の知り合いっ事だけれど。今回はどんな用事なんでしょうか。」

そう言っ。蓬に顔を向け、微笑みながら（彼等からすれば、だが）答えて、

「ああ、済まないな。御前達シャイレオンが神龍ゲイフリオンの関係者であると分かったので、魔王に対抗すべく協力したい事を伝えに来たのだ。」

そう、ジークフリートは言った。其れに加えて、

「そして、私を含め、その様に考えている者達は古龍の間にも大勢居る事を伝えにね。」

ブリュンヒルデがそう言い含める。事態が、壮大に為り、蓬は理解出来ずに居た。其の様子を見て、

「まあ、すぐ理解しろとは言わぬ。只、我等も御前達の仲間であり、敵対はしない事だけは伝えておこうと思つてな。勿論、我身边を害する者に関しては、人間であろうと何者であろうと、我の存在と尊厳の為に戦うがな。」

ジークフリートはそう言うのであった。其れに付け加えるように、

「出来るなら、私達のような仲間を増やし、魔王ゲイフリオンに対抗出来るように頑張つて下さいな。私達は、この様な姿故に、余り人とは交流が出来ませぬから。」

ブリュンヒルデがそう言った。蓬は、

「はい。直ぐ出来るとは思わないけれど、頑張ります。其れに、其の…。」

そう言いかけて言葉に詰まる。ジークフリートが、

「如何した？我等に遠慮は要らぬ、思う事を話すがよい。」

そう言う。意を決して、蓬が、

「あの！お二人は、凄く素敵で…カッコいいと思います！其の、神々しいと言うか…」

顔を赤くしてそう言っていた。ウオルフが、

「だから、二人は、ザンクトS a n k t（聖）の称号が付くのだニヤ。」

自慢げにそう言っていた。苦笑しつつ、ブリュンヒルデが、

「まあ、私達が言い出したものではありませんけれどね。」

そう言った。ウオルフが、

「まあ、其れはそうだがニヤ。でも、二人は其れだけの事をしてると思うのニヤ。」

そう力説する。其れに答える様に、ジークフリートが、

「まあ、我等を持ち上げてくれるのは嬉しいが。ウオルフガング、御前も「勇者」である事をもう少し誇りに思えば良いものを。アイルーという姿だけで蔑まされるのは惜しいと言うものだ。」

そう言った。其れに答え、ウオルフが、些か胸を張りながら、

「其れは御互い様だニヤ。」

そう言うのであった。其処では旧友の間で笑いが起こっていた。

其の様子を見つつ、ゾフィーが、

「素敵な間柄だな。」

そう、ポツリと言っていた。蓬が、其れに答え、ゾフィーの肩に身体を寄せながら、

「そうね、あたし達ももっと進展したいんだけど。」

そう言っていた。

賑やかな様子を見て、

「あのおおお。」

「楽しそうです。」

ミウとミューがやってきた。二人を見て、

「ほう！此れは又可愛いものだ。」

「素敵ね。一人欲しくなりそう。」

ジークフリートとブリュンヒルデはミウとミューを見てそう言っていた。そうして、其処では、旧友と新たに出会う仲間との、新しい始まりが起きようとしていた。

そんな中で、ゾフィーは、顔を真紅に染め上げて、立ち尽くしていた。蓬に答える事が出来ずに。

偉大な二人の聖なる者達と神龍^{シャイレオン}一族の出会い、其れを結ぶキーとなつた「勇者」ウォルフガング。そして、運命の者と結ばれる事と爲つた、女性ゾフィー。彼女達の行く手に、幸が増え、そして、混沌^{オス}に対抗できるのか。魔王の野望は阻止できるのか。更に、其の先へ進む事が出来るのか。答えを知る時の神はまだ、其の答えを教えはくれない。

ミドリ「ほのぼのした話やったなあ。」

サクラ「最近大変やったしな。こう言うものも大切やで。」

ミドリ「うんうん。然し、今後は大変やな。」

サクラ「まだ、魔王も如何してるか分からんさかいなあ。」

ゲイフリオン

ミドリ「恐ろしいのう。」

サクラ「頑張って貰うしかないわあ。」

ミドリ「そうやな。では次回予告やで。」

サクラ「次回「中級」試験、其処で出会っ古龍?!」やで。」

ミドリ「又何かありそうな感じやな。」

サクラ「まあ、頑張ってもらっただけやな。」

ミドリ「こちらは本編には出れんからのう。」

サクラ「そうやな…。さて、では又の機会に!」

ミドリ「又会いましょう。」

なんじ
汝の赴く処にも神龍シャイレオンの加護があらん事を……

「中級」試験。其処で出会う古龍?!（前書き）

作者 「はあ。前書きは如何し様かしら……。」

蓬 「さ、作者さん！前書きが始まっていますよ?!」

作者 「あら？んじゃあ……。蓬ちゃん、あたしとイイコトしない？」

蓬 「はあ？あたしと？ちょっと待ってよ、あたしにはゾフィーが……。」

作者 「またまたあ、ゾフィーは中々進展しないしさあ。此処はあたしと……。」

ゾフィー 「やめろおおお！（作者を殴り飛ばす!）」

作者 「ギャ （＂ 〃 ;） スー!」

蓬 「ゾフィー……。」

ゾフィー 「蓬……。」

蓬 「やっとあたし達結ばれるのね……。」

ゾフィー 「済まないな……俺がハッキリしないで。」

蓬 「ううん、待っていた甲斐があったわ。（作者さんの作戦通りね）」

ゾフィー「そうか……。何か、嫌な気配が？」

ウォルフ「では本編をどうぞなのニヤ！」

「中級」試験。其処で出会う古龍?!

小説 蓬の旅(モンハンFF)
第十九章 「中級」試験。其処で出会う古龍?!

(前回より約二週間ほど経った「雪山」の麓にあるベースキャンプにて)

蓬は今回「中級」試験の為に、「雪山」に来ていた。ハンターとして、より強力なモンスターを倒す依頼を受けるには、其れにあった実力を証明しなければ、受けることが出来ない決まりであった。試験は其の為に用意されたものである。

「えっと。鞆の準備は此れで良いかな……。」

蓬は、アイテムを確認しながらそう言っていた。ゾフィーやウオルフもそれぞれ自分の装備やアイテムを確認していた。

「ふむ。俺の方も全て揃っているな。」

「僕も、準備万端なのニヤ!」

二人はそう言っていた。ミウとミューの二人は、蓬とゾフィーの頭の傍を漂うように浮遊しながら、事態を静観していた。蓬が、

「なら、武装して「雪山」に行きましょうか。今回の対象はドドブランゴだったわね。」

そう言う。ゾフィーが答えて、

「ああ、そうだったな。外見上はババコンガに似ているから、見た目ではそう見間違えることは無いだろう。色は「雪山」に相応しく白いんだが。」

経験者である事を^{ほの}仄めかしながらそう語る。蓬は其の言葉に頷いてから、

「R? ^{リュストウング}stung(武装)！」

そう叫ぶ。其れにより、二人の身体の周囲は輝き始め、何時もの^{シャイレオン}様に神龍の武装を装着していた。身に着いた装備を確認しながら蓬は、

「よし！今日も問題ないわね。此の前以上に使いこなさないと。」

そう言う。ゾフィーはやや苦笑しつつ、

「まあ、そうだな。然し、今回は動きが早い敵だ。バサルモスの様には行かないし、ドドブランゴは、部下としてブランゴを呼ぶからな。集団戦の練習にも為るだろう。」

そう言った。蓬は其の言葉に、

「分かった！立ち回りは気をつけるね。ウォルフ君もサポート宜しく。ミウやミューは危ないときは上空に逃げてね。」

元気にそう答えた。其の言葉に、ウォルフ達は、

「分かったのニャ！いざと言う時は任せるのニャ！」

「はい。怖かったら直ぐに逃げます。」

「分かりましたですう。」

それぞれが、そうやって元気に答えるのであった。其れを見届けてから、蓬は、片手をあげつつ、

「では！「中級」試験完了に向けて出発！」

そう、氣勢を上げる。全員が其れに応え、

「よし、頑張ろう。」

「行くのニャ！」

「頑張るううう。」

「行くのですう。」

そう言うのであった。そうして一行は「雪山」に入ってしまった。

（「雪山」中腹部。山が切り崩れて広くなった場所で）

ドドブランゴは、何時もの様に部下であるブランゴを引き連れて、縄張りである「雪山」を散策していた。餌を探すのと同時に、縄張りを荒らす邪魔者を排除する為である。時折雪を掘り分けて、餌を見つける。ドドブランゴの姿を見ながら、ブランゴ達も自分達の欲

求を満たす為に活動をしているのであった。

そんな中に、蓬達は到着する。一頭の大きな白い毛むくじゃらな巨体。それに付き添うように約十体もの白い動物達が付きまとっていた。

「うは…結構多いのね、ドドブランゴの一家って。」

其れを見つつ、蓬がそう感想を述べていた。ゾフィーが、

「まあ、あれ位が普通だな。更に呼び出すときもあるぞ。」

そう付け加えた。ウォルフが其れに続いて、

「雑魚はいざと言う時は僕が引き受けるのニヤ。蓬はとにかくドドブランゴに集中するのが良いのニヤ。」

そう言った。蓬は其れに頷きながら、

「うん。分かった。まずはそうする。ウォルフ君援護宜しく。ニウヤミューは、危険と感じたら上空に逃げてね。」

そう答えてから、ドドブランゴに向けて歩みを始めた。それに氣付いたブランゴの一人が蓬に対して威嚇の声を上げる。それに連鎖する様にブランゴ達が反応をはじめ、最終的にはドドブランゴが氣付いて大きな咆哮を上げた。

防具【神龍^{シャイロン}】の効果により、咆哮自体の効果は受けなかった蓬達は、其の俣ドドブランゴに向けて斬り込み始める！ウォルフも今回は烈風双剣【迅雷・轟雷】を既に手にしていた。

「行くわよー！」

蓬はそう言っ、閃光玉を上方に投げる。

！！

其れは、炸裂して周囲に強力な閃光を発した！其れによりドドブランゴやブランゴ達は一時的に視力を失う。其処へ、ゾフィーがランスを構え衝き込んだ。

「まず、初手は俺だ！」

ランスはドドブランゴの右肩に直撃する。ダメージを増やす為にゾフィーはやや捻りながら引き抜く。其の引き抜くのに併せる様に蓬が太刀を衝き立てた。

「今度はあたし！」

太刀は、ドドブランゴの左肩に食い込んだ。蓬もダメージを増やす為に些か捻るようにして太刀を引き抜く。両肩を痛めたドドブランゴは、徐に立ち上がり、再び咆哮を上げる。そして、強力な跳躍力で後方に後ずさる。其の口には、怒りを表す、白く激しい息が漏れていた。

「怒り出したか。蓬、注意しろ！」

ゾフィーがそう言う。蓬は頷いて、ゾフィーとは異なる軸線へ移動する。

ウォルフガングは双剣を構えて、ブランゴと戦おうとしていた。ふと考えた後で、こう言う。

「よし、今日は一気に決めるのニャー！迅雷60%で行くのニャー！」

其の声に反応する様に、【迅雷】の文字が発光していく。何かを理解したように、文字の上に光が走る。そして其れが終わると、ウオルフガングの身体の回りには、目に見えて分かる雷で出来た鎧の様な物が現れた。そして、

「行くのニヤ！」

そう言った瞬間！ブランゴ達の前からウオルフガングの姿が消え去り、移動の為の残像として僅かな雷光だけが残っていた。そして、雪原に殺意を持った雷光が走り抜ける！

ドドブランゴ以外の場所に、雷光の嵐が、一瞬の出来事のように文字通り、一気に駆け抜けた。流れる様に、とは、此の事を言うのである。ブランゴ達は理解出来ていなかった。其の雷光が走り抜けた後で、

「此れで、^{エンデ}Ende（終わり）なのニヤ！」

姿が現れたウオルフガングがそう言う。其の瞬間！始めにウオルフが居た起点部分から今現在ウオルフガングが居る場所に、縦横無尽に雷の波が走る！其の雷は、ブランゴを瞬く間に飲み込み、其の強力な電撃により、全身は強力に刺激され筋肉は蠕動し毛は奮い立つ、そして最後には全身から鮮血を吹き出して其の雪原にいた筈のブランゴ全てが真っ赤な血と肉の塊となって其の場に骸を晒していた。其の時間は、生唾を飲み込むほどの間……。文字通り一瞬と比喻すべき驚愕すべき情景であった。

ドドブランゴは、怒り心頭していた。手痛い攻撃を喰らい、さらには部下達が一瞬の内に葬り去られたのだ。怒らない方がある意味おかしいであろう。そして、ドドブランゴは其の巨体を雪原に居るにも拘らず驚異的なスピードでゾフィーの方へ突進する。そして、其の佯全身を捻りながらタックルをした。

「Schild（盾）^{シルト}」

無意識の内にゾフィーはそう言っていた。其の言葉により、構えていた盾の前の空間に、巨大な光の魔方陣の様な物が浮かび上がる。^{まさ}正しく、ゾフィーを守る為の「盾」とも言すべき様な。ドドブランゴは其の佯勢良く其れに突っ込んだ。

其処、つまり其の光の「盾」にドドブランゴが入った途端、ドドブランゴは動きを止められてしまう。そして身動きが出来なくなり、其の場で一生懸命にもがき始める。

始め、状況が理解できなかったゾフィーと蓬であつたが、ドドブランゴが、動けなくなつた事を理解して、二人は武器を構える。そして、

「いっけええええ！」

「喰らえ！」

蓬とゾフィーの二人はそう叫びながら、ドドブランゴの腹部と頭部に、太刀とランスを突き立てた！そして、

『Schlag（打撃）^{シュラーク}！』

二人が和する様にそう叫ぶ！其れにより、^{シャイレオン}神龍の武器である太刀とランスは、其処から強力な振動をまるで、^{みなも}水面に石を入れた時に輪が広がって行く様に発して、衝き刺さつたドドブランゴを衝き抜けて行く！其の衝撃が、ドドブランゴの身体の反対側に到達する。すると、其の体は盛り上がり、遂には耐え切れなくなり、盛り上がった場所から鮮血を大量に噴き出し始めた！二人は武器を抜き出す。ドドブランゴは、全身を貫かれ、大量の出血をしてしまった。立ち上がるうともがくが、結局其れは叶わず、雪の上に真つ赤に化粧

をして倒れ込んで行った。

暫く、其の様子を見ていた二人であつたが、ゾフィーが、

「Auf Wiedersehen（さようなら）。」
アオフ ヴィーダーシャオエン

そう言った。漸く蓬も、終わった事を理解して、ゾフィーに顔を向けて、

「お疲れ様、ゾフィー。」

そう言うのであつた。そして、其の場にウオルフガングも寄ってくる。

「お疲れなのニヤ。今回はますます使える様になつた様だニヤ。」

そう言った。蓬とゾフィーは、其れに微笑んで返す。そんな折、

「蓬いいいい。大変だよおおおお！」

「ゾフィー、又古龍ですう！」

上空からミウとミューがそう叫びながら降りてくる。一行の間に緊張が走る。

「な?!」

「又か。」

「今度は誰だニヤ？」

それぞれがそう言う。「其れ」は、全身に「風」を纏いながら、雪原、ブランゴ達が居ない綺麗な場所に降り立った。其の着地により、周囲の雪は舞い上がり、「其れ」を美しく彩る。「其れ」は鮮

やかな鉄色で、雪によつて更に際立つて美しく見えた。

「クシャルダオラ?! 鋼龍まで居たのか……。」

ゾフィーが其の姿を見てそう言う。

鋼龍クシャルダオラ。全身が金属の様に構成される特殊な鱗を持つ龍。然し、此の龍の特出すべき点は、全身に巻き起こす特殊な風にある。通常の物では此の風を突き抜けて攻撃するのはほぼ不可能で、故に防具としての役目も持つ。つまり、二重の鎧を持つ龍なのである。しかも、この風は攻撃の武器にも足りえるという厄介な側面があつた。全身が硬質の金属質に近い鱗である事もあり、非常に強い龍なのである。通常のリオレイアなどは比べ物には為らないのである。

其れは降り立つてから、蓬達一行を眺めた、そして、

「ふむ、御前達が神龍シャイレオンの一族と其の一行か。」

そう言う。其の言葉に蓬達一行は更に驚く。そして更に、

「私の名前はジルヴェスター（Silverster）と言う。神龍シャイレオンの一族なら、是非とも手合わせを御願ひしたい。」

そう言った。言われた事が理解出来ずに、蓬は、

「あ? えっと、手合わせって?」

間抜けにもそう言ってしまった。苦笑しつつ（彼らなりにはそうらしい）ジルヴェスターは其れに答えて、

「む、少し言い方が不味かつたかな? 私と神龍シャイレオンの者、一対一で勝負

がしたいと言っているのだ。」

そう言い、決闘を申し込んだ。蓬は驚いて、

「ええっ?! あ、あたしとですか?!」

そう言う。ジルヴェスターは、蓬の方に首を向かせて、

「そうか、御前が代表なのか。是非御願いたい。何、別に本気で殺しあうと言うものではない。まあ、油断すれば大怪我はするかもしれないがな。」

そう、微笑みながら（彼らからすれば）言った。蓬は、焦って、

「えっと…此の場合は如何すれば…。」

そう言っていた。ウォルフガングは其れに答えて、

「取り敢えずやると良いのニヤ。」

そう言った。蓬は驚きながら、

「ええ?! いや、ジルヴェスターさん、古龍だよ? あたしじゃ無理だって……。」

そう言う。其れに対してゾフィーが、

「いや、いけると思う。彼は本気で戦うのではなく、蓬、御前がどんな存在か知りたくて闘いたいんだと思う。まあ、単に闘うのが好きなのかも知れないが。」

そう言った、そして更に、武器を一旦置いて、蓬の手を握り、

「俺が応援している、『自分』を信じて頑張ってみる。」

蓬の瞳を見ながらゾフィーはそう言った。蓬は、暫く其の俤でいたが、頷いて、

「うん、頑張る。」

そう答えた。そして、

「分かりました、ジルヴェスターさん。其の申し出をお受けします。」

そう言う。ジルヴェスターは其れに咆哮を上げて応え、加えて、

「感謝するぞ！では、上空へ行こう。」

そう言って、飛び上がっていく。蓬達一行は呆然として其れを見る……。そして、

「いや、上空って、如何やって……。」

呆然と蓬はそう言っていた。ゾフィーやウオルフガングもどう言っているかわからず、苦笑をしていた。

（暫くして、ジルヴェスターが上空から降りてくる）

蓬達が暫く待つと、ジルヴェスターが上空から降りてきた。

「如何したのだ？早く上で戦おう。」

ジルヴェスターは何気も無くそう言う。蓬は苦笑しつつ、

「あの…あたしはまだ飛べないのですが…。」

そう言った。ジルヴェスターは、目を丸くしながら（是非見てみたい。By作者）こう言った。

「何と、まだ知らなかったのか。其れならば「フリーゲン Fliegen（飛ぶ）」シャイレオンと言うが良い。神龍の一族や縁者であるなら飛翔できるはずだ。」

其れを蓬は聞いて、

「フリーゲン Fliegen（飛ぶ）！」

そう言う。すると、蓬の周囲に風が纏い始め、ゆっくりと浮かび上がった。初めての感覚に蓬は始めバランスを取り損ない身体を傾けるが、次第に体勢が整う。其れを見届けた後でジルヴェスターが、

「ほう、さすがに飲み込みが早いな。では上空へ参ろうか。」

そう言うて上昇を始める。蓬も其れを追いかける様に上によつて

いった。其れを追いかけるように、

「待つてええええええ！」

「追いかけるのですう！」

と、ミウとミューが上つていった。ゾフィーはウオルフガングを捕まえて、

「フリーゲン Fliegen（飛ぶ）！」

そう叫んだ。すると、周囲に蓬と同じ様に、風が纏わり始めた。ウオルフガングが、

「ゾフィーも出来るのにや？！」

驚きつつそう言った。ゾフィーは苦笑しつつ、

「さつき、無意識に「盾」が使えたので、まさかと思ったが……。此れで、俺も使える事が分かった。取り敢えず上昇する。行くぞ、ウオルフガング。」

そう言った。ウオルフガングは答えて、

「分かったのニヤ、宜しくなのニヤ。」

そう言った。そうしてゾフィーはウオルフガングと共に上空へ上つていった。

（「雪山」の上空。蓬とジルヴェスターが対峙する場所にて）

ジルヴェスターと蓬は、「雪山」の上空、何も無い、風が吹きぬける空間で対峙していた。蓬は太刀を構え、ジルヴェスターは全身をこれから突撃するかの様に体勢を整える。

「では、行くぞ！」

「はい！」

二人はそう言う。そうして、ジルヴェスターが蓬に突進を仕掛けた！

蓬はまず回避を試みる。ジルヴェスターは「風」を纏っている為、ギリギリで回避すると、自分の「風」と合わさってしまい、如何影響するか分からなくなる。蓬は出来るだけ離れるように回避を試みたが……。

「ええ?! きゃあああああ！」

ジルヴェスターの「風」に巻き込まれ蓬は吹き飛ばされる。すぐさま体勢を立て直す^スが、其処を狙うようにジルヴェスターが龍の吐息を吐いた! 龍の吐息は其の俣^{プレス}体勢を立て直した俣の蓬に襲い掛かる。蓬は無意識に、

「Schild^{シルト}（盾）」

と、そう言った。其れにより、蓬の前に光で作られた魔法陣の様な物が現れる。ジルヴェスターは其れを見て、

「ちっ！エネルギー変換方陣か！」

そう言った。龍^{プレス}の吐息は其れに当たり、其の俣其の光の魔方陣に吸い込まれていく。蓬は事態が良く分からなかったが、取り敢えず自分に有利に働いた事を理解して今度はジルヴェスターの方に一気に詰め寄った！

「いっけえ！」

蓬はそう言いながら太刀を衝き立てようとする。ジルヴェスターは、

「させぬわ！」

そう言い、全身に纏う「風」を強める！全身の纏う「風」の力が強くなり、周囲が竜巻の様に為るまでになった。其処へ、蓬は突っ込んでしまう。

「きゃああああ！」

蓬は、其の強力な「風」に巻き込まれ上空へ放り上げられてしまう。其処へ、

「今度こそ行くぞ！」

そう言ってジルヴェスターは再び蓬に向けて龍^{プレス}の吐息を放った！蓬は、体勢を立て直す事が出来ずに、ジルヴェスターの「風」の龍^{プレス}の吐息を喰らってしまう。

「がつ！……ま、まだまだあ！」

ダメージは来たものの防具【神龍】^{シャイレオン}の力で軽減された事もあり（又ジルヴェスターがある程度抑制していた事もあり）、蓬は体勢をやつとの事で立て直す。そして、

「Schlag（^{シュラーク}打撃）！」

そう言い、太刀から強力な振動が発する！太刀の前方に巨大な空気の塊が目に見えるような形で展開し始める。そして、

「Abschießen（^{アッブ・シーセン}発射する）！」

そう言う事で、巨大な空気の振動の塊は、ジルヴェスターに向けて一気に進みだした！余りに巨大な其れを見て、

「なああああ！此れでは避けようが……ぐわあああああ！」

ジルヴェスターが、そう叫ぼうとしたが、直撃を喰らい、悲鳴を上げる！そして其の俤落下していった。蓬は其れを追いかける。

「……………何とも凄いニヤ。」

戦闘を見て、ウォルフガングはそう言っていた。ゾフィーも、

「そうだな…最後の蓬の技は、竜撃砲を、神龍の能力^{シャイレオン}に合わせて変化させた様な技だったな……。」

そう、感想を言っていた。そして、ゾフィーやミウ達は、蓬を追いかけて下に下りて行くのであった。

ジルヴェスターは、地面に叩きつけられる前に何とか体勢を立て直し地面に降りることが出来た。蓬も其れを追いかけて着地する。そして、

「素晴らしい、初めて上空での戦闘を経験した筈なのに素晴らしい戦闘才能だ。」

そう、ジルヴェスターは言った。蓬は、

「え?! いや、無我夢中だったし、あたしは余り覚えてないんですけど……。」

そう答えた。ジルヴェスターは少し考える様にしてから、

「ふむ…まだ、神龍シャイレオンの力を使いこなせていないと言う事が。成程な、面白い! 其れで居て此の力。又、是非ともやり合いたいぞ!」

興奮する様にそう言った。蓬は、

「は、はあ……。」

勢いに飲まれて、そう言っているのであった。そんな中、上空からゾフィーたちも降りてきて、

「一段落したのかニヤ?」

ウォルフガングがそう言った。ジルヴェスターが答えて、

「ああ、楽しませて貰った。又御願いしようかと思っていた処だ。処で、御前がウォルフガングか?」

そう言い、ウォルフガングに尋ねた。答えて、ウォルフガングは、
「ニヤ？僕がウォルフガングだけど、如何かしたのかニヤ？」

そう言った。其れを聞き、得心した様に頷いて、ジルヴェスターは、

「成程、其れで納得出来た。先程見た雪山での雷光は御主の技だったのだな。」

そう言う。そう言われて、ウォルフガングは、

「ああ、あれを見たんだニヤ。成程、あれを知っているなら、僕を知っているのは当然だニヤ。」

そう言った。蓬は其の問答を聞いて、

「ウォルフ君…有名なのね……。」

感心した様にそう言っていた。其れに答える様にジルヴェスターが、

「ははは。彼は「勇者」だからな。長年生きている私達の中では、彼を知らない者は居ないと思うぞ。」

そう言った。ウォルフガングは、照れる様に頭を掻きながら、

「いやあ、古龍の皆は僕を持ち上げるから恥ずかしいのニヤ〜。」

そう、非常に可愛く言っているのであった。其の姿を見て、一行とジルヴェスターは微笑んで其れを見ているのであった。

（其れから暫く経ち、ドドブランゴを解体した後の蓬達一行とジルヴェスター、「雪山」の雪原で）

ジルヴェスターは、蓬達に向かって、

「さて、そろそろ私は移動しよう。最近、ハンター達がうるついでいて、相手をするのが面倒なのでな、度々移動してるのだ。」

そう言った。蓬は其れに答えて、

「ハンターに限らず、人間は、貴方を脅威と思っていますからね……。意思が疎通出来る相手なのに、如何して、戦うのかしら……。」

哀しげにそう言った。ゾフィーが其れに答える様に、

「蓬も、街に出れば其れが分かるかもしれないな。」

そう言う。ウォルフガングも、

「そうだニヤ。暁の村の人達は皆「良い人」だから、蓬は気付かないのかも知れないニヤ。街に行つて人の「本性」を見るのが手っ取

り早いかも知れないのニヤ。」

少し、厳しい口調でそう言った。其れに頷くように、ジルヴェスターが、

「そうだな、此れを期に行ってみるのが良いかもしれないな。そう言えば……ウオルフガング。」

そう言う。ウオルフガングが答えて、

「何だニヤ？」

そう聞く。ジルヴェスターが続けて、

「ジークフリートやブリュンヒルデは知っているんだよな？」

そう聞く。ウオルフガングは、

「勿論だニヤ。以前も「魔王」ゲイフリオンを追いつ返せたのは彼らのお陰だニヤ。」

そう答えた。蓬が其の言葉に驚き、

「以前?! ウオルフ君其れ如何言う事?!」

驚きの余り、ウオルフガングの首を掴んで蓬はそう言っていた。ウオルフガングは、

「ちょ! 蓬落ち着く……の……ニヤ……。」

次第に、喋れなく…。ゾフィーが苦笑して、

「蓬、ウォルフを殺す気か？」

そう言った。蓬は漸く気付いて、

「ああ！？御免ウォルフ君、大丈夫？」

そう言う。ウォルフ GANG は息咳き込みながら、

「だ、大丈夫…じゃないのニャ！……家に帰ったら話すのニャ。だから今は待つニャ。」

幾らか語気を強めてそう答えた。蓬は、少ししょんぼりとして、

「あ、うん……動転しちゃってた、御免ね……。」

そう答えた。肩を落とす蓬に、ゾフィーが手を掛ける。蓬は、そうしてくれるゾフィーに寄り添った。其れを見て、ジルヴェスターは苦笑しつつ、

「ふむ…街に行くのはいいが…蓬は誰かに守って貰っていないと問題には巻き込まれそうだな。」

そう言った。其れに答えて、ゾフィー達が、

「蓬は俺が守る。」

「蓬は僕が守るのニャ。」

「ボクもやるのぉ。」

「あたしも手伝うのですう。」

一斉に答える。其れを見て、ジルヴェスターは、笑いながら、

「わははは。此れは頼もしい騎士達リッターだな。此れなら問題は無さそうだ。よし、では又会おう。そうだな、出来れば蓬、御前と又一戦したいぞ。」

そう言い、「風」を纏って飛び上がる。蓬は、答えて、

「あ、はい！頑張つて少しでも神龍シャイレオンの力を身に付けます！」

そう答えるのであつた。其の答えに満足したのか、咆哮を上げつつジルヴェスターは、上空に上がって行き移動して行つた。

「中級」試験は終了した。しかし、新たに会つた古龍、鋼龍クシャルダオラのジルヴェスターから得た情報。街に行く事を勧められた蓬。「過去」に「魔王」ゲイフリオンが追い返されていたという事実。其れに関与していた「勇者」ウォルフガング。些か力を得たとは言え、蓬の前にはまだまだ分からない事が、又、此れから解決すべき事が、そして、否が応にも対峙なくては為らない事が、其れこそ山のようであつた。先には何が見えるのか？今は其れは分かっていない。

「中級」試験。其処で出会った古龍?!（後書き）

ミドリ「はいはいは〜い。長らく御待たせしました。」

サクラ「リオ姉妹で御座います〜。」

ミドリ「姉さん。又新しい人が出ましたのう。」

サクラ「そうじゃな。然し、今度の人は変わっておったの〜。」

ミドリ「強い人みたいだけれども、変わっておるのう。」

サクラ「さて、又色々分かったの。」

ミドリ「そうじゃな。特にウォルフガング君。彼はすごいのう。」

サクラ「うんうん。一体どれだけ強いのか想像もつかないの〜。」

ミドリ「ファンが増えそうぢゃな。」

サクラ「ふふふ。」

ミドリ「何じゃ、姉さん怪しいで?」

サクラ「じゃ〜ん!」

ミドリ「ああ!此れはウォルフガング君のサイン色紙!うちも欲しいわあ!」

サクラ「此処の、肉球がいいんやでえ。」

ミドリ「ぐう……うちも欲しいわぁ。貰いに行つてこよ!」

サクラ「あら……。どこに居るんかわかつとるんやるか? まあええか。」

ジル「まあ、いいんじゃないか?」

サクラ「おや、ジルヴェスターさんやないけ。」

ジル「たまたま此処にたどり着いてな。」

サクラ「そうか。此れも何かの縁やな。」

ジル「かもな。そう言えば、こんな物を拾ったのだが?」

サクラ「どれどれ?」次回予告、「街へ!」だそうや。成程こんな所に……。」

ジル「誰が一体、こんな物を……。」

サクラ「ジルヴェスターはん、其れは言っちゃいけない決まりやで。」

ジル「何と、そうだったのか。決まり事が多いのだな。」

サクラ「伝説やからの。」

ジル「そうか、奥が深いのだな。」

サクラ「そう言う問題では無いんじゃないか……。兎も角、又来週。」

ジル「会える様なら又会おう！」

汝^{なんじ}の赴^{シヤイレオン}く処にも神龍の加護があらん事を……

街へ！（前書き）

ミドリ「こんばんわ皆さん。チャンネルM&Sのお時間に為りました。」

サクラ「今回は、あの人気ウオルフ GANG さんの過去が一部語られます。」

ミドリ「サクラ御姉様、此れは楽しみな御話ですわねえ。」

サクラ「獅子奮迅の戦いが見れるのか楽しみですわね。」

ミドリ「更に今回は、皆さんから応募された投稿キャラクターが登場します。」

サクラ「此れも楽しみですわねえ。」

ミドリ「今回のキャラも癖が強そうですね。」

サクラ「次回も楽しみですわね。」

ミドリ「まだ今回も始まっていませんわよ。御姉様。」

サクラ「あ、あら……。では本編をどうぞ。」

街へ！

小説 蓬^{よもぎ}の旅（モンハンFF）
第二十章 街へ！

（前回より約二週間程経った蓬の家にて）

蓬達は「雪山」から帰還し、其の翌日、寝室兼自室である蓬の部屋に一行は居た。其処で、ウォルフガングから昔、魔王^{ゲイフリオン}を追い返した経緯^{いきさつ}を聞こうとしていた。蓬が、

「じゃあ、ウォルフ君。面倒^{ゲイフリオン}に為るけれど、以前、魔王^{ゲイフリオン}を追い返した時の事を話して貰えるかな。」

気を引き締めながらそう言う。ウォルフガングは、皆に見える位置に立って、

「分かったのニヤ。此の話は今から、もう、二十年位前の話に為るのニヤ。」

そう言って、過去、魔王^{ゲイフリオン}を追い返す事と為った出来事を話し始めた。

（約二十年前、「最終戦」をしている某所にて）

周囲の遺跡はボロボロの状態に為っていた。然し、其れでも、壊れ尽きない辺りが、過去の遺産で建てられた遺跡と言うべきなのだろうか。未だ風化していない遺跡の中で、ウォルフガングは魔王と対峙していた。共に立ち並ぶのは、聖王ジークフリートと聖王妃ブリュンヒルデ。然し、一対三と言う状況でも、魔王の方が不利という状況では無い様子に見えた。

「もう、御前のカードは無いのニヤ！今回も諦めて、虚無に帰るのが良いのニヤ！」

ウォルフガングは、両手に、烈風双剣【迅雷・轟雷】を持ち、既に双方共が発光して発動している状態で構えていた。聖王ジークフリートと聖王妃ブリュンヒルデも、全身の炎の鎧を強めつつ、

「我等一人で御前と対峙すれば、そう簡単には御前には勝てぬだろう。然し、今回は我等が揃った。更に御前の手駒は全て片付けた。」
「ですから、今回は諦めて帰りなさい。神龍が不在とは言え、我等も、混沌を良しとしない者、貴方を其の俤にしておくわけには参りません。」

そう言った。其れに答える様に、魔王は、今回宿っている戦士の姿での声で、

「そうは行かぬ。我はまだ負けてはおらぬ。そう、我が完全に負けるまでは、帰る訳には行かぬのだ。此処で、御前達を倒し、再び、遺跡を用いて「混沌」へと導いてくれる！」

語気を強め、そう言った。そして、其の身体の周囲には、「闇」
が取り巻き始める。魔王^{ゲイフリオン}が其の「力」を用いて、自分の力を増加さ
せる為に、周囲にある「負」の感情を利用して増幅させているので
あった。その結果が、「闇」として見えているのだ。

其の様子を見て、ウォルフガングは、武器を構え直し、

「【迅雷・轟雷】 100%なのニヤ！此処は一気に決めないと危な
いのニヤ！」

怒鳴るようにそう叫ぶ！其れに答える様に、【迅雷・轟雷】は、
眩いばかりの閃光を発し始める。そして、其の文様の上を、縦横に
光が走り、ウォルフガングの言葉に呼応した事を伝えた。そして、
双剣から、水が溢れ出る様に、雷が溢れ出始める！其れは更に、ウ
ォルフガングの身体に纏い始め、其の身体は浮かび始めた。其れを
見て、魔王^{ゲイフリオン}は、

「やはり、御前が此の世界においては最大の敵だ！ウォルフガング
^{シャイレオン}！神龍同様、「何時の日」も我の邪魔をする！」

そう怒鳴る。其れに答えてウォルフガングは、

「呪われた者とは言え、僕も「勇者」として宿命付けられた以上、
此の大好きな「世界」を無に還す事は許さないのニヤ！」

そう言い返した。そして、ウォルフガングの身体を纏う雷は激し
さを増す！周囲に、蛇が舌を出すように雷光の筋が地面や天井を走
る。既にウォルフガングの身体は空中に浮いていた。ジークフリー
トやブリュンヒルデも魔王^{ゲイフリオン}に対抗する為に、自らの武器を取り出し
始める。

『ヴァッフェ
W a f f e（武器）』

二人がそう言うのと、二人の周囲に光り輝く球体が幾つも現れる。そして其れは、二人の周りを漂いつつ、警戒する様に、躍動する。
ゲイフリオン
魔王も其れに負けずと、

リュストウンゲ
「R？ s t u n g（武装）」

そう言った。其れにより、周囲に纏っていた「闇」が形を成し始める。ウォルフガングは、姿が消える程の速さで移動を始めた！其の後には残像として、雷の波立つ跡が残るのみ。直後、激しいエネルギーの衝突が起こる！

ゲイフリオン
魔王の放つ「闇」と勇者ウォルフガングの放つ「雷」がぶつかった！辺りには、巨大な空気の振動が起き、今まで巨大でがっしりしていた筈の遺跡が鳴動を始める。暫く魔王とウォルフガングはそうやってぶつかり合っていたが、ふとした事からお互いに距離を取る。其処へ、

「今度は我等だ！」

「参りますよ。「光」を此処へ！」

ジークフリートとブリュンヒルデは、二人の周囲に展開していた球体を操りながら、其処から「光」による攻撃を開始した。其れは、彼等の意思により、自在に動き回り、多角から魔王を襲い掛かる！
ゲイフリオン
「光」の攻撃が魔王を襲う！然し、

「五月蠅い奴等め！」

そう怒鳴りながら、「闇」を周囲に解放する！其の巨大なエネルギー

ギーにより、「光」と其れを発していた球体は「闇」に飲み込まれた。ゲイフリオン魔王は笑みを湛えて聖王達を見たが、其処へ、

「今だニヤ！【轟雷】！100%で放出なのニヤ！」

ウォルフガングは、【轟雷】を魔王の方に向けて、そう叫ぶ！其れにより、【轟雷】の文様が激しく発光して走り始め、其の周囲に巨大な雷が発生し始めた。其れは最後には巨大な槍の様に為り、

「アップ・シーセン Abschießen（発射する）なのニヤ！」

そう叫ぶ。其処で、其の巨大な雷の槍は、其処から消えた！そう消えた様にしか見えなかった。直後、凄まじい音が発生する！そして其の後に、魔王の身体には、其の巨大な雷の槍が突き刺さっていた。ゲイフリオン光速で進んだ槍が、一瞬の内に突き刺さったのだ！目にも留まらぬと言うのは正に此の事である。

「ぐおおおお！おのれえ！」

突き刺さった其れを外そうと魔王はもがく。ゲイフリオンウォルフガングは、双剣を構え直し、其れを交差する！そして、

「此れで、止めにするのニヤ！！行くのニヤ！【雷神波】100%なのニヤ！！」

其の声に、【迅雷・轟雷】双方が激しく輝く。文様が激しく光って走り、ウォルフガングの言葉を理解して反応する。そして、ウォルフガングの周囲に雷の暴風、いや、竜巻とも言つべきエネルギーの嵐が吹き荒れ始めた！其れはウォルフガングの中に向かって入って行く！

「ぐううううわああああああ！」

巨大なエネルギーが入って来る為、其の凄まじさにウォルフガン
グは悲鳴を上げる。然し、諦めずに、其れを使いこなす為に、更に
次のステップへ進む。双剣を構え直し、自分に入っていたエネル
ギーを魔王に向けて、

「行くのニャ！ラ・イ・ジ・ン・ハああああああ！！」

そう叫んだ！魔王はまだ、雷の巨大な槍から逃げ切れずに、もが
いている処だった。其処へ、「無」に帰す為の巨大なエネルギーの
流れが襲い掛かる！

「くう、くそおおおおお！またしてもお、またしてもおおおお
！！」

魔王は、己が手詰まりに為った事を悟りそう叫ぶ！【雷神波】の
エネルギーは、魔王に襲い掛かった！其の強大なエネルギーにより、
魔王が宿っていた肉体は耐えなくなり、分解を始める。

「おのれえ！またしても、神龍が不在の時だったのに、又もや邪魔
者が入るとは。口惜しい、口惜しいぞ！仕方があるまい。今回も、
私の野望は費えたが、我が滅びた訳ではない。必ずや、機会を得て
復活し、次こそは、混沌へと導いてくれん！」

魔王はそう叫んだ。其れに答えるように、ウォルフガングが、

「そ……そんな事は……僕や……聖王達……が……許さないのニャ
……そして、次こそは……神龍の……力と共に、おま……えを……」。

」

そう言いかけて倒れる。其れを見て、ジークフリートと、ブリュンヒルデが、

「ウォルフガング！」

「しっかりするのです！」

そう言つて駆け寄る。ゲイフリオン魔王は、肉体がほぼ分解しつつある中で、

「相変わ……らず、「勇……者」だな……御……前は。そうだな。今……度こ……そ、決……着を付……けた……いもの……だ。」

そう言い、【雷神波】で身体を分解されて、其の俛、「闇」へと帰つていった。

暫くして、ウォルフガングは目を覚ました。

「ニヤ？！魔王は？」
ゲイフリオン

そう言つて起き上がるうとするが、

「い？！いたたたたた！」

全身の痛みにそう訴える。ジークフリートが苦笑して、

「御前、雷神波を使ったと言うのに、そう簡単に五体満足に戻るわけが無かるう。」

そう言った。ブリュンヒルデが、

「暫しお休みなさい。魔王は「闇」に帰りました。暫くは大丈夫です。然し……。」

そう、其処まで言って言葉を濁す。ウォルフガングは横に為った
俤、

「又、「人」が居る限り復活してくるのニヤ。そして、又僕が封印してやるのニヤ。」

そう言った。そう答えるウォルフガングにジークフリートとブリ
ュンヒルデは苦笑するのであった。

そう、此の「勇者」は、己の宿命を受け入れて、絶え間ない「混沌」の是非を巡る戦いの渦中で、戦い続ける事を決意しているのだ、と。決着が着くまで、永遠に。

そうやって、二十年前の魔王との最終戦は終了したのであった。

（再び蓬の家にて）

そう言い、ウォルフガングは話を終えた。

「ちよつと長話に為つたのニヤ。」

ウォルフガングはそう言う。蓬達は絶句して何も言えない状況と為っていた。そんな一行をウォルフガングは眺めて、

「如何したニヤ？僕は皆言つたのニヤ。納得出来たら、次は街に行く仕度をするのニヤ。」

そう言う。蓬はそう言われて漸く、

「あ……うん。いや、其の。ウォルフ君。」

そう言いかける。ウォルフガングが答えて、

「何だニヤ？」

そう言う。其れを確認してから、蓬は、

「ウォルフ君は長い間ずっと魔王と戦つてきたの？」
ゲイフリオン

そう尋ねる。ウォルフガングは少し考えてから、

「そうだニヤ。数えた事はもう無いニヤ。面倒に為つたのニヤ。まあ、其れ位、あいつを追い返しては来たんだニヤ。只、僕の力では追い返すのが精一杯なのニヤ。完全に、魔王を消滅させるには、完全に揃つた神龍シャイレオンの力が必要なのニヤ。」
ゲイフリオン

そう答えた。其の答えに蓬は、

「なら、あたしは更に学んで神龍シャイレオンの力を使いこなさないといけない

のね。」

そう言う。其れにゾフィーが、

「シャイレオン神龍が言っていた、「力」、「心」、「思い」の三つだな。」

そう言う。其れに蓬が頷く。其れを見てウォルフガングが、

「其処まで分かっているのなら、後は、此れから見つけるだけニヤ。大丈夫、僕も居るし、ジーク達も居る。シャイレオン他にも神龍に組する者は居るからニヤ。只……。」

そう言つて、言葉に詰まる。蓬は不思議に思い、

「如何したの？ウォルフ君。何か問題でも？」

そう聞く。ウォルフガングは答えて、

「いや、問題ではないのだがニヤ。さっきも言つた様に、シャイレオン神龍に組する者も居る。と言う事はだニヤ……。」

そう言いかけて、止まる。ゾフィーが其れに気付いて、

「そうか、ゲイブリオン魔王に組する者も現れる、と言う事が。」

そう言った。ウォルフガングが頷いて肯定しながら、

「そう言う事だニヤ。二十年前の時は、予め手駒を全て倒せたから、僕達三人でも何とか追い返せたのニヤ。今回が如何為るかは分からないのニヤ。だから、仲間は多いに越した事は無いのニヤ。」

そう言った。其れに答えて蓬が、

「うん。そうだね。街に行けば人も増えるから、そう言う面も探さないといけないね。」

漸進的な意見を述べるのであった。ゾフィーとウォルフガングは二人、見つめてから頷く。そして、

「よし、皆で頑張ろう！（のニヤ！）」

と言うのであった。そうして、一行は、街に行く仕度を始めるのだった。

（仕度が終わり、報告の為、村長の元に行った蓬達）

暁の村の村長、シャイルレゼイラーフェラントは、蓬からの報告と希望を聞いた。此処を発って街に向かう。そして、「混沌^{カオス}」との戦いに終止符を着けるべく戦いに向かうと。

「そうか……長く竜人の間に語られていた伝説の一つの成就に向かうか。」

村長はそう言った。そして、

「分かった、皆にはわしから伝えておこう。グラウ＝エルモウム迄行くなら、軽く見ても一月は掛かるからな。準備はしっかりとして行くんだぞ。」

そう言った。蓬は其れに答えて、

「はい。有難う御座います。ウォルフ君も居るので大丈夫です。」

そう言った。村長は其れを聞いて、

「又、苦勞を掛けるな、ウォルフ GANG。」

そう言った。ウォルフ GANG は答えて、

「僕が望んでやっている事なのニヤ。大丈夫、蓬達なら出来ると信じるのニヤ！」

そう言った。村長は頷きながら、

「そうぢやな。蓬が此の村に現れたのも何かの縁ぢや。此れからの幸が御主達にあるように。」

そう言って一行を祝福するのであった。

一行は其処で挨拶をしてから、暁の村を旅立って行った。目指すは、大都市グラウ＝エルモウム。魔王ゲイフリオンの消息を掴み、そして、更なる仲間を加えて、この「混沌」カオスを巡る戦いに終止符を打つために！

（暁の村から旅立って約四週間目、間も無くグラウ＝エルモウムに到着しようかと言つ街道上で）

街道を歩く一行は、長い旅路を経て現在の旅程迄来た。上空に上がっているミウとミューが、

「あゝ！あれが目的の街かなあ？」

「そうですねえ。たぶんそうかとお。」

そう言いながら蓬達の下に下りてくる。そして、

「もう少しみたいです。」

「頑張るのですう。」

そう言った。蓬達は苦笑しつつ、歩いていた。そんな中、

「此れからどちらに行くのかニヤ？」

そう言う声が聞こえて来た。一行は其の音がする方へ向く。そして、其処には、一人のメラルー族が立っていた。其の姿を見てウォルフガングが、

「ポルト！なんで、御前がこんな処に……。」

そう言った。其れを聞いて蓬が、

「あれ？ウォルフ君知り合い？」

そう言う。ウォルフガングは、苦笑しながら、

「まあ……知り合いと言うか……腐れ縁なのニヤ。」

そう言う。ポルトと呼ばれたメルルーは、お辞儀をしつつ、

「ミヤーは、ポルトモネー Portmonee ゲシュトレン Gestohlen ななせい 七世と言
うのニヤ。ウォルフガングとは長い付き合いなのニヤ。宜しくなの
ニヤ。」

そう言った。其処に、ウォルフガングが邪魔に入り、

「ポルト！其の手は何をしているニヤ！」

そう言って、ポルトの手を取る。其処には、蓬の財布があつた。
ポルトは、頭を掻きつつ、

「い、何時もの癖なのニヤ。ウォルフ、御前も知ってるじゃないの
ニヤ。」

愛嬌を振りまきながらそう言う。然しウォルフガングは、睨みを
効かせながら、

「僕の仲間に手を出したら、又、マタビで虐めるのニヤ？」

そう言った。ポルトは、答えて、

「そ、其れは嫌なのニヤ！ミヤーは虐めるのは好きだが、虐められ
るのは嫌なのニヤ！」

とまあ、自己論理に完結した答えを言っているのであった。苦笑しつつゾフィーが、

「何とも、メラルーにしては変わった人だな。」

そう、感想を述べていた。ウォルフガングが答えて、

「一応、こいつはメラルーの大盗賊団のボスなのニャ。腕も一流なのだが、手癖が悪いのニャ。って、ポルト！」

そう言っつて、再びポルトを注意する。其処には、ゾフィーの財布をもスリ盗ろうと、ゾフィーに近づいてるポルトの姿があった。ポルトは、

「じよ、条件反射なのニャ！」

そう言っつているのであった。蓬は呆れつつ、

「本当に変わってる人ねえ。でも、凄腕なのはそうかも。あたし全然気付かなかったし。」

そう言っつていた。ポルトは、

「御前の物はミャーの物、ミャーの物はミャーの物なのニャ！」

そう豪語した。ウォルフガングがマタタビでしびきながら、

「いい加減にするのニャ！其れは兎も角、ポルト、お金は少しやるから、手伝っつてのニャ！」

そう言う。そんな折、ミウたちも来て、

「何か賑やかですう。」

「如何したのですう？」

そう言うてきた。ポルトは、ミウたちを見て、

「か、か、か……可愛いのにヤ〜！ミヤーの物にするのにヤ〜！」

いきなりそう喚き始めた。ウォルフガングは更にマタタビでしばきあげて、

「ポルト……いい加減にするのにヤ〜！」

そう言うのであった。

其処では、メルルーとアイルーのどつき漫才が始まっていた。苦笑しながら、蓬達は其の様子を楽しむのであった。

過去、壮絶な戦いの末に闇に還された魔王。^{ゲイフリオン}そして、ウォルフガングに定められた悲しい定め。蓬は神龍の力を全て得ることが出来るのか？組する仲間を手に入れることは出来るのか？魔王に組する者を出来る限り排除できるのか。そして「街」では何が待ち受けているのか。ウォルフガングの知り合いとして現れたポルト、彼はという立場に為るのか。其れが語られる、時のページはまだ先の事である。

街へ！（後書き）

ポルト 「御前の物はミャーの物、ミャーの物はミャーの物なのニヤ！」

作者 「と言う、口癖を持つ、ポルト君です。」

ポルト 「宜しくなのニヤ！」

作者 「と言いながら、財布スラないで……。」

ポルト 「はにや?! 条件反射なのニヤ。」

作者 「描ききれるかしら……汗。」

ミウ 「ふええええええええ。」

ミュー 「襲われそうです。」

ポルト 「可愛いのにヤゝ！」

ミウ達 「いやあああああ！」

作者 「あゝ……。暴走して行きそうね……。」

ゾフィー 「処で次は街だが如何するんだ？」

ウオルフ 「先ずは、話が通じる人を探す事からだニヤ。」

蓬 「成程。と為ると、通常の依頼もするのかな？」

ウオルフ 「其処で仲間になる人で、僕達の事を理解する人も居るかもしれないニヤ。」

ゾフィー 「まあ、そうだな。」

蓬 「では頑張りましょう！」

作者 「では次回「神出鬼没?! 灰蟲窃盗団!」」
はいむし

全員 「お楽しみに! (なのニヤ!) (ですう!)」

なんじ 汝の赴く処にも神龍シャイレオンの加護があらん事を……

神出鬼没?! 灰蟲窃盗団! (前書き)

ミドリ「姉さん、姉さん。」

サクラ「どないしたんや、ミドリ。」

ミドリ「前回、うちらが、TVのアナウンサーの真似したら、如何したんだって驚いた人が居ったんやで。」

サクラ「ほほう。なら作戦通りやな。うちに気を引くファンが増えたと言っ事やで。」

ミドリ「嬉しい事やなあ。其れはそうと、姉さん。今回も又凄い事に為りそうなんやて。」

サクラ「色々人が出るらしいからのう。作者さんは、仕事が大変じやな。」

ミドリ「然し、寧ろ喜んでった様な……。」

サクラ「成程。作者さんはMと。メモメモ。」

作者「ちょ?! 変な情報植え込まないでよね!」

ミドリ「おやあ? 顔が赤いで? と言っ事は……や。」

サクラ「そうじゃなあ、ミドリ。」

作者「な、何よ……。」

二人 「虐めてやろうかなあ……。」

作者 「な、なななな！ギヤス！！」 〵（〃〃）ノ

蓬 「えっと……取り敢えず本編をどうぞ。此れって何なんだろ??？」

神出鬼没?! 灰蟲窃盗団!

小説 蓬よもぎの旅(モンハンFF)
第二十一章 神出鬼没?! 灰蟲はいむし窃盗団!

(前回と同じ場所と時間、グラウⅡエルモウムの近くの街道にて)

ポルトとウォルフのメラルーとアイルーによるコントが繰り広げられる中、蓬達一行は、グラウⅡエルモウムの町の入り口に向かって足を進めていた。

「何か……凄く大きいんだけど……。」

蓬が、次第に迫ってくる巨大な街の城壁を見ながらそう言っていた。そう、町全体を覆う様に、未だ遠いと言うのに巨大な城壁が張り巡らされているのが次第に分かってきたからである。未だ、歩いて一時間は掛かるか?と言う様な距離にも拘らず、其れは、威圧するかの様に聳そびえ立っている事を確認する事が出来た。

「確かに大きいな。俺は此の街に来るのは初めてだが、此れ程の街があるとはな。」

ゾフィーも、目にする光景を見てそう語った。彼女の過去は未だ明らかに為っていないが、語る事から想像すれば、今見る街よりは小さな街で経験を積んだであろう事は、考えられるのであった。そんな折、

「此処は、此の辺りでは最大の街だからニヤ。ミヤー達には美味しい街なのニヤ！」

ポルトが、ウォルフとやり合っていたのを振り切ってそう言う。疑問に思い蓬が、

「美味しい？如何言う事、ポルト君。」

と、聞いた。其れに、胸を張りつつポルトは、

「良くぞ聞いたのニヤ！あの街には、ミヤー達がかっぱらえる御宝がわんさかある美味しい街なんだニヤ。」

ウツトリしつつそう答えていた。其処へ、

「全く、いい加減にするのニヤ！蓬に、変な事を教えるんじゃないのニヤ！」

ウォルフ GANG が、再び束ねたマタタビでポルトの頭を叩き上げた。ポルトは頭を押さえながら、

「ぽこぽこ叩くんじゃないニヤ！只でさえ、悪い頭が更に悪く為るのニヤ！」

そう訴える。然し、ウォルフ GANG は、両手をやれやれと広げつつ、

「もう、十分悪党なのニヤ。此れ以上は悪く為らないのニヤ。」

そう言い、更にポルトの頭を叩く。ポルトは頭を押さえて、

「わ、悪いは悪いでも、悪い違いなのニヤ〜！ウォルフ、御前分かっててやってるニヤ！」

そう言い、次のウォルフの攻撃を避けた。ウォルフが、舌打ちをしつつ、

「相変わらず、頭だけは良いんだからニヤ……。仕方が無いのニヤ。暫く、付き合っつのニヤ！」

と、まあ、言っのだった。ポルトは、其れに、目を輝かせながら答えて、

「其れは嬉しいのニヤ。今度、是非、「聖王」や「聖王妃」とも御近づきに……。」「

そう言いかける。其処へ、ウォルフ GANG が再び束ねたマタタビで叩いて、

「又、御前は！どうせ、ジーク達の御宝を狙っているんだニヤ！」

と、言った。ポルトは惚けながら答えて、

「な、何を言っんだニヤ。御前の物はミヤーの物、ミヤーの物はミヤーの物なのニヤ。」

何故か、威張りながらそう言っていた。其処へ、更にウォルフ GANG の……と、まあ……街に入るまでこんな状態である。

そんな事をしながら一行は街の入り口へとやってきた。入り口に

は、出入りする人々で賑わっていた。近隣の村から街へ来た者、逆に、街から、荷物を抱えて近隣の村へ行こうとする者、此れから冒険に出るハンター達。逆に、冒険を済ませ、満身創痍に為りながら帰路に着くハンター達。ぱっと見ただけでも様々なドラマが見て取れる程である。

「はあ……色んな人たちが居るのねえ。」

感心をしつつ蓬はそう言っていた。ゾフィーが、其れに横から、

「街中に入ったらこんなものじゃないぞ。先ずは中に入ろう。」

軽く蓬の肩を叩きつつ言うのであった。蓬は頷いて、

「うん。皆行きましょう！」

そう答えて、足取り軽く進んで行く。其れに付いて行く様に、一行は街中へと入っていった。

街中に入り、街の中央部へと続く大きな通りを一行は歩いていた。出店からは、店の店員の明るい声が響き、時折、大きな草食竜に引かれた荷車が、大きな荷物を運んでいた。中にはハンターが狩った物であるう獲物を載せた物もあった。人間だけでなく、通りを歩いているのは、竜人、アイルー族など、様々に居た。中には、

「おや、可愛い龍を連れている人があるゼヨ。」

「あ、本当だ。彼奴が見たら喜びそうだね。」

蓬達一行を見て、そんな反応を示す人達も居た。そんな中、蓬は、出店の店員に、ハンターズギルドの場所を聞いて、其処に向かつて

移動を始めるのであった。そんな中、ゾフィーとウオルフガングが周囲を見渡す。二人はお互いに、あるものに気づいた事を確認しながら、

「ウオルフも気付いたのか。」

「ゾフィーも気付いたんだニヤ。」

お互いがそう言いあっていた。そう、一行に敵意のある視線が向けられた事を。当の蓬は其れに気付かず、歩みを進めていた。尚、一行が歩みを進めている間に「何故か」ポルトの懐が膨らんでいたのは言うまでもない。

暫く歩いて、蓬は店員が教えてくれた建物の前に来た。其処は、暁の村にあったものとは違って大きな物で、看板も大きく「ハンターズギルド」と書かれており、建物に多くの人々が出入りをしていった。一般人も含めて、其処では沢山の人が関与している様であった。蓬は、暫く其れを眺めた後、徐に、ギルドの入り口から中に入った。入り口のドアを開けて中に入ると、酒場も兼ねている其処では、真昼だと言うのに出来上がっている者、戦いを終えて自慢話に花が咲いている者、此れから向かう為に意気込んでいる者など、様々な者が居た。暫く、蓬は其れを眺めていたが、其の姿を見て、ハンターズレディの装備を着た女性が近づいて、

「あら？いらつしやいませ。此の街のギルドは初めてなのかしら？そうであれば、あたしが少し案内するわよ？」

丁寧に優しく言ってきた。蓬は其れに答えて、

「あ、有難う御座います。あの、あたし、暁の村からやってきた「中級」のハンターなのですが、手続きとかは何処ですれば宜しいん

ですか？」

そう言った。女性は微笑みながら、目的の場所を指差しつつ、

「あそこのカウンターよ。緑の服を着ている子が居るでしょ？あそこで受け付けているわ。」

そう言うてくれた。蓬は感謝を示しつつ、

「どうも、有難う。早速行つて来ます。」

軽く会釈をしつつ目的の場所へ移動を開始した。女性は微笑みながら、眺めていた。

蓬が、酒場と為っている場所を避けながら、其処へ向かおうとしていると……。

ふと、別の女性のハンターと軽く身体が当たってしまう。

「あ、御免なさい。ちょっと余所見をしていたかも。」

蓬はそう言つて、ぶつかった女性に謝った。女性ハンターは、淡々と、

「いいえ。何も問題はありません。私はやりたい事がありますので済みませんが此れで失礼します。」

軽く会釈をして言い、其の俣歩いていった。其の様子を見て、

「白^{まじ}ちゃんは相変わらずだなあ。」

別の場所で、男性がそう言つのが聞こえた。蓬は、其れに感心を

持つて其の男性に近づいて、

「あ、済みません。今の方を御存知なんですか？」

と尋ねた。其れに答えて男性は、

「ああ、彼女は雪風ゆきかぜ白しろって言ってな。見た通り可愛い子なんだけれどちょっと愛想が無くてなあ。ハンターの腕もそこそこで、良い子なんだが……。真面目なんだが、逆に其れが冷たく見られる様でな何か、特殊な力もあるらしくって、あ、俺は詳しくは聞いていないんだがな。ま、そんな事もあって、結構一人でハンターをしている処を良く見かけるよ。」

やや溜息混じりに言った。そう言う男性も、ハンター装備に身を包んでいる。彼にも思ふ処があったのだろう。蓬はそう思い、

「有難う御座います。今度出合った時には御話をしてみる様にしますね。」

笑顔で答えた。男性は、其の答えに喜びつつ、

「ああ、そうしてやってくれ。俺だと中々打ち解けてくれなくてな。」

苦笑しながら言っていた。其の男性に会釈をしつつ、蓬は、目指すカウンターへ向かう。

目指すカウンターに蓬は到着して、其処でカウンターレディに、

「あ、えっと。今まで暁の村でハンターをしていて「中級」まで行

きました、蓬と言います。この街で、ハンター活動もしようと思つて、手続きは此処だと聞いたのですけれど。」

畏まって言う。そう言われて、女性は笑みを浮かべながら、

「あらあら、いらつしゃいませ。ようこそ、グラウ＝エルモウムのハンターズギルドへ。其の手続きであれば、此方に書き込んで貰うように致します。」

そう答えて、所定の用紙とペンを差し出した。蓬は其れを書き進めていく。

暫くして、其れを提出し、

「書き上がりました。此れで宜しいですか？」

蓬は言った。丁寧に女性は其れを確認してから、

「うん。問題は無いわね。蓬ちゃんに、ゾフィーさんね。其処のおチビさんは同行者なの？」

そう尋ねる。蓬は答えて、

「ああ……えっと、此の二人の龍、ミウ、とミューは一緒に行動します。後、アイルーのウォルフガング君も一緒です。えっと、こっちのポルト君は別行動です。」

たどたどしくもそう言った。ふむふむ、と頷きながら女性は見てから、

「なら、掲示板はあそこね。受付カウンターは其の隣の向こう側。」

分かったかしら？此処は結構大きいから迷いやすいからね。」

丁寧に語るのであつた。蓬は、示された後で其処を眺めてから、笑顔で、

「有難う御座います！早速見てみますね。」

答えてから、走って行くのであつた。一行は其れに付いて行く。其れから蓬は、暫く掲示板を眺め始めた。そんな折、

「おい、灰蟲窃盗団と言う奴の噂は聞いたか？」

「ああ、聞いた事があるな。」

「何でも、予告状とか出して、堂々と盗みを働く奴らしいぜ。」

「噂では二人組みらしいな。」

「ほう……面白いな。」

「白と黒の虫型の衣装で活動しているらしいから灰蟲と言うらしいな。」

「成程な。出会えると楽しそうだな。」

そんな声が聞こえて来た。ゾフィーは其れを聞いて、

「さすが、街と言う処だな。色んな人達が居る様だ。」

感嘆しつつ言った。ウォルフ GANG が、

「まあ、色んな人が居るからニヤ。って……如何したポルト？」

答えるように言っていたが、ポルトの様子を不思議がつてそう尋ねた。ポルトは、身体を戦慄かせながら、

「ミヤー達を差し置いて……盗みを横行する、とんでもない奴等なのニヤ！此の街の御宝はミヤーの物なのに……。さつきも、掏る事が出来ない凄腕の奴が居たし……手強いニヤ！」

辺りに当り散らす様に喚いていた。其の様子を見て苦笑しつつ、ウォルフガングは、

「あははは……しかし、ポルトも舌を巻く位と為ると、其の掏れなかった人も、灰蟲とか言う窃盗団も、結構やり手だニヤ。」

素直に感想を言う。ゾフィーも、頷いて、

「確かに。ポルトの腕はかなりのものだから、其れでも無理つてのは確かに凄いな。」

納得しつつ言うのであった。そんな処に、

「あら？新しいハンターさん達かしら？」

「如何やらそうみたいだね。」

そう言う声が聞こえて来た。一同は其の声の方へ向く。其処には、赤と青の美しい髪を持ち、同じ色で鮮やかに映える昆虫系素材の装備を着た年若い兄妹のハンターが立っていた。そして、赤い髪をした女性のハンターが近づいて

「こんにちわ。あたしは、ネプ・コーカサス。兄さんのアト・コーカサスと一緒に兄妹でハンターをしているの。宜しくね。」

笑顔を見せつつ言ってきた。ゾフィーは其れに答えて、

「これは丁寧にも。俺は、ゾフィーと言う。今掲示板で睨めっこしている其処の女性、蓬と言うのだが、彼女と一緒にハンターをしているんだ。此方こそ宜しく。」

丁寧に御辞儀をしながら言った。アトがネプに近づいてきて、

「ネプ、次の依頼を探しに行こうか。」

軽くネプの肩を叩きつつ言う。ネプは頷いて、

「分かったわアト兄さん。其れじゃあ、又お会いしましょうね。」

笑顔で別れを惜しみつつ二人は離れていった。ゾフィーは彼らを見つつ、

「鮮やかな色の二人だったな。」

素直な感想を言っていた。そんな中で、蓬が戻ってくる。そして、

「んゝ。今すぐやってみたいなゝって依頼が無かったかな。明日以降でいいかな？」

納得が出来ない、と言った様子でそう語る。苦笑しつつゾフィーが、

「焦る事はないさ。そうだな、少し街中見物でもするか？」

と、提案を持ちかけた。ウォルフガングが其れに答えて、

「良いかもニヤ。早く為れる為にも少しは散策した方が良いと思う

ニヤ。」

賛同してそう言う。蓬は其れを聞いて、

「ん。分かった。なら少し散策しましょう。」

結論を其の様に出して出口の方へ進み始める。一行も其れに付いて行き、其の途中でウォルフガングはポルトに、

「ちょっと頼みたい事があるのニヤ。」

そう言つて、ポルトに何かを耳打ちをしていた。其れを聞いてポルトは、

「分かったのニヤ！そう言う事なら、ミヤーに御任せなのニヤ！では、ミヤーは此処でおさらばなのニヤ。！」

突然そう言いだして、走り出し始め先に外に出て行つた。蓬達は驚いて立ち止まり、

「えつと……ポルト君如何したの？」

「如何したんだ？ポルトの奴。」

そう尋ねる。ウォルフガングは、

「いや、ちょっと頼み事をしたのニヤ。張り切りすぎているようだニヤ。」

やや誤魔化しながらそう言っていた。納得出来ないながらも其の答えに頷いて、一行は外に出るのであった。

（其れから暫く経った、ハンターズギルドから離れたとある路地にて）

蓬は……迷っていた。しかも一人で。さっきまで皆一緒に居た筈なのに、ふと、出店のある物に目が行って其処へ足を運び、再び戻ろうとした筈なのだが……。何時の間にやら、おかしな処へと迷い込んだ様だった。

「えっと……あれ？ハンターズギルドが何処だったわけ？……」

既に自分の場所すら分からなくなってしまい、蓬はふとそう言っていた。何時の間にか、細い路地に入った様で、辺りには、人が見当たらない状況と為っていた。

ふと、其の路地の反対側から、一人の青年らしい男性が、刀の様な物を下げて歩いて来るのが見えた。

「あ、あの人に聞けばいいかな。」

蓬はそう言い、其の人物に近づく。そして、

「あの……。」

そう話し掛けようとした途端。

突然、首に掛けていたペンダントが光り始める！蓬は其れに驚き、

「な?!何?!」

叫びを上げた。其の刹那、青年が手にしていた刀を抜き放ち蓬を斬り付けて来た!

ペンダントが出す光に驚いて一瞬怯んでいた為に、逆に刀を上手く避ける事が蓬は出来た。

「ちつ……。避けたか……。」

青年は悔しげに言う。抜いた刀は刃が黒く異様な輝きを発していた。蓬は驚いて、

「な?!何故、あたしを斬るの?!」

叫びながら問い尋ねる。青年は答えながら刀を振り、

「魔王が御前の命を求めているのさ!」
ゲイフリオン

蓬に再び黒い刃が襲う!何とか蓬は其れを避けてから、

「R?stung(武装)!」
リュストウング

そう言った。其れにより、蓬の体は光に包まれ、シャイレオン神龍の装備に包まれて現れた。其れを見て青年は、

「やはり、御前が「蓬」か。御前の命、此の夜光要やいづかなめが貰い受ける!」

踏み込みながらそう言い、素早く刀を振り下ろす。蓬は手にした太刀で其れを受ける。激しい音が鳴り響き、その後二人は御互いに

後方に下がる。蓬は、太刀を構え直す。が、しかし、要の方は……。刀を鞘に戻しながら、

「面倒だからまた今度な。」

そう言つて、振り向き走り去つていった。

「な?!……。何なの一体……。」

蓬は事態が理解出来ず、ふとそう言つていた。其処へ、

「あ、いたあ!皆々蓬は此処に居るよ。」

上方から声が聞こえてくる。蓬が其方へ顔を向けると、ミウが其処には浮遊していた。

「ミウ?!」

蓬は叫びを上げた。其処へ、

「いたいた。蓬、はぐれちゃ駄目じゃないか。って、如何した?武装なんかして。」

ゾフィーがやってきて、蓬の様子を見、驚いて言う。蓬は、暫く呆けていたが、

「あ?!ゾフィー……。あ、うん、実は……。」

そう言い始め、此れ迄襲われた経緯を詳細に伝えた。

蓬が、はぐれた後の経緯を語り終えると、

「と、言う事は魔王ゲイフリオンの関係者が此の街には居ると言う事だニヤ。そして、若しかすると……。」

ウォルフガングがそう言いかける、其れにゾフィーが、

「魔王ゲイフリオンも居るかもしれないと言う事か。」

結論付ける様に言った。ウォルフガングも頷く。蓬が首を傾かしげて、

「えっと、魔王ゲイフリオンが居るかも知れないってのは分かるんだけど。何故、魔王ゲイフリオンは街に居るの？」

疑問に思って其れを述べた。答えて、ウォルフガングが、

「以前、僕が魔王ゲイフリオンと闘った時の事を喋ったよニヤ？」

そう言い、其れに蓬は頷く。確認をしてから、ウォルフガングは続つけて、

「で、其の中で言った筈だけれど。魔王ゲイフリオンはどうやって復活すると言ったかニヤ？」

蓬に尋ねる。蓬は、一生懸命に考えるが、中々思い出せないでいた。ゾフィーが微笑みつつ、

「確か、話の最後で言っていたな。「人」が居る限り復活すると。」

蓬にそう言った。ウォルフガングは其の答えに頷く。そして、

「そうだニヤ。奴は「人」の負の感情、独善的なものや、利己的なもの、そんな「邪悪」な感情を餌に生きている様なものなのニヤ。そして「街」は……。」

と、言いかけて止まる。ゾフィーが続けて、

「成程。「街」は人が多く集まる処。しかも、邪な者も多い。そう言うことか。」

結論付けてそう言う。ウォルフ GANG も頷いて肯定した。蓬も漸く気付いて、

「って、事は、「人」^{ゲイフリオン}が魔王を呼び出している様なものって事？」

導き出した答えを語って言う。苦笑しながらウォルフ GANG は、

「まあ、そう言う言い方も出来るニヤ。「人」は元々優れた力が与えられているんだニヤ。でも、大半の「人」はそんな事を理解もせず生活しているからニヤ。其処へ、欲望の俥に生きる事をする存在が現れて、「人」の考えを汚染し始めたら、魔王^{ゲイフリオン}の望む形に「人」^{ゲイフリオン}の考えは変わると言う事だニヤ。そして其れは、魔王の「力」と為るのだニヤ。」

纏める様にそう言った。蓬は其れを聞いて、

「って、事は既に魔王^{ゲイフリオン}は此処で活動して、自分の「力」を増やすべく行動しているって事よね。」

と、結論を述べた。頷いて、ゾフィーが、

「だから、これから、仲間を増やしつつ、其れを阻止する事を始めないといけない訳だ。俺達が神龍^{シャイレオン}の力を求めるのと同時に。」

蓬の肩を軽く叩きつつそう言った。蓬は頷いて、

「ええ。頑張りましょう。大変だけれど、前に進まなければ解決はしないものね。」

決意を新たに述べた。一同は頷く。そして、一行は街の賑やかな方へと移動していった。

少し離れた場所で、其れを遠くから眺める一人の人影があった。

「お前の性格、ムカツクな。」

「其れ」はそう言って、建物の影に入り其の俤見えなくなっていた。った。

（日も暮れた夜半、グラウエルモウムにある旅人用の宿屋にて）

蓬達一行は街を散策した後で、旅人達が使う宿の一つを借りて其処に宿を取っていた。暁の村の様なギルドの上に宿が無い訳ではないが、巨大な街な為、ハンターの数も必然的に多くなり、故に、ギルドだけではハンターを賄い切れないのである、宿としては。其処で、一般人も泊まれる宿の一つを借りたのであった。

「ふう……。今日は、街の巨大さにも吃驚したけれど……。色々あり過ぎて疲れちゃったな……。」

起きた事感慨しながら蓬は言っていた。微笑みつつゾフィーは、

「全くだな。只、魔王ゲイフリオンの関係者が居たって事は、危なかったとは言え収穫だったとも言えるかも知れないな。」

蓬の肩を抱きながらそう言った。ウォルフガングは、せつせと片付けつつ、

「向こうから接触してくれたのは、そう言う意味では幸いだニヤ。此方も其れなりの準備が出来ると言うものだニヤ。」

前向きな意見を述べた。其れに肯定して頷きつつ蓬は、

「そうだね、大変なのは分かっているんだし、前向きに考えないとね。」

元気を取り戻すかの様に語っていた。そんな折、

「又出たぞ！灰蟲窃盗団だ！」

「何処だ?!」

「屋根の方だ！」

そんな叫び声が外から聞こえてくる。ゾフィーが、部屋の窓を開ける。すると、屋根の上を颯爽と走り抜ける二つの影が見えた。月明かりで、ふと其の姿が露になる。其れは、白と黒の衣装を纏い、蟲の姿と言うよりも、其れを綺麗に衣装として纏っている艶やかな

姿として月明かりで演出されていた。蓬達は其の様子に見入っていた。其の二人は其の倨颯爽と屋根の上を走りぬけ、騒ぎの喧騒は其れを追いかけるが如く移動していった。

「今のが、灰蟲窃盗団？」

感想を述べる様に蓬が言った。其れに答えるが如くゾフィーが、

「恐らくそうだろう。白と黒の綺麗な衣装だったな。暗がりでもよく分からなかったがハンター装備にも見えただがな……。」

感想を述べてそう言った。ウォルフガングは、何も言わずに外で起きている様子を眺めていた。

今日も、街は賑やかに演出をしているのであった。

無事に街に到着した蓬達。様々な人が居る街で、蓬は魔王ゲイフリオンの關係者と遭遇する。其れはつまり、魔王ゲイフリオンが近くに居るかもしれない事を暗示しているのであった。蓬は、神龍シャイレオンの力を少しでもものにする事が出来るのか。ウォルフガングの言葉からして魔王ゲイフリオンは「力」を蓄えるべく暗躍している筈。其れを、阻止し、仲間を増やし、敵を減らせるのか。見えぬ課題が多い中、蓬は明日へと希望を託して床に付いた。明日はどんな太陽が昇るのであるのか。答えは今とは分らない。

神出鬼没?!灰蟲窃盗団!(後書き)

作者「なんかいっぱいキャラが出たわね……。」

白^{ましろ}「募集した以上、出さないと困るのは貴女ですが。」

作者「ぐ。ま、まあそうなんだけれど。」

要「一度やるって言ったんだ、絶対にやり通す。って覚悟でやれ。」

作者「ぐ……。口癖で、あたしに迫りますか、要君。」

アト「今回は、ちょっと見せたっただしなあ。」

ネプ「兄さんとの甘いシチュエーションを期待したのに。」

アト「ちょ?!ネプやめろ!」

ネプ「え〜?!あたしと兄さんの仲じゃない〜。」

作者「そう言う事は、余り人前でしないように……。あたしが言える立場でもないが。」

?「儂等も其の内、常連化ゼヨ?」

?「それは気が早いよ……。」

作者「君達まで来たのね……。まあ、兎も角、次回「^{ゲイフリオン}魔王の影響」

です。お楽しみに。」

汝^{なんじ}の赴^{しゅ}く処^こにも神龍^{シャイレオン}の加護^{かご}があらん事を……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3452i/>

蓬の旅（モンハンFF）

2010年10月8日21時29分発行